
タダシイ冒険の仕方5

イグコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タダシイ冒険の仕方5

【Nコード】

N3465R

【作者名】

イグコ

【あらすじ】

「俺らがまた引つ掻き回すわけだ」サントリナ王室からの招待状に仲間のシーフは不敵に笑う。初めての異国に突入する前に「あの」に会いに久々のおつかいイベント！剣と魔法の異世界を舞台にした冒険者（の卵）達のぬるいようにでぬるくない旅、五話目です。

（第1話 <http://ncode.syosetu.com/n3901y/>

招待（前書き）

タダシイ冒険の仕方五話目になります。

招待

「あ、リジア待つて、それまだブルーチーズ散らすから」

親友からの声にわたしは右手に持ったサラダボウルを見る。葉っぱ類の他にもカラーピーマンやらトマトやらゆで卵やカラカラに炒ったベーコンが乗った大盛りサラダにまだ加えるというのか。

「もういいじゃん、これで」

わたしが正直な気持ちを言うと美形オカマ、ローザは「もう！」と腰に手を当て怒りだす。

「あたしリジアのそういう所が信じられないわあ！自分ののめり込んでる事以外だと途端にいい加減っていうか……」

ぶつぶつ言う彼女にそこまで言うか、と思う。その隙にローザが切っていたほうれん草のキッシュを横からイルヴァがつまみ食いした。本日の衣装はやたら重装備のゴスロリファッション。なぜこの暑い季節にわざわざ、と見ているだけでこっちが汗をかくというのに当のイルヴァは涼しい顔だ。

「ご飯まだー？」

キッチンの入り口から猫耳男が現れる。見た目は子供のように愛らしく、ふわふわの尻尾が可愛い奴だが中身はベテランシーフそのもので油断出来ない。

「もうすぐ。フロロも運ぶの手伝って」

わたしはそう言うのと直ぐさまキッチンから逃げ出そうとしていたお猫様を取っ捕まえた。フロロにサラダを持ってもらい、わたしは飲み物を運ぶ。

「こういう時、広い家って不便だなあ」

ローザちゃんのお宅アズナヴール邸の広く長い廊下を歩きながらフロロがぼやいた。サラダボウルとはいえ一抱え程のでかさのあるそれを運ぶのは彼には重そうだ。

ダイニングルームに着くと塞がった両手を見てフロロと顔を合わせ

る。

「開けてー」

中に声を掛け暫し待つ。ゆっくりと開く中から不機嫌なエルフの顔が覗いた。

「……まだ食うのか。テーブルに乗り切らない料理なんて眺めているだけで胸やけしそうだ」

舌打ち混じりに呟くのはアルフレート。少食なのは可哀相だけどそんなに文句言わなくてもいいのに。

「しょうがないでしょー？イルヴァのお誕生日会なんだから。あのお嬢さんを満足させてあげなきゃいけないんだから大変ね。キッチンじゃまだお手伝いさんとローザちゃんが奮闘中よ」

「その主役はどこに行っただ？」

アルフレートはそう聞きながらテーブルに置かれた帽子を眺める。

紙で出来たそれはド派手な色に先端にはボンボンがついている。イルヴァが冠ると自分で持ってきたのだ。

「キッチンで味見というつまみ食いに夢中だよ」

フロロが答えるのをわたしも追加する。

「予めある程度お腹に入れといてもらうのよ。そうしないとここに用意した物あつという間に無くなっちゃうもん。『今日は目一杯食べたいわよ』なんて約束しちゃったから」

アルフレートは嫌なものでも見るかのように目を薄くするとぶつぶつと呟いた。

「あいつは消化にエネルギーを使い過ぎるから思考能力が無いんだ」そのぼやくエルフの横で何かをしげしげと眺めるのはすりとした長身に銀の髪がなびく美男子、ヘクター。

「これ、リジアが作ったんだってね」

彼に聞かれてわたしは慌てる。誰が教えたんだろう……、まさかアルフレート？いやローザちゃんだな。にやにやしてたもの。

「うん、そうだよー」

照れつつも軽い調子で答えるとフロロが顔を挟んでくる。

「何、なんか思うの？」

妙にわくわくした様子にわたしは彼の頭を小突いた。するとヘクタ
ーがさりと答える。

「いや、可愛いなあと思って」

一瞬、部屋の中にいるヘクター以外が固まるのが分かった。が、

「こんな色に出来るんだねー」

にこにこと答える彼に脱力する。わたしが作ったホールケーキはデ
コレーションのクリームをピンク色にしてある。イルヴァとわたし
が好きな色だ。

「彼が自分の残酷さに気付くのはいつなんだろうねえ」

そう言いながらわたしの肩に寄りかかるアルフレートをわたしは思
いきり睨みつけた。

「おめでとー！」

クラッカーが鳴り響く中、満足げにテーブルを見回すイルヴァは優
雅に立ち上がると、

「ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げた。今日は彼女の十六歳の誕生日。今日という日
をわたし達六人とゆつくり過ごしたいというのは大変彼女らしい希
望だった。

やれやれ、と息をつくわたしとローザに早速イルヴァが尋ねてくる。

「食べていいですか？」

「……どうぞ」

ローザが答えるや否やカロリー搾取マシンと化したイルヴァがテ
ーブルのあちこちに手を伸ばし始める。毎度のことながらその細い
体のどこに収納されているのが気になってしょうがない。

「あたし達も頂きましよう。今日はのんびり過ごせそうね」

ローザがはあ、と息ついた時だった。扉がノックされる音の後、ロ
ーザの姉力ミーユさんがゆつくりと入ってくる。

「あらー、すごい料理なこと。お誕生日おめでとう、イルヴァ」

「ありがとうございます」

カミーユさんに頭を撫でられイルヴァはご満悦、といった表情だ。

フロロがひよいと手を上げる。

「よう姉ちゃん、今日も相変わらず偉そうだな」

「ほほほ、おちびちゃん、私は偉そうなんじゃなくて『偉い』のよ」
カミーユさんは一通り高笑いを響かせるとわたし達の顔を見回す。

「お誕生日みたいにおめでたい日に相応しい所からお手紙が着たわよ」

そう言つて差し出したのはぱつと見るだけでも豪勢な見た目の封筒。
クリーム色を下地に金の装飾がごてごてと騒がしい。

「サントリナの王室からか」

アルフレートがそう呟いたのは封筒に描かれた紋章を見てのことだろう。剣に竜の絡み付く絵は目立つ青で印されている。

王子からの手紙かしら。もしかしたらあらためてお礼の言葉だったりするかも。そうわくわくするわたしをカミーユさんは見るとにこつと笑った。

「なんでかしらねー、リジア宛てよ」

「わ、わたし!？」

驚いて立ち上がったしまったが、言われてみればわたしが一番接点持ったのかもしれない。暫し呆然としてしまったが「はい」と手紙を渡され我に返る。

「開けてみて!」

隣からローザが覗き込み浮かれた声を響かせた。わたしは焦りながら封を切る。封筒のみならず中の用紙も上質のものだ。ほのかにお香の匂いがした。

「『拝啓リジア、ならびにお仲間の皆さん、いかがお過ごしですか。ローラスの心地好い夏の日々はきつと皆さんに素晴らしい時間を与えていることと思います。皆さんと過ごした数日間が既に懐かしく

思える程、私は今皆さんにお会いしたくて堪りません。

さて、実は皆さんにお願いしたいことがあってこの手紙を書いていきます。急な申し出をお許し下さい。

お願いというのは、一つは皆さんのような優秀な冒険者に是非依頼したい事があるというものです。もう一つは皆さんにとつても楽しんでいただけるのではないか、と思う私からの招待です。

もうすぐ私の母が誕生日を迎えます。そのお祝いのパーティーに私の友人として皆さんをご招待したいと思います。母の希望にある通り、あまり堅苦しい会にはならないと思われます。城を案内することと兼ねて一度サントリナに来て欲しいのです。

それにあたつて母への誕生日プレゼントをある人物の元に取りに行つて貰えないでしょうか。これが私からの依頼になります。』

わたしがそこまで読み上げるとアルフレートが、

「頭いいもんだなあ」

と呟いた。自然と皆の視線が彼に集まる。アルフレートはひよい、と肩を竦めた。

「プラティニ学園のクエスト受諾、及び依頼人に関するルールだ。

五期生はローラス共和国を出て国外での活動は原則禁止、ただし受諾後の依頼がその後、国外活動まで及んだ場合のみ許可。依頼完遂まではきつちりやつてこいつて話したな。それに『ローラス以外の人間が依頼を出す』ことには何も触れていないんだよ」

「そんな奴、普通に考えたらいないもんな。わざわざ周りの国の人間でうちの学園に依頼出すなんてさ」

フロロは面白そうに尻尾をゆらゆらさせた。アルフレートが頷いた後、説明を続ける。

「それに母へのプレゼント云々なんてのも、そのお誕生日会とやらに呼びたいが為の口実だろう。でなきや王室の人間のパーティーに誰が冒険者の卵なんて呼ぶ事、許可するんだ」

「もう、王子は散々『感謝してる』って言つてたんだから嬉しいこ

とじゃない」

わたしが口を尖らすと鼻で笑うアルフレート。

「だから、その王子は『来てくれ』って言ってるんだらう？それを周りが許可するかは別の話だ。しかしそこまで懐かれたとはねえ」「いじわるエルフはほっときなさいよ」

ローザが笑いながらわたしの手元を覗き込む。

「で、そのプレゼントって何処の誰に貰いに行けばいいの？」

ローザの問いに答えようとわたしは手元の手紙に視線を戻す。読み進めた箇所まで目で追った後、記述された内容にびきり、と固まってしまった。

「バレット・T・ヘスカル」

わたしが読み上げた名前に全員押し黙る。ヘクターが首を傾げた後、手を叩いた。

「ああ！あの発明家の人か。猫と住んでた面白い人」

「チード村の迷惑じいさんね……、はあ、また関わり合いになるとは」

ローザが深い溜息をついた。アルフォレント山脈にあるチード村。

わたし達が初の冒険に赴いた場所であり、バレットさんは初の依頼人だったりする。しかし依頼内容を故意に変更したりと迷惑極まりない、とプラティニ学園には出禁扱いの人なんだよね、今は。

「許可下りるのかねえ……」

わたしが呟くと窓辺に腰掛け面白そうにわたし達のやり取りを見ていたカミーユさんが立ち上がった。

「逆に下り易くなった、って言えるんじゃない？王子からの依頼は厳しい教官なら断りそうなものだけど、そのバレットって人に面識があるあなた達を頼りにしてきたって事ならしょうがないって考えてくれるかもよ？それにバレットって人が『依頼人』じゃないなら問題は無いだらうし」

なるほど、そういう考え方も出来るわけか。わたしとローザが顔を見合わせているとカミーユさんは、

「面白くなってきたじゃないの、ほほほ」

と言いながら部屋を出て行った。あの人がそう言っただけは、やっぱり嫌な予感がふんぷんするんだよね……。

「俺らが来るって聞いたなら張り切ってダンジョン用意しそうだな、あのじいさん」

そう言って笑うフロロもやっぱり面白がっているように見えた。

翌日、わたしは朝から図書室にいた。わたしが受ける授業は無いけれど今日は久々にミーナがわたしの授業を聞きにくる。何か分かり易い教材はないかなーと探しに来たのだ。始めはどうなるものか、といったミーナへの個人授業だったがこういう資料集めにしてもわたしの話を聞いたミーナの反応も面白い。

なんだ、わたしって教員の仕事も向いてるんじゃないの？

と自惚れそうになるが魔法の手本の度に冷や汗かく教官なんて嫌だよな、と思い直す。

「冷や汗かくのは生徒の方がもしれないしね……」

そんな独り言を呟いた時、図書室の入り口から何か視線を感じた。扉の曇りガラスになっっている部分にちらちら揺れる影は中の様子を窺っているように見える。あの位置に頭が覗くことは男の人だ。黒髪ということはロレンツか？とも思うが彼なら真っ直ぐ入ってくるだろう。わたしは持っていた本を机に置くと扉に向かう。ゆっくり、そーっと扉を開いていくと金色の瞳が目が合った。

「うわ！びっくりした！」

向こう側も全く同じ行動をしていたらしく真っ直ぐ顔を合わせてしまい、わたしは思わず飛び退く。開いた扉の先ではその目を合わせた人物が派手にびっくり返っている。

「い、イリヤじゃない！ちよつとしっかりしてよ！」

わたしは倒れたまま動かないイリヤに慌てて手を伸ばし、体を起こさせた。

「……びっくりして心臓が止まるかと……いや止まってもおかしくない」

「何言ってるのよ！今しゃべってるんだから生きてるわよ！」

わたしがそう言うといリヤははっと顔を上げ、辺りをきよるきよろと見回し始める。

「大丈夫、わたし以外いないわよ」

その言葉に安心したらしく大きく息を吐いた。こんだけ人見知りが激しいから普段学園で見掛けないんだろうな。

「馴れないことなんてしなきゃ良かったよ……」

彼のぼやきにわたしは首を傾げる。で、なんでその馴れないことをしたんだ？そう聞く前にイリヤはわたしの顔を見て言い難そうに口を開いた。

「ちよつと相談したいことがあるんだけど……」

その申し出にわたしは少し驚きつつも頷いてみせる。

「相談？わたしになんて珍しい。なんでまた？」

「ファイタークラスに行くのはちよつと問題があつて……」

イリヤはそう答えると眉間に皺寄せる。わたしの頭になぜか緑頭の男の顔がちらつき始めた。

「サントリナ王室から手紙が何か来なかった？」

図書室の机に向かい合わせに座るなりイリヤが尋ねてきた問いに、わたしは目をぱちぱちさせる。

「そうそう、来たわよ。……もしかしてイリヤ達の所にも？」

「やっぱり？」

イリヤは嫌そうに顔をしかめた。

「俺達の所にも学園経由で着たんだ。王子のお母さんの誕生日パーティーに来てくれて招待と、それに纏わる依頼の話し」

そういえば王子とレオンの関係を取り持つ事が出来たのはイリヤのお陰なんだから、彼らにも招待が着ていてもおかしくないんだった。しかしなんで嫌そう？と突っ込みたかったが、とりあえず話を聞くことにする。

「依頼つて……やっぱりバレットさんの所に行くの？」

わたしが尋ねると今度はイリヤが目をぱちぱちと瞬く。何の話し？といった様子だ。

「俺達の所には『レオンを連れて来れないか』って話だったよ？
シエイルノースまで彼を迎えに行ってから王宮に来てくれないか、
って」

「レオンを……」

わたしは思わず続く言葉を失ってしまった。シエイルノースに住む
少年レオン。彼の輝く金髪と常につんとした表情、未だ卵の殻に籠
ったままのような空気を思い出す。

「両親に会わせたいってことなのかなあ」

イリヤの言い方は『どうするべきか』をわたしに聞いているような
感じだった。生まれてすぐに両親である国王夫妻から離され孤児院
で育った彼には、今は慕う両親が別にいるのだ。少し考えてからわ
たしは口を開く。

「レオンに聞いてみたらどうか。あくまで決定権は彼にある、つ
ていう風にするのが一番良いと思う」

サントリナの国王夫妻が望んだ事なのかどうかは知らない。が、や
っぱりレオン本人の希望に任せるのが一番良い気がしたのだ。イリ
ヤの穏やかな笑みを見るに彼も賛成のようだった。

「で、それが相談したいことだったの？」

わたしが聞くとイリヤは少し困った顔に変わった後、首を振る。

「実はアントンが……」

「またあいつね！」

「まだ何も言っていないよ……」

思わず立ち上がるわたしにイリヤは座るよう手を振った。

「昨日、手紙を教官から貰った時点で皆は君らにも着てるはずだか
ら相談しよう、って話してたんだけどアントンが『そんなわけない』
って聞かなくてさ。俺はメインに関わったのはリジア達の方なんだ
から着てるはずだって言っただ。でもアントン曰く『俺達の方が
優秀そうだから招待がきたんだろ』とかめちゃくちゃで」

わたしが眉を上げる仕草を見たのかイリヤは「アントンが言ったん
だよ？」と慌てる。しかし失礼な奴だ。そこまでわたし達を毛嫌い

することないんじゃないの！？と、ここでふと思う。

「アントンも分かっているんじゃない？ただわたし達とまた関わることになるのが嫌なんじゃないのかな」

わたしの言葉にイリヤは意外そうに目を大きくした。

「なるほどね、確かにそうかもなあ……。ただ一人でも騒ぐ奴がいると君らにも迷惑掛かるだろうから、どうしたらいいかわからなくて」

「こっちの事は気にしないでいいよ。冷めた連中ばかりだから」
わたしは答えつつ違和感を覚える。何だろう、パーティー内できちんと話し合っていないのかな。

「アントンが騒ぐのが嫌ならサラとかセリスと話し合ってみれば？もちろんアントンだってメンバーの一員なんだから、彼の意見も尊重するべきかもしれないけど……。一人に振り回される、っていうのは良くないと思うよ？」

わたしの言うことにイリヤは深く頷きながら聞き入っていた。その様子がまた、わたしには不思議なものに見えてしまった。わたしは自分の気持ちに戸惑いつつもイリヤに話しかける。

「ねえ、もしよかったらでいいんだけど……」

わたしの申し出にイリヤは目を大きくした後、頷いた。

「へー、今度はお城に行くのね！羨ましいなあ」

ローザ宅の司書室、わたしの話を聞いてミーナが感嘆の息をついた。アントンがどうのこうのはいまち飲み込めない様子だったが、サントリナの王室からの招待というには飛びついてきたのだ。そういう反応を見るとわたしもわくわくした気持ちちがようやく沸いて来る。

「まだ分からないけど……。その王子からの依頼を受けるべきか教官達の許可貰ってないし」

わたしはそう答えた後、ミーナの顔を見る。レオンの事についてど

う思うか、彼女の意見も聞いてみようか。本当の両親に会ってみた
いものなのかどうか。何しろ彼女達の境遇はよく似ている。

「何？」

ミーナの無邪気な顔にその気持ちは消え失せる。今そんな質問をぶ
つけるのは変に動揺させるだけかもしれないのだ。

「ううん、何でも……じゃあ今日の授業を始めますか！」

わたしは気持ちを切り替えるとテーブルの上の資料を整えた。

「今日は白魔術、黒魔術についてよ」

「はい！」

ミーナは張り切った返事を部屋に響かせると右手に持ったペンに力
を入れる。気合い入ってるなあ、と感心しつつどう話しに入るか迷
う。これからも彼女に魔術に対して関心を持って貰うために自分の
話しが重要になるのだ。

「難しい理論なんかは学園に入ってから先生達に習ってもらおうとし
て、この二つの魔法がどういう性質なのかを感覚的に掴んでもらう
としましょう」

わたしはそう言うふう、と息をつく。そしてミーナの顔を真っ直
ぐ見た。

「わたしは、ミーナが、好きよ。……はい、どう思った？」

ゆっくりと口にしたわたしの言葉にミーナは暫しばかんとする。

「……えーっと、嬉しかった」

「そう、その感覚が白魔術の基本よ。今度は逆に、わたしは、ミ
ーナが、嫌いよ」

今度はあえて語尾を強めて伝える。ミーナは戸惑いながら、

「うーん、悲しかった」

わたしの意図を読み取ったのかすぐに答える。よしよし、空気読む
の上手いぞ。

「今のが黒魔術の基本ね。要するにプラス方向に働くのが白魔術で
反対にマイナスに働くのが黒魔術。実は原理は同じものを動く力の
性質で分けてるだけってこと」

「なるほどー」

ミーナが可愛いノートにペンを走らせるのを暫し見守った後、わたしはもう一つの説明に入る。

「で、なんで今みたいな『台詞』をぶつけるやり方をしかのか、つていうと『言霊』つて聞いたことある？」

「言葉だけなら……。小説に出てきた気がする」

「うん、その意味は『全ての言葉には力が有る』つてこと」

ミーナの手が止まる。興味をそそられたらしい。

「さっきみたいな『好き』『嫌い』を相手に伝えるだけでも相手の精神にはプラスに働いたりマイナスに働いたりするわけでしょ？実はこれは白魔術黒魔術に限った話じゃなく、全ての魔法はこの理論から成ってるのよ。呪文を唱えると何かしらの力が動く。それを魔術師が行使するのが魔法ね」

「なるほどねー！」

ミーナはにこにことノートに書き込んでいった。上手い説明が出来たようでわたしも満足する。が、ミーナが何か考えるように天井を見た後「はい！」と手を挙げた事に身構える。ややこしい質問は勘弁、と思ってしまうのはしょうがない。

「一個気になってたんだけど、黒魔術でも火を飛ばす魔法があったりするわけでしょ？そういうものと精霊魔法の違いは何？」

「良い質問ね。大雑把に言えば『行使する際の力の流れ』の違いね」わたしは自分の前の白い紙に文字を書き込みながら説明を続ける。

「例えば精霊魔法の『ファイアボール』なら精霊語を唱えることで火の精霊サラマンダーに『相手に火の玉ぶつけてやってちょうだい』つてお願いするわけ。そうすることで行使する魔法。で、黒魔術の『ファイアボール』になると唱えた呪文に空気中のマナが反応して火の玉が出来て、それを爆発させる、と。さっきの話にあつた言葉に力があるつてことの証明でもあるわね。もちろんこの魔法にも火の精霊の力は働いてるわよ」

わたしの説明にミーナは「うーん」と唸りながらノートに書き込み

を続ける。ちよつと難しかったようだ。少し迷うが半分独り言のノリで話しを続けることにする。

「古代語魔法と白、黒魔術の違いは唱える際の言語でしかなかったりするしね……。マナが反応する言葉の形体を見つけて使うのは同じ。その呪文が出来た時代が古代文明期なのか、現代なのかの違いってわけ」

更に言えば現代の共通語で古代呪文の形式を試しても呪文は発動しなかったり、かと思えば共通語以外の地方言語で同じ意味合いの黒魔術を唱えてもキチンと発動したりと色々研究段階の話はいろいろある。が、湯気が出ていそうなミーナの様子を見て、この話しはまた今度、とわたしは苦笑した。

ちよつどいいタイミングで部屋の扉がノックされる。

「……お茶にしない？ サラとイリヤも来たことだし」

扉から顔を覗かせたローザは心なしか戸惑ったような表情でわたしとミーナを呼び寄せた。

温かい紅茶と「朝焼いておいた」というローザちゃんお手製スコートを囲むのは、いつもより人数が増えて八人。ヘクター以外のわたし達いつものメンバーにミーナ、わたしがお招きしたサラとイリヤだ。ヘクターは学園に行つて今回の王子からの依頼をどうするかを話し合う為、教官達に会いに行っている。

「こんなサロンみたいな部屋にいつも入り浸つてるなんて羨ましいなあ」

ダイニングルームを眺めつつ溜息つくサラ。「ホントだねー」などと相槌を打っているイリヤをわたしは肘で突いた。イリヤは慌てながらもどう切り出していいものか迷うように目だけが忙しく動く。「で、何しに来た？」

アルフレートはびしりと言い放つが、責めているというより焦る反応を面白がるようににやにやとしている。イリヤはこほん、と息つくとズボンのポケットを探り出した。

「……これなんだけど」

彼が怖ず怖ずとテーブルに置いたのはわたし達にも見覚えのある物だ。サントリナ王室の紋章が印された一通の手紙。彼らの元にも着たという王子からの招待状だろう。

「へえ、兄ちゃん達の所にも着たつてわけか」

フロロが面白そうに手を伸ばす。

「じゃあまた一緒に行けますねー」

純粹に楽しそうなのはイルヴァ。その横でローザが少し腑に落ちない様子で小首を傾げる。

「単純に考えたら着てもおかしくないけど……何でまた別々に着たのかしらね？」

「その理由は中見れば分かるよ。依頼が別みたいなんだ」

イリヤはそう答えると彼らの元に着た王子からの依頼の内容を皆に

聞かせた。レオンの話が出るとミーナの顔が少し曇る。同じ境遇の者同士、王子が王室に連れて来いというのはやはり複雑なんだろうが、それも一瞬のことですぐにクリームをいっぱい乗せたスコーンを頬張る。

「レオンを呼んでどうするつもりなのかしらね」

ローザの質問は心配げな様子を含ませていた。わたしも考えたことだが、レオンを王室に呼び戻すつもりでは？と考えたのだろう。

「リジアが言ってくれたらしいんだけど、その辺の判断も含めてレオンに任せる、っていうのに私も賛成よ」

サラはそう言うのと紅茶を傾けた。依頼を優先するよりレオンの意思を尊重する、という申し出は単純に嬉しい。わたしがほっと息ついた時、アルフレートが再び口を開く。

「それで？そんな確認の為に来たわけじゃないだろう？」

すつと目を細める彼にイリヤは叱られた犬のようにキョドリ出した。

「あ、ああ、えっと……アントンのことなんだ……」

言いにくそうなイリヤの後をサラが受け継ぐ。

「どうやら手を組むのが嫌みたいなの。しきりにリジア達には招待状なんて着てないはずだ！とか牽制してて、困っちゃった」

「でもそういう訳にもいかないだろう？レオンの所へ行くにしても君達と話しをしておきたかったし、それにサントリナへ行ったらどうせ一緒になるんだし」

イリヤが言うといルヴァがうんうんと頷いた。

「一緒に行けないなんてつまらないです。イルヴァは皆一緒に良いですねー」

「王宮に行ってから陰険ムードだったりしたら向こうも気使うわよ」

わたしはそう呟くと二つ目のスコーンに手を伸ばす。それを聞いたからかイリヤはほっと息をついた。

「アントンの意見だけを無視するわけにもいかないし、迷ったんだけど……このままだとまたあいつが騒いで迷惑掛けそうだったから

「さあ」

頭を掻くイリヤをじっと見ていたアルフレートがテーブルに身を乗り出す。

「で、どうして貰いたいんだ？あの血気盛んな男を納得させて円満に行くような魔法の言葉でも教えて欲しいって言うんじゃないだろうな」

「意地悪な奴ねー！」

わたしが窺めるがアルフレートは涼しい顔だ。……まあ確かに、だからわたし達に何が出来ると？って話しではあるんだけど。

「しかしキーパーソンらしき人が狙ったようにいないからねえ」

ローザが溜息混じりに空いた席を眺める。

「……ヘクターはわたし達の為に教官の所に行ってるんじゃないの」わたしはそう言うとな意識に未だ戻らない彼を探すように窓の方を見てしまった。とその時廊下の方が騒がしくなる。遠慮のない大きな足音と話し声に自然と皆の視線が扉に移る。

「じゃあそうするか……お！何だよ、お前らも来てたのかよ」

ダイニングの扉から顔を出すなり声を響かせたのはデビス。サラとイリヤに茶化するような視線を送った後、わたし達に手を上げた。その後ろからヘクターの銀髪も覗いている。二人の登場により何だか急に室内が活気づいたような空気だ。ローザがお茶を追加する為にポット片手に立ち上がるのと同時に二人は椅子に座った。

「今、学園でヘクターと話してただけどよ、やっぱりサントリナ王室から手紙着てるってよ！だから一緒に行くかって話しになったんだ」

豪快な口調のデビスはそう言うとな眩しい笑顔を見せる。その呆気無い展開にわたしとイリヤは思わず顔を見合わせてしまった。

自宅の自分の部屋、ベッドに並べた着替えと旅の道具を前にわたしはあれこれ考える。

「こうやってあーだこーだ考えるのも良くないのかもしれないわね」
デビスとヘクターのすぱっと気持ち良い行動の決定に、わたしはふうと息をついた。あれから彼らにもわたし達の話していた内容を聞かせたのだが、デビスは一言「俺がリーダーだ」と言ったのだ。彼が普段からそんな暴君では無い事はよく知っているし、彼も『俺に従え』という意味で言ったのではない。今回は彼の言う通りにしておけ、と仲間の背中を押したのだろう。サラとイリヤのどこかほっとしたような顔にそれが現れていた。大きな背中の中頼れるリーダーがいるっていうのも良いパーティーの一つの形なんだろうなと思う。

それに比べるとわたし達ってうだうだ考えるのが好きだよな……。まあ「極端に考えない人」イルヴァもいるけど。

「サラ達の荷物もフローラちゃんに入れてあげるのはどうだろう」自分の用意している大荷物にそう呟いた。本来ならもっと少ない荷物で、それでも重いのをがんばって背負って歩くんだもん。やっぱりバレットさんは良いものくれたんだなあ。また会いに行くことになってしまった偉大な科学者の胸を張る姿を想像してしまった。未だにフローラちゃんの中の広さは物置のレベルを出ないけど。

デビス達はわたし達より一日早く発つ。わたし達はアルフォレント山脈の中腹、チード村までだけど彼らは山脈を越えてシエイルノースまで足を伸ばさなくてはいけないからだ。それからチード村で落ち合う約束なのだから、荷物を預ければきつと喜ぶだろう。アントンが騒いだらこれを優位に立つ道具にしてもいいし。わたしは目を吊り上げる彼の顔を思い出していた。

アンTONはどうして……ヘクターの事が嫌いなんだろう。わたし達と関わりたくないっていうよりは、やっぱりヘクターと手を組みたくないのだと思う。それでついどのように仲間のわたし達の事も嫌いなんだろうけど、やっぱり表れる態度の険悪さが違うもの。イリヤが言ってた女関連のごたごたも結局違ったわけだしね。あ、そうだ、まだこれに対してイリヤに文句言っただけだったな。次会った時

に言っておかなきゃ。

ヘクターが自分の事をちらりと「冷たい人間だ」と言ったのも気になっていた。確か両親の話をしてた時だったと思うけど、そんなようなことを言っていたのだ。良い人の塊みたいな彼だもの。きつと自分にも厳しいのだ、と思っていたけど。

「アントンもそんなこと言ってたっけな……」

偽善者だ、と言いながらわたしの腕を掴んでいた冷たい手は忘れられそうにない。

「よっぽどの事がなきゃそんな台詞出て来ないわよね。アントンってどこ出身なんだろう。まさかサントリナとかじゃないわよね」

そうぶつぶつ呟きながらわたしはふと我に返る。なんであの緑頭の目線で考えようとしてるのよ！今日だってそうだ。イリヤと話していた時に自分が発言した「アントンだって分かっていると思う」だの「アントンの意見も尊重するべき」だのという言葉に驚いてしまっていたのだ。

最近、この事に限らず色々考え過ぎてている気がする。前までの自分だったらもつと傍若無人だったと思うもの。それは大人になってきたとも言えるけど、やっぱり少し本来の自分とズレが生じているように気持ちが悪い。

ふと目の前の鏡に眉間に深い皺を作り、ワンピースを握りしめている自分の姿が映っているのを見た。

「いけない！服決めなきゃ、服！」

今大量の服を引っ張り出しているのは旅の準備の為だけではない。明日は人生での山場になるかもしれないイベントが待ち構えているのだ。

「あんまり張り切り過ぎてても恥ずかしいしなー。でも明らかに適当な格好でも失礼だと思うのよね」

そう言いながらもにやにやとする顔をわたしは抑えられなかった。

「ママ、お願いだからはしゃがないでよ？」

わたしは目の前でそわそわと指をいじる母に念押しする。

「わ、分かっているわよお。でもママのイケメン好きは知ってるじゃない」

良い年して自分で「イケメン好き」を自称するのってどうなの……

？と思いつつ自分との血の繋がりを感じたりする。わたし自身も落ち着かない気分を振り払うように冷めきった紅茶を飲み干した。

わたしの前で指の次は髪をいじくりだすのはわたしのお母さん。髪色といいよく似ていると言われる。二人して同じようにそわそわとしているからかテーブルと椅子ががたがたとうるさくて仕方ない。

「今日の格好可愛いわよ！リジア！」

「あ、ありがとう」

テンション高い褒め言葉にわたしはやや引きながらお礼を言う。そろそろ来てもおかしくないな、と時計に目をやると、

「ママは！？ママはおかしくないかしら！？」

自分を指しながら聞いてくるのには「どうでもいい」と答えたくない。普段よりは綺麗な服装の母がはしゃぐ姿はあまり見たくないものだ。

一瞬の部屋の静まりの中、家の外門がきい、と開かれる音と共に門に付けた鐘がからからと鳴る音がする。

「き、来た！」

二人同時に椅子から飛び上がる。廊下に駆け出すわたしと、それをなぜか押し退けて走る母。ドアのノックが鳴らされるのとわたし達が扉に飛びつくのは同時だった。勢いよく開けた扉に外の人物が慌てて飛びのく。

「こ、こんにちは」

危つく扉にぶつかるところだったのか、ヘクターが身構える姿勢の

まま挨拶をした。母の体が硬直するのが横目で分かる。

「予想以上きたー!!」

雄叫びの後に身もだえる母をわたしは慌てて押さえ付けた。

「ちよつと! さっきあれ程言っただよね!」

わたしは顔から火が出そうになりながら怒鳴った後、ヘクターに頭を下げた。

「ご、ごめんねー。ちよつとうちのお母さん、若い男の人に慣れてなくてー」

苦しい言い訳にヘクターは面食らったような顔になる。が、いつもの柔らかい笑顔で母に挨拶を続けた。

「はじめまして。ヘクター・ブラックモアです」

「ははははじめましてえー! リジアの母ですー」

握手する母の目は完全に恋する乙女ものだ。パパに言いつけるぞ、この野郎。

「じゃあ、行ってくるからね」

わたしは玄関を出ながら言い放つ。自分でも声が不機嫌なのが分かるが仕方がない。母のテンションが恥ずかしいのもあるが、どうも照れ臭くてしょうがない。

「ええー、こんなすぐ行っちゃうのー? お茶ぐらい飲んで行けばいいのに」

「そついう用で来たんじゃないんだから!」

頬を膨らます母にびしりと言いつ返すとわたしはヘクターの腕を引っ張る。

「すみません、今日はこれで失礼して、じゃあ行ってきます」

ヘクターの礼儀正しい挨拶に、

「『今日は』! ? じゃあまた次があるってことよね! ? 今度また来てねー!」

と大人げない反応をする母を睨みつけると、わたしとヘクターはようやく家の敷地から出ることに成功した。家の前の通りを過ぎて大通りに出ると大きく息をつく。ヘクターが一度振り返った後、ふ、

と笑った。

「可愛いお母さんだね」

「やめて！調子に乗るから！」

わたしの絶叫にヘクターがまたくすくすと笑う。だから迎えに来なくても良いって言ったのに……。

さて、この状況が何なのかというと、今日はヘクターと一緒に『おつかい』に行く。王子から王妃へのプレゼントはバレットさんの元に取りに行くとして、わたし達はわたし達で何か贈り物をしようかという話しになったのだ。とりあえずウェリスペルトの商店が並ぶ通りに買いに行くか、となったのだが、わたしの家がそのマーケット通りに割合近い事が分かるとヘクターが「迎えに行くよ」と言い出したから、さあ大変。我が家のあの大騒ぎになったわけだ。変に自慢しようと母に「すげーイケメンだから」などと説明したわたしが悪いっていったら悪い。

どうして二人かと言えば単純に暇なのがこの二人だったからだ。ローザちゃんも授業があるというし、イルヴァはコスプレ仲間との会合があるらしい。そうになると妖精二人は「面倒だから」と来やしない。何を買うかも決めていないのに任せられた上に、いちやもんをつけそうなのがその二人なんだから気に食わない。

気を使ってくれたのかと思いきや、最近じゃ「どうせ何も進展なんてしない」とばかりに舞い上がるわたしを冷めた目で見るのだ。そうなるうちよつと悔しいと思ってしまう。

「サントリナかあ……、こんなに早く行く事になるとはなー」

ヘクターの呟く声。わたしははっとして顔を上げる。実は少し気になっていたのだ。

サントリナの、しかも彼が住んでいたセントサントリナに王宮はある。でもヘクターは一度も喜ぶような顔を見せていなかった。嫌がる様子もなかったけど、いつもと同じ淡々とした態度が気になって仕方なかった。

普段から手放しで喜ぶような感情を見せるような人ではないけど、

一言ぐらい「嬉しい」っていうようなものがあってもおかしくないと思うのだけど。それとも前に言っていたように、全くホームタウンって気持ちが無いのかなあ。でもそんな冷徹さも不自然なんだけだな。石畳の灰色の道を歩きながら色々と考え込んでしまう。

「一応何がいいか考えてみたんだけど、やっぱり難しいね」

ヘクターの声に我に返るわたし。

「え？あーそうだよ。わたしも考えたんだけど王族の人に喜ばれるものなんで分からなくて」

その答えにヘクターが少し考える素振りを見せた後、わたしの顔を見る。

「女の人が貰ってうれしいものって何だろう」

「えー、何でもう……」

ヘクターがくれるなら何でも嬉しい、と答えそうになるが彼の聞きたいのはそういうことじゃない。わたしは腕を組み考える。

「何だかんだ言って、どういう人でも『王道』は嬉しいと思うんだよ。花とかアクセサリーとかぬいぐるみとか。でもそれが王妃様ってなると……」

「そうなんだよなー、食べ物はないな、ぐらいいしか分かんないなー」
確かに初めて会う冒険者に食べ物もらって素直に受け取る王族なんていないだろう。下手すりゃ周りに怒られるか、非ぬ疑いかけられそうだし。

「一個考えたのはね、ローラスの名産品なら良いんじゃないかな。隣の国だもん、持つてるかもしれないけど『お土産』としてもいいし、礼儀は果たしてるというか、ね」

わたしが言うと感じげに頷いてくれる。

「なるほどねー、それがウエリスペルトの名産だったら尚良いかもね」

そうなるわたしでもそれが何なのか分かりそうなものなんだけど、食べ物ばつと浮かぶがそれ以外の品物というとなかなか浮かばない。

「ヘクターの方が覚えがあるんじゃない？こつちに来て初めて見た、
つていう物とか」

わたしが尋ねるとヘクターは再び首を傾げて考え込んでしまう。暫く待った後、ぽつりと呟いた。

「『ファイブスター』ってあの変なお菓子は初めて見たなあ……」

「食べ物じゃん！」

わたしは思わず突っ込む。ウェリスペルト郊外にある人口魔晶石の工場が出したお菓子で、甘く固いクッキーにねちよねちよのゼリーが埋め込まれたもの。そして不味い。

しかし都会って色んなものに埋まってるからか、これって物が無いものだな。わたしは見えてきたマーケット通りを前に頬を掻いた。目を引くようにか住宅地よりかは派手な色合いの店が多い。所々に露店も出ていて客引きの声が通りに響く。馬車が通行止めになつて
いるわけではないので、路上に出過ぎた店主を警備団が注意する、
なんていつもの光景があつた。午前中だからか普段来るよりは空いている。が、空いている間に、というような主婦層が大きな紙袋を抱えている姿があちこちに見られる。

馴染みの通りなので大体入る店は決まっていた。その一軒目に向かう前にふと思いつく。

「大体の予算を決めちゃおうか。皆で六等分するって考えて良いよね」

わたしの言葉にヘクターが「あ、そうだった」と言つてポケットをまさぐる。

「予算は貰ってきたんだ。結構な額を気前良く包んでくれたよ、アルフレートが」

「アルフレートが!？」

思わず飛び出る大声。そんなわたしにヘクターがにこにこと語る。

「何でも『一発当てたから』って。代わりに今度、蔵書の整理に付き合わされるけど。何当てたんだらうね？」

何って……何かの『山』を当てたんだらうな、と思う。まだまだ裏

のありそうな奴だ。

「じゃあ思いきってあそこ入ってみようか」

そう言つてわたしが指し示したのは一軒の大きな雑貨屋。広い入り口からはマダムらしい人が出入りしている。鞆や洋服、靴といった衣料品に雑貨類も売っているような店だ。なんでも『良いものをコンセプトに』という高尚な雰囲気、鼻につく店であり、店員もやら優雅な物腰の割には上から目線なのをばんばん感じる所である。アルフレートが出資、と聞いて遠慮が無くなったのかもしれない。ちよつと入り難いけど仕方ない、と足を進めていたが、問題の店につく前にふと目に入つた綺麗な色に足が止まつた。入りかけた店の隣りにある小さな雑貨店。クリーム色の木枠がかわいいショーウィンドウにカップやシュガーポット、各用途分けが便利そうな大小中のお皿が綺麗に飾られている。

「これ可愛いね」

ショーウィンドウを覗き込むわたしの後ろからヘクターも食器を眺める。霞んだ青と黄色に厚みのある少々無骨な形がまた可愛い。

「好きそうだね」

花が色とりどりに並ぶ模様にそう思ったのか、ヘクターがそう言つて笑つた。何故か妙に気恥ずかしい。

「入ってみようか」

そう言いながら既に店の扉に手を掛けているヘクターにわたしはあわてて体を起こした。

扉に着いたベルの音をカラコロと響かせながら中に入る。ふつと香るミントの匂いは夏場によく合っていた。それだけで店主のセンスと気づかいを感じる。だが中に入って一番に目につくのは色とりどりの可愛い雑貨ではなく、小さなカウターにぎゅうぎゅうに詰まったおばさま。わたし達を見ると球体のような体を器用に動かし、こちらへやって来る。けして広いとは言えない店内にも関わらず、どこにもぶつからずにやって来るのが不思議だ。

「こんにちは！何かお探し？」

おばさま（この表現がぴったりだと思う）はにこにここと甲高い声を響かせた。

「あ、その食器を見たいんですが……」

ヘクターが言い終わる前におばさまは「まあ！」と大げさに驚き、喜んでいいる。ふよふよと揺れる体が何とも気持ち良さそう……。

ときばきとショーウィンドウから食器を抜き取ると、今度はそれを店の中央にあるテーブルに乗せていった。わたし達もテーブル脇に移動するとよく見せてもらう。

「やっぱり可愛いね。こういう素朴なの貰ったら嬉しいかもよ？」

わたしは王族のイメージとは少しずれた食器セットを前にはしゃいでしまった。ただ普段使う食器も自分達で用意しているのかどうか自室とかに飾ってくれるだけでも嬉しいけど、部屋に合っていないと微妙な気持ちにさせてしまったらどうしよう。またぐるぐると考えを始めた時、ヘクターが手揉みするおばさまに口を開く。

「実はある貴族の女性に、誕生日に送るものを探しているんです。こういうのってどうですか？」

するとおばさまはうんうんと頷いていた顔をにっこりさせた。

「なら『アニール焼き』はぴったりよ。今ではどこでも見られるようになったけど、これは元はウェリスペルトが起源のものだから

どなたかは知らないけど、貴族というなら外国の方でしょう?」

へええ、知らなかった。今の状況にはまさに、な情報にわたしとヘクターは顔を見合わせた後、ほーと息ついた。その様子を見ておばさまはぽん、と手を叩くとお尻をふりふりカウンターの方向に戻って行く。

「良いものがあるわ!」

カウンターの下を暫くごそごそとしていた彼女が取り出したのは小さな木箱。もう一度テーブルに來るとそれを置き、中の物をゆっくりと取り出した。

「カップ&ソーサーのセットよ。使うことも出来るけど見た目が華奢で綺麗だから鑑賞用としてコレクションする人が多いの」

さっきまで見ていた食器と同じような厚みのある陶器だが装飾が細かい。カップといっても二飲みで終ってしまいそうな小ささだ。こういうのをガラス扉の食器棚に飾るっていうのを見た事あるな。

「これがいいかもね」

ヘクターの一言におばさまは嬉しそうに「でしょう!」と笑う。わたしも自分の目敏さとの人柄の良い店主に会えたことに満足だった。

そのまま会計を済ませて綺麗に包んでもらう。むちむちの手が器用に食器を包むのを横目で眺めつつ店内を見てみると、カウンター脇にある棚に並んだ綺麗なスカーフが目に入った。ぱつと浮かんだ考えにわたしは慌てて尋ねる。

「あ!これも、これもお願いします!別の包みで別会計でも良いですか!」

「もちろん、少しお時間頂ければ綺麗に包みますよ。……でもこれはウエリスペルトの名産品ってわけじゃないけど良いかしら?」

おばさまの問いにわたしは大きく頷いてみせる。おばさまはにっこり笑うと既に包み終わったカップ&ソーサーを脇に置き、素早い手つきで黄色のスカーフを包み始めた。

にこにこ手を振るおばさまに応えつつ店を出ると、不思議そうな顔のヘクターに包んでもらったスカーフを見せる。

「これ？タンタへのお土産よ。わたし、この前の別れ際にぬいぐるみとか貰ったから」

タンタとはこれから行くバレット邸で働いていた二足歩行の猫のこただ。白い毛並みに耳と尻尾の先端だけ黒くて可愛い子だった。こんなにすぐ会えるとは思わなかったな。

納得顔でわたしを見るヘクターに尋ねる。

「でも男の子なのに可愛過ぎちゃうかな。黄色に水色の模様なんて」わたしの問いにヘクターのなぜか目が大きくなった。

「え、タンタって女の子じゃないの？」

な、何！？……でも言われてみれば仕草とかは女の子っぽかった、かな？いやどうだろう。

驚きのあまりよろけてしまい、通りがかりのおっさんにぶつかりそうになってしまった。しかし確証がないのは同じだったらしく、お互い暫し無言になる。

「……フロロに聞いてみようか」

同じ種族ではないし単に猫繋がりでただだが、ヘクターの言葉にわたしも頷いてしまった。

わたしの「お昼でも食べて行く？」という提案はヘクターの「でもローザが用意しとく、って言ってたよ」という申し訳無さそうな顔の前に敗れる、という展開はあったものの、皆に報告するためにアズナヴァール邸までやってきた。普段通りメイドのメリッサちゃんに挨拶しながらダイニングルームに入る。

「おかえりー。どうだった？」

わたしの二人目のお母さんローザに収穫である箱を掲げて見せた。

「何にしたの？随分可愛い包みね」

花柄の包み紙に破顔する彼女には中身も見せてあげたくなってしまう。でも我慢してもらおう。と思ったのだが、

「俺が開けてやるよ」

出窓からひよい、と飛び降りてフロロがやってくる。腕まくりをしながら歩く顔は完全に盗賊の雰囲気を出しているではないか。

「開けて、また元通りにすりゃいいんだろ？誰が見ても分かんないぐらいに戻してやるぜ」

「失敗しないでよ？せっかく綺麗に包んでもらったんだから」

フロロの器用さを知っているのもそれはないか、と思いつつもわたしは念押しする。だが言ってる間にもひよいひよいと雑にも見える動きでフロロは包みを開けていった。

「うわあ、可愛い！」

白地にサーモンピンクの花柄といういかにもローザが好きそうなカップ&ソーサーに予想通りの反応が見られる。

「コレクションにどうかと思って。お金持ちにそういう趣味が多いそうだし」

わたしの言葉に自分が貰ったかのように喜ぶローザ。

「良いわよ良いわよー！しかも無骨なデザインに見えて所々の模様が浮き彫りになってたり、芸が細かいわあ」

うつとり眺めるローザにわたしも満足する。すると部屋の入り口から声が掛かった。

「アニニール焼きか。なかなか良い選択じゃないか。褒めてつかわそう」

わたしは偉そうな口ぶりと共に入ってきたアルフレートを睨みつける。まったく、他人任せにしたくせに。

「出資者にそんな顔していいと思ってるのかね」

彼の呆れた顔にわたしははっとし、ローザはきよんとする。

「何、アルフレートが負担してくれたわけ？珍しい」

「何でも一山当てたんで懐温かいんだって」

質問にわたしが答えるとローザが眉間に皺寄せた。

「……どうも真つ当な事やってのことなのか不安になるわね」

わたしも同調するローザの呟きにも、当のアルフレートは涼しい顔でお茶を啜り始めた。「そっぴやイルヴアは？」

ヘクターが疑問を口にするタイミングを見計らっていたかのようなタイミングで廊下の方が騒がしくなる。ばたばたと走る足音の主は姿を見なくても分かる。

「お昼ご飯間に合いましたー？」

仲間との会合があつたからか一段と派手な格好で登場したイルヴア。百年単位で流行を逃しているようなお姫様ドレスが目にも痛い。

「間に合つたわよ、今から準備だから」

やれやれ、と立ち上がるローザにほっと息つくといルヴアは表を指差した。

「さつき学園の前でデイベスさんにお会いしました。向こうは明日出発だそうです」

そうか、わたし達より一日早い出発なんだからもう明日なのか。

「『見送りに来てくれよ』って言われたんで『お断りします』って言つとききました」

自分の冷たい仕打ちをのほほんと語るイルヴアはいつもの無表情のまま席に座る。言われた方のデイベスの反応が気になってしまつじやないか。

「別に良いんじゃない？どうせすぐ合流するんだから」

わたしはデイベスも冗談で言つたのであるう、と分かりながらもそう答えた。

イルヴアも贈り物を確認したのを見て、フロロが宣言通り包みを元に戻し始める。小さな手が動く様子は繊細な様子には見えないというのに、確かに綺麗に包まれていく。その工程を見るだけでも面白い。最後の締めになるテープをぺたりと張り終えると「どや」とテーブルに置いた。見事な仕上がり全員が拍手する。

暫く満足げにふんぞり返っていたフロロがふと止まった。

「そっぴやエミール王子の母ちゃん誕生日っていつなんだ？」

今まで一度も出ていなかったのが不思議な疑問に皆の顔がぽかんとしたものに変わった。

そういえば……いつなんだろう。日時の指定も手紙には無かったし、教官達から何も言われていない。依頼完了からサントリナへ掛かる日数ぐらい考慮してくれてると思うけど、間に合わなかったりしたらどうするんだろう。

「あの王子の事だ。嫌ってぐらい滞在期間設けて待ってると思うぞ」
ぼつり、アルフレートが呟いた台詞にはわたしは首を傾げる。

「何で？嬉しいけど、あんまり長くても困っちゃうね」

そう返したわたしをアルフレートは妙にじっとり見る。が、「さあねえ……」と答えた後はお茶を飲むのに専念するかのように黙ってしまった。

持て余し気味の科学者

「行つてきます」

出発の日の朝、玄関扉の前でわたしは母に告げる。にこにこ笑顔で手を振る母。その様子に少し安心した後、扉を開けてハーブの生える小道を何歩か歩き、外の通りに向かう。ハーブ類は「実用的だから」と母が色んな種類を植えている。一度も食卓に上がったことはないのだけれど。

門の前でもう一度母に手を振る。笑顔で小刻みに手を振り返す姿に苦笑した。わたしは知っている。通りを歩き始めると途端に母の顔が寂しそうで、心配そうな顔に変わることを。毎回、この時だけは苦手だ。胸が苦しいのは罪悪感からなのか、わたしも単純に寂しいからなのか。

『魔法使いになりたいの』そう言つて学園に通わせてもらえることになった時は、まさかこんなに家を空ける親不孝者になるとは思わなかったな。子供の頃は「魔術師」冒険者」という図式が出来上がつていなかったのかもしれない。

白い豪華馬車に繋がれた馬二頭は今日も意気込みを鼻息で表している。アズナヴール邸前、早朝だからか屋敷の方は静かだ。

「またコレで行くのか」

腰に手を当てアルフレートが唸るとローザが怒り出す。

「しょうがないでしょう!? あたしだってやーよ! でも王宮に直接行く、つて言ったらお父様が乗って行けつてうるさいんだもの!」

「貴族が集まつてるからつて事? そんな張り合わなくてもいいじゃん……」

わたしは言つてもしょうがない文句をばやくと、静かに馬車に乗り込んだ。今日も御者席にはフロロとイルヴァ。二人に悪いな、と思

つたが本人達はあまり嫌ではないらしい。

「全く、『もうちょつと落ち着いた色に出来ないか』って言ったら、お父様つてば『白が嫌ならピンクにでもしようか』とか抜かすのよ！？」

喚きながら乗り込んでくるローザはわたしの隣りに座るとフローラちゃんを窓枠に置いた。今回はフローラちゃんの里帰りでもあるわけだ。それを知ってか知らずか小首をしきりに傾げている。馬車の狭い空間ではこの時間から暑くてしょうがない。わたしは窓を全開にした。走り始めれば風で涼しくなるだろう。

「全員乗った？」

ヘクターが扉を閉めながら馬車内を見回し、御者席に繋がる小窓を叩く。一瞬の間の後、馬車は静かに動き始めた。

フロロの先導が良かったのか馬の機嫌はすこぶる良く、快適に走り続けた。元からそう遠くない道のりだ。懐かしの、とまではいえないが数ヶ月振りのチード村に着いたのはお昼ご飯の時間より少し早いぐらいだった。

「何だ？これ」

馬車を村の入り口に停めた後、村の様子を見たフロロがぼかん、とした顔で指差す。馬車から下りた直後で固まった腰を伸ばしながらわたしも中を窺い見る。

「こんなのあつたっけ？」

わたしが言うのは村のあちこちに掲げられた旗だ。カナリヤ色の布に茶色で絵が描かれている。丸い顔に半月のような目、笑っているようにも見える口元といいこれは猫だ。猫のイラストが村中に踊っているようにも見える様子は少し不気味にも思える奇妙さじゃないか。

「とりあえずバレットさんところ行ってみよう」

ヘクターの言葉にわたしとフロロは頷いた。歩き出してすぐにすれ

違った人が、ヘクターに肩車されるフロロをじっくり、というよりじっとりと見て行く。

「な、何だよ」

「猫……に關係あるみたいね」

慌てるフロロに答えるローザは少し面白そうだ。しかし前回の訪れよりも人が増えているような。前も場所の割には人の多い所だな、と思ったものだが。そんな事を考えていると横から声がかかる。

「あら、あなた達、また来たのね」

そうわたし達を見て声を掛けてきたのは箒片手に笑顔を見せる女の子。女の子、といつても少し年上だろうか。

「あ、このウェイトレスさんね」

彼女の後ろに見える看板を指差しわたしは答える。前回来た時に寄った酒場兼大衆食堂の元気のいい店員さんだ。彼女はにこにこしながら頷いた。

「そうよー！よく覚えててくれたわね。……何、またバレットさんのお使い？」

「うーん、ちよつと違つけどそんなようなものね。『お使い』に出した人が違つけど」

わたしの答えに首を傾げるのを見て、付け足した。

「バレットさんの方にお使いに頼まれたものを取りに行くの。ところで、これ何？」

彼女の店にも掲げられた猫の旗をわたしは指し示す。ぱつと後ろを振り返った後、彼女は苦笑した。

「ああ、これ？村興しの一環っていえば良いのかしらね」

「バレットのところの猫か？」

アルフレートが首を突っ込んでくる。彼女はまた苦笑すると「まあね」と低音を響かせた。わたし達の顔を見たのかも少し話してもいいか、という様子で彼女は話し出す。

「実はもうちよつと西にいくと溪谷があるでしょう？アルフォレント山脈の。そこをぶち抜いてシェイルノースなんかの北の町とウェ

リスペルトを結ぶ街道を作る計画があるのよ」

「山をぶち抜くってこと？大丈夫なのかしら……」

ローザの心配にはわたしも同感だ。乱暴なやり方に聞こえるが、きちんと計画あつてのことなんだろうか。

「なんでも北側の町が乗り気で進めてる計画みたいなの。もしその街道が出来上がればこの村に訪れる人も減ってしまうでしょう？それで何か村の特色を出そう、って話が出たのよ」

なるほど、北との行き来が楽になればウエリスペルトなんかは「あ便利になったな」ぐらいだけど、南に比べて人の少ない北の町にとっては躍起になる問題なのかも。そうすると確かにこの村に寄る必要は無くなるなあ。

「バレットさん達もあなた達が帰っていったぐらいから随分村に溶け込んできたのよ。それであの珍しい猫さん達がうるうるしてる姿を立ち寄った旅の人が『可愛い』って言ってたから、こんな事になったってわけ」

見せ物……ってわけか。本人達の許可は取ったんだろうか。珍しい種族の彼らだもの。人が増えると誘拐とかに会わないか心配だ。目の前の彼女があまり良い反応では無かったわけが分かった気がする。

ウエイトレスの女の子と別れ、村の端にあるバレット邸へとやって来たわたし達は屋敷の様子に少し驚く。無機質に感じる薄いグレイの箱のような建物は変わっていないが、前庭には花が咲いていて玄関までの道が華やかになっていたからだ。きつと猫達を作ったのであろう木彫りの人形が所々に設置してあるのが微笑ましい。が、チャイムを押す前にゆっくりと開いていく門を見ると、いかにもわたし達を待ち構えていたといった様子で尻込みする。

「さて、今回はどんな遊びに付き合わされるやら」

アルフレートはそう言うと言敷地内にずかずかと入って行く。皆もそれに続くように足を踏み入れた。今の言葉でわたしの頭の中に前回

二回目に訪れた際のバレット邸の暗い廊下が浮かんでいた。外門が開いたというのに出迎えの顔は出て来ない。入ってこい、という意味だろうと受け止めたのかヘクターが扉に手を掛けた。

「わくわくしますねー」

というイルヴァの声と共に開かれる扉と、少しずつ見えてくる屋敷内。全開になってから暫し、わたし達は無言になる。

「また張り切ったわね」

ローザの呟き通り、中は初めて訪れた時とも二回目の時とも随分違うではないか。広い吹き抜けのホールに奥には階段。階段の上は左右二股に別れて先にどちらも扉が見える。ホールの左右にも扉があり、いかにも迷ってくださいという感じだ。白い大理石のような床に真つ赤な絨毯、朱色に金の細かい模様が入った壁紙は豪華な屋敷内にも見えるがどこか暗く、このご時世に蝋燭の炎が赤く照らすのは不気味さを煽っている。しかしバレットさんを知っている人間からすると『演出』なのだ、と分かってしまうから魅力減だ。

全員がホールに入ってから扉の閉まる重い音がする。顔を見合わせた時だった。

『ふはははははは、ようこそ迷える冒険者達よ』

くぐもったような不思議な声が響いてくる。どう聞いてもバレットさんの声だが姿は見えない。それに声の発生源はホールの広さでやたら声が反響するせいか、いまいち分からない。ま、別に良いけどきょとん、としたわたし達の反応に不満だったのか暫く静寂に包まれた。それでも新しい反応が起きないことに諦めたのか声が再び響く。

『私の迷宮に足を踏み入れた君らを待つのは死か名誉か……。さあ、私の元までくるがいい！』

「またこの展開？あんまり時間掛けたくないんだけど」

腕を組むローザのぼやきにわたしが頷いた時、新しい声が聞こえてきた。

『たすけてにゃー』

タンタの声だ。思わず顔を上げて何もない空間を眺めてしまう。しかし棒読みにも程が有るだろ、という台詞にタンタがあまり気乗りではない様子が窺えた。

「聞いたかね？君らとも知り合いであるかわいい猫ちゃんだよ！助けたければ君らに逃亡という選択肢は無いのだ！」

「いやあんたに用があるんだよ」

フロロの的確な突っ込みが虚しく響く。続く台詞が無いが少し待った後、何も無いのを確認してわたしは口を開く。

「……じゃあ、とりあえず行きましょうか。付き合ってあげないと話しも出来なそうだし」

全員の頷きを見ると「どこから行くか」という話し合いを始めようとする。やっぱり一階からかな、と考えた時、またホールは騒がしさに包まれた。

「……ふいー、じゃああの子らが来るまでお茶にしようか」

「旦那さま、お茶とコーヒーどちらにしますかにゃ？」

「ビールが飲みたいのう」

「……少しだけですよ？昼間からお酒はあまり感心しませんにゃ」

「旦那さまー、こないだ貰ったクッキーの箱あけて良いかにゃー」

「おうおう、構わんぞ。でもあの子らが来たら一緒にお昼だから、控えめにね。……おいトントン！あそこにあるナッツの缶取ってくれい」

「にゃんは丸いクッキーがいいにゃー！」

「あ、やべ……」

ぷつり、というロープを切ったような音を最後に静寂が戻ってくる。

「……明らかにオンオフのスイッチ切り忘れてたわよね」

呆れたローザの声にフロロも続く。

「付き合ってやるんだから、せめてちゃんとして欲しいな」

ふう、という全員の溜息の後、イルヴァの勘に任せるといふこちらもいい加減な理由で一階の右手から回ることに決まった。

「おっと、いきなりかよ」

右手に進み、扉に手を掛けたフロロが呟いた。位置といい扉の簡素さといい『使用人室』のような、主が使う感じの部屋ではないように見える。前でござこそとしていたフロロが懐を探るとぱっ、と何かを取り出す。針金だ。躊躇の無い様子で鍵穴にそれを突っ込み、まるでこの扉の鍵を使ったかのような早さで「かちり」と音が鳴る。おおー、と拍手する一同。

「さくさく行こうぜ！」

そう言ってフロロはドアノブを回し、中へ入って行った。その後をわたし達も続く。

中に入って見た光景は少しがっかりするものだった。青い壁紙に囲まれた短い廊下が続いていたのだ。

「なんで廊下に鍵掛けるのよ」

わたしの文句にローザが頷いた。フロロが振り返り前を指す。

「どっちに行く？」

行く先、すぐに新しい扉が待ち構え、その手前の左側にも扉がある。前の扉が茶の重厚な扉なのに比べて左側の扉は白く一回り小さい。用具入れの扉、といった感じだ。

「あ、こっちは鍵掛かってないな」

フロロが前方の茶の扉のノブを回し、きい、と音を立てて向こう側が少し覗く。向こうも同じような青い壁紙の廊下が続くのを見たわたしは左にある扉を指差した。

「ここは何？何かあるかもよ」

普通なら人様の家をこんなに見て回らないが、ここはバレットさん提供のダンジョンなのだ。ゲームを楽しむように色々探してみた方が良くかもしれない。フロロは黙ってまた針金を取り出すと、先程よりは時間は掛かったものの見事な手さばきで鍵を開ける。そろそ

ると開ける扉の先には予見したように狭い物置スペースがあった。

「お、ご褒美ってやつかな」

その物置スペース程の小さな部屋の真ん中に一抱えする程の大きさの木箱がある。それだけがぽつん、とある状況は「取って下さい」と言われているようで逆に躊躇してしまふ。が、フロロは楽しそうにひよいひよいと箱に近付くと、何かを警戒するようにゆっくりと表面に手を触れた。しばらく何か調べていたが「何も無い」と判断したらしく上蓋を取る。

「……人形だった」

そう言つて振り向きながら見せてきたのは手のひらサイズのお人形。毛系の髪の毛が三つ編みになっている女の子の人形だ。

「まあまあ、バレットさんが用意したんだから金銀財宝なんて入ってないわよ」

ローザが慰めながらフロロの上着に人形を押し付けた。フロロは不満らしくむくれている。

「簡単な鍵開けて木箱の蓋取った事への報酬なら、こんなもんだろ」アルフレートが大欠伸をしながら言い放った。

先に進むと全く同じ展開を迎えることになってしまった。すなわち更に先に進む扉に、左側には鍵の掛かった扉。ずっとこのループが待っているとしたら、ちよつと迷うかもしれないな。

「……これは俺の出番じゃないな」

鍵を調べていたフロロが扉から離れてこちらを振り返る。

「開いてるってこと？ だったら……」

わたしは早く開けようよ、と言おうとした所で止まる。ドアノブに薄ら見える光源のようなもの。魔法が掛かった物体に見えるオーラだ。物質的な施錠ではなく魔法の鍵が掛かっているということだろう。そこまで考えてフロロからの視線にわたしは慌てる。

「『アンロック』でしょう？ 無理無理、あんなの使えないわよ」

「なんだ、情けないな」

小馬鹿にする台詞を吐くアルフレートをわたしは睨んだ。『アンロ

ツク』は魔法の鍵を解く魔法だ。唱えれば即、解錠されるわけではなくて施錠した使い手の仕込んだ細工を読み取って、暗号を解くように解除していかなくてはならない。そういう意味では物質的な鍵を解く工程と似ている。

「じゃあアルフレートがやってよ！」

わたしが背中を押すとアルフレートは「泥臭い魔法は嫌いなんだがな」と言いながら扉の前に出る。古代語の詠唱を響かせながらノブに手をかざし、

「アンロック」

呪文を完成させた。芝居がかかる仕種で扉を開けて見せる彼にわたしは顔を歪ませた。悔しいけどこういうものの練習も積んだ方が良くかもしれない。

中を見ると今度は立派な鍵の付いた木の箱がある。金属の縁取りといい「宝箱」といった感じだ。フロロが手を擦り合わせながら近づく。

「おっと同時に解かないとニードルが出てくるタイプか……。中にも鍵がある、と。しかし年代物だな。骨董屋で買ってきたかね……」
ぶつぶつ言いながら箱を弄り始める。皆が遠巻きにそれを眺める中、ヘクターが感心げに呟いた。

「何で罫とか鍵の種類とか分かるんだろうね」

「気配だよ。兄ちゃんがモンスターの気配を嗅ぎ取るように、俺には臭ってくるわけ。……ほい、開いたぜ」

ぎい、と音を立てて宝箱が中を見せる。リボンで綺麗にラッピングされた何かが頭を覗かせているではないか。

「……クッキーだぜ」

そう言っただけ片方の眉を上げるフロロにイルヴァが黙って手を出した。

「また同じ廊下ですかあ」

イルヴァがクッキーをもそもそと食べながら軽い声を上げる。再び

前に進んだわたし達はまた同じ青い廊下に立っていた。

「これで三ブロック目よね。一応覚えておかなきゃ」

わたしがそう言う横でローザが前方を指差した。

「あれ、でも扉の位置が変わってるわよ」

ローザの言う通り今まで前方にある扉が茶の重厚な扉、左側にあるのが白い小さな扉だったのに対して、ここは目の前に白い扉に左側が茶の扉に変わっていた。

「曲がり角なんだよ」

ヘクターが左手に右手を垂直に合わせる。成る程、屋敷の敷地内の曲がり角に来たってことか。

「じゃあまたこっちを開けるか」

フロロが鼻歌混じりに白い扉に近付いていき、針金を鍵穴に差し込んだ。後ろから様子を見るが忙しくなく針金を出し入れしているようにしか見えない。これでどうして開くのが不思議だ。かち、と乾いた音の後にフロロが扉を開ける。やっぱり白い扉の方が小部屋の入り口らしい。先程の二部屋と同じような正方形の狭い空間があるが、今回はその小部屋いっぱいにわたしが入れそうな程大きな箱がどすん、と居座っていた。フロロが「うひょー」という奇声を上げつつ箱に手を伸ばす。さっきの宝箱のように金属の縁取りが物々しい。鍵穴も横並びに三つと何やらもの凄いお宝がありそうな見た目だ。

心無しか皆からも期待する気配を感じる。人形にお菓子、と続いたけどこの大きさ見るとわくわくしちゃうよね。と思っただが「やめた」というフロロに驚いてしまった。

「どうしたの？」

立ち上がる彼に尋ねると珍しく難しい顔をしている。

「この三つの鍵穴、同時に操作しないと面倒なことになりそう。俺一人じゃ無理だもん。こういうのは諦めるのも大事な判断でしょ」フロロの言葉に皆顔を見合わせる。確かにフロロを手伝う自信なんてわたしには無いし、他の皆も同じだろう。

「もったいないですねー。ごちそう入ってるかもなのに」

鼻をひくつかせながら箱の匂いを嗅ぐイルヴァにフロロが振り向いた。

「火薬の匂いしかないぜ。多分『開けない』のが正解の宝箱なんだろ」

火薬……。下手に開けるとドカーンってことだろうか。それは確かに手伝いも無理そう。

「バレットさんのテストってことね。ってことはこの先もあの爺さんが用意したテストが溢れてるわけか」

ローザが腕組みながら唸る。腕試しさせてやろうということだろうが面倒な、と思ってしまうた。ここまでは鍵開けの問題ばかりだったけど、それだけじゃなさそうだし。ソーサリーに向けた魔法のテスト……。なんてものが待ち構えていたらどうしよう。さっきの魔法の鍵はアルフレートにやってもらったことだし、次こそわたしが何とかしないと立場無い。

爪を噛むわたしを余所に、フロロが「先進むぜ」と言いながら茶の扉を開けた。先に見える光景に思わずわたしは「ぎゃー！」と悲鳴を上げつつ、ヘクターの後ろに隠れてしまった。

「やややあだ、こわいじゃないのー！」

ローザも上擦った声を出し、アルフレートの背中に張り付く。現れたのは正方形の広い部屋。学園の教室ぐらいあるかもしれない。そしてわたし達をびびらせる原因といえば、真っ赤なのだ。床に敷かれた絨毯も壁紙も赤で統一され、赤く薄暗いランプの光が天井まで赤に染めている。

異様な部屋に目を奪われていたが、ヘクターがロングソードを抜く気配に再びびくり、と背中が震える。ぎちぎちと耳障りな音を立てて起き上がる影が、部屋の奥に浮かび上がった。イルヴァもクツキーの残りを胸元に押し込み、ウォーハンマーを構える。ぎこちない動きで立ち上がったのは全身が銀色の奇妙な生物。全身鎧の人間にも見えるが、何か変。細いというか……。人型の生き物を銀色に塗り

たぐったようなモンスターのようだ。

じゃきん！と鋼の音を鳴り響かせ、指の先から長い爪が現れた。瞳が妖しく光る。その数三体。

「前に来た時のワーウルフだ」

フロロが呟いた。あれが？とも思ったが、前回ここに来た時にうるうるしていたワーウルフ型のからくりを中身だけにしたらこんな感じかも。どうせわたし達には作り物なのがばれてるし余計な装飾はいいや、ということだろうか。

モンスター達が金属音を響かせながらこちらに踏み込むのと同時に、ヘクターの体が動く。が、それより早くイルヴァの長い髪が舞った。回転する体と振り回されるウォーハンマーに啞然としている間に、こちらに飛んできた金属片をヘクターが「おっと！」という掛け声と共に切り払う。

ひしゃげた三体のからくり人形はぎぎ、と微かな動きを見せた後、ばたりと倒れた。

「……ちよ、ちよっと、危ないじゃないの……もうちよっと考えてよ」

イルヴァにぶん回されたウォーハンマーが壁に削り取った線を付けているのを見て、ローザが後ずさる。

「お腹空いてイライラするんです」

頬を膨らませたイルヴァがどすん、と重たい音を立ててウォーハンマーを床に置いた。

「あーん、もう邪魔ですよおー」

棒読みの台詞を吐きながらからくり人形をめこめこと倒していくイルヴァを、後ろで見守るわたし達。もう三つ目の赤い部屋に侵入してきたが段々モンスターの数が増えている。さっきの青い廊下と同様に一本道になった部屋を順に進んでいるだけなので、単調さにだられてきた。「ふう」と息つく声にイルヴァを見るとこの部屋のからくり達も全てが動かなくなっている。生き物ではないとはいえ、いびつに歪んだ形で動かなくなっている姿は妙に哀愁を感じるものだ。

「じゃ、進もうか」

フロロが指差す扉を見てわたしは眉を寄せた。

「何かボスの部屋って感じねえ」

入ってきた扉から見て左手にある扉は大きな両開きのもので、広いホールの入り口のように見える。全部の部屋を回ってないし、これで最後とも限らないが位置を考えると『主の部屋』とも考えられる。「ま、躊躇しててもしょうがないっしょ」

軽いノリでフロロが扉を開けていく。彼には重かったようで途中からヘクターが代わってやったりして中が見えてきた。

「真っ暗じゃない……」

そう言つて『ライト』の呪文を口に始めた時だった。突然闇の中に浮かび上がる二つの光。首を大きく傾けて見上げなければならぬ位置にあるのは巨大生物の瞳だ。

「ばたん！と勢いよく扉を閉めるわたしとローザ。

「なんだ、行くんじゃないのか」

見下す目で見えるアルフレートにローザは「い、いや反射的に……」と口籠った。

「つーか何！？何あれ！？超でかつたけど！」

焦るわたしにアルフレートが答える。

「前に来た時もいた、変な巨大ロボットだろう？」

「あー……なんだっけ、名前。シュバインシュタイガーみたいな名前じゃなかったっけ？」

ヘクターが首を捻る。その様子にフロロが頬を掻いた。

「何でもいいよ。で、どうすんの？」

その言葉に皆で顔を見合わせた後、ヘクターが口を開く。

「とにかく何とかしないといけないのは確かだし、行こう。リジアとアルフレートは明かりを。俺とイルヴァで突っ込むから……」

そう言ってイルヴァを見たヘクターに残りのわたし達も固まってしまった。

「どうしたの？」

ローザがしゃがみ込むイルヴァに尋ねると弱々しい声が返ってくる。

「お腹空いて動けないんです」

一瞬の間の後、皆から漏れる溜息とアルフレートの大きな舌打ち。

それを聞いたヘクターが慌てて手を振った。

「ま、まあまあ、俺もお腹すいたし、イルヴァはちょっと休んでてもらってことで」

「甘いなあ、兄ちゃんは。……でもさ、『あいつ』って魔法しか効かないんじゃない？」

フロロはそう言っただけを指差す。そういえば前回もイルヴァとヘクターの物理攻撃は全然効いてなくて、アルフレートの魔法で呆気無く終わったんだっけ。

自然に皆の視線が自分に集まっていることに気が付いたわたしは飛び上がりそうになる。

「わ、わたし！？本気で考えてる！？」

「アホか、お前に命運掛ける気になんてなるわけないだろう？」

アルフレートの冷めた目に怒りで顔が赤くなるが、任されても困るのは確かだ。となるとやっぱりアルフレートにさっさと決めてもらうのが一番早そうだけど。わたしの顔に出ていたのか、アルフレ

トは退屈そうな顔で頬を擦った。

「どれ、やってみるか」

そう言うなり呪文を唱え始める。わたしも照明を作る為に『ライト』の呪文を唱え始めた。暫くの間二人の詠唱の声が室内に響き渡り、アルフレートが扉に手を掛ける。

「ライト！」

勢い良く開かれた先にわたしは明かりを送り込んだ。照らされて現れた懐かしいずんぐりむっくりの巨人にアルフレートの呪文が放たれる。

「アークボルト」

巨人の足下に現れた光のサークル。それを起点にして眩しい電流が天井に向かって駆け上った。どどど、という地鳴りにも似た激しい音。巨人の体が大きく揺れている。光が収まった後、ゆらゆらと痙攣していた巨人は倒れるか、と思ったのだが両拳を振り上げるような動きを見せるではないか。発光する体は電流を纏っているように見える。これって、受けた電流を蓄えたように思えるけど……。

「閉めて！」

ローザの悲鳴に反射的に体が動く。倒れるように体をぶつけ、ばたん！と扉が閉まった瞬間、頭の上で爆音が響いた。扉と天井の間に穴が空き、煙が立ち上っている。

「……ちよつと洒落になんないじゃない！」

震える体を軋ませながら横を見ると、同じく倒れ込んだアルフレートと目が合う。

「跳ね返されたな。対電対策もばっちり改良されたか」

「その落ち着いた分析が腹立つのよ！」

わたしは喉が許す思いっきりの怒声を、しきりに頷くエルフにぶつけてやった。

どしんどしん、と巨大ロボットが動き回る音にびくつきながら扉を

見つめる。追ってはこないようだが扉の上に空いた大穴が奴の攻撃本能を物語っている。

「どうする？」

眉間に皺寄せながらフロロが皆を見た。大きな溜息一つ、ローザが答える。

「一度入り口まで戻る？まだ反対側も回ってないし、二階もあったわよね」

「でも屋敷の構造的にここが中心じゃない？どこから来てもここに着くんだと思う」

わたしがそう言うとなフロロが「俺もそう思う」と手を上げた。

「明るくなった一瞬に見たけど、反対側に扉と右手に階段が二つあった。多分四方向から全部この部屋に繋がってるんだと思うよ」

おお、流石やり手シーフ、よく見てるなあ。わたしが感心しているとヘクターも手を上げる。

「左側にも扉があつた」

「じゃあフロロの話が合ってるなら、その左手にある扉が怪しいわね」

ローザが深く頷く。ぼーっとした顔でそのやり取りを見ていたイルヴアが口を開いた。

「何でもいいです、早くご飯……」

そう言われてもとにかく中にいる巨人を何とかしないと。倒すのは無理でも目を逸らすようなことが出来れば隙について移動出来るかもしれない。でも生き物でもない相手に隙が生まれるんだろうか。わたしは唸る。

前に戦った時はバレットさんが操縦しているみたいだったけど、操縦者が見当たらない。自らの意思で動くようにも改良されているみたいだ。人間のように意思が一つなら隙も生まれるけど、ああいうのってどういう仕組みで次の行動を決めてるんだろう。操縦者がいればそれを叩けば動かなくなる、っていう案も考えられるのに。そこまで考えてわたしはぼん、と手を叩いた。

「動けなくすればいいんじゃない？凍り付けにしちゃうとか！」
自分でも良い案だと思ったのだが、なぜか皆の動きが止まる。

「……誰がやるんだ？」

アルフレートがちらりとわたしを見る。思わずむっとして胸を張った。

「も、もちろんわたしがやるわよ」

「……じゃあ皆、下がって。あたしが嚴重に結界張るから」

ローザが『嚴重に』をやたら強調して言うのと、よっこらせ、と立ち上がる。「世話の焼ける」という空気は気のせいだろうか。ヘクター以外が部屋の端にぴったり寄る様子を見て、わたしはイライラしながら呪文を唱え始めた。背中のダガーを引き抜くと扉の前の床に刺す。増幅装置、とまではいかないがコントロールしやすくなるこのダガーはわたしが個人的に作ったものだった。

ルーンを並べながら頭の中でイメージする。金属の固まりである巨人が凍りつく様を。一度目を瞑り、再び扉を見つめて開け放った。

「スモークブリザード！」

突き出した両手から吹雪が巻き起こる。扉を開けたことでこちらを振り向いた巨人に向かって氷の粒が勢い良くぶつかっていった。まるで人間の反応のように腕で顔を覆う巨人が、徐々に氷で覆われていく。ふと気が付くとわたしの前髪にも氷の粒が張り付いていた。巨大な冷凍室のようになった室内に「やった!？」と声が弾むが、ぎぎぎ、と微かに揺れる巨人の指先に顔が強張る。

「急いで！完全に固まらなかった！」

わたしの大声に全員が弾かれたように走り出す。先頭を走るフロロが「さみー！」と悲鳴を上げながら部屋に入り、ヘクターの言っていた扉に飛びつく。それに追いついたわたしは悲鳴に近い声で急かした。

「は、早く早く！動いてるよー！」

かなりゆっくりとだが巨人は固まった体を何とかしようとするように手足を動かしている。ばきばきという氷が割れる音が気持ちを焦

らせた。

「と、扉まで凍ってるじゃんかよ！」

流石にフロロも慌てた様子でこちらを振り返る。びっしりと氷で覆われた扉と、回そうとしてノブに張り付いてしまったフロロのグローブが持ち主から離れてだらりと揺れた。

「やっぱりやり過ぎたんじゃないのぉ！この暴走娘！」

ローザがわたしに向かって悲鳴を上げた。その間にも少しずつ巨人はこちらに向かってきている。

「しょうがないじゃん！じゃあもつと止めてくれりゃー良かったのに！」

言い返すわたしの横でアルフレートが大きく溜息をついた。すっと両手を突き出すと扉に向かって何かを唱える。

「フレイムシールド」

顔に一瞬だけ熱気を感じた。炎の防御シールドを作り出す呪文だが、その簡易版なのだろうか。一瞬だけ舞い上がった炎は消え去ってしまふ。氷は蒸気と床に広がりつつある水に変わったようだが、ノブに張り付いたままだったフロロのグローブと一緒に燃え上がる。

「俺のグローブ！」

悲鳴を上げるフロロをヘクターが抱えると「中へ！」と言って扉を開け放った。先に見える真っ暗な光景にわたしとアルフレートがライトの呪文を放つ。長い長い階段が下に向かって伸びていた。

暗がりには伸びる階段を転げそうに、いや半分転がりながら降りていく。地下三、四階分は下ったのではないかという段数に太股が張ってきた時、先に扉が現れた。その前で皆が足を止め、お互いにぶつかり合いながら崩れ落ちる。

「……はあ、焦ったー！」

乱れる呼吸の間に声を漏らすわたしを、隣りで床に俯せになったフロロが睨んできた。

「俺のグローブ！弁償しろ！」

「わ、わたしい！？消し炭にしたのはアルフレートじゃない！」

弁償が嫌、というよりも責任を負うのが嫌なわたしは思わず言い返す。するとアルフレートが指先をわたしに突き付けてきた。

「原因を作ったのはお前じゃないか」

「どっちでもいいよ！あのサイズでちゃんとした盗賊用のグローブ探すの大変なんだぞ！」

ああ、確かに大変そうだな、と叫ぶフロロの小さな手を見てわたしとアルフレートは頷いた。その様子を見ていたローザがばんぱん、と手を叩く。

「喧嘩は後でいいわよ！先に進みましょう。イルヴァが限界に近いわ」その言葉に壁に身を預けて座り込むイルヴァを見る。焦点が定まらない目をしていて頭にはヒョコが舞っていきそう。かわいそう、と思うよりもイルヴァって一日どのくらいのエネルギー使ってるんだろっ、なんて疑問が沸いてしまった。

「……後でしっかり追及するからな」

フロロはぶつぶつ呟くと飾りけの無い扉のノブに手を掛けた。鍵穴も無いし開いているようだ。軽い音を立てながら開く扉の先、また暗闇が続いている。わたしは指を振ると自分の出現させた『ライト』の光を先行させた。

「なんだ、ここ？」

先頭のフロロがぼかん、と辺りを見回す。広い部屋にクッションが
いっぱい落ちているのだ。何だろっ、と思った時、自分の間違いに
気付き総毛立つ。

「スライムよ！」

わたしの叫びと同時にヘクターのロングソードを抜く音がする。う
そぞと気味の悪い動きを見せる透明のモンスターはわたし達を囲
みだした。

「き、気持ち悪いーい」

ローザが後ずさる先にもスライムの集団がいる。ヘクターがローザ
の腕を引っ張るとスライムの一匹に剣を走らせた。すぱっと簡単に
切れた体だったが、

「うわ、なんだこれ」

ヘクターが驚いた声を上げる。二つに分かれたスライムはそれぞれ
が綺麗な球体に戻り、別々にまた動きだしている。

「数を増やすだけだ、止めておけ」

アルフレートが冷静に答えると呪文を唱え始めた。が、何か思いつ
いたように動きを止めるとわたしを見る。

「勝負しないか？」

「な、何で？」

嫌な予感に小声になってしまつわたし。

「グローブの弁償を賭けて勝負しようじゃないか。こいつらには魔
法しか効かない」

そう言い終わるなりアルフレートは光球をスライムの集団に向けて
投げ放つ。すぱん！と景気の良い音を立てて弾ける無機質のモン
スターはそのまま溶けて蒸発していった。

「ちよつと待つてよ！……ローザちゃんは？」

アルフレートとガチ勝負なんて冗談じゃない、と親友を巻き込もう
とするが、

「あたし？判定員になってあげるわよ」

そう言つて指を折りだす姿に更に慌てる。

「ちよちよちよと待っててば！それもう数えだしてるってこと！？」

「騒いでないでさっさと呪文唱えだした方が良いと思つぜ」

フロロの冷静な声に振り返ると、アルフレートが鼻歌混じりにスライムを消していく姿があつた。にこにこ指を掲げるローザに困つた顔のヘクター、我関せずのフロロとイルヴァに味方がいないことを確信する。

「く、やってやるわよ！」

そう叫ぶ間にもアルフレートの呪文によつて弾け飛んでいくスライム達の姿に気を取られながらも、必死でわたしも呪文に取りかかり始めた。

「エネルギーボルト！」

暴走気味の不安定な形をした光球がわたしの手元から離れ、勢いよく飛んでいく。始めこそ床を這うように進み無数のスライムを巻き込んでいくが、すぐに上昇気流に乗ったかのように天井に跳ね上がっていく。ばうん！と激しい音を立ててぶつかつたが特殊な素材で出来ているのか天井は無傷だ。ほっとするも、

「ファイアボルト」

アルフレートの静かな声にまた幾つものスライムが消えていく。まずい、とてもまずい。咄嗟に浮かんだ呪文の断片を口に出した瞬間、ローザの顔色が変わった。

「何唱えようとしてんのー！」

わたしを羽交い締めするローザにはっと我に返るも、焦りしか沸いてこない。

「やらせて！このままじゃ負けちゃうじゃん！」

「『サラマンドー』って聞こえたわよー！ファイアーボールでも唱えてあたし達全員消し炭にする気！？」

悲鳴に近いローザの声に結界でも張つてろ、と答えそうになるがフロロが冷静に言い放つ。

「言つとくけど、少しでも俺らにダメージあつたら即、負けにするからな」

至極真つ当な突っ込みにわたしは口籠るしかなかった。

「圧勝という快感は私にこそ相應しい」

うつとりとした顔のアルフレートに、さっきまで「リジアの負けー」とはしゃいでいたフロロも引き気味だ。がつくりと肩を落としながら続く暗い通路を歩くわたしにヘクターが声を掛けてきた。

「グローブが駄目になったのも、皆リジアが悪いと思ってるわけじゃないから、気落とさないで」

優しい言葉にぐっとくる。この人がいなかったらとつくに冒険辞めてるんじゃないだろうか、わたし。

「フロロはグローブの代金より探すのがめんどくさいんですよ？」

イルヴァと一緒に買い物に行きましようか？」

イルヴァの可愛い声に、

「い、いや、それは遠慮したいかな」

とフロロが柔らかく断った。それをにやにやと見るアルフレートを眺めながらわたしはさっきまでのことを考え始める。

やっぱり状況に相應しい魔法を咄嗟に、次々に唱えていくって想像より難しいんだな。今だったらあれ唱えておけば良かった、とか思いつくんだけど。わたしの場合、慌てることでいつも以上に魔法が暴走気味になっちゃうし。そう考えると学園での魔術師クラスって勉強ばかりで何で実践が無いんだろう。まずは知識、ってことかもしれないけど、今のこの足の引っぱり様を考えるとちょっとねえ……。でもアルフレートがない所だと『火事場の馬鹿力』的に上手くやってる気もする。っていうとやっぱり甘えてしまっているんだろうか。

わたしの考えも知らずにアルフレートは歩きながら、
「飽きた」

と呟く。わたし、そしてローザも大きく溜息をついた。

「飽きたって、ねえ……。そういう問題じゃないでしょうが」

呆れるローザに顔色変えずにアルフレートは答える。

「飽きたものは飽きた。何で毎回こんな無機質な迷路を歩かされるんだ。せめて壁に絵でも描いとけばいいのに」

いいか？と聞き返したくなる台詞にわたしとローザが顔を見合わせた時だった。

「あ、また扉だよ」

いつの間にかヘクターに肩車されているフロロが前を指差す。廊下の突き当たりに大きな扉が見える。足を進めるにつれ『ライト』の光が届き、全貌が見えてきた。色とりどりの折り紙で星を象った物や猫の形の物がぺたぺたと張られた壁は幼児のお誕生日会の会場のような雰囲気。左右に伸びる弾幕には妙に下手糞な字で『いらつしやい』と書かれている。

「……ここでゴールみたいね」

ここまで分かり易いお出迎えも珍しい、と思いつながらわたしは呟いた。はあやれやれ、と扉に手を伸ばしたがふと思う。

「また変なロボット用意して待ち構えてたりしないかな」

振り向くわたしに皆も「あー……」と考えるような顔になった。

「さっき出てきたんだし、もう無いんじゃない？」

ローザが眉を寄せる横でヘクターも頷く。

「用意してあったらあつたで考えよう。さっきと同じ性能だとちょっとキツいかもしれないけど」

「これで名前も分かるかもしれないですねー。何か長い名前だったのは覚えてるんですけど」

イルヴアには記憶力は期待していないが、わたしも覚えていない。

「何だっけ、ジャック・ウィルシャー？」

「それもう完全に人の名前じゃん」

アルフレートとフロロの会話を横にゆっくりと扉を開いていく。予想以上に明るい室内に目を細めた。するとぽけつとした顔のバレッ

トさんと目が合う。

「あ、遅かったねー」

ビールグラス片手に安楽椅子でくつろぐ姿にいらっとした。しかし良い匂い、と空腹のお腹が鳴りだす。

「皆さん、いらっしやいにやー」

「お久しぶりだにやー、ご飯用意してあるにやー」

「早く席に着くにやー、待ってたにやー」

にやーにやーとまとわりつくのは懐かしい姿。猫そっくりだけど二足歩行の不思議な種族、その中に白猫タンタの姿もあった。わたしと目が合うとにやー、と笑い恥ずかしそうに身をよじる。

「お久しぶりだにや」

うふふ、と笑う姿に顔がほころぶものの、やっぱり男の子か女の子かは謎のままだった。

「あー、お腹空いた」

案内されたテーブルに着くなり、ローザが珍しいばやきを吐く。地下だというのに明るいは綺麗なランプシェードに包まれたいっぱいの魔晶石のお陰なんだろう。広いテーブルに全員が着くのを見るとバレットさんが口を開いた。

「王子のお使いで来たんだよね。お疲れさまー。遠いのにご苦労さん」

思わず頷きそうになるが、あれ、わざわざ『遊び』に付き合ってたことは流しちゃうの？と非常にもやもやした気分になる。が、わざわざ話しに出すのも面倒くさい、とお腹が鳴りっ放しのわたしは思う。皆も同じ気分だったらしく疲れた顔のまま、運ばれてきた飲物を一斉に飲み干す姿があった。

「いっぱい冒険したんだねえ」

わたし達のこれまでの話しを聞き終えたバレットさんはしみじみと頷き、グラスを回した。食事のお供に、とわたし達の冒険の話しを聞きたがったバレットさんはこれこそが本来の目的だったように見えた。わたしは食後のデザートであるフルーツ入りミルクレープに手を伸ばしながら口を開く。

「わたし達の話しはこのへんでいいから、王子が頼んだプレゼントって何です？」

その質問にバレットさんは「んー」と唸り、眉間に皺寄せた。

「せっかちじゃのー、お嬢ちゃん」

「全然せっかちじゃない！むしろ気の長い方だわ！散々ふざけた屋敷に付き合わされて！」

叫ぶローザの横でイルヴァが「あ、ローザさんこれ貰いますね」と言ってケーキを奪っていく。すっかり元気になったようで良かった。その間に何処かに消えていたタンタが一抱え程の箱を手に持ち、とてとてと戻ってくる。

「これですにゃー、王子が旦那様に頼んだ王妃様へのプレゼント」
おお、とわたし達は目を輝かせる。しかしバレットさんは困った顔で髭をいじり始めた。

「期待させちゃって悪いんだけども、王子から『中を見せないように』って言われちゃってるんだよねー。何でも一緒に驚かせたいから、って」

なるほど、王妃にお披露目した際に一緒に楽しもうという事か。しかしバレットさんの言葉に少し引く掛かるものを感じる。

「驚かせたい、って驚くようなもんが入ってるってことかい？」

フロロの質問はまさにわたしが思っていたことだ。しかしバレットさんは呑気な顔を崩さずに「さあねー」と答えるだけだった。むう、

食えないじいさんだ。

「まあまあ、あたし達も楽しみにしておきましょう。どうせ誕生日会では見られるんだし。サントリナまではフローラの中に仕舞っておくわ」

ローザがそう言つてローブのポケットからフローラちゃんを引つ張り出す。あそこに入れてたんだ、とちよつと驚いているとバレットさんが目を丸くした。

「おうおう、ちゃんと可愛がつてくれるのか、嬉しいのう」

そう言つて手を出すバレットさんにローザは一瞬躊躇を見せたものの、作り手の元へフローラを歩かせる。

「なんとまあ、随分丁寧に扱われてるみたいじゃの」

うふふ、と笑うバレットさんにヘクターが質問する。

「分かるんですか？」

疑う、というより微笑ましそうに尋ねた問い掛けにバレットさんは大きく頷いた。

「そりゃあもちろん、触れるだけで大切にされてる感じがするものさね。作ったワシにしか分からんかもねー」

そう言つてほお擦りするが、されているフローラちゃんは嫌そうに目を細めている。が、突っ込めない。微妙にわたしが視線を逸らしているとバレットさんが「そーだっ」と叫んだ。

「サントリナ行くんだよね？ だったら良い案がある。フローラちゃんを改造してサントリナまでの道のりを短縮してみせよう！」

「ほ、本当に？」

えへんと胸張る科学者にわたしは身を乗り出し尋ねる。

「任せなさい！ ただ今晚いっばいは掛かるだろうから、一晩くらい泊まっていけるじゃろ？」

その言葉にタンタ達猫はにやー、と嬉しそうに笑い、わたし達は顔を見合わせる。ヘクターがバレットさんに「実は……」と口を開いた。

「学園の仲間と待ち合わせしてるんです。始めからこの村には滞在

する予定だったので……」

「仲間とな！卵かね？若いのかね？」

何故か興奮気味のバレットさんにヘクターは身を引きつつ答える。

「え、ええ……、俺達と同じ学生ですが、もう二回程一緒に行動している六人グループで……」

言い終えより早く猫達の動きが慌ただしくなってしまった。

「お部屋の準備にやー」

「ベッドメイクはにゃんがやるにやー」

「夕食の買い出しにや！」

ばたばたと消えていく彼らにお礼も言いそびれてしまう。そうだ、働くのが好きなんだっけ。ならば主にお礼を、と振り返ると、

「ハイブリット化か……、まさに生物の進化と科学の勝負。いや融合か？」

などとぶつぶつ呟きながらバレットさんは部屋を出ていってしまふ。

「何だよ、有り難いけど客はほっときっぱなしだよ！」

フロロが呆れたように叫んだ。

それにしてもバレットさん、フローラちゃんをどう改造するつもりなんだろう。凄い人なのは分かっているのにこの全部信頼寄せられない感じは何なのか。

腕を組み眉間に皺寄せているとアルフレートの呟きが聞こえてくる。

「シエイルノース組は上手く行ったのかね……」

その言葉に金髪の少年レオンが気難しい顔でデヴィス達を出迎えているところを想像してしまった。

「大丈夫なのかしら……」

用意された寝室の窓から身を乗り出してローザが心配そうに呟いた。見る先にはバレットさんの研究室という離れがある場所だ。建物の窓から漏れる光が暗闇に浮かんでいた。一応可愛がっていた飼い主という立場だからか落ち着きのないローザを見て思う。やっぱり改

造ってお腹切ったりとかそういう手術みたいな事やるんだよね。大丈夫なんだろうか。いや、でもフローラちゃんロボットだし……。つていうかバレットさんが作ったものだし。

「イルヴァの心配もしてくださいよー」

ベッドに横になりながら苦しそうな声を上げる主を見る。珍しく食べ過ぎ、という経験をしたイルヴァが胃の辺りを押さえながらローザを見上げていた。

「あんたは一時間もすればけろつと治るんだからいいでしょ！神官であるあたしが心配するような事じゃないわよ……」

ローザの言葉に、そういえばこの人神官になったんだつた、と今更なことを考えたりする。

「デビース達つて早ければ明日にはこの村に着くよね。……上手くいったのかなあ」

わたしが半分独り言のように呟くとローザが一度こちらを見て、窓を閉める。ベッドに座るとふう、と息をついた。

「レオンの事でしょ？あたしも色々考えちゃってねえ。捨てられた事實は間違つたものだとしても、彼はシェイルノースのご両親を選ばれたわけでしょ？他人からすれば『一度くらい本当の両親に会つてみるのもいいんじゃない』つて事で、本人にとつてはキツい選択よねー」

そう、そしてその提案をしたのは王室側なのだ。レオンが自ら望んだわけじゃない。レオンが来る事を選んだとすればきつかけを与えたことになるが、来ない事を選んだとすれば彼の心を、立場を不要に乱すことになる。

「平々凡々な家庭に生まれたわたし達があれこれ考えたところで無駄なのかもねえ」

情けないがわたしの今の本心だ。それを聞いたローザがぱつと顔を上げる。

「ヘクターだったら少し気持ち分かるんじゃない？彼はどう思ってるのかしらね」

その提案にはわたしは眉を寄せて首を振った。

「両親いない立場だから分かるでしょ、って？失礼すぎて聞けないわよ、そんなこと」

わたしが言うところローザはしゅん、と頭を下げる。

「そうよね……考え無し過ぎたわ。大体聞いたところでどうなるわけでもないしね……」

「まあまあ、何とかしたい、って気持ちが行き過ぎてもしかしたのは分かるよ。わたしも同じだもん」

項垂れるローザにわたしは慌てて慰めるような言葉を掛けた。いつの間にか寝入ってしまったイルヴァの規則正しい寝息が部屋に響き渡る。フローラちゃんの話に戻そうかな、と考えたところで部屋の扉がノックされた。

「誰だろ、……はい！どうぞ！」

わたしが声を大きくして応えようと、ゆっくりと遠慮がちに扉が開いていく。隙間からひよこつと顔を覗かせたのは白い毛並みが愛らしいタンタだった。隠れるように扉に身を寄せていたが、ぴょん、と跳ねると中に入ってくる。

「あ、着けてみてくれたのね！かーわいい！」

タンタの首に巻かれた黄色いスカーフにわたしは手を叩いて喜ぶ。

ローザも一緒になって拍手するとタンタは嬉しそうに身をよじった。「皆に羨ましがられたにゃー。こんな良いものをありがとうにゃあくるくると回ってみせるタンタは本当に可愛い。白い毛並みだから黄色が似合うと思ったんだよね。喜びの踊り？を見せるタンタに目を細めていたわたしだが、ふとあの疑問が思い出される。聞いていいものか迷ったが、ずっともやもやするより良いか、と尋ねることにした。」

「気悪くしたら申し訳ないんだけど、その……タンタって男の子？女の子？」

ローザが隣りで「あら、そういえば」と呟いた。当のタンタは目をぱちぱちさせていたが、にゃーと笑うと再び身をくねらせる。

「どっちだと思っかにや？」
うふ、と笑うタンタに「女の子」と答えそうになるが、まさかの、
という展開もあり得る。タンタも答える気は無いようで再びくるく
る回り始める。こんな質問しても機嫌を損なわないってことは元々
あまり性別にこだわりの無い種族なんだろうか……。愛らしい大き
な目の顔をじーっと見るものの、やっぱり分からないのだった。

翌朝、美味しそうな朝食を前に起きたたてだというのにテンションが
上がる。猫達の作るパンは本当に美味しくて、黄金色に輝くように
見えると言っても過言ではない。すっかり元通りになったバレット
邸のダイニングは窓からの朝日が部屋を照らしていた。

「お席にどうぞにやー」

「お飲物はどうするかにやー？」

朝からてきぱきと働くタンタ達には本人達は喜んでやっている、と
分かっているにも申し訳なく思う。席につくわたし達を見てバレット
さんは胸を張った。

「見て見てみ！一晩で改造してやったぞい！」

はりきった声を上げるものの顔は大分お疲れのように見える。目は
重たく腫れているし、皺もなんだか濃くなってるような。そんな彼
の指し示すテーブルに置かれた生き物、いやフローラちゃんはいた
って元気そうだ。バレットさんの物と思われるサラダをもりもり食
べている。しかし、自信満々な顔をされても反応に困ってしまった。
「変わりないように見えるぞ？」

アルフレートがしょうがないから触れてやるか、といった様子で尋
ねる。そう彼が言う通り、見た目も大きさも昨日までのフローラち
ゃんと何ら変わらないように見えるのだが……。

バレットさんは「ちつつち」と指を振ると再びフローラちゃんを
びしり、と指差した。

「見た目は同じでも性能はぐーんと上がったんじゃないぞ！何とフロー

ラちゃんは『ハイブリットイグアナ』に生まれ変わったのじゃ！」
うわあ、まためんどくさい。「ハイブリットイグアナって何ですか？」って聞かなきゃいけないんだろつか。

「簡単に言くと水陸両用のイグアナだな」

アルフレートのあっさりした答えにバレットさんは顔を歪め、皆はほっとした顔になる。

「へえ、泳げるようになったってことね。で、何でまた？」

ローザがパンを口に放り込みながら尋ねるとバレットさんは気を取り直したように胸を張り直す。

「よくぞ聞いてくれた！サントリナに向かうのだったからここから直線に突っ切れたら陸路より早いのではないかと思っただけ。ここアルフォレント山脈から流れる川はこういう流れ方知ってるじゃろ？」

「あー、リニヤック川の事か。そっぴいこの山に源流があつてサントリナ方向に真っ直ぐ流れてるね」

フロロがようやく興味を持ったように顔を上げた。

「なるほどね、フローラちゃんに乗って、フローラちゃんがその川を泳いでいくってことね？」

わたしが聞くとバレットさんは大きく何度も頷いた。確かに楽しんでいるし興味もあるんだけど、陸路より断然早そう！って気はしないんだけどな。フローラちゃん小さいし……。

「馬車は？」

ヘクターがさらっと口にした疑問にローザが身を乗り出す。

「そっぴい、うちの馬車置いていくわけにいかないわよ」

「どうせ中身は広くなつてたりしないんだろ？」

フロロが目細めて見ると、バレットさんはぎくりと肩を震わせた。「じゃあどの道ダメじゃない。デイビス達も来るんだから。只でさえ狭いのにな人数倍よ？倍」

わたしの言葉に続いてイルヴァがトドメを刺す。

「急ぎの旅でもないですしねえ」

そっぴいやそっぴい、と皆が頷く中、バレットさんはがっくりと肩

を落とすのだった。

陽射しを反射する様が美しい池をすいすいと泳ぐフローラちゃん。水中花が咲く隙間を身をくねらせるように進む。想像していたより大分速い動きに思わず興奮してしまう。

「凄い凄い！これ乗ってみて中から見たら迫力ありそうじゃない？」わたしは自分と同じように池の淵に並ぶ石に足を掛けて中を覗き込むローザにはしゃいでみせた。笑顔を向けたローザだったが、少し間を置いて答える。

「でもこれ中、揺れてたりしないわよね？」

「……王妃様へのカップ！」

フローラちゃんに仕舞ったカップ&ソーサーを思い出す。わたしの悲鳴に二人して池に手をつ突っ込んだ。重力からの解放が心地良いと言わんばかりにフローラちゃんは捕まらない。

「イルヴァも手伝ってよ！」

「そんなことよりバレットさんのイビキ、こんなところまで聞こえてきますよ、うふふ」

バレットさんの自室のカーテンが揺れる方向を指差し笑うイルヴァ。

「それこそどうでもいい！」

わたしの返しにもイルヴァは暢気にシャボン玉を吹かすだけだ。

三人がいるのはバレット邸の綺麗になったお庭。なんでも前回訪れた際に『住民が不気味がつてるわよ』とわたしが助言したことによって、屋敷の周りも明るく整理するようになったらしい。猫達は庭いじりという概念自体がなかったらしく、初めての経験だったそうだが見事に整えられたローラス式のガーデンングを見る限り、本当に器用な種族なのだと思う。鉢植えの一個一個に木の素朴なプレートが刺さっていて、丁寧な花の名前が書いてある。それを見てわたしは屋敷を取り囲む背の高い塀を見渡した。後はこの塀ももう少し何とかすればいいと思うのだけど、バレットさん曰く防音の意味も

あるらしいのよね。

そんな事を考えながら灰色の石塀を指で叩いた時だった。数人の声が混じり合うような音にはっとする。どこか聞き覚えがあったからかもしれない。屋敷の外へと意識を動かしていると声が大きくなってきた。

「ここじゃない？」

「うわ、確かに陰気というか物々しい屋敷」

「あいつらいるかね」

そんな会話と複数の足音に無意識に塀の上を見てみると、屋敷の中にいたフロロがひよい、と窓から顔を出す。

「デビス達、来たぜ」

やっぱり、とわたしは彼らを出迎えるべく振り返った。屋敷の脇を通って正面の入り口へと向かう。すると丁度門を潜ってきたデビスと目が合った。

「おう！……なんだあ？水遊びでもしてたのか？」

デビスがわたしを見て目を大きくする。短パンに裸足、ずぶ濡れになった自分の両手足にわたしは慌てた。

「い、いや、実験というかね……」

「早かったのね」

後ろからやって来たローザがそう声を掛けながら彼らの中に視線を泳がせる。探しているのだろう。

「レオンは……来なかったのね」

その探す相手、金髪の少年の姿が見られなかったことにわたしはゆっくり声を吐き出した。六人の空気が何処か暗いものになってしまった。

「ごめんね、リジア」

デビスの隣りにいたサラがこちらにやってくるなりわたしの手を握りしめる。わたしは黙って首を振った。セリスも赤い髪をかき上げながらこちらに顔を向け、大きく息をつく。

「向こうで滞在も勧められたんだけど、変な空気になってる上に私

達はそこまでレオンに馴染み無いじゃない？だから玄関先でさよならしてとんば返りよ」

「だからこんなに早かったんだ」

わたしは肩を回す仕草を見せるセリスに「お疲れさま」と続けた。

「そういうことなんで飯、頼むぜ」

はああ、と溜息をつくデビスに六人とも感染したようにぐったり、という雰囲気になる。

「ウェリスペルト出てから簡易食しか口にしておねえ」

珍しく覇気の少ないアントンがそう呟くと、バレット邸の玄関に目を移してぎよっとする。つられて玄関扉をみると扉の隙間から猫達が顔を覗かせているではないか。白、クリーム、赤茶、茶、黒というようにグラデーションを作って連なる頭は、揃ってにやーと笑った。思わず、といったように身構えるデビス達の中でイリヤが唯一前に出る。

「やあ、随分可愛らしい種族だね」

にこにこ猫に近づくイリヤを見てわたしは首を傾げる。人間じゃないだけで人見知りはいらないんだな。

猫達もイリヤを取り囲み、握手を求めたりくると回ったりして見せた。

「いらつしやいにやあ」

「お客様がいつぱい、うれしいにやあ」

「しかも若い人だにやあ、若い人いつぱいご飯食べるから嬉しいにやー」

口々に喜ぶ猫にイリヤははっとしたように顔を上げた。

「ここまではつきり言ってることが分かるのも珍しい……」

「いや、喋ってるから、人間の言葉喋ってるからね。お兄さんの能力じゃないから」

ローザがめんどくせえ、というようにイリヤに突っ込んでやる。茶縹の猫が扉を開けて手招きした。

「どうぞにやー、まずはゆっくりご飯にするにやー」

ばさばさの寝癖だらけの頭をしたバレットさんはうつとりとした顔で『科学とは』を話し続ける。

「科学とは真実の追求、世界の真理を人間の手に近付けるというもの。魔法のように『何か知らんけどすごい力』というものではないつか暴走を呼び起こす。これからの世界は科学によって発展していくべきなのじゃよ」

「ふーんすごいね」

絶対思っていないだろ、という声で答えながらアントンは食べ物をお口に運んでいる。大男のデビスはもちろん、他のメンバーも見事な食べっぷりでダイニングルームの大きなテーブルに隙間無く並ぶ料理を片付けていった。その姿を横目に猫達が嬉しそうに皿を運ぶ。

暫くその様子を面白いものでも見るかのように眺めていたフロロが声を上げた。

「で、レオンは何で来たくないんだって？」

その質問に動きを止めたサラがゆっくりと口を開く。

「『まだその気にはなれないから』って。あまり考える素振りも無かったから、食い下がる気にもなれなかったわ」

「ご両親にも会ったよ、少しだけど。良い人そうだった」

イリヤがそう言うことは実際そうなんだろうな、と思う。しみりしそんな空気を打ち破る為にわたしは話題を変えることにした。「出発はいつにする？すぐでも大丈夫？」

「俺はいいぜ。さっさと行っちゃった方が気が楽だ」

デビスが彼らしい答えを言うがセリスが頬を膨らませる。

「ええー、もうちょっと休みたかったのに！あ、言っとくけど向こうに着くまで野宿は嫌よ、絶対」

「今から出れば宿のあるような町には着けるよ、大丈夫」

その声を掛けるヘクターをセリスは珍しいものを見るように眺めると「へー」と呟いた。

「そんな優しいこと言われるって変な感じ」

「そ、そう？ごめん」

「何で謝るの？おもしろーい！」

けらけらと笑うセリスをアントンが睨む。確かに何が面白いんだよ、とは思うけど彼が睨むのは違う理由からだろう。仲良くすんな、とでも言いたい感じた。ふとサラの手が止まっているのに気が付き彼女の顔を見る。無表情で前を見ていた彼女だったが、次の瞬間にはテーブルに視線を戻していた。何だかぼーっとした様子にローザちやんと同じ啓示の力でもあったのかな、なんて考えていると肩を叩かれる。

「リジアの短剣、これかにや？」

振り向くとタンタがわたしのダガーを手に持って立っている。昨日、ここで呪文を使った際に床に突き刺してそのままだったんだよね。

「そうそう！ありがとう」

お礼を言うとなわたしはタンタの頭を撫でてやる。顎を伸ばしてごろごろいうのを見ると本当に猫にしか見えない。暫くごろごろ言っていたタンタだったが、ゆっくり目を開くとわたしの顔を見た。

「また寂しくなるにやあ」

その言葉に胸がぎゅうつとして思わず眉が下がる。

「また来るし、村の人とも……」

『仲良くね』と続けようとして思い出した。村のあちこちに掲げられた旗の猫のマークとウェイトレスの女の子の話した。

「そういえば村の人に聞いたんですけど」

わたしはバレットさんに村がタンタ達、猫で村興しを考えているという話を尋ねてみた。バレットさんは何度か目をぱちぱちさせると口を開く。

「あー、その話しねえ、一応断ったんだけどね。この辺じゃ『マーユ族』は珍しいし彼らの性格上、良くない人に連れ去りとかも起こりうるわけで」

確かにこんな働き者の種族、家にいたら便利とか考える人は少なく

ないだろうな、と思う。

「だからあんまり有名にはなつて欲しくないわけ。皆が皆そんな心ないとは思つとらんけどねー。でも中にはいるっていうのは変えられない事実だし、守る力はわしには無いし。……だからあの旗と猫のマークを使うことは了承したつて経緯なんだけど」

バレットさんは話し終えると「んー」と言いながら眉間に皺寄せた。あんまり深刻そうには見えないけどバレットさんなりに気にはしてるみたいだ。するとフロロが軽い声を上げる。

「俺の仲間に声掛けるよ。なるべくこの村を利用するように手当たり次第呼びかけさせる。二、三日したらこの村モロロ族でいっぱいになるよ」

「モロロ族のマークにしちやうつて事ね」

わたしが聞くとフロロは大きく頷いた。

「盗賊ばかりだから目を光らせることも出来るしね。流れの細工師も多いから、物流も増えるぜ」

ふふん、と胸を張るフロロを皆尊敬したように眺め、手を叩く。確かにモロロ族つて万能だよな。子供みたいだけど。しかし……、

「でもやかましくなるわねえ、この村」

わたしが思っていた事をローザが呟くと、フロロはふんと鼻を鳴らした。

「そのくらい我慢してもらおうぜ。何、毎晩宴会するくらいだから充分うるさ過ぎるだろ、という気もするし学園のモロロ族を見てると昼間から常にいるさいんだけどな、と思つてしまった。」

おしゃべりな花の乙女達

「この中って揺れないのね」

青白い光が四方から注ぐ中にいるからか、そう呟いたサラの顔はいつも以上に白く見える。

フローラちゃんの中に入って移動する事になったのはわたし、ローザ、イルヴァにサラ、セリス、ヴェラの「女の子メンバー」である。一人間違いないような人がいるのは気にしないでもらいたい。バレットさん達にお世話になったお礼を何度も伝えた後、馬車で移動することになったのだが如何せん人数が多いので半分はフローラちゃんの中に、という話しになったのだ。

「リジア、食べる？」

セリスが猫達に貰った焼き菓子を手渡してくる。彼女は「フローラの中で寝たい」と希望し、真っ先にフローラちゃんの中に入っていたのだ。初めてフローラちゃんの中に入る事になったはずだが、躊躇の無い様子に少し驚いてしまった。反対に「絶対に嫌だ」と言っている間かなかったのがアントン。この流れでこんなメンバー分けになったのだった。

「アントンってば怖いだよ」

そう言ってセリスはふふん、と笑った。わたし達も初めてバレットさんからフローラちゃんを受け取った時は戸惑いまくりだったのだから気持ちは分かる。

「あつた！大丈夫そうよ、カップ。置いてあつた場所にそのままだったわ」

ローザが総勢十二名の荷物の山から王妃様へのプレゼントを持ち上げた。事前に荷物を預かる旨を伝えたのだが、勝手が分からない為かデイベス達の荷物は少なかった。比べてわたし達の荷物は段々増えているから窮屈でしょうがない。

「飽きてきました……」

そうつまらなそうに呟き、『操縦出来ない操縦室』からこちらに振り返るのはヴェラ。美しいプラチナブロンドといい尖りの無い端正な顔といい見た目はとことん良いが、中身は残念過ぎる程残念なデイベスチームのシーフである。操縦室には部屋いっぱい広がる窓と、何の為なのかさっぱり分からないパネルが所狭しと置いてある。安楽椅子型の操縦席が二つあるが、単に外を見る時に寝転がる事が出来るだけのお飾りだ。一応中の声はフローラちゃんに聞こえているらしいが、フローラちゃん自体そこまで細かい命令を聞いてくれるわけでもない。安楽椅子の一つに寝転がったイルヴァからは既に寝息が聞こえ、もう片方に座るヴェラが今の不満を吐いたわけだ。

「飽きるとかそういう問題じゃないのよ」

わたしが答えるとヴェラは表世界の光景が広がる窓を指差す。

「だってぴくりとも動かないんですもん、皆さん」

そうヴェラが口を尖らせる通り、フローラちゃん目線から見える馬車内の光景は動きが全く見られない。フロロとイリヤは御者席にいるはずなので見当たらず、デイベスとアントンが腕を組み目を閉じている顔が見えるだけだ。たまにフローラちゃんが首を動かしてアルフレートが大欠伸する様子が見えたりするが、これも特に面白いものではない。そして極めつけがフローラちゃんの位置だ。どうやらヘクターの側にいるらしく彼の顔は全く見えないのだ。わたしとしても全く面白くない。それでも表に意識を払わなくてはいけない理由は、何かあった時にフローラちゃんに向かって合図を送ってもらう約束だからだ。

「何かあったとしてもどうせゴブリンか何かが現れるだけでしょ。

そのぐらいじゃ呼ばれもしなそう」

わたしが欠伸しつつ言うときセリスも頷いた。

「確かにねー、……つかアントンの仏頂面！ひつどい顔！」

指をさして笑い出すセリスをサラが咎める。

「セリスは口が悪過ぎ！そんなだからいつもケンカになるのよ」

「ケンカじゃないわよお、コミュニケーション取ってるだけじゃな

い」

全く意に介さずなセリスにサラが大きく溜息をついた。中々面白い光景だな、と思ってしまった。普段の彼らの様子を窺えるようで面白い。何と言うか、どうして一緒に組んでいるのが気になってしまふメンバーだよな。

「あんた達ってどういう経緯で組むことになったの？」

同じ事を考えていたのかローザが二人に尋ねる。するとサラとセリスは驚いたように顔を見合わせるが、次の瞬間に変わった顔はまた両極端なものだ。セリスはにやりっと笑い、サラは何か苦いものでも思い出すかのように眉を寄せた。

「多少のズレは有るかもしれないけど一応時系列順に言っていくと、私とイリヤは親同士が知り合いなのよ」

セリスの意外な話から彼らの人間模様の話しは始まった。

「へええ、だからなんだ」

思わずわたしは口にする。セリスは「何が？」と眉根を寄せるが、彼女がイリヤに対して姉のように接する空気があったことはわたしでなくとも皆感じていると思う。イリヤの人見知り具合を心配する様子は五期生に上がってからパーティーを組んだ関係としては、やや過剰すぎる気がしていたのだ。

「幼なじみってやつ？」

ローザの言い方はちよつと羨ましそうな空気を感ずる。セリスは少し唸るような仕草を見せた。

「所謂幼なじみ、って感じじゃあないわね。イリヤって特殊な人でしょ？一族皆そうなのよ。ビーストマスターの一族なわけ。町に定住する普通の家庭じゃなくて流れの一族で……浮世離れた不思議な人達よ。ウエリスペルトに来た時だけ、私の家に挨拶にきて、滞在する間だけイリヤは家に預けられて私と遊んだ。……でもあの性格でしよう？黙ったまんまだし、からかえばすぐ泣いちゃうし、結構しんどかったのよねえ」

からかわなければいいんじゃないかしら、とは言わないでおこう。

彼女の親睦の深め方なのだ。

「だから私に対しても『家族同様の』」って感じでは無かったわよ。ただ単に昔から顔なじみではあったから、学園に入ってからモイリヤの中で数少ない話す友達になれたってぐらいかしらね。今の学年に上がってパーティーを組むなんて話が出た時に、ちよろつと心配してたら案の定一人だったから誘ってあげたわけよー」

けらけらと笑うセリスは『ちよろつと』を強調していたけど、案外優しいんじゃない、と思ってしまった。

「次がアントンとデイビスかな。見て分かるかもしれないけどデイビスはアントンのお守役みたいなもんね。クラスで特別仲が良いってわけじゃないらしいんだけど、アントンのあのキャラからして『ぼっち』寸前じゃない?」

わたしとローザは顔を見合わせる。ま、今更氣を使ってもしょうがないとばかりに二人して大きく頷いた。

「あはは！でしょう？デビビスはクラスの中でもリーダー的立ち位置だから、問題児を引き受けちゃったらしいのよね。だからアントンはデビビスのことが気に食わないし、同時に頭も上がらないわけ」

「はああ……面白いわねえ、余所の話を聞くのも」

ローザが感嘆の声を上げる。わたしも頷きつつ右手を挙げた。

「それで、デビス達とセリス達が組むことになったのは？」

「私がデビスの事が好きだったからよ」

返ってきた言葉がうまく頭に入らない。え、何、今何て……？

「えええええええええええええええええ！」

ローザの絶叫にわたしもようやく言われた事を飲み込み、目を見開いた。が、セリスは手を振って答える。

「勘違いしないでよー、今はそういうのじゃないから。ただ一時期追いかけて回してたことがあってねー、それで顔なじみだったわけ。去年の始めかなあ、ファイタークラスの遠征にお付き合いすることがあって、そこで『良いなあ』って思っちゃったのよね。帰ってから散々つきまとったけど、全然伝わらないっぱいから止めちゃった」

「や、止めちゃったって、軽いわね……」

わたしの正直な感想に彼女は赤い髪をかき上げて澄ました顔で答える。

「だって好きになったきつかけも『かつこいいかも』って軽いものだったもん。ちよつと年上ででかいし、皆をフオローするくらい強いし。でもそれを上回るくらい鈍感だから、嫌になっちゃった」

はあ、そうですか……。衝撃の事実の連発にぼけつとするわたしとローザの横で、今の話しは知っていたのかサラは澄ました顔のままオレンジ風味のマドレーヌを口に運んでいた。

「力溢れる戦士をかつこいい、って思う魔女っ子は多いのかもね……。鈍感さに苦労するのモ」

はあ、と息つくローザの台詞にわたしは慌てて話しを元に戻すことにする。

「そそそそんなのどうでもいいじゃん、で、サラは？　どういう経緯で仲間になったの？」

ある意味一番気になっていたことでもある。今でこそ馴染んだように見える彼らだけでも、初めてサラの仲間だと知った時のショックといったらなかったもの。話しを振られたサラは暫く考えるような様子を見せ、

「あんまり思い出したくない……」

と呟き、眉間に深い皺を作ったのだった。

「私、ファイタークラスにお友達なんていないし他のクラスの子とも『パーティー組もうね』みたいな約束してなくて、ちよつとどうしようかなって思ってたのよね」

サラはそう言うマドレーヌの残りを口に入れて、大きな栗色の瞳をぱちぱちとさせた。

「でも実はあんまり焦りは無くて、ほら人数の関係でプリーストクリスの子は余ることは無いでしょう？　それに各パーティーに一人はいた方が良く、って教官達の話しにもあつたし。だからどこかしら声は掛かるだろうし、もしダメだったとしても『研究科』に進むの

もありかなー、って。魔術理論とか好きなのもあるけど三期生までの魔術師クラスの雰囲気とか好きだったのよね。研究科に進めばまたソーサリークラスの子達ともお付き合いするようになるわけだし……それに私、自分の性格が集団行動に向いてないっていうのも気が付いてたし」

「ええ！？そんなことないと思うけど……」

わたしは驚きの声を上げるが、意外にもローザとセリスは意味ありげにサラの顔を黙って見ているだけだった。一瞬の間の後、セリスが口を開く。

「頭が固いのよー、サラは」

「協調性がない、人の気持ちが読めない、でしょ？」

サラはあっさりと自分の短所を口にしてみせた。セリスは肩を竦めると「まあね」と答える。ローザもうんうんと頷いているではないか。わたしだけだったのか……「良い子ちゃんサラ」をそのまま受け止めてたのは。

「だから研究科行きに大分気持ちが傾いてた時だったかなー、アンTONに声掛けられたのは。全然顔なじみでもない人なのに『一緒に組まないか？』って誘われて、何で？って聞いたら『可愛いから』って言われたのよ」

わたしとローザは薄目になって押し黙る。単なるナンパじゃないか……。

「私、そう言われても『ああ、冒険者パーティーでもやつぱり顔の好みで選ぶものなのかしら。ずっと顔合わせることになるんだもの、その方がストレス無いしね』としか思わなくて……」

はあ、と溜息を漏らすサラにセリスが操縦室から見えるアンTONの方を指差し怒りの声を上げる。

「あいつつてばサラから何のアプローチも無いことに勝手に切れたしたことがあってさ、『ああいう誘い方したんだから分かるだろ！』とか言い出したんで揉めたことがあったのよ。ま、私とデイビスでぼこぼこにしたけど」

「楽しい関係じゃないのお」

ローザは完全に人事だという様子で「ほほほ」と笑った。

「私も悪いのよ……、世間知らず過ぎたというか、アントンの気持ち考えればパーティーに入った時点で期待持たせてたことに気付くべきだった」

何度目の溜息なのか、サラが大きく息つく。サラには悪いけどすごく楽しい話だったな、というのがわたしの感想だ。あたり前かもしれないが彼らにも色々な展開があつて、今ここに六人いるのだ。一通りの話しが終わり、何となくまつたりとした空気になってからわたしは初めて思い出した。

「あ、そういえばヴェラは？ 彼女はなんで一緒になったの？」

「やつと思ひ出してくれたんですか！！」

大声に振り返ると操縦席から涙目でヴェラがこちらに身を乗り出している。可哀相だがすっかり忘れていた彼女の存在に「いや今、顔合わせてなかったから……」とごにょごにょ言つてごまかしておく。「ヴェラはシャイエ教官に押し付けられたのよ。知ってる？ シーフクラスの教官」

「ああ、あのほんわかした女の人ね」

セリスの言葉にわたしは頭に浮かんだふわふわとした雰囲気的女性教官を思い浮かべた。

「シーフがいないって言つたら『推薦したい生徒がいるの』なんて話し持ち込まれてさ。で、それがヴェラだったわけ。あの雰囲気に騙されるけど、相当腹黒い教官よ、シャイエ教官」

そう言うときセリスとサラは難しい顔でうんうんと頷いている。当のヴェラといえば「教官からの推薦だったんですか」と見当違いな受け止め方をしたようで、嬉しそうに両頬に手を当てて笑顔を見せていた。

夢を見ているのか起きているのか。意識はあつて隣りのローザの腕の感触もあるのだが、学園の教室でケーキを食べているという現実ではあり得ない夢も見ている。不思議で心地よい微睡みを打ち破るのは肩を叩かれる感触。

「……い、おい、……ってば」

あれ？ここってどこだっけ、という疑問が沸き、急激に意識が戻る。弾かれるように上半身を起こすと頭に強い衝撃が走った。

「いで！」

「おこ！」

二つ目の自分の声では無い不思議な悲鳴に目を開けると、おでこを押さえたデイビスがうずくまっている。

「……ご、ごめん、わたし石頭だから」

咄嗟に出た謝罪の言葉は少し自分でも変なものだったが、デイビスは「い、いや」と手を振った。

「着いたぜ、今夜泊まる村。少し無理して飛ばしたんでちよつと遅くなつちまつたけどな。……全員起こすの手伝ってくれよ」

そう言われて周りを見渡すとメンバー全員が気持ち良さそうに寝息をかいていた。お菓子の包み紙が散乱していたりと酷い状況に気まぐさが込み上げる。呼びに来てくれたのがデイビスで良かったなあ、と思つてしまった。隣りを見ると妙に乙女チックに腰をくねらせたポーズで荷物に寄りかかり、すやすやと寝るローザがいる。わたしが肩を叩くと薄らと目を開け、次に勢い良く飛び起きた。

「あらやだ！寝ちゃったのね！」

「わたしも寝ちゃってた……。イルヴァ起こさなきゃ」

わたしがそう言うのとローザはローブの袖を捲る。そのくらい気合いのいる作業なのだ。移動するわたし達の横でデイビスがセリスの肩を揺すっている。

「ほら、起きろ」

「……んー、まだ眠い」

まだ寝言のような声を出し、眠気眼でデイビスの首に腕を回すセリスにやたらどきどきしてしまった。さっきの話しを聞いたせいだと思っただけ。サラは既に立ち上がり、大きく伸びをしている。ふうと息ついた後、瞬間移動装置である赤い魔晶石に触りさっさと出て行くサラに「確かにマイペースだわ」と思ったりした。

「ほうら！起きて！」

ローザがイルヴァの胸ぐらを掴み、勢い良く頬を引く叩く。勘違いしないで貰いたいのはこれは決してやりすぎでは無く、むしろこれでも中々起きてくれないのだから困ったものだ。その間にわたしも隣の安楽椅子で眠るヴェラの肩を揺すった。彼女の方はすぐに目を開け、わたしと目を合わせる。が、

「ごごごごごごごごごめんなさいごめんなさいごめんなさい！ねね寝てましたよね！？ごめんなさい！」

いきなり涙目で土下座するヴェラに何とも言えない気持ちになった。

「あ、いや、皆寝ちゃってたから」

「あああう、あのあの、見張りなのに寝てんじゃねーよ、とかで怒ってません？」

「思っていないから！逆にその態度だとこっちが鬼みたいで気分悪いっつーの！」

わたしの怒鳴り声にヴェラが「怒ってるう！許してえ！」と叫びながら腕にまとわりついてくるが、そのまま彼女も引き連れて表に出る事にする。魔晶石に触れた後の軽い浮遊感と共にわたしはローザちゃん宅所有の馬車内に移動していた。

「あ、着いたよ。……寝てた？」

馬車の座席で身支度を整えていたらしいヘクターがわたしに振り返り、自分の頬を笑いながら指す。その仕草にはっとするとわたしは慌てて頬を摩った。

「本当だ、跡ついてますよ」

ヴェラがわたしの右頬を指で突く。ぎゅあああ！と叫びたい気持ち
は何とか抑えたものの、顔が赤くなっていくのが自分でも分かった。
多分、寝ている時に寄り掛かっていた鞆の開け口部分の跡だ。

「大丈夫、皆先に行っちゃったから」

そう言つて、ふふ、と笑うヘクターに「いや、あなたに一番見られ
たくなかったんですよ」と言いたくなる。片手で頬を押さえながら
馬車を降りると、花の匂いが漂っていた。

「……ここ、何処？」

頬を押さえるのも忘れて周りを見渡す。柵でぐるりと囲まれた小さ
な村だ。しかしその柵をまた囲い込むように膝丈程の植物が覆い茂
っている。暗がりによく見えないので近付いてみることにする。手
のひらぐらいある大きな薄紫の花、それが満開に咲いている。中心
部から黄色の色素がふんわりと伸びている花弁が綺麗だ。

「トールファーって村だつて。山脈から少し南下しながら東に来て、
レイグーンの真北に位置するらしいよ」

ヘクターが剣の柄を使って地面に図を描く。ふんふん、と頷きつつ
わたしは彼に尋ねる。

「そのまま山脈沿いに行くのかと思つてた。北の方の……アルフォ
レント山脈とメイヨーク山の切れ目に関所があるんでしょ？」

アルフォレント山脈が今までいたチード村のあるローラスを横に走
る山脈、メイヨーク山はフローの大神殿があるラグデイスの町を頂
いた縦長の山だ。

「それが……」

ヘクターがわたしの疑問に答えようとした時、村の方から声がする。

「おい、ご飯食わせてくれるところ見つかったってー」

遠くからイリヤがわたし達に手を振る姿があった。

「ごめんよー、もう残りそれしか無いんだ」

大柄のおかみさんがテーブルに並べる料理は野菜と山菜の煮物、豆

入りスープ、川魚と鶏のフリッターなど素朴だがお母さんの味、といった感じで美味しそうだ。

「充分だろ、な！」

デイビスが輪になる皆を見回し言うと、おかみさんは微笑まし氣に目尻の皺を深くした。綺麗な眉の形といい若い頃は美人だったんだろな、と思う。本来は十人掛けだ、という大きな木のテーブルはフロロのようなおちびちゃんがいても、大柄な戦士が三分の一を占めるわたし達にはやっぱりちよつと狭い。店内を見渡すと夕飯の時間というよりは飲みの時間に変わっているようだ。機嫌良さにグラスを傾ける年配の男性や流れの傭兵、といった客が多かった。

「部屋、用意出来たよ」

カウンター脇にある階段からおかみさんの息子さんという人の良さそうな青年が降りてくる。

「ありがとう、助かったわ」

ローザがお礼を言うのと「こっちも商売だもの」と笑った。満室だ、と言われて肩を落とすわたし達に、普段使っていない部屋を急ごしらえて泊まれるよう用意してもらったことになったのだ。それでも二、三人用の部屋が二つとのことなので、男女別に別れて六人で雑魚寝ということだ。小さな村の宿屋がいつぱいになっているのは今が夏だからだろう。ローラスでは短い夏に冒険者や商人達も活発に動き回る。ベテランの冒険者で懐に余裕のあるような人間は暖かい期間しか仕事をしない。もちろん個人の性格によるだろうが。

「首都に寄ってからサントリナ入りしようと思うけど、良い？」

フロロの唐突な問いにパンを食べる手が止まる。

「あ、それで南下してきたんだ？」

先程のヘクターとの会話を思い出しが問い返すとフロロはこくこくと頷いた。

「チード村の件、レイグーンで広めれば一番効果あるっしょ？後でこの村のギルドにも顔出して頼んどくけど、首都が一番仲間も多いし」

この村にもギルドがあるんだ……。こんな花の匂いいっぱいなの
かな村なのに。というよりフロロの言い方だと『モロ口族を集める』
より『盗賊を集める』が趣旨に変わってるような気がするんだけど。
モロ口族は大抵がシーフ業なのかもしれないが、チード村が盗賊ギ
ルドの総本山になって二ヒルな笑みを浮かべる住民ばかりになる様
子を想像してしまった。

「首都に行ったらちよつと遊びたいなあ。この前行った時は聞き
込みでそれどころじゃなかったし」

セリスが伸びをしながら期待するような声を出す。この前、とは先
日までの冒険で彼女達がミーナのお母さんハンナさんの搜索にあた
った時のことだろう。わたし達も前に首都に行った時はアンナの搜
索でそれどころじゃなかったんだよね。そう考えるとわたし達って
人を追いかけてばかりだな、と思う。

「まあいいんじゃないか？ どうせ国境の検問所はラグデイスの東だ。
一日くらい羽伸ばせる」

アルフレートがこんな風に誰かの肩を持つ時は、自分も用がある時
だ。確かローラスとサントリナの国境検問所『関所』は北の渓谷と
今いったラグデイスの東、南の沿岸部の三カ所だったはず。今の所
大したタイムロスも無いはずなので大丈夫だろう。でも親の脛かじ
りの身分であるわたしはそんなに予算があるわけでもなく、何して
過ごそうかなあ、とぼんやり考えていた。

「遊ぶって何して遊ぶんだよ」

アントンが理解出来ない、というように頭を掻く。その様子にセリ
スは目を細めた。

「買い物とかよ。まさか鬼ごっことかかくれんぼでもすると思っ
たわけ？」

「ちげーよ！ 買い物がなんで遊びなんだよ。別に面白くも何ともね
え」

「あんたって本当にガキ、別に付き合ってもらおうなんて考えてな
いから。昼寝でもしててよ……あ、それとも私とデートしたかった

？」

けられらと笑うセリスにアントンが目を吊り上げて怒る。仲良いな
ー、と思うの同時にセリスには「かわいくねえ！」は言わないのね、
なんて考えてしまった。ふと、騒ぐ二人をじっと見るサラに気が付
く。怒ってるのかな、と思うが無表情のままセリスとアントンを眺
めているだけで咎めるようなことは無かった。わたしの視線に気が
付いたらしくこちらに振り返り目が合う。にこっと笑う顔にとりあ
えずにやっと笑顔を返しておくが、二人を見るサラの横顔が何だか
脳裏にこびり付いてしまっていた。

翌朝の快晴の空の下、アルフレートが馬車の前で立ち止まる。

「寝足りない」

あ、そう、と答えなくなるが真っ直ぐこちらを見る瞳に仕方なく答える。

「代わるわよ。フローラちゃんの中行けば？」

わたしが言うなり鼻歌混じりにアルフレートはフローラちゃんの中へと消えていった。普段あんなに饒舌なくせに、何で不満を言う時は直球の言葉しかないのかね。

他のメンバーとはいえ昨日と同じようにセリス達が馬車のステップ部分で日に当たるフローラちゃんの方へ行ってしまう。あれー、女の子皆いなくなっちゃうのか。そうなるとちよつと寂しいと思ってしまった。もう一人ぐらい中にいても、と思うがアルフレートが寝転がってるだろうし、昨日以上に狭いかもしれない。わたしは大人しく馬車の座席についた。

「もうちよつと端寄れよ、チビなんだから」

アントンが舌打ち混じりに言う台詞にわたしは反射的に目を吊り上げる。

「何でよ、そこに座るなら関係ないじゃない」

アントンが座ろうとするのは対面する二つの長椅子のわたしの正面だ。

「お前が端に寄ればいいだろうが」

そう言っただけでアントンのおでこを叩くデビスを一睨みすると、アントンはぴったりと御者席側に体を押しつけ、わたしの脇にどかっと足を乗せる。あー、足伸ばしたかったのね、と納得するもまた怒りが込み上げてきた。

「ちよつと！行儀悪いんじゃないの！？他の人間がいる場所で自分の欲求優先すんな！」

「いちいちうるせえな……、足が長くて羨ましいんだろー。ほれ、お前も足乗せてみろよ」

アントンはからかうような声になると座席の自分の脇をぼんぼんと叩く。思わず席の間のスペースを目測してしまった。……届く、と思う。元々狭い馬車内だ。席の間もあまり無い。わたしの目の泳ぎを見たのかアントンはやにやと笑っている。

「と、届くわよ、こんぐらい」

アントンとデビスの間に足を伸ばし、座席に足を乗せるとアントンが「ぶおほ！」と吹き出す。

「ぎりぎりじゃねえか！しかも全然深く腰掛けてねえし！チビ！チビ！」

げげらと笑うアントンに顔が真っ赤になるわたし。お腹を抱えて笑い続けるデリカシーの無い男にわたしは掴み掛かった。

「うつつうつつるさい！足の長さなんて身長で決まるんでしょうが！わたしは決して短足じゃあない！」

「だからチビだっつってんだろぅが！」

言い合うわたしとアントンの背後から静かな声が掛かる。

「リジア、馬車動き出すから危ないよ」

そう言って苦笑するヘクターの隣りにわたしは大人しく座り込む。ああ、またやってしまった。またこの人の前で醜い言い争いを繰り広げてしまった。くう、と奥歯を噛んでいると馬車が動きだし、ぐらりと揺れる。表からフロロとイリヤの笑い声がした。

窓から見えるのは遠ざかる村の周りで揺れる紫の花。朝ごはんも美味しかったし、いい村だったなあと思う。

「このペースだと夕方には首都入りか。そうすりゃサントリナも目の前だ。早ええな」

デビスが顎を撫でながら呟いた。首都か、着いたら何しよう。そんな事を考えているとふと思う。何か、暑い。表の気温も夏真っ盛りの暑さなのは分かっているが、窓は全開だし、まだ朝なのに。何て言っかいつものメンバーで乗ってる時より暑苦しい。

……もしかして野郎ばっかだから？

アルフレートが嫌がった訳が飲み込めてきたわたしはごくりと喉を鳴らした。

そんなわたしに隣りから声が掛かる。

「リジアは首都で何したい？」

ヘクターからの質問にわたしは腕を組む。お金無いんでやること無い、っていうのが正直な気持ちだが答えとしては何だかな、と思い首を振った。

「特に無いよ。買い物もウエリスペルトでも事足りるし」

「そっか、……俺も特に無いんだよな！。皆することあるのかと思ってた」

「え、じゃ、じゃあさ……」

わたしは少し前に首都に行ってきた、と言っていたクラスメートのキーラが教えてくれた情報を思い出す。確かラシヤ神の教会の近くが町を一望出来る景色で素晴らしいというのと、その近くにあるカフェが良い雰囲気だったという話した。下心満々で誘い出そうとするわたしの声を遮るようにデビスの大きな声が響く。

「じゃあ女共が買い物してる間に食い放題行こうぜ！こんなでけえリブがいくらでも食えたりするバーベキュー屋があるんだってよ！」

身振りを付けながらにこにこ話す。わたしの顔も見えているということは一緒に、ということだろうが……。き、気が利かねえ！気が利かねえ、この男！

「そ、そうね」

わたしは小声で答えると身を小さくする。隣りで苦笑するヘクターの顔は何だかひどく大人びて見えた。

アントンが大口を開けて寝ている。かーかーという寝息が規則正しく馬車内に響き、口の中が乾かないのか人事ながら心配になってしまった。暇を感じたわたしは目の前で外の景色を眺める大柄の青年

に話しかけることにする。

「そういえばさ、デИБス達はどうしてパーティーを組むことになったの？」

昨日セリスからも聞いた話したが彼から聞いても面白そうだと思ったのだ。デИБスのオレンジ色の瞳が何度か瞬きをみせる。

「……気付いたらだなあ。特に動き回ったような覚えは無いけど、気付いたらこんなメンバーが集まってたな」

何とも男らしい答えにわたしは眉を寄せる。もうちよつとこう、何かあるだろ。どう取っ掛かりを掴もうかな、と考えていると、

「お前は？」

と逆に聞かれてしまう。わたしとヘクターは顔を見合わせた。……網に引っ掛けたんです、とは言えない。

「お前からこそ別に知り合いじゃなかったんだろ？そっちの方が不思議だよ。ナンパ？ナンパしたの？」

真顔で聞くデИБスにヘクターが少し頬を赤くして眉間に皺を作る。

「変なこと言うなよ……」

「そ、そうよ！アントンと一緒にしないで！」

思わず上げたわたしの大声に緑の頭が揺れた。

「俺が何だつて？」

あれ、起きちゃった。三人で不機嫌な寝起き顔を見ていると、いきなり前方の小窓が開かれた。

「敵さんのお出ましだよ、用意しときな」

フロアの可愛い声に似つかわしくない台詞。ぴんと張りつめる空気にわたしは体が固まってしまう。馬車がスピードを緩め、徐々に止まっていた。

「主要街道外れた途端に出てきやがったか！」

何故か笑顔で声を張り上げると、デИБスは馬車後方の扉を蹴って開け放つ。学園長の馬車だって分かってるんだろ？勢いよく飛び出すデИБスとヘクターに慌ててわたしも彼らを追いかける。が、後ろから来たアントンに突き飛ばされて派手にすっ転ぶ。

「へぶ！」

「だ、大丈夫？」

ヘクターに腕を取ってもらい起き上がるが、痛む顎と手に殺意が湧く。

「今に見てるよ……魔法の暴走に見せかけて消し炭に変えてやるくらい出来るんだからな」

自分でも恐ろしいと思う台詞をぶつぶつ言いつつ、簡単な治癒術を唱え始めた。騒ぎの音からして前方にモンスターがいるらしい。馬車の影から覗くとデイビスよりも更に二周りほど大きくしたような体が三体。赤黒く異臭のしそうな肌に顔をしかめた。醜く凶悪な猿のような顔は巨人族オーガーのものだ。三体中二体は粗悪な棍棒のような物を持ち、一体は隆起した筋肉の素手を振っている。

「……待ってて」

ヘクターがわたしの肩を叩くと、既にデイビス達が武器を振るうちに駆け出した。イリヤも含めて四人いるんだし、見てるだけの方がいいかな、と思っていると馬車の上から声が掛かる。

「やばいかもしんない」

「うおお！ちよつと何処に乗ってるのよ」

わたしは馬車の屋根部分から顔を覗かせるフロロを睨んだ。するとフロロは上空を指差す。空に浮かぶ黒い染みが風に吹かれて舞っているような光景。よく見ると染みの一つ一つには羽が生えており、大きな蝙蝠のような姿が次第に目で確認出来るようになる。翼のある人間の赤子にも見えるが手足は筋張って奇妙な曲がりを見せ、暗い緑の肌が不気味なモンスター。

「インプの群れだ……」

わたしの呟きにフロロが頷く。

「オーガーの獲物を奪いに来たな」

フロロの言う『獲物』とはわたし達の事だろう。わたし達だってオーガー相手にそのままやられるわけでは無いが、空を舞う妖魔達も黙って見ているだけとも思えない。

「数が数だし、飛行モンスター相手にさせんのは酷だろ？リジア追っ払ってくれよ」

馬車前方の戦士達を親指で示しつつフロロはわたしの顔を見る。

「え、……どうやって？」

わたしの正直な問いかけに仲間のシーフは露骨に顔をしかめた。

「お得意の魔法ぶつ放しをしてくれりゃあ良いんだよ。ちよつと厄介そうだと思つたら簡単に退いてくれる」

なるほど、と思うが何を唱えよう。また肝心な時にさらつと呪文が出て来ない。うわ、どうしよう。そう思うと更に頭から大事なものが抜けていく。

「早く早く！にいちやん達の方に来る前にやないと！あんた命中率只でさえ悪いんだから！」

ばたばたと馬車の上で飛び跳ねるフロロにわたしは焦りながら言い返す。

「あ、焦らせないで！なななんでも良いからヒントヒント！」

「ひひひヒントお！？俺、呪文なんて知らねえよ！」

「単語で良い！好きな精霊は！？」

「えええつと、ジン！風の精霊ジン！」

「おっけえええええ！」

わたしはフロロに向かってびしり！と親指を立てるとすぐさま呪文を唱え始めた。

インプ達の動きはすぐさま襲いかかるようなものではないものの、明らかに探るように空を旋回している。彼らの赤い目は日差しの降り注ぐこの時間でも光を放っているように見えて不気味だ。

わたしが早口で言葉を紡ぐことに風が周囲に漂いだす。軽い体のフロロが飛ばされそうになったのか馬車に張り付いた。

「ミスティックカッター！」

風の精霊シルフによって現れた風の刃が無数に空に放たれる。ジンではないのか、と言われそうだが風の精霊の上位種であるジンの魔法なんぞ、ちよつとコントロールに自信が無い。空に溶け込みそう

な青い光をした刃は耳障りな高音を響かせて飛行モンスターに襲いかかった。空を自由に動き回るインプ達に大抵は避けられてしまうが、

「ケエエ！」

仲間とぶつかりそうになった為に逃げ遅れた不運な二匹が悲鳴を上げた後、塵と消える。元は異界の者である彼らの最後は呆気無い消え方だ。フロロの予想通り、戦意を喪失したらしいインプの群れは何事も無かったかのように空の高みへ消えていく。ほっと胸を撫で下ろすわたしとフロロに聞こえてくる情けない声があった。

「ひええ……」

馬車前方、いつの間にかオーガー達は倒れたようで戦士の皆は武器を収め、こちらを見ている。そして彼らの中央、地面を巨大な爪がえぐり取ったような跡が走っていて、その脇でへたり込むイリヤの姿があった。

「何？どうしたの？」

わたしが言うくとフロロが呆れた声で答える。

「あんたの魔法だろ」

おお……、空しか見てなかったから気が付かなかった。周りをよく見ると右手に広がる林の木もいくつか枝が折れたり細い木が根元から切断されたりしているじゃないか。

「生身に当たったら妖魔じゃなくても消し飛ぶんだからな。気をつけろって、ほんとに……」

フロロはぶつくさと言い終わると屋根の上を四つん這いになりながら御者席の方へと戻っていく。

本当にフロロの言う通りだ。いつ事故を起こすか分からない暴走車両だわ、わたしって……。だからといっていつまでも何もせずに見学してるわけにもいかないしなあ。

「おし、行くか！」

オーガーの亡骸を端に避けたデイビスが彼の愛用の武器である大きなバトルアックスを肩に担ぎ直し、全員を見渡す。

「イリヤ、ごめん」

わたしは未だ座り込んでいるままのイリヤに手を差し伸べた。彼の金色の瞳がわたしを捉えると少し恥ずかしそうにその手を取った。

「いや、こっちこそ大げさに騒いでごめん。噂には聞いてたけど実際みるとびびっちゃって」

イリヤの言葉がさくつ！とわたしの胸に刺さるが気にしないよう務める。悪気はない、はず。イリヤが立ち上がり御者席に戻るのを見た後、わたしも馬車の中へ帰ることにする。

「ありがとう、助かった」

後ろから掛かる声はヘクターの柔らかいものだ。わたしは複雑ながら「うん」とだけ答えることにする。デビスとアントンに至っては戦闘そのものが無かったかのように「腹減った」「飯どうするよ」などと騒いでいるのだった。

馬車の扉を開けると怯えた顔のヴェラが立っている。身を竦ませるようにしたポーズが何とも滑稽で美人の顔と釣り合わずもったいない。

「どうしたの？」

わたしが声を掛けるとあうあうと口を動かした。

「すすすいません、見張りなのにまた寝ちゃって……。皆さんがいないのに今気が付いて『何があったか見て来い』って言われたもので、ああー、役立たずですいません！」

ヴェラが見張り、そして役立たずなのは分かった、いや分かっていたが何かあったと思うなら全員出て来いよ、と思うのは間違っているだろうか。

「……良いわ、『何も無かった』って伝えてちょうだい」

「あ、そうなんですか！よかったあ」

寝癖だらけの彼女はそのままフローラちゃんの中へと戻っていく。やっぱこの『二両編成』はよろしくないなあと思い始めているのはわたしだけじゃないらしく、昨日から丸きり『護衛』扱いの男達が深く溜息をつくのが聞こえた。

「三体中二体は俺が倒した」

機嫌よくアントンがグラスを傾けつつ、二本の指を立てる。

「聞いてない」

アルフレートがぴしゃりと言い放つとアントンは「何をー!?」と叫び立ち上がる。またか、という顔の皆を横目に、わたしは大袈裟過ぎる程顔を歪ませてアントンを睨んだ。

「店の中で騒がないでよ、恥ずかしい」

首都の外周部分にある大衆食堂は冒険者ばかりだから元から賑やかだが、立ち上がって奇声を上げるような人はいない。全く以って恥ずかしい。

「アントンは無茶苦茶だよ……周りの奴の安全なんて関係無しに力タナ振りまくるんだもん」

イリヤが珍しく不機嫌そのものを現にした顔でばやく。せかせかと口に運ぶ豆の煮物があつという間に皿から消えていく。

「こいつよりマシだろ」

アントンはそう吐き捨てるとフォークでわたしの顔を指した。むっとする間もなくイリヤが言い返す。

「リジアは悪気は無いだろ? アントンは『出来る』のにやらないんだ」

つまりわたしは『出来ない』と。言われように泣けてくるが、悪気は無いのだ、と思う。いや思わないとやってられない。

「お前なあ、膝から下まつ二つに切り落とされそうになつてよく言えるな。悪気は無いのに暴走する方が性質悪いじゃねえか」

アントンの台詞になぜかセリスが目を輝かせる。

「まじ!? とつとつやっちゃった!? やあだあ、見たかったあ」

「なんでそんな楽しそうなのよ」

ローザが呆れた顔でセリスを見た後、わたしに振り返った。

「でもこのままじゃやっぱ駄目ね。リジア！特訓するわよ」

「え、ええ！特訓って……何処で？」

わたしの嫌そうな顔を見たのかローザの顔は一層厳しいものになる。

「何処でって、町の外でやれば平気よ！何もない荒野にでも向かって撃ちまくって、少しは上達しなきゃ！」

「撃った先に人がいたらどうすんだよ」

フロロが言くとローザは一瞬考え込むように頬を指で叩く。そしてぼん、と手を叩いた。

「海なんてどうかしら！夜の海なんて誰もいないし、いいんじゃない？ここからじゃちよつと遠いから、もし今度海辺に行くようなことがあったらやってみましょう！それに綺麗かもよー、魔法の光で最後は完全に蛇足でしかないがいいかもしれない。ちよつと前向きに気持ちが変わってきたところでアルフレートが口を開く。」

「魔力の大きさ、その個人差はどうやって決まると思うかね？」

聞いた事がない質問だ。しかしもしかしたらわたしの魔法のコントロールに役に立つ情報が隠れているのかもしれない。わたしは唸りつつ熟考する。

「……気持ち強い！とか」

わたしが言った答えにアルフレートは真顔のまま首を振る。確かにこの答えだと魔力が無い人は全て無気力になっちゃうか。戦士達の精神力なんてわたし以上にありそうだしなあ。集中力に気合い、どれを取っても敵いそうにない。再び唸るわたしにアルフレートはゆつくりと正解を答え始める。

「答えは精神世界にいか結びつきが強いか、だ。体はこの世界に剥き出しで立っている状態だとしても、その体という殻に精神は守られている。その精神は一部でしかなく、大部分は精神世界に隠れているんだな。そして現世にある精神力の大小が個人によって変わる。大きい人間は精神世界に入る術に長けてるのさ。想像力逞しいと言っている。つまりは……」

そこまで言うとなたしの顔を見てにやー、と笑った。

「妄想力が長けているということだ」

「も、妄想!？」

わたしの大声にアントンが大きく吹き出す。そしてまた不愉快な馬鹿笑いを響かせるではないか。

「妄想かよ!なんだよ、単なる変態じゃねえか!」

今朝方と同じく頭がかったとしてくるわたし。アルフレートだって今そんな話をしなくてもいいのに!

怒りと恥ずかしさから真っ赤になっている顔をごまかそうと、わたしはグラスに手を伸ばす。すると丸いテーブルの丁度反対側の席に着いているサラが目に入った。

まただ。あの顔、ぴくりとも動かない瞳。不機嫌とも取れる無表情。半ば分かっているがわたしはゆっくりと視線の先に目を移す。気難しい顔でスペアリブにかぶりつく男の顔。

アントンを見ているのだ。その事実が確定した時、急に鼓動が早くなる。サラの視線がうつとずれてわたしと目が合いそうになった瞬間、何故か妙に気まずさを感じたわたしは慌てて視線を落とす。

お皿に残ったほうれん草のバターソテーを見ながら思う。

……もしかして、いや、かなりの確率で、サラってアントンの好きなんじゃないの?

改めて頭に言葉を浮かべると心臓の動きが更に活発になる。

こんなに頻繁に顔を見たい相手、なんて答えは一つじゃないか。わたしにだってよく分かりすぎる程分かる気持ち。いつまでも眺めていても飽きない顔。好意を持つ相手の顔だ。

隣りのテーブル席のドワーフが酒を飲みつつご機嫌な声を上げる。それを背後に何故か手に嫌な汗をかいているのを感じていた。

首都で迎えた朝はゆっくり目の時間だった。今日は休日と決めたからである。わたしは隣りのベッドに座り、既に身支度を整えて髪

を梳かしているローザに声を掛ける。

「じゃあローザちゃん達は商業地区に行くのね」

「そうよお、……ほんとにリジアは行かないのお？」

ローザはなんと寂しげに眉を下げた。流石親友、心の友よ。昨日から滞在しているこの宿も二人部屋に各自別れることになったのだが、わたしとローザで組になっている。最早誰も気にしないのが面白い。しかし特に買い物の予定が無いのは本当なので、わたしは今日、デビス達野郎共と肉食い放題に参戦する予定である。ローザとイルヴァは女の子組と一緒に買い物に行くそうだ。ちょっと寂しいと思っているのは内緒だ。

ここでわたし達の財布事情、というものを公開させてもらおうと思う。実はわたし達のほぼ全員が親におんぶに抱っこである。普段、旅に出る時、移動費は依頼人から出ていることが大半だが普段の生活費は自分持ち、すなわち親のお金だ。え、こんだけ冒険してるのに？と思われるだろうが、わたし達は「学生」という身分なのだ。修学する身であり金儲けが目的ではない、というのを明確にする為に冒険の依頼受付から終了後の依頼料受付まで学園の窓口で行っている。依頼受付時には学園が用意した誓約書にサイン、依頼完了後は料金を踏み倒そうにも学園がみっちり回収まで行う。その点は独り立ちした冒険者よりきちんとした制度に守られている感があったりする。六期生からはまた事情は変わるけど、今はそういう仕組みになっているのだ。

一応プラティニ学園は「公的機関」なので国からの援助があり、依頼料は正規の冒険者を雇うよりも格安、という面もある。学園の収入には他に生徒の入学金、有力者からの援助がある。それを設備投資やら教官達への給料やら教科書代やら、材料費にも届かない学食の値段の維持やらに使われるわけだ。「学園側が儲けていることは？」という疑問が住民の間に湧くこともない。なぜなら一番の出資者が町の有力者でもあり、国外にも名前を知られるフロー神の大神官であり、プラティニ学園の学園長様だからである。

そう、ローザのお家はお金持ちなのだ。これについては「何を今更」という感があるが、実はイルヴァのお家についてもそう。彼女のお家も上流家庭に位置する。まあそうでなかったらあんな毎日無駄に金掛かってそんな仮装は出来ないけど。このままわたし達が冒険者として独り立ちすればパーティー内における格差は無くなるだろうが、今は家柄が個人の財布事情に直結しているキビしい現状だったりする。うちは幸い「奨学金」を申請するほどじゃないけど、父はしがない物書きで簡単にいえば中流、「ザ・一般家庭」なのだからしょうがない。

何が言いたいのかというと、そんなに毎回ショッピングを楽しむ余裕は無え！という愚痴だ。食い放題すら「最低限、元は取らなくては」と意気込んでいる。

荷物を整えると二人揃って部屋を出る。他の部屋からもぞろぞろと見知った顔が出てくるところだった。（何故か）隣の部屋だったフロロとアルフレートが欠伸びつつ出てくる。

「アルフレートはどっち行くの？」

買い物組か食い放題組か、という意味でわたしが聞くと、彼の整った眉がくいつと上がった。

「どっちも気が進まない。ピーちくぱーちくうるさい買い出しも、肉を食いに行くのも嫌だ」

「俺は食い放題」

フロロが張り切って手を上げる。肉食な彼は何時になくやる気があるようだ。

「じゃあ何処か他に行くの？」

わたしの問いにアルフレートは頷く。

「そうするかな。この町はどこもやかましくてどうも好きになれない」

そうぶつくと呟きながら、彼は階段を降りていった。後ろからヘクターと同部屋だったイリヤのぼやく声が聞こえてくる。

「肉食えるのは嬉しいんだけどさ、何もこんな起き抜けに行かなく

てもいいと思うんだ……」

胃の辺りを押さえる彼は眉間に深い皺を作っている。確かに夕飯でいいじゃないか、と言いたくなるが買物組が来るまでの時間潰しなのだから仕方ない。

「じゃあ行くぜー!」

発案者のデイビスの晴れやかな笑顔が現れ、廊下に元気な声が響き渡った。

クーウェニ族

大人数が揃ってやってきたのはフロー神の教会とメーニ神の教会が揃う「女神の広場」。ここで買い物組と食い放題組の二手に分かれることになっているのだ。

「あんまり食べ過ぎないようにね」

ローザがわたしの顔を見てふう、と息をつく。

「お母さんじゃないんだから、ローザちゃん……」

右手の商業地区に向かう道と左手の飲食店通りを前に、何となく活気ある町の様子を眺めたまま話を続けていると、

「おっと失礼」

人混みから現れた男性と肩がぶつかる。よろける体を立て直そうとしているとヘクターがわたしの手を掴んだ。

「ありがとう」

「いや、……クーウェニ族だ」

彼の視線を追うと既に別の人混みに溶け込む寸前になっているぶつかった男の後ろ姿があった。クーウェニ族は大型の爬虫類に似た頭部に目立つオレンジ色の肌をした種族だ。珍しい種族ではないが人間の中にあまり入り込まずに、町に彼ら独自のコミュニティを作るので、あまり良い顔をしない人も多い。うちの学園にもいない種族だ。

彼ら独特の発達した上半身を思い出し、ぼーっとしているとフロロが眉を寄せながらやってくる。

「リジア、財布は？」

「え？……あ！忘れてた、フローラちゃんの中にある鞆に入れっ放し！」

「ならいいや、あいつスリだぜ？運が良いな」

「ええ！？」

フロロの言った衝撃の台詞に目を見開く。全然気が付かなかった……

…。も、もしかして一瞬でわたしの懷を探ったってこと！？なんか気持ち悪いよー！

わたしは無意味に体を掃う。……。しかし首都は人が多くて活気がある分、ウェリスペルトよりは治安が悪いから気をつけなさいって母親に言われてたの忘れてたわ。帰ったら怒られそう。主に財布の危機で。

「よく分かったわねえ」

フロロに感心気な目を送るローザを見てわたしは尋ねる。

「フローラちゃんは？財布出したいんだけど」

その言葉にローザはポケットに手をつ突っ込む。が、ざあ、と音がしそうな勢いで一瞬にして青い顔に変わった。

「……忘れたわ」

「ええ！ど、どこに！？」

「宿の部屋の窓枠……。ひなたぼっこしてたから『ぎりぎりになったら捕まえればいいか』と思って……」

「そのまま？」

ローザはこくりと頷く。呆れた、という顔でわたしとフロロは顔を見合わせる。

「リジア、宿戻るなら俺も行く」

フロロの珍しい申し出に、わたしは首を傾げるが「いいわよ」と頷いた。わたしの不思議そうな顔にフロロは指差し答える。

「さっきの奴、宿に行く道の方向に行っただろ？顔もう一度見たいんだ。ギルドに所属してるかどうか確かめる」

あらら、何だか穏やかじゃない話みたい。フロロがこんな事言うってことは、男の様子に何か思う事でもあったんだろうか。

「あんまり深入りするなよ？」

眉を寄せるヘクターにフロロはにやつと笑った。

「分かってるって」

そう言うなり駆け出すフロロにわたしは慌てる。

「ちよ、ちよっと待ってよ！」

「早くしないとフロローラがいなくなってたらどうすんだよー！」
騒がしく広場を後にするわたし達を、後ろからローザとヘクターが
心配そうな目で見ていた。

「ちえ、やっぱいいないか」

目立つはずのクーウエニ族のオレンジ色をした肌は見当たらない。
フロロはつまらなそうに舌打ちすると走るのを止めた。大通りでは
ない住宅地にある狭い道だというのに人が多い。わたしとフロロは
周りに埋もれていた。

「顔、覚えて無いの？」

わたしが聞くとフロロは頭の上で腕を組む。

「あいつぐらい人間離れしていると、中々個体差つき難いんだよ。
リジアにだってみんな同じ顔に見えるだろ？」

確かに、とわたしは頷いた。モロロ族くらい人間に近い顔つきだと、
学園にいる何人かを見比べても誰が誰だかくらいは分かる。しかし
クーウエニ族は人から見ればワニの方が近い（失礼だけど）としか
思えない。町中で見る機会が多いものの、見分けを付けるのは難し
い。頭髮も無いので色での見分けもつけられないのだ。

「ま、何個か特徴は押さえたけどさ。ギルドに報告するには似顔絵
描くのが手っ取り早いんだよな」

「それでもすごいじゃん。あの一瞬で特徴なんて、普通顔見るだけ
で精一杯よ」

単純に感心するわたしだが、フロロはつまらなそうにするだけだ。
『俺を誰だと思ってる』とでも言いた気じゃないか。アルフレート
と違って口には出さないけど。

「……ってことで俺、戻るわ」

「何言ってるの！」

広場方向へと体を回転させるフロロを、わたしは素早く捕まえた。
襟元を掴まれたフロロはじたばたと暴れる。

「俺じゃ護衛になんないよ！戻ってヘクターの兄ちゃん連れてくるからさあ」

「護衛なんていいわよ、わざわざ悪いじゃない。それに、万が一フローラちゃんが宿から逃げてたりしたらアンタの役割じゃないの」

「……俺は逃走ペットの捕獲係になった覚えはないぜ？」

フロロは「はああ」とわざとらしく溜息をつくものの、諦めたように宿方向へ歩き出した。

「部屋にちゃんといますように！」

さつき出発したばかりの宿にに戻ったわたしは入り口に手を掛ける前に祈りのポーズを取る。

「いるだろ、だってフローラって意外と頭良いじゃん」

そう言うフロロにわたしは指を振った。

「頭が良いから心配なのよ。結構ローザちゃんに懐いてるから、いなくなつたのに気付いて後追いつたりするかもしれないじゃない」

「親だと思って……とは考えにくいがフローラちゃんはローザに一番懐いている。ま、それを薄情にも置いていったのはローザちゃんなんだけど。」

わたしとフロロは宿に入ると朝手続きをしてくれたおじさんのいるカウンターへ向かう。おじさんは驚いたように目を丸くして顎髭を触った。

「ありゃ、どうした？忘れ物？」

その通り、とわたしは頷くとおじさんはうふうふ、と笑う。でつぶり突き出たお腹がカウンターに当たり、花瓶がかたかたと揺れた。

「だと思った！『肉肉ー！』ってはりきって出てつたのにちびちゃんだけで戻ってくるんだもん。まだ掃除前だから部屋にあると思うよ」

ちよっと引つかかる言葉は多かったものの、わたしはほっと息ついた。おじさんに許可を貰うとわたし達は二階へと駆け出す。部屋の

扉が並ぶ廊下を走って角を曲がるとわたしとローザが泊まった部屋の前にくる。

「いた！」

フローラちゃんが扉の開いた隙間からひょっこり顔を出していた。やっぱりじっと待っている気は無かったようだ。わたしとフロロは安堵の息を漏らす。ちよつとだけお邪魔するとして、部屋に入るとわたしはフローラちゃんをベッドの上に置いた。

「じゃ、取ってくる。……ちゃんと待っててよ？」

「信用ないなあ」

フロロのしかめた顔を見ると、わたしはフローラちゃんの中へと入っていった。

ふう、と不思議な浮遊感の後、わたしの足は内部の青白い光が満たされた床に立つ。昨日の夕飯前に『余計なお金を使わないように』と思って、ぎりぎりの夕飯代だけ持ち、財布を鞆に入れていったのだ。珍しいことなんてするもんじゃないな、と思う。自分の旅行鞆を探していると嫌な状態を発見してしまった。アルフレートのかい鞆、セリスのお洒落な鞆がわたしの物を押しつぶしている。荷物までもが遠慮の無い人達だ。

「もう！」

わたしはいらいらと鞆を引っ張った。すると雪崩を起こしたように、大量の荷物が作る山が崩れていく。やばい、と慌てつつも中身は大抵衣服なのだ。大丈夫だろうと思う。鞆から財布を取ると外へ出る為に振り返った。

「……ああ！」

一人だというのに思わず出た大声。わたしは目に入った包みに駆け寄る。王妃様を買ったティーカップセットの包みだ。初日からフローラちゃんの餌が入った箱の上にあっちははずなのに床に落ちている。この箱の高さから落ちたとなると、結構まずいんじゃないだろうか。さっきの雪崩のせいだったなら洒落にならん。ゆっくりと振ってみるが微かに紙のこすれるような音がするだけで分らない。

迷ったあげく、わたしは一度外へ出ることにした。

「フロロ！」

急に現れ、名前を呼ぶわたしにフロロは少しびっくりしたようだ。しっぽが真っ直ぐ伸びる。

「な、何？」

「ちよつと来てくれない!？」

わたしの慌てように少し嫌な顔はするものの、すぐにフローラちゃんへ手を伸ばした。わたしもそれに続く。

「……うわあ、こんなに散らかってたっけ？」

フロロは中の惨状に呆れた声を上げた。わたしはそれには答ええないようにして、王妃様へのプレゼントを指し示す。

「落ちちゃってたのよ。心配だからもう一回中見せてくれない？」

フロロは目をぱちぱちとさせた後「大丈夫だろ」とぶつくさ言つて箱に近付く。包みを取る寸前にぴたりと止まり、わたしの顔を振り返り見る。

「謝礼は？」

「……はああ!？あのね、これはわたし達全員からの贈り物でしょ!？フロロだつて心配じゃないわけ？渡す前に壊れちゃってたらがっかりでしょう?」

「全員に平等に管理責任があるのは分かったよ。でも包みを綺麗に解いて元通りにするのは俺なの、分かる?」

「……………夕飯に一品奢るわよ」

「分かればよろしい」

フロロはそう答えるなり包みを解き始めた。その間にも「リジア太っ腹」などとうかれた声を上げているのが憎らしい。

「大丈夫だったな」

フロロの言う通り、クッションになる紙に包まれたカップ&ソーサーは綺麗なままだった。ほう、と大きく息をつく。

「良かったあ、ありがと、助かったわ」

「いえいえ、お礼は別に頂くんで」

機嫌の良いフロロの声にわたしは軽く彼の頭を小突く。フロロは再び包みを元に戻していく。何度見ても素早く見事な手つきに見飽きる事はない。「からあげがいいかなー、ウインナーにしようかなー」という鼻歌は気に食わないけど。

「でけた！」

包みを掲げるフロロにわたしは拍手する。今度はこんな事にならないように、と包みを別の場所に移す事にした。

「どこがいいと思う？」

「こっちのスペースは良くないかも。鞆が不安定な形だから揺れなくてもまた崩れると思うよ」

フロロの言う通り、全員の鞆（しかも一人一つでは無い）は皮や布製なので形が不安定で定まっていない。かといって他に置く所も……

……と思った時、操縦室の扉が目に入った。

「あ、そっちならいいんじゃない？何も置いてないから」

フロロの頷きを貰うとわたしは操縦室の扉を開ける。

「あれ？」

乾いた声が飛び出した。見覚えの無い光景にわたしが固まっていると、フロロも顔を出す。

「あ、あれね？」

フロロも同じように固まってしまった。操縦室の全面に広がる窓からはフローラちゃん目線の世界が広がっているはずなのだ。それが……無い。いや、真っ暗なのだ。右から左、隙間無く闇に包まれている。

「お、俺そんなに時間掛かってなかったよな？」

フロロの言葉はわたしも考えていたことだった。いつの間にか夜に！？と思っていたのだ。暫く固まってしまっていたが、ちらちらと明るい部分が見えるようになる。ぼんやり光る明かりが上の方から差し込んでいて、上下している。

「わ、分かった！」

フロロが飛び上がった。思わずびくりとしてしまう。

「ポケットだ！ポケットの中だよ、これ！」

フロロが指差す先にうつすら何かの線が見える。わたしにも全貌が見えてきた。ポケットの縫い代なのだろう。内側だからほつれた糸がたくさん飛び出ている。一瞬ローザちゃんの？と思ってしまいが、そんなわけではない。彼女が宿に迎えに来たとすれば、何かしら知らせにくるだろうし、黙ってポケットに入れるなんてことはしないだろう。誰か知らない人に持ち去られたのかもしれない。そう考えてわたしは血の気が引いた。

「大変！」

すぐに飛び出そうと振り返るわたしの腕をフロロが引っ張った。止められた理由を尋ねるまでもなく、前方に見える景色にわたしは息が止まる。

急激に明るさが戻り目を細める中、ぼんやりと見えるのは髭もじやのいかつい顔。頬に傷があり、太い眉毛と太い首が男の体の大きさを窺わせる。フローラちゃんが首を振っているのかぐるぐると景色が変わる。何人もの男がいるようで、その全てが薄汚れた皮鎧にソードを装備している。『善良な一般市民』には全く見えない。奥にあるのは大きな荷馬車だ。黒い外装がなんだか不気味。四輪の荷台には大量の荷物が積み込まれていた。始めに見えた男がつまらなそうにフローラちゃんを覗き込んだ後、顎で馬車を指す。すると急激な景色の揺れの後、馬車の入り口が見える。いや、中から見ている景色に変わっているのだ。荷台の幕が下ろされたらしく、再び景色は真っ暗に戻ってしまった。

その景色が暗転する直前、馬車の入り口に見えたのはオレンジ色の肌をしたクーウェニ族だった。

「……フローラちゃん？聞こえる？分かる？」

意味は無いと分かりつつ、小声でわたしは語りかける。操縦室からの呼びかけはフローラちゃんに聞こえているはずなのだ。知能レベ

ルがいまいち読めないなので、どの程度の反応が帰ってくるかは未知数だが。

真っ暗に見えた景色だったが、馬車の隙間や幕から漏れる光が差し込んでいくようで薄らとだが中の様子が見える。わたしの声に答えているのか、フローラちゃんがしきりに首を傾げる様子が分かる。

歪む景色に少し目が回りそうになるが、とりあえず安堵する。こちらの声は届いているようだ。

「おい、フローラ、中に人はいるか？いるならそっちを見ろっ」

フロロも緊張した様子で声を響かせる。暫くの沈黙の後、ゆっくりとフローラちゃんが動き出す。馬車の入り口、幕が揺れる前に座り込む影が二つ。がちがちに鍛え上げられた戦士の体が暗さの中でも浮き上がる。護衛、という役割だからか抜き身になったソードを担いでいるのを見て、わたしとフロロは思わず飛び上がり、ひし！と抱き合ってしまった。

フローラちゃんは連れ去られたのだろう。まだ分からないけど犯人はわたしにぶつかつたクーウェ二族だと思う。馬車の外にいたオレンジ色の肌が脳裏に焼き付いていたわたしはそう考えていた。財布を横取り出来なかった腹いせなのか、わたし達を付けてきていたのかもしれない。このぞんざいな扱いを見るにフローラちゃんが「何なのか」までは分かつてないみたいだけど、珍しい生き物を献上したところか。

実際の時間は分からないが、二人共かなり長いこと途方に暮れていたと思う。

「ど、どうする？」

わたしは沈黙を破り、フロロを見た。彼の方もどうするべきか、というように眉を下げている。

「こいつら盗品扱ってる故買屋だと思う。普段は山賊まがいのことしてる集団だ。リーダーの顔に見覚えがある」

「ちょ……、どこで知つたの？」

驚くわたしにフロロは肩をすくめた。

「ギルドに『処分』の話が上がってた。そういう気配があるから普段は町中にいないんだと思う」

穏やかでない話しの内容にわたしはぐくりと喉を鳴らす。しかし欲を言えばこんなことになる前に盗賊ギルドには何とかしといて欲しかったのだけど。何とかして逃げたいけど「どうぞどうぞ」と放してくれる相手には見えない。フロロの話しを聞けば尚更だ。

寄りによつてわたしとフロロが二人の時にこんな事になっちゃうなんて……。フロロじゃわたしが魔法を唱えている間、盾になることも出来ないし、実質この二人じゃ戦闘の力なんて無いに等しい。逃げるにしてもわたしじゃフロロのお荷物になるだけだ。

そこまで考えてはつとずる。そうか、フロロだけなら逃げられるん

だ。

わたしはフロロの顔を見る。彼の方もそう考えているからこそ、こんなに困った顔をしているのだろう。

「ね、ねえフロロ、あなたならあの見張り巻いて逃げる事も出来るわよね」

わたしは恐る恐る尋ねる。怪訝な顔をするフロロに自分の提案を聞かせることにする。

「まずフロロがフローラちゃんから出て、フローラちゃんをポケットか何かに入れるの。それでこの馬車から脱出してもらうつていうのはどうかしら」

まるつきりフロロ任せな案だが仕方が無い。これが一番成功率高そうなもの。それにフロロ一人が現れただけなら「猫が一匹紛れ込んだ」ぐらいの扱いで済むんじゃないだろうか。

「まあそれが一番、現実的かな……」

「でしょ！？だってわたしが出て行ったところで足手まといになるだけだもん。わたし達もこの山賊の集団もみーんな巻き込んでファイアーボールでご臨終しちゃいましょう、っていうなら出来るかも知れどさあ」

「自分で言っなよ、んなこと……」

フロロは呆れた顔をした後、じっと何かを考える。そしてわたしの方を向いた。

「俺だつてこんな事になっちゃった責任考えたら、そんぐらいはして当たり前とも思うよ。でもさ、この馬車、南東方面に来てる可能性が高い」

「なんで？商品売りさばくならウェリスぺルトだつて考えられるじゃない」

「ローラス中のギルドから目付けられてる連中が首都とウェリスぺルト間で商売なんてするわけないだろ？行くとしたら国外だ。首都レイグーンから一番近い外国は何処？」

フロロの言わんとする事が飲み込めてきたわたしは頷き、答える。

「サントリナね……」

一瞬、サントリナに行けるなら丁度いいじゃん、と考えてしまいが
そういう問題じゃない。わたしは慌てて頭を振った。

「そう、国境近い町でカンカレっつー商売にはもってこいの町もある
ことだしね。それに三つある関所のうち南の海岸線付近が一番警
備が薄い」

「だから南東に向かってるってことね？」

わたしの溜息混じりの声にフロロは頷いた。そして彼の一番言いた
い事が分かってきた。レイグーンの南側は海沿いに出るまで荒野が
広がっている。ラグデイスの周りぐらい岩だらけの寂しい景色では
無いけど、森のように隠れる場所が無い。いくらフロロでも馬車と
競争して逃げ切れるわけないし、町まで帰るなんてもっと無理だ。

「万が一、フローラが消えてるっていうのに気付かれたらしつこい
と思う」

フロロが再び眉を下げる。

「じゃあフロロもこのままで、フローラちゃんにお願いして馬車か
ら飛び降りてもらってというのは？」

「走ってる馬車から？フローラ、バラバラになっちゃうんじゃない
の？そういう場合って中にいる俺らどうなるの？」

的確すぎるフロロの突っ込みにわたしは沈黙するしかない。

「……結局、この馬車が止まるまで様子見るしかないってことね」
わたしがそう言うと、二人共揃えたように「はあ」と息つき、床を
見つめる体勢になってしまった。

「お腹空いたねえー……」

「だなー……」

フローラちゃんの操縦席に半ば寝そべるように座り、わたしとフロ
ロはぼやいた。朝から何も食べていない。中に残っていたタンタか
らの贈り物であるお菓子をちよと食べたけど、食べ盛り二人には全

然足らなかった。というよりかなりの時間が経っている気がする。一体どこまで来てるのやら。

「もし本当にサントリナまで来ちゃってたらさ、皆に連絡付ける前にご飯食べようよ」

「俺もそう思う。そのくらい許される」

どうやって皆に連絡取るつもりか、は考えないようにしてわたしとフロロは頷き合った。皆、心配してるだろうな。でもお腹空いたよ。ひもじいとき、無性に悲しくなってくるよね。元気出すにはやっぱりご飯だと思うの。

自分でも思考がずれてきている危機感を感じるものの、そう結論付けて寝転んだ。

動きがあつたのはこの時からだった。隣りのフロロが勢い良く起き上がる。

「な、何？」

慌ててわたしも彼が見る前方に目をやった。フローラちゃんからの視線に一筋の光が見える。それから一瞬にして光が広がり、大柄の戦士二人のシルエットが浮かび上がる。急に明るさが戻ってきた事で、馬車の荷台入り口が開かれたのだと理解するのに時間が掛かった。表側にも一人、髭もじゃの仲間の姿がある。中にいる護衛二人と何か話しているようだ。そして護衛二人も頷くと揃って馬車を降りていく。

「きた！」

フロロは飛び上がると扉を抜け、外への転送装置に走っていく。風が起きるような早さにわたしは呆気に取られるが、

「ま、待つてよ！」

そう言つて追いかけようとする。しかしフロロは消える寸前に、「待つてろ！」

手で制す仕草と共にそう言い残し行ってしまった。は、早い。こういう躊躇無い行動力って羨ましい。一瞬、室内に影が差したのに気が付き、わたしは操縦席に戻る。表に出たフロロが巨大に見えた。

フロロは荷物の間に潜り込むと様子を窺うように耳を動かしている。ふとこちらを見て一度頷き、フローラちゃんを持ち上げると自分の首元後ろにある上着のフードの中にしまい込んだ。これでこちらから見える映像はフロロの上着の緑色だけである。一瞬、フローラちゃんに外の様子を窺うよう顔を出して貰おうかと考えるが、フロロがフローラちゃんを盗んだように見えたら困ると思い直す。

「フローラちゃん、じっとしてるのよ」

意味は無いが小声で話しかけると首を振っているのだろうか。一面緑の映像がゆらゆらと揺れた気がする。わたしは手を合わせてじっと祈ることにする。

どうか、どうかこれで表に出た時にお猫様のバラバラになった姿があつたりしませんように！

こんな事考えてるの知られたら、本人には怒られそうだけど。

息を飲んで前方の画面にかじりつく中、ふ、と明るくなる。フードの中にいるのは確かなので緑色の世界のままだが陽の光の元に出たのが分かった。しかしそのまま変化は無い。大丈夫なんだろうか……。

暫く我慢したままじっとしていたが、やけに長く感じる時間の感覚にいても立つてもいられなくなる。「うー」と唸った後、わたしは再度フローラちゃんに話しかけた。

「フローラちゃん、あの、そーっと、そーっと顔出してみてくださいない？フロロ以外の人がいたら、即隠れる感じで」

こんな複雑な言葉、全ては理解してないだろがフローラちゃんはずもずもと動き出す。やがて見えてきた光景は揺れる世界だった。日が傾きかけているややオレンジ色の空に申し訳なさ程度に生える草花に細い木。全てが猛烈に揺れているのだ。あまりのことに酔いそうになる。

「な、何これ、走ってるの？」

そう、ちらちらと映るフロロの茶の髪が風を切っているように流れている。移り変わる景色も移動しているようだ。

「あ、あー！やっぱりあいつ！」

数人の人間がこちらを指差しながら追いかけてきている。その中の一人を指差し、わたしは叫んだ。髭もじやの汚い男達に混じってオレンジ色の異種族の姿があったのだ。フロロが見つかったしまつて逃亡中ということは分かった。馬車で追えないように、ということだろう。フロロはほとんど岩場を選んで入り込んでいく。流石、足の速さと身軽さはフロロに勝てないらしく男達の姿は徐々に小さくなっていった。

やがて比較的葉の覆い茂る木が見えるとフロロは勢い良く飛びついた。あつと言う間に高い所まで上るとフローラちゃんを木の幹にある小穴に入れて何かを言っている。ぱつと消えてしまった彼の姿にびっくりするが、わたしは「あ！」と声を上げて振り返る。戻ってきたに違いない。

扉を開けると想像していた通りの仲間の姿にわたしは駆け寄った。

「おかえり！」

「た、ただいま」

フロロは荒い息でそう答えると、ぱつたりと倒れ込んでしまった。

フロロのあがった息が治まるまで待つと、わたし達は床に座り込み相談を始めた。

「何とかして首都まで戻らないと。大分潮風の匂いが濃い。海に近いな」

フロロが腕組みをして唸る。

「沿岸まで来てるのね……。首都行きの馬車とか通らないかな。今、出て行ったら危ない？」

わたしが尋ねるとフロロは何とも答え難そうに口籠る。そして眉を寄せるわたしに、ふうと息つくと思え始めた。

「暫くは待った方が良さそう思う。フローラがいなくなった、とかは気付いてないと思う。それより俺を見つけ出して何とかしたいんだろ？」

「な、何でよ。何か余計な事したの！？」

わたしの言い様が気に食わなかったらしく、フロロはむっとして目を吊り上げる。

「人聞き悪いこと言うなよ。俺の事、ギルドからの回し者だと思ってるみたいだ。『今回の取引、潰されたらヤバイぜ』とか怒鳴り合ってるのが、逃げる時に聞こえた」

つまりはいきなり現れた盗賊^{フロロ}が盗賊ギルドからの回し者で、自分達（無法者）を潰す為の潜入捜査に来たと思われてるってことか。捜査という言葉を使ってしまったが、盗賊ギルドの連中だって大きい顔してお天道様の下歩けるようなもんじゃないだろ、とかそもそもその仕組みに突っ込みたいけど、そんな勇氣はわたしには無い。

うむむ、と唸るわたしにぽん、と一つ考えが浮かんだ。

「あ、フローラちゃんにこのまま首都まで行ってもらうのは？小さいから物陰に隠れながら行けば、結構見つかり難いと思うのよね」

「小さいからこそ、何年掛かるんだよ」

「……確かに、フローラちゃん歩くの遅いもんね」

普段、部屋の中を動き回るフローラちゃんを見ているが、その動きはのっそりのっそりと遅い。まだ詳しい現在地は分からないものの、馬車で数刻の距離をフローラちゃんが進むとしたら何年……は大げさでも何日掛かるか分からない。ある程度まで行ったらわたし達の足で戻れば良いんだろうけど……。とにかく早いところ戻らないと皆心配しているだろうし。

「でも早い所、手を決めないと日が暮れちゃうな」

フロロが立ち上がり、前方の画面に目を移す。こんな話しをしている間にも空の色は夕刻の赤に染まってしまっていた。その様を見ていると、わたし達のいる木の下に人影があるのに気が付いた。

「げ！本当に探してるっばい！」

思わず変な声を上げてしまう。無精髭に汚い皮鎧を着込んだ姿の男が木の下をうろつろつとしていた。そこまで必死さは感じないものの、何かを探すように首を動かしている。

困った。とても困った。彼らの馬車から逃げ出したはいいいけど、事態はあんまり進んでいないように感じる。

無言になるわたしの肩をフロロが叩いた。

「ま、もうちょいしたらいなくなるだろ。そしたら俺が又、偵察に出るからさ」

「……わたしも行こうか？」

そう答えるわたしにフロロは隠すことなくはつきりと嫌な顔をする。

「マジで言ってるの？俺、結構本気でヤバい状況だと思ってるから、結構本気で迷惑なんだけど」

「や、やな奴ね……」

そう言っただけのものの、一緒に行きたい理由が「そろそろ外の空気が吸いたい」というだけなわたしは彼に従うしかなかった。大人しく待っていればあの故買屋グループもいなくなつて、その後は街道に出て首都行きの馬車をつかまえばいいのだ。首都行きならきつと夜でも向かう商人もいるはず。少し安心感が戻ってきたわた

しはあらためて酷い空腹に顔を歪めた。
しかし本気でヤバい状況というのはこれから待ち構えていたのである。

何故か途切れることなく男達は姿を見せ、フロロも出るタイミングを逃し続ける間にすっかり辺りは夜の闇に包まれてしまった。現れる男達の手には松明や『ライト』の魔晶石といった光源体が握られるようになり、わたし達の焦りも増す。

「ど、どういう事よ」

わたし達がいる一本の木の下、男達が輪を作り座り込んでいるではないか。

「……宴会始めたみたいだな」

「何でこんな所で！」

非難めいた金切り声を上げてしまったが、わたしだってフロロには答えようがないのは分かっている。しかしわたし達がここにいることはばれていないはずなんだから、それでも彼らが宴会をするのにこの場所を選んだのだとしたら、わたし達って運悪すぎじゃないの？ 煙が空に舞い上がり始める。故買屋グループの男達は焚火を囲み、何かの獣肉を焼いたり酒瓶を傾け始めた。その様子を見てわたしとフロロのお腹はぎゅーぎゅーと騒がしくなるが、お互いにそれに触れる元氣も無い。

輪を作る男達の中にオレンジ色の肌をしたクーウェニ族がいる。何やら愛想笑いを浮かべて周りに酒を注いで回っている様子は『下っ端』という言葉を浮かばせた。

「やっぱ首都で見たあいつだな。覚えとけよ」

そう呻くフロロの顔は随分とやさぐれてしまっていた。

「起きろー！」

肩を揺さぶる気配とフロロの声。ふと目を開けると、誰かの鞆に涎を垂らす寸前な自分に慌てて身を起こす。いつの間にか寝てしまっ

ていたらしい。横には腰に手を当てたフロロが立っていた。

「故買屋達も見張り除いて寝始めた。今、起きてる奴が一番隙が多そうなんだ。今の内に離れるぜ」

それを聞いて操縦室の画面を見る。火の弱まった焚火の脇に寝転がる男が数人と、膝を抱えて火の番をする男が一人。しかしその男も時たま大きく首が傾き危なかつしい。わたしは一気に目が覚める。

「オツケー！じゃあ行きましょう！」

「うん、ここで待つてろよ」

フロロは立ち上がったわたしに冷静に言い放った。やっぱりお留守番か……。

「信用無いなあ」

むくれるわたしに転移装置へ向かう途中だったフロロが振り返る。

「あるわけないだろ。今しか無い最大のチャンスだつてのに、遊んでられるか」

そう吐き捨てさつたと消えていくフロロを見送ると、わたしは再びフローラちゃんから外を眺める傍観者になる。暗闇の中に木の枝に器用に掴まるフロロが現れた。そつとこちらに手を伸ばす。フローラちゃんが彼の手に上ると、フロロの肩に乗せられたのだらう。下の方に彼の上着の緑色が見える。その後はぐんぐんと視界が下がっていった。

「下に降りたんだわ。……大丈夫かな」

わたしの心配も何のその、男達の囲む焚火がぐんぐんと離れていく。こんなスピードで後退する光景もなかなか見れるものではない。フローラちゃんをこういう使い方出来るのも面白いなあ、と思ってしまった。後は闇の中を疾走しているだけなのだと思う。真つ暗な景色が時折見える月で動きを感じさせるだけだ。そしてやがて月も見えなくなる。

「上手く、いったんだよね？」

全く現状が掴めず、独り言が多くなる。静まり返るだけの室内にまた不安になってきてしまった。

どのくらい立ったり座つたりを繰り返したろう。いきなり「ふい
く」という声と共に戻ってきたフロロに心臓が跳ね上がる。

「どうだった!？」

わたしの掴み掛かる勢いにフロロは黙って親指を立てた。一瞬の間
の後、わたしは大きく息を吸い込み、そして吐き出す。

「良かった……、助かったんだよね」

「そゆこと、結構な距離置いてきたから大丈夫だと思うぜ」

示し合わせたように二人同時に座り込む。はあ、と息をつきながら
放心していると、

「さて、夜中だろうけど頑張つて戻ろうぜ。あーあ、ヘクターの兄
ちゃんに怒られるだろうな、俺」

フロロの言葉に急激に目が霞む。

「言わないでよ、頑張つて考えないようにしてたんだから」

きつとあの人はわたし達のことを怒つたりはしないと思う。でも、
きつと今も心配して起きててくれるんだろうな、と考えると泣け
てきてしまった。自分でも想像以上に緊張していたのかもしれない。
流れる涙を抱える膝小僧で隠していると、フロロがぽんぽんと頭を
撫でてくる。彼にも申し訳ないことの連続だったなあ、と思う。そ
もそも二人してフローラちゃんの中に消えるなんて大ボ力をしたの
がいけなかったのだ。そしてそれを希望したのはわたしだったのだ
から。逃げ出せたのも全部彼のお陰だったな、と顔を上げるとフロ
ロのにやりとした顔が目に入る。……何かお礼言う気も失せたぞ。
「よし、今度こそ表出ようぜ! 北に向かって街道に行けば更に距離
稼げる。……まあこの時間だと馬車つかまえるのは大変そうだけど」
立ち上がるフロロにわたしも続き、大きく頷いた。はあ、何時間振
りの表世界だろう。こんだけ狭い空間に閉じ込められると、そこま
で大した時間じゃないのは分かっているが、ちゃんと歩けるだろう
か、なんて考えてしまった。

「今どこに置いているの? フローラちゃん」

「何か何の気配も無い洞窟……とも言えないな、洞穴があっただんで、

その入り口の岩場」

「へええ……、もしかしたら今晚はそこで野宿した方がいいかもね。朝になってからの方が馬車の通りも有りそう」

そんな会話をしつつ転移装置である赤い魔晶石に手を伸ばす。

「わあ、ホントに海の匂い」

出た瞬間に鼻についた潮風の匂いにわたしは深呼吸する。そのまま腕を上げて大きく伸びをした時だった。

隣りのフロロがびくん、と跳ねる。ん？と彼を見ると、

「おめえら、今どっから出て来た」

ひどく擦れた声がする。一瞬にして体が凍り付いてしまった。相手も急に出現したわたし達に啞然、という顔でこちらを見ている。『ライト』の魔晶石を握りしめ、洞穴の入り口に仁王立ちしているのは、あのクーウェ二族の男だったのだ。

暫くわたし達の顔を見て呆然としていたクーウェニ族の男は、目の前の光景をゆっくりと咀嚼したかのように口を動かした後、目を細める。

「一体どこから湧いてきた？」

今度の問いはわたし達に対する尋問だ。空いていた右手が腰のショートソードに伸びる。喉を鳴らすわたしの横でフロロがゆっくりとフローラちゃんをポケットに運ぶのが分かった。

「お前らレイグーンにいた冒険者だよな？モロ口族のお前が馬車に紛れ込んでたのには驚いたが、まさかもう一人も一緒だったとはなあ。……今のテレポートみたいな術、何だよ」

男はにたと笑うとゆっくりと近付いてくる。闇の中に浮かぶ魔晶石の光にオレンジ色の肌が照らされる様子は不気味で怖い。視線を逸らす事無くわたし達を見ながら、男は顎と思われる部分を撫でる。

「こんなひよつこのくせに良いお宝持つてるみたいだな。ほれ、出してみろよ。俺が良い値段で買ってやる」

『良い』をやたら強調した言い方にわたしは顔をしかめた。どうやらテレポート系の魔導具を持つてると勘違いしてるみたいだけど、こんな言い方してタダ同然で奪っていくつもりだと簡単に想像出来る。しかしフローラちゃんを差し出す訳にいかないし、どうしたものか……。

洞穴の入り口に仁王立ちされる形を取られては逃げ場が奥に行くしかない。でも奥に逃げたところで行き止まりだろうし、何か注意を引いて隙を作れないだろうか。あれこれ考えるわたしの隣りでフロロが鼻を鳴らした。

「ケチなコソ泥が偉そうな口利くな！お前のその背中の荷物、見覚えあるぞー」

フロロの言いようにわたしはびくりと肩を揺らし、クーウェ二族の男も同じように驚きの目でフロロを見る。そして舌打ちする男からは笑顔が消え失せていた。フロロは尚も続ける。

「馬車にあつたよな？その革袋……。乗り込む前、お前はそんな荷物持つてなかったぞ。夜中に一人でこんな所にいるのも怪しいなあ」男のたすき掛けする袋を指差してフロロはにやりと笑い、相手を挑発するがわたしには焦りしか湧いてこない。何か故買屋グループの荷物からこいつが失敬した話らしいけど、今それを追及するのってどうなの……？

案の定、男は顔を歪ませてわたし達を睨むと、とうとう剣を引き抜いた。怒声のような喚く声が洞穴に響き渡る。クーウェ二族の声は皆、しゃがれていて怒鳴ると迫力満載だ。

「やっぱりお前らモロロ族はチヨロチヨロと目障りな奴らだ！ちびのくせに何処でも偉そうにデカイ顔しやがって、汚ねえ鼠どもが！」
「猫でちゅう」

フロロのおどけた声に男が震えだす。その怒りようにわたしは青ざめると同時に、フロロの理解出来ない行動を恨みに思ってしまった。何でわざわざ煽る必要があつたのよ！

「ちよつとフロロ……」

わたしが隣りの仲間を諫めようとした時、男が腕を振り上げる。咄嗟に目を閉じたわたしに威圧感たつぷりの声が聞こえてきた。

「剣を置け」

クーウェ二族の声では無い。そして目の前の男の動きが止まるのが気配で分かる。恐る恐る目を開けていくとクーウェ二族の男の後ろ、ぼんやりと浮かび上がるシルエットは馬に乗った男性の姿。しかし声といい耳の飛び出たシルエットといい、誰なのかがすぐに理解出来た。

「に、似合わねー……」

フロロが月明かりに照らされる騎乗の相手に呻いた。わたしも同感である。白い大きな馬に乗った相手はアルフレートだったのだ。

「もう一度言う、剣を置け。三度目は無いぞ。言う前にお前を撃ち抜く」

アルフレートの淡々とした声にクーウェ二族の男はそつと首だけを動かし振り返る。そしてアルフレートの手元に光る魔法の矢を見たのかびくりと小さく飛び上がった。

「分かつてると言うがこつちに躊躇は無いぞ。あるとすればお前の頭を狙うか腹を狙うか、だ」

それを聞いて男は慌てたようにショートソードを放り投げる。嫌な奴だけど正しい状況判断は出来るようだ。アルフレートの静かな声は仲間のピンチに怒り、というよりはひたすら面倒くさそうではあった。ほう、と息つきアルフレートに駆け寄るフロロとわたしを見て白い馬に乗ったエルフは嫌そうに顔をしかめた。

「よりによってちびすけ二人でいなくなるとはね」

「喜びの再会に第一声がソレ?……皆は?」

わたしが尋ねるとアルフレートは首を振る。

「私だけ先に来た。まだ大分後ろにいるだろうな」

アルフレートだけ早馬に乗ってきたということか。残る馬一頭なら馬車を引くだけで精一杯なのかもしれない。フローラちゃんもこちにいるのだから大多数が徒歩なのかも。

「こつちだってなんでよりによってアルなんだ、って思ってるけどな」

不貞腐れるフロロにアルフレートは肩を竦めた。

「しょうがないだろ、馬に乗れるのが私だけだったんだから。……学園で馬の乗り方ぐらい教えるべきだろ」

ぶつぶつ言う彼の姿はもう一度言うが全く似合っていない。

「……あ、あのー」

クーウェ二族のしゃがれ声がする。振り返るとおずおずとこちらを窺う姿がある。

「あ、まだいたんだ」

思わず出たわたしの言葉に男はがっくりと肩を落とした。

馬を降りるとアルフレートはわざとらしく溜息をつく。

「しかしフロロも交渉の仕方になってないな。やり手シーフを気取るなら逆上しやすい相手にもスマートな交渉をだな……」

「だって俺、アルが来てんの分かってたし」

「ああ、フロロ耳良いもんね。良いなあ、わたしだけ無駄に焦って馬鹿みたいじゃん」

クーウエ二族を囲みつつ内輪話を止めないわたし達を、男はもう一度回し見る。

「あ、あのう、行ってもいいすかね」

「駄目に決まってるだろ」

ぴしゃりと言いつつフロロに、さっきの勢いは何処へやら男は土下座せんばかりに頭を下げた。

「すいません！出来心だったんです！その嬢ちゃんから財布ちようだい出来なかったんで、ついむしゃくしゃして金目の物漁ってまして！」

「さりげなく人の責任織り交ぜんな！……で、わたし達の跡追ってフローラちゃんを捕まえたってわけね？」

わたしが思いきり見下し目線で睨むと、もう一度「へへー！」と頭を下げる。が、

「フローラちゃん？」

男の疑問顔にわたしははっとする。そうか、名前じゃ伝わらないのか。めんどくさい。

「あのイグアナよ！ええつと、すぐに気が付いて追いかけたから良かったけど、そうでなかったら今頃あの故買屋達に売り捌かれてたんでしょうが」

フローラちゃんの中にいたんです、なんて言うと話しがややこしいばかりか、この男にフローラちゃんは何なのかを教えることになる。適当に誤魔化したわたしの言葉にまた男は「すいません！」と頭を地面に擦り付けた。

「まあ何とかなったからいいや。それよりお前の持つてる荷物、あ

いつらに返して来いよ」

フロロに背中荷物を指差され、男は顔をしかめて首をぶんぶん振る。断固拒否、という感じだ。

「この状況で荷物減ってる、なんて気付いたら状況的に俺らも疑われるだろうが。これ以上面倒になるの嫌だぜ」

確かに盗品売り捌いてる連中に目付けられるなんて嫌過ぎる。フロロはばつちり顔も見られちゃってるし。ギルドに目を付けられてるとはいえ、言い方を変えればそれでも何とかやり過ごしてる連中ともいえる。

しかしクーウェ二族の男は「それは……」と言葉を濁して首を振るだけだ。彼の中でもわたし達に良い顔したい、という気持ちと荷物の重要性がせめぎ合ってるように見えた。

「こ、これは元々俺の物なんだよ！……なんです。だからちよつと

……」

男は喚きながら革袋を抱え込む。明らかに隠そう、という態度じゃないか。怪しい。怪し過ぎる。

顔を見合わせるわたしとフロロの肩をアルフレートが「まあまあ」と笑顔で叩く。

「無事に合流出来て、こっちの荷物も奪還済みだ。我々だって鬼じゃない」

アルフレートの台詞に男の顔がぱつと明るくなる。その鼻先に指を突き付けるとアルフレートは話しを続ける。

「それに『元々俺の物だった』と言ったな。連中はそれも知ってるのか？」

射るような目線に男はこくこくと首が揺れる人形のような動きになる。それを見てアルフレートはにやりと笑った。

「じゃあ『それ』が無くなったところで疑いはコイツにしか掛からないだろ。お前、フローラも『それ』の交換の為に差し出したんじゃないか？」

男は目を大きくした後、うなだれる。

「すまねえ、その通りなんだ。あいつらからどうしても奪い返したくてよ、何とか金目の物が欲しかったんだ。普段から下っ端扱いだったもんで、交渉するどころか単なる献上品で終っちまったんだがよ……」

「ふうん、あんなにへいこらしてたけど仲間じゃないって言いたいわけ」

わたしはじつと男の顔を見た。一瞬焦ったように見えたが男も目を逸らすことなくじつとしている。爬虫類のようなぎよろぎよろとした目を見てもあまり感情は読めない。が、わたし自身の感情の動きの方が今は大きかった。

「あいつらも盗品で儲けてて、あんたも盗品でどうにかしようとしてたってわけね。……もう行って良いわよ」

むかむかしてきたわたしがそう伝えようと、男はアルフレートの顔を見る。本当に怖い人物を分かっているらしい。アルフレートが黙って顎で向こうを指す。

「す、すまねえ、すまねえ、また会ったら絶対に恩返しするぜ！」

勢いよく立ち上がり、男は駆け出す。しばらく行くとこちらに振り返り頭を下げ、また去っていく。そしてまた振り返り頭を下げ……というのを繰り返していた。その姿にフロロが一言、

「もう会いたくねえよ」

と呟いた。わたしも全くもって同意だったが、男の駆けて行く先がサントリナへの関所方向なのが妙に気になってしまっていた。

潮風と船乗りの町カンカレ

クーウェ二族の男が去ってしまってから漸く現実の世界に帰ってきたような感覚がした。アルフレートが地面を踏む音を聞いて彼の方に向き直る。

「皆どうしてた？」

「ローザが泡吹いて倒れる勢いだった。他は逆にそれで冷静になれたみたいだな」

「そう……」

いつも明るいローザの顔を思い出して罪悪感にかられる。こちらとしても不慮の事故にあったような気分なのだが、やっぱり皆を心配させたのは後ろめたい。

「なんで俺らの場所、分かったんだ？」

フロロがした質問にはアルフレートはつまらなそうに答える。

「宿に戻ってたのは分かっていたんだ。後は宿の使えないオヤジに不審人物を聞けば簡単だった」

アルフレートによるとあのクーウェ二族は町でも有名なコソ泥らしい。宿のおじさんも彼を宿内で見つけるとすぐに追い出したらしいが、その時には既にわたし達は彼のポケットにいたようだ。

「目撃情報も馬鹿みたいにあったからなあ。町外れで商隊用のかい馬車に乗り込む所まで聞けば、その馬車が去っていった街道を追いかけるだけだったわけだ。……天下の盗賊ギルドも使えないなあんなケチな泥棒一派一つ取り締まれないなんて」

「他の仲良しグループの集いでしかない職業ギルドよりマシさ。……さてどうすつか」

フロロがこちらを見ているのに気が付き、わたしは頭を掻いた。

「待つてるしかないんじゃない？もう南の関所に行く方が近いんだし、ここで待つてる方が良いでしょ」

「ただ待つだけなのも味気ない。こっちの居場所の合図でも出して

やったらどうだ？」

アルフレートの言葉に首を傾げていると、フロロもわたしを見ているのに気が付く。何？と聞こうとしたが彼らの言わん事が飲み込めた気がする。

「花火代わりに呪文打ち上げればいいわけね」

わたしが言っているとフロロがにやにやと笑った。

「ちょうど良い練習機会じゃん。アルと模擬戦でもやれば？」

フロロの茶化しに首を振ったのはアルフレートの方だった。

「やめてくれ。私は手加減出来てもコイツは手加減出来ないんだぞ？私だつてもうちよつと長生きしたい」

それは突っ込み待ちの台詞だと考えていいのだろうか。

揃った途端にやんややんやとうるさい妖精二人を放っておくことにして、わたしは浮かんだルーンを唱えていった。

「ライトニングボルト！」

バチバチと爆ぜる音を撒き散らしながら夜空に雷の渦を放つ。一瞬明るくなる周辺にフロロが「おおー」と感嘆の声を上げた。

「フレイムランス！」

顔の表面がちりちりと焼けるような熱波を出しながら炎の槍が続く。あー気持ちいい。

「まだまだいくぜファイアーボール！」

指先から離れた光球が空へひゆるひゆると上っていき、爆発……と思いきや暗闇の彼方に消えていった。あれ？

「あれは着弾しなきゃ意味ないだろ」

アルフレートの突っ込みにわたしは頬を掻く。

「そ、そっか。じゃあこんなのはどうか……ウブ・リクト！」

合わせた両手から放たれた光が五芒星を作り上げ、それを中心に青白い光が空へ舞っていく。直下にいるわたし達の周りは昼間のような明るさだ。

「やるじゃんよ」

フロロが面白そうにわたしの手元と空を見比べた。

どのくらいそうしていただろうか。わたしの呪文のバリエーションも尽きてきてしまい、空も明るくなってきた。

「……そろそろ休んでいい？」

擦れる声でわたしがアルフレートに尋ねた時、ガタガタと揺れる車両の音がする。はつと顔を上げると街道の北側からやってくる豆粒程の大きさの馬車。遠くからでも白い馬だと分かった。わたし達と一緒にいる馬もその方向を見ている。ローザ達だと考えて間違いないだろう。

「お、きたな。ローザの声もするぜ」

フロロが耳を動かし肯定する。豆粒程の大きさが手のひらになり、徐々に近付いてくると馬車の周りを歩く皆の姿も見えてきた。その中にいる銀色の髪のすらりとした人物を見つけると、じわつと胸が熱くなる。思わず泣きそうになるがぐつと堪えた。向こうもこちらに気付いたらしく、手を振っている。フロロと一緒に駆け出そうとした時、向こうから猛牛のような勢いで走ってくる人物に気が付いた。

「心配したのよおおおおおお」

思わず構えのポーズを取るわたしに構う事無く突進してきたローザちゃんは勢いそのままにわたしにしがみつく。

「ご、ごめん……ぐえっ」

息苦しさに悶えるわたしとおいおい泣くローザちゃん、という奇妙な光景をにやにやと見ていたフロロだったが、彼にもローザちゃんの腕が伸びる。

「あんたもよおおお、……心配させてええええ……」

ローザちゃんはフロロの顔に頬擦りしつつ泣き続け、フロロは嫌そうに顔をしかめた。

解放された体を回しながら息ついていっていると、すぐに別の人物に拘束される。

「無事で良かったです」

イルヴァにぎゅうぎゅうと抱きしめられると気持ちいいんだか痛い

んだか分からない。また苦しみの呻きを漏らしているとヘクターと目が合った。心底ほつとしたような顔でわたしの頭を撫でる。

「良かった」

一言、それだけだったが嬉しかった。にやけるわたしに後ろから声が掛かる。

「疫病神」

顔を見なくてもアントンだと分かる。頬が引き攣るが時間と手間を取らせた分、強くは出れない。が、ぼこつという音にまたデイビスに殴られたな、と分かった。

「フロロさんがいながらなんでこんな事になったんですか！」

ヴェラに詰め寄られてフロロは困惑顔だ。彼女の中でフロロは万能神なのだろうか。

「さて、感動の再会で盛上がる中に悪いが、さっさと移動しよう。眠くてしょうがない」

アルフレートが大欠伸をしながら皆を見渡す。確かに明け方で鳥がうるさく空を飛び回ってる時間だっていうのに、全員一睡もしてないんじゃないか。……わたしはちょっとだけ寝てた時間があったけど。

少し話し合いをした結果、さくつと国境を越えてサントリナ入りを果たすことにする。サントリナでも一番国境側にあるカンカレという町はこのすぐ近くらしい。ヘクターに話を聞いてから行ってみたいと思っていた町だ。こんな状況での予定外の訪問だが少し嬉しい。

「ふああああ……、こんな時間から休んで、この先どうする？ 夕方過ぎにまた次に出発するの？」

セリスが大欠伸しながら馬車に乗り込んで行く。

「今から考えてもしようがないわよ。とりあえずお腹空いちやって空いちやって……」

それに続こうとしたわたしは馬車の中を見て固まってしまった。荷物荷物、荷物の山だ。皆の旅道具はフローラちゃんの中にあるまま

だっというのに、これは一体……。

「ちよつと買い過ぎちゃって。まあ大部分はイルヴァのだけど」

セリスが指す先にいるイルヴァを睨むと「てへ」と舌を出す。それでも真顔のままなのが怖い。ということはこれ全部が買い物組の戦利品ってことか……。羨ましいことこの上ない。それにしても仲間がいなくなつてたというのに結構楽しむ時間はあつたのね、とちらりと思つてしまった。

「もうちよつとだ。町に着いたらたつぷり休ませてやるからな」

馬を馬車に付け直しながらイリヤが言うと、馬二頭は「分かつてる」というように鼻を鳴らす。馬車の中ではセリス達がせつせと荷物をフローラちゃんの中へと運んでいた。

「俺は表が良いなあ、気分的に」

フロロはそう呟くと御者席に足を向ける。その背中にわたしも頷いた。

「同感、わたしも暫くはフローラちゃんの中、入りたくないわ」

ぶつくさと言いながら馬車に入り、席の柔らかいクッションに身を沈める。この半日以上の間、体を動かさない事に疲れた気がする

……。はあ、と息つくとも早くも眠気が襲つてきてしまった。

馬車の扉を閉めた後、隣りに座るヘクターの顔を覗き込む。

「ごめんね、予定狂っちゃって……えーっと、心配かけて」

「いや、うん、まあ……馴れてきたかな」

何に？と聞き返したくなる謎の台詞を言うと、ヘクターはにっこりと笑った。

荷物運びを手伝っていたデイビスが馬車内に戻ってくるなり溜息をつく。

「全く、あいつらもう寝る準備始めてやがる」

フローラちゃんの中にいったメンバーというとセリスとサラ、ヴェラにイルヴァとアルフレートか。マイペースの塊みたいなメンバーだ。昨日とは違ってこっちに残ったローザちゃんはわたしの前で欠伸している。

「しょうがないわよ、徹夜で歩いて来たんだし。でも先のこと考えると昼夜逆転しないように昼過ぎには起きるようにしないとね」

皆のお母さんは体調管理で頭が一杯なのかもしれない。わたしが「ごめんね」と言うのと、

「まあ……いいわ。馴れてきたし」

と呟いた。だから何に!?

暫く行くと国境での出入国管理をする関所が見えてきた。大きな外枠だけの門が山と海岸側にある大きな岩にめり込むように建っている。馬車が止まり、窓から表を見ると簡単な作りの小屋からローラス警備隊の制服を着たおじさんが出てきて、何か紙のようなものを振っている。名前などを記帳するのだろう。国にもよると思うけど、ローラスとサントリナは出入国も簡単な手続きで済む。わたし達のような学園の人間なら尚更だ。

そろそろと馬車を降りると受付である小屋の窓に向かう。

「これに米印が振ってある所を書いて埋めて……って何人乗ってたんだ?」

馬車を降りた十人超と馬車を見比べて、おじさんは目を丸くした。

国境を越えると、そこは異世界だった。

「ふおおおお！まさに！外国！」

寝不足からハイになっているわたしはカンカレの町を前に叫び声を上げる。後ろからローザに、

「やめてよ、恥ずかしい」

と窘められるがきよきよと顔を動かし続けてしまう。朝早い時間だというのにこの町は動き始めていた。

町の入り口から市場の列が伸びていて、色とりどりの野菜、果物、鮮魚、加工済みの食品の屋台が並んでいる。匂いからして海鮮物が多そう。南の方は港に繋がっている町だもの、当たり前なのだろう。

氷をざくざくと割る音を聞きながら市場を歩いていると、

「早く宿、宿探してくれ」

後ろから恨めしい低音の声が聞こえてくる。振り返ると薄ら開いた瞼の下から睨みを利かせるアルフレートがのそのそと歩いていた。

「ええ？お腹空いたよ。何か食べさせてよ」

わたしの反抗にアルフレートの肩がぴくりと揺れる。暫くわたしを睨んだ後、すっと上空を指差した。

「あのでかい看板の宿に行く。お前達は勝手に食べてきてくれ」

言われた通り、指差された方向には周りの建物からひよっこり顔を出している宿屋の看板がある。なかなかシユールな絵柄で魚のイラストが描いてあったりして宿の質が気にかかるが、アルフレートの様子を見るとあまり否定を続ける気にもなれなかった。

「わかった。でもアルフレートは食べなくて平気なの？」

返ってくる答えを半ば分かりつつ尋ねると、案の定黙って足を宿に向けながらひらひらと手を振られる。大分お疲れのようだ。馬に乗って疾走、なんてアルフレートにしちゃ過酷な運動だったのかもし

れない。

「全く、オンオフのスイッチの激しいやつねえ」

隣りでローザが溜息混じりに呟いた。

「で、俺らは何食うよ？」

デビスが皆を見回す。眠気から思考が回っていなそうな皆の顔を見て、わたしはぱつと手を挙げた。

「魚！ やっぱりこんな町だもん、魚でしょ」

我ながら真つ当な意見だと思ったのだが、すぐに別の意見が出る。

「俺、肉がいい」

フロロだ。彼の方は元気が余っているようで、びしりと手を挙げる。猫のくせに魚より肉とな、と思っているとデビスが頷く。

「俺も肉の方がいいな」

「私は魚がいい」

わたしの横からセリスが顔を出し、手を挙げる。「私も……」と遠慮がちにヴェラの声が聞こえた。

「こんだけの人数だもの、二手に別れて丁度良いんじゃない？ あたしも魚がいいかな」

ローザが一軒の店に視線を送りながら意見する。壁一面に原色カラーで海を描いた派手なお店だ。確かに気になる。

「俺も肉だな」

そうアントンが言ったところでデビスがヘクターの肩に腕を回す。「ここは空気読んで、お前も肉だよな！」

そこは逆じゃないのか？ と言いたくなるが、なるほど、男女別ということか。それを聞いたからなのかサラが一段と明るい声を上げる。

「あら、それいいかもね。どうせ宿の部屋もこういう別れ方なんだし。同じ部屋のメンバーで行動した方が良いと思う」

「そうねえ、やっぱりここは女の子同士がいいわあ」

ローザも加わり『プリースト組』がきやつきやとはしゃぎ出した。

まあ、わたしは何でもいいけど。お腹の空き具合からして今ならアントンと二人、ってコースでもどうでも良い気分だ。……やっぱ嫌

かな。

そんな中、イリヤがぼつりと呟く。

「俺は魚がいいな……」

「お前ほんつつつと！糞な奴だよなあ！！」

目を吊り上げたアントンがイリヤの頭を殴りつける。殴ることはな
いと思うが、確かに今は空気読めないどころじゃないわ。

「イルヴァは何でもいいけど、リジアと一緒にいいですう」

そう声を弾ませるイルヴァに腕を取られ、わたし達は二手に分かれ
ることになった。

「派手ねえ……」

水色の店内を見渡し、ローザがほう、と息をつく。先程ローザが見
ていた海の絵の店は中身も負けない程派手だった。テーブルや椅子
も含めた内装は水色一色で、壁には貝殻が埋め込まれている。天井
からは色んな種類の魚の張りぼてがあちこちぶら下がっていて、見
ていて面白い。

「でも可愛いよ」

わたしは案内されたテーブルの上で揺れているハリセンボンの丸い
姿を指して笑った。

「……落ちてきませんよね」

ヴェラの問いには全員が「うっ」と詰まる。どこまでネガティブな
娘なの……？

「やっぱり前にヘクターから聞いてた通り、ローラスより賑やかで
派手な町だね」

水を飲みつつわたしが言うとセリスが身を乗り出した。

「なになに、やっぱりそういうこと語り合ったりする仲なの？良い
雰囲気の中で『ボクの生まれた国はね……』とか言ったりして！」
一人で盛り上がり出すセリスをわたしは慌てて注意する。

「ややややめてよ、何言ってたんだか！同じパーティーなんだからそ

のくらい話すでしょ」

キヨトンとした顔のイルヴァを横目に嫌な汗が吹き出てしまった。

「もーつまんないなあ、エロい話しとは言わないけど、こんぐらいいいじゃん」

「ほら、セリス、いいからメニュー決めてよ」

頬を膨らますセリスにサラがメニューを押し付けたことで、わたしはほっとする。まったく、席につくなりする話じゃないっていうの。

『量が多い、少ない』の議論で揉めたものの、店員さんに無事注文を済ませる。全員がふう、と息つき足を伸ばした時だった。

「……で、何か相談があるんじゃないの？」

ローザが淡々と言った台詞にわたしは顔を上げる。え？何？誰？わたし？いや違うな、ローザちゃんの目線の先は……サラだ。

わたしはどきりとする。サラが相談つて、その、まさかね。

「さっすが神官様、よく分かるわねえ」

感心するセリスにローザは手を振った。

「この前からの様子に、さっきの空気見てれば誰でも分かるわよ。

女だけで話したかったんじゃないの？」

妙に大人びたローザの雰囲気になつたとイルヴァ、ヴェラは顔を見合わせる。あら？わたしもこっちの『空気読めない組』だったのか。あらやだ、シヨック。

そんな焦りから目を泳がせるわたしだったが、サラがふ、と視線を落として重いため息をつくのを見て、再び鼓動が早くなる。暫くの間続く沈黙に、話を聞きたいような聞きたくないような不安が立ち込めた。そんな中、サラの小さな声がテーブルに落とされる。

「……アントンのことなんだけど」

ばく！と一際大きく心臓が跳ねる。まさかのまさか、いややっぱりこの話題が出てきたか。連日のサラの目線、けだるい雰囲気。空気読めない組に入りそうになったわたしが、それには気がついていたもの。隣りで『真・空気読めない組』の二人が目をぱちぱちさせ

るのが分かった。

緊張から水に手を伸ばす。ローザも思うことがあるのか、眉間に薄い皺を作りつつ口に水を運んでいた。

「私、アントンのこと……」

サラの可愛い声に全員の喉が鳴る。頭の中に鮮やかな緑色の髪の彼が浮かんでいた。

「私アントンのこと嫌いなよねえ……」

ぶは！とわたしとローザが吹き出した水がテーブルに散り、ヴェラが「汚い！」と悲鳴を上げる。セリスが一人達観した顔つきでサラを眺めていた。

重苦しい雰囲気の中、イルヴァの食べっぷりを見ると「ここまですマイペースなのは羨ましい」と素直に思う。魚のスープを飲んでいても何だか味が分からない。

「あの怒りんぼ君のことだとは思ってたけど……まさかそっちとはね。いや、まあ、サラの性格考えれば自然なだけだ」

ローザもぶつぶつ言いながら魚介たっぷりサラダを口に運んでいる。その向かいに座るサラが大きく息を吐いた。暗い表情には自責の念が強いように感じる。

「こういう気持ちが悪くないっていうのは分かってるの。だって大体のパーティーが卒業してからもずっと一緒にいるわけでしょう？きつと……まだ分かんないけど、私達もそうなると思うし」

サラのぽつりぽつりと繋ぐ言葉にセリスが頭を掻いた。確かにわたし達だって卒業後のことまで決まっていけないけど、決まっていなくても決定的な何かがあるわけでもないグループはそのまま一緒にいることが多いんじゃないだろうか。上昇志向の強い人達はスカウトと離脱を繰り返す、って聞いたことはあるけど、普通は縁あって一緒にになった仲間だもの。冒険を辞めるまで一緒にいるパーティーが大体だと思う。

「で、でもわたしだってあの緑頭のこと『ぐわー!』ってムカつく時あるよ?そういうのは当たり前なんじゃないかな。少しずつお互い改善していけばベストだと思うし」

わたしが言うもサラは首を振る。

「私もね、セリスが変なこと言い出したりとかヴェラのおっちょこちよいが直らない時とか、イリヤの引つ込み思案な所とかデイベスが大雑把過ぎる所とかイライラしたりするよ?でも、何て言うか『修復出来ない溝』を感じちゃうのよね、自分の中に」

サラのアントンの名前を出さない言い方には、彼女の遠慮と気まずさを感じる。が、アントンへの距離感が一層強く感じられた。

「それで、嫌いつてことになるわけですか……」

ヴェラが呻くように呟いた。何だか泣きそうな顔に見える。きっとシヨックだったんだろうな。

考えてみればわたしは仲間の事を好き嫌いで見てなかったかもしれない。いや、きっと『好き』が前提にあったんだろうな。ローザちゃんのこともイルヴァのことも、アルフレートやフロロだって好きです!って胸張って言えるもの。そんなこと考えたことも無かったから、変な感じだけでも。

でももし、わたし達の仲間になったのがヘクターじゃなかったらどうだっただろう。すっごく嫌な奴でローザちゃんをいじめたりとか皆を見下したりする奴だったとしたら。「あいつ嫌な奴じゃね?」って仲間に伝えるもの気まずいし、その後の不調和とか考えちゃうよね。かといって毒は溜っていくばかりになるし。そう考えると今の自分の恵まれた環境でサラに何言ってあげたらいいのかわからない。ふとアントンとヘクターがもし逆のパーティーにいたら、と考えて首を振る。何か、変だ。気持ち悪い。わたし達の中にいるアントンも変だし、サラ達と一緒にいるヘクターも変。

「リジア、耳から煙出てるわよ」

「うそ!」

ローザからの注意に慌てて耳を塞ぐ。いや、出てるわけじゃないじゃな

いか……。

「出そうな顔してた、ってこと。……ねえサラ、もうちょっと頑張ってみたら？」

ローザはサラに向き直ると彼女の手を取った。

「あたし達で良ければいくらでも愚痴は聞いてあげる。でも同じメンバーの男の子に話すのはもうちょっと後にしよう、ね？きつと……見えない黒い空気が舞ってきちゃうわ。貴方がパーティーを抜けるものと同じことよ。理由は分かるわね？」

ローザの言葉にサラは一つ一つ頷いていく。セリスがその様子をじつと黙って見ている。敢えて黙っている、というように見えた。

「アントンのすぐ怒りだしたり、皆の輪を考えない所が信じられないの。でも、私……そういう風に考える自分が一番嫌なんだ。ずっと一緒にいる仲間のことを、平気で否定出来る自分が世界で一番嫌な奴だと思う」

言い終えた後、サラの目を瞑った顔が痛々しい。でもこれが彼女の本当に言いたいことだというのが分かった。

「同族嫌悪ってやつじゃないか？」

夕焼けに染まるカンカレの町を前にアルフレートが口を開いた。宿屋の最上階から見ると坂の多い土地なのがよく分かる。遠目から見ても太陽の光を反射する海が綺麗だ。

「サラとアントンが似てるってこと？そうかなあ……」

未だにベッドから起きられない二人の名前を出してわたしは唸る。メンバーのまだ半分が寝っていて、半分はそのメンバーを待っている状態だ。アルフレートがテラスの柵に身を預けると指を立てる。

「気が強くて助言を受け入れられない。物事を全て『勝ち負け』で見ているからだ。そのくせすぐ自己嫌悪に陥るところなんかそっくりじゃないか。あの二人は似てるよ」

そう言われてみれば似てる、かなあ？気が強いのは確かだけど、アントンが自己嫌悪に陥るところなんて見た事ないけど。でもアルフレートから見た時、そういうところが窺えたところかしら。

わたしは年上の仲間を改めてみると自分を指差した。

「ねえねえ、その鋭い観察眼でわたしの性格も見てみてよ。結構役立ちそう」

アルフレートは少し眉を上げた後、ふふんと笑う。

「お前は『人見知りするのか初対面の人間を、自分と合うかどうかで見極めようとする。その反面、一度仲間だと思った相手のトラブルには動揺が激しい』今回みたいな、な」

「う……うぬう」

「好き嫌いがはっきりしているからか一度『無理』と思うとすぐ投げる。飽きっぽいと思いきや真逆だ。執着する物事に対しては異常な程のめり込む。オタク体質ってやつだな」

「ぐ……」

「まだ言うか？」

「い、いや結構です」

手で遮るわたしにアルフレートは「残念」と肩を竦めた。恐ろしい、流石百年の時を越えるエルフ。

「でもさー……、何て言ってあげていいのか分からなかったよ、わたしには」

わたしは柵に両腕を乗せ頼杖をつくど街並みを眺めながら呟いた。

「『どうしても駄目』って人がいるって感覚、わたしにも分かるもん。それなのに『そんな事言わないで』とも言えないし、『分かるー、嫌な奴っているよねー』って同意するのもちよつと違うと思うし。だってサラは何とかしたいと思ってるからこそ、話してくれたんだと思うのね。それを具体的な案も出さずに同意だけで終らせただけで終わったっていうか……」

「めんどくさい奴だな。良い人振りたいたいだけじゃないか」

アルフレートの言葉が頭に突き刺さる。確かにそうかもしれない、と思うと反論出来ない。

「……その点、やっぱりローザちゃんはすごいよ。アントンのこともサラのことも否定しないでアドバイスしてたもん。わたしもサラが皆に正直に言うのも、抜けるのもマズいと思う。デビス達、ボロボロになっちゃうと思うよ」

戦力的に、ではない。彼らの中で確実に揉めるだろう。揉めた時に他のメンバーがアントンのことをどう思うのか。更に言えば揉める理由が『嫌いだから』なんてものなのだ。それを考えるとサラのと違って彼らはどう思うのか。その後、彼らは健全なパーティーを組めるのか。

「青春のヘドロみたいな匂いがプンプンするじゃないか」

何がおかしいのかアルフレートは高らかに笑っている。うちが揉めないのはこういうのがいるからかもしれない……。そんなことを考えていた時だった。

「んんー？」

宿の前の通りに繋がる細い路地に目を引く姿が見える。ここからだ

と小さな粒だが、一見して分かる異種族の姿。

「んんんー!？」

意味は無いが身を乗り出してその姿を凝視する。あれって……、あのクーウェ二族の男じゃない!？」

「あいつだなあ。やっぱりこの町に来てたか」

「やつぱり!？正直言つてクーウェ二族って皆同じに見えるんだけど、あいつって本当に『アイツ』!？」

指差しながら捲し立てるわたしの頭をアルフレートが押さえてくる。目を細めて対象をじっと見た後、にやっと笑った。

「あの謎の荷物もある。間違いなく『アイツ』だな。元気に商売もしてるみたいだ」

「商売……?」

聞き返してからはつとする。スリだ。さっきから不自然にすれ違う人とぶつかっているのだ。思わず頭に血がのぼる。

「ちよつと！捕まえに行こう！全然反省してないじゃないの!」
腕を引っ張るわたしをアルフレートは嫌な顔で見ると、短く息をついた。

「……フロロを起こして来い。下に降りるまでに何処行ってるかわからんからな」

仕方ない、といった様子が引っ掛かるがわたしは大きく頷いた。

「とってもどうでもいいです」と言い放つフロロの首根っこを掴み、わたし達は宿を出る。

「フロロ、こっちでいいのか?」

ヘクターがやる気ゼロの盗賊に尋ねた。何故、彼がいるのかという
とクーウェ二族の男に「会ってみたい」と言つて一緒に行くことになったからだ。ちよつと何考えてるか分かんないが、単純に興味を持つたという。

暫く恨みがましい顔で空を睨んでいたフロロだが、耳に手を当て考

え込むようにじっとしている。そして脇に逸れる細い道を指差した。
「こつちの方向っばいな」

「アイツの声が聞こえるの!？」

町の音全てを拾い、判別しているかのようなフロロの答えにわたしは声が大きくなる。今歩いている通りも普通の町人の声で溢れかえっているというのに、それに遮られていたりしないのだろうか。

「アイツ、歩き方に特徴あるからなあ。爪先をわざと引きずるみたいな……。あとクーウェ二族って独り言うるさいじゃん」

フロロの講釈にわたしはあのクーウェ二族の男がずっと漏らしていた低いうめき声を思い出す。そういえばあの種族は皆ぶつくさうるさいな。その様子がまた柄が悪く見える原因なんだよね。だからといってそれを聞き分けるなんて芸当、人間には不可能だけど。

「行くぞ、早いとこ終わらせたい」

アルフレートがフロロの示した道をさつさと歩いていくのを見て、わたし達も慌てて後続く。

「で、捕まえてどうすんのさ？」

欠伸しながら尋ねるフロロにわたしは答える。

「決まってるでしょー？スリの現場見てるんだから警備隊に突き出すか、『あんたの仲間』の所に連れてくのよ」

「盗賊ギルドか、勇ましいね」

アルフレートの苦笑混じりの声が聞こえた。

首都でフロロが言っていたように、あの男は盗賊ギルドのお尋ね者なのだ。わたしがギルドに協力するのは少し不本意だけど、まあ仕方ない。

「めんどくさ。あんな小者、わざわざ知らない町で追いかける程の労力使う相手じゃないぜ」

寝足りないらしく不機嫌なフロロの背中をわたしは叩いた。

「あんまり文句ばっか言っていると、そのギルドに非協力的な態度をチクってやってもいいのよ？」

「恐ろしいこと言う女だな、おい……」

そう言うつとフロロは苦虫を噛み潰したような顔になった。

フロロの指示に従い、二、三度細い道を曲がった時だった。両脇にある民家と思える建物、その外壁に木の板が地面と平行してずらつと貼り付けてあるのに気がついた。

「これ何だろうね？二軒とも同じ位置に打ち付けてるし……あ、奥の家もだ」

道に続く家全てが同じように木の板を貼り付けてられている。それを指差すわたしにヘクターが答えた。

「船を運ぶ時に船体と壁、両方を傷つけないように、らしいよ。昔は小船なんかは家に持ち帰る人もいたんだってさ」

「家に？わざわざ！？なんで？」

思わず矢継ぎ早に質問するが、ヘクターは「そこまでは……」と首をひねる。へえ、でも面白い話だな。

お得意の妄想の世界に入りそうになるわたしのズボンをフロロが引っ張る。ん？と見ると前方を親指で指している。先に目をやるとあのクーウェ二族がぼんやりと立ち尽くしているではないか。

「いたあ！……ちよつとあんたねえええ！見てたわよー！？」

目の前に駆け寄り、人差し指を突き出すわたしを見る男の顔は予想した反応が無く、ぼーつとしているように見える。その、もうちよつと慌てふためくのが見られると思ってたんだけどな。もしかして人違い？心なしか肌の色も違うような気がしなくてもない。と不安になってきた時、

「あ、あんたらか……」

呻くように言う男の声には力が無い。ようやく彼の様子に違和感を覚える。そして男は続けた。

「よつぽど運が無いんだな、あんたら……」

はあ？と聞き返そうとするわたしの後ろから声が掛かる。

「仲間か？」

聞き覚えの無い声に慌てて振り返ると、既に剣を抜いた状態のヘクターにぎよつとする。その彼が向く方向に黒づくめの怪しい姿が数

人立っているではないか。

「い、いやその仲間っていうか、その……」

「違うわよ!」

言い淀みを見せるクーウェ二族の男の声を遮り、わたしは全力で否定させてもらった。

「どーした、そんな青い顔して？あんだ色んな奴らに追われてるんだな」

フロロは軽口を叩きつつもダガーを抜いた。肌の色が違う、と思っただけ。たら顔色が悪かっただけらしい。しかし黒装束に身を固めて顔まで覆ってる連中に追われてるって……ちよつと尋常じゃないと思うんだけど。

クーウェ二族の青い顔と怪しい黒ずくめを交互に見ていると、リーダーらしき中央にいる男が口を開く。

「仲間じゃないなら用は無い。下がって貰おう」

そう言われて大人しく引つ込むか！とでも言い返したいが、こちらとしても確かに『用は無い』。元からクーウェ二族の男を取っ捕まえにきたのだから、制裁ならこの黒ずくめの連中に任してもいいのだ。が、明らかに普通じゃない男達の空気に、あつさり退くのも気が引ける。冒険者として、人としてどうなのか、という問題なのだ。わたしとアルフレートは顔を見合わせる。彼の方も「どうしたもんか」という顔だ。この空氣的にわたし達の方が外野なのは間違いないさそうだが。

「どうした？引かないというなら……」

そう言いながら背中から短剣を抜くリーダーに合わせ、男達は一斉に剣を抜く。躊躇の無い揃った動きに嫌な予感が湧いた。

「悪いがあんだ達、どう見ても善人には見えないな」

ヘクターがそう言って苦笑すると、リーダーの男の唯一見せている目元がすうつと細まる。

わたしが瞬きしたのは、ほんのちよつとの間だったはずだ。キーン、という澄んだ鋼の音に反射的に顔が動く。ヘクターが短剣を持つ男の手を弾いていた。早過ぎる男の動きにひやりと背中が震える。

視界の隅に黒い影が動くのを感じ、切り付けられる自分を予想して

しまった時だった。

「ウインドストーム」

低い呟きにマナが応える。辺りを暴風が吹き荒れ、男達どころかわたし達全員を巻き込んでいく。軽いフロロはもちろん、わたしも荒れ狂うシルフに吹き飛ばされた。あちこちから「うお！」だの「ぐはあ！」だのといった苦悶の叫びが聞こえる。

「くは！」

民家の壁に背中を打ち付け、息が止まる。骨が折れてるんじゃないかと思ってしまう痛みに悶絶していると、

「立て」

先程の呪文の主と同じ声が聞こえ、襟元を強引に引つ張られた。

痛みの為に意識が朦朧とする中、命令に自動的に体が動く。半ば引きずられるように走り、先程見た板打ちされた民家の壁を横目にする。転びそうになったところで意識がはつきりと戻ってきた。

「……あ、あ、あんたねえええ！あんなやり方ないんじゃないのぉ！……」

「文句は後、後。早く走れ」

わたしの抗議にアルフレートは涼しい顔で走り続ける。フロロの、

「さすがにこのパーティーいる意味考えちゃうぜ」

というぼやきが聞こえた。

細い路地を纏れ合いながら駆け抜け、職業ギルドや商業施設が並ぶ広い通りに出ると最後尾を着ていたヘクターが声を上げる。

「大丈夫だ、もう追ってきてない」

それを聞くと一斉に立ち止まり、荒い息を整える為に肺に空気を送り続ける。足の裏がじんじんと痛い。汗が首筋、背中から吹き出る。「アルフレート、ごめん。ありがとう」

額を拭いながら言うヘクターにアルフレートは首を振った。なんでお礼を、とわたしが文句を言おうとする前に、ヘクターが言葉を続ける。

「あいつら完全に『プロ』だ。躊躇無しに首狙ってきたな」

その言葉に体が一気に冷える。それって、最初の一撃を彼が万が一、流し損ねていたらばーんって……。

最悪な想像をしてしまい、慌てて首を振る。

「だからってあれはねーよ。俺の軽さも考えてくれ。あいつらにも逆恨みされたらどうするよ」

フロロが眉間に皺寄せ言々と、アルフレートはもう一度首を振った。「ごろつきとは違うんだ。ああいう連中は個人的な感情じゃ動かさ。意味無い相手は追いかけてもしない」

確かに足音からして始めからわたし達の方を追い掛ける気はなかったように思われる。彼らの暗殺者そのものの動きを見るに、足音も立てなそうだけど、現に追い掛けてきている様子は無かった。

「あ、クーウェニ族の方は？」

わたしははっとすると三人に尋ねる。

「俺達とは反対側に逃げてったぜ。立ち直りは一番早かったみたいだ」

フロロの答えに何となくほっとする。なぜかは分からないけど。すっかり暗くなった町並みを見ながらヘクターが口を開く。

「……戻ろっか」

その申し出に深く頷くと、わたしは大きく息を吐いた。

「次、あいつを見掛けることあっても、近付かないようにしよう」「始めからそうしてくれよ！」

フロロの文句に『あんたがそもそもその取っ掛けを作ったんだろ』とも思ったが、汗だくの不快感から流すことにした。

その日の夜、全員での夕飯が終わった時だった。酒場兼飯処の入り口を出るとフロロがヴェラに声を掛ける。

「俺、ギルドに顔出しに行くけど、姉ちゃんどうすんの？」

「えー行きます行きます！」

元気よく即答したヴェラだったがなぜかふと考える顔になり、もし

もじとし始める。

「何、行かないの？行つとく方がいいんじゃない？」

わたしが顔を覗き込むと「えーっと」とこちらを見返してくる。

「リジアさんも一緒に行きませんか？」

「はあ！？何で？」

「いや、面白そうじゃないですか。リジアさん好奇心旺盛ですし……」

意味が分からない。訝しげに見るわたしにヴェラは焦ったように言葉を重ねる。

「いい経験になりますよ！めったに出来る経験じゃないです！この機会にご一緒しましょう！……えと、フロロさんと二人じゃなんですし」

「あんた俺のことそんな風に見てたのかよ！」

フロロが呆れた声を上げた。ヴェラは更に慌てだす。

「いや！そんなんじゃないです！そんなんじゃないんですー！女の子一人じゃその、ね」

「……要するに初心者丸出しが一人じゃ馬鹿にされそうで不安だから、ついて来て欲しいってことね」

「はあ……」

わたしの指摘にようやくうなだれると頷いた。フロロの顔が既に「やめようかな」と語っている。

「でもいいの？」

わたしが聞くとフロロも頷く。

「別に部外者は立ち入り禁止ってわけじゃないよ。誰でも利用は可能、入り込めるならね、って所だから。あ、でもこれ以上は勘弁な後ろで様子を窺うメンバーをフロロは手を振って牽制した。わたしは首を傾げる。

「なんで？やっぱりあんまり大勢で行くのはまずいの？」

「いや、俺が恥ずかしい」

なるほど、学校に親と一緒に行く、みたいな感覚だろうか。

そんなやり取りの後、残りのメンバーには宿に帰ってもらい、わたしとヴェラはフロロの案内の元、盗賊ギルドへと向かうことになった。

『余計な行動は取らないこと！』とローザにうるさく言われたのは言うまでもない。

「ここ……？」

目の前の普通の民家を見てわたしは思わず尋ねる。

「普通のお家に見えますねえ」

ぽかんと口を開けるヴェラとわたしをフロロは面白そうに見ていた。そして通りを指差す。

「この並びにある家、全部が北向きに玄関口があるだろ？この家だけ南向き。それで……」

次に向かいの並びの家々を指差していく。全てが普通の民家といった雰囲気だ。

「向かいは全部南向き、と。これなら出入りする人間は近所の一般人に見られない。こんなへんてこな立地をわざわざ作ったのか、はたまた偶々出来上がったのかは知らないけどね」

「へええ、じゃあ他の町でもこういう所を探せばいいんですね！？」
ヴェラの元気な声にはわたしですら「違うだろ」と突っ込みたくなる。

「……他の町はまた別。その町によって酒場の裏だったり下水道の中だったり。よく考えてから発言してくれ」

疲れきったフロロの声に思わず「がんばれ！」と言いたくなった。ヴェラの顔には依然として『？』が浮かんでたりする。

さて入りますか、となると途端にわくわくしてきた。ヴェラの指摘はわたしの性格だけは当たっていたようだ。

狭いポーチを抜けて扉を開くと煙草の臭いがむわつと襲い掛かってくる。いかにも、な雰囲気だ。明かりも最低限しかないのか薄暗い。

廊下を通り奥へ進む。左手に見える開きっぱなしのドアの前に熟練者風の男性が立っているが、特に挨拶するわけでもなくフロロは進んでいった。ギルドの仲間っていうともっと気さくな感じだと思っ
ていたわたしは少し驚いてしまう。

男性の前を通りすぎる時、なんだか気まずいわたしはぺこりとお辞儀する。その様子が面白かったのか相手は目を大きくした後、「ふふ」と微笑んでいた。

ちよっとかっこよかったなー、などと考えていると目の前の光景に驚く。丸テーブルと数脚の椅子、カウンターと後ろに並ぶお酒の詰まった棚など、どう見ても酒場の雰囲気だ。髭の生えた軽鎧の男、ダガーを括り付けた太もをあらわにしているスタイルのいい女性、モロ口族の姿もある。皆、露骨にこちらを見遣ったりはしないものの、横目で窺っているという空気は強く感じる。

「どーも」

フロロが話しかけたカウンターにいるおっさんは頬に大きな傷があり、煙草をくわえている。目つきの鋭さといい「まさに！」な外見に、わたしは妙に嬉しくなってきた。しまった。

大人はなんでも知っている

「いよう兄弟、この町は初めてかい？」

おっさん——ギルドマスターは陽気な声で尋ねるが目は笑っていない。こちらにも真っ直ぐ視線を合わせてくることは無いが、明らかにわたしとヴェラの方まで注意を払っている様子だ。

「まあね、魚が美味いなんて猫には良い町だよ」

カウンター前の椅子によじ登りながらそう言うフロロに『あんた魚食べてないじゃん』と言いたくなるが止めておく。軽口言える雰囲気じゃない。

「挨拶周りってやつかい、ご苦労さん」

マスターは磨いていたグラスをフロロの前に置いた。フロロは軽く頷く。

「そゆこと、この二人は俺の学友。こっちが同じパーティーの仲間ソーサリーだぜ」

「学友ってことは『学園』に通ってんのか。物好きだね。ソーサリーの知り合いは大事にしるよ。……魔術師ギルドとは折り合い悪くてなあ。なんかあつたら頼むよ」

そう言うてにやっと笑うマスター。急に顔を向けられて飛び上がるが、社交辞令ってやつだろうと解釈する。フロロは続けてヴェラを指差し「俺の弟子」と説明した。ヴェラも元気よく「はい！」と言うということはフロロの冗談では無いらしい。

「そんでさ、ちょっと聞きたいんだけど今日、東の路地裏の方で騒ぎあったの知ってる？アサシンっぽい物騒な連中だったから何か知らない？」

フロロの問いにマスターは黙ってカウンターに視線を落とす。フロロは「ちえ」と舌打ちすると、置かれていたグラスの中に硬貨を入れた。キン、と澄んだ音が響く。するとマスターは表情を変えることなく話し出した。

「アサシンに追われてたのはクーウェ二族の男か？」

「そ、そうですそうす！」

わたしは思わず身を乗り出す。本当に何でも知ってるんだなあ、と感動を覚える。

「じゃあまた戻ってきたんだな、あいつ。……クーウェ二族の野郎は『トマリ』ってやつだ。ギルドに入りもしないでケチな泥棒ばかりやって、問題起こすたびに町移動してる。東の方から来たみたいだな」

「戻ってきた、ってことはこの町も前に追われてるんだ？」

フロロの質問にはマスターは首を振った。

「カンカレじゃ特に問題は起こさなかった。『俺らの見張る範疇』じゃあね。野郎、そんな時からやばいのに追われてたんだよ。それですぐにローラスの方に逃げてつたみたいだな」

「やばいのって……アサシンの集団に？」

眉を寄せるフロロにマスターは頷く。それを受けてフロロは「むう」と唸った。しばらくするともう一度マスターに尋ねる。

「あいつ、一個荷物を抱えてるんだよ。それを狙ってる集団が幾つかありそうなんだ。ローラスじゃギルドと喧嘩になってる故買屋グループが追いかけてた。その荷物の噂聞いてない？」

それを聞くとマスターは感心げに口笛を吹いた。

「そりゃ面白いな。分かった、こつちも探り入れる」

マスターは入り口方向を見ると少しだけ目を動かす。先程、わたしが挨拶した長身の男性が小さく頷くと、そのまま玄関の方へ消えていった。ヴェラの「かつこいい……」という呟きにはわたしも同感だ。

「いい情報持つて来た礼だ。何でも答えるぜ」

カウンターに身を預かるマスターをフロロはちらりと見て、椅子から飛び下りる。

「……いや、これ以上はいいや。元々ちょっと興味引かれただけで、深入りする気は無いんだ」

「あ、そうなんですか？」

ヴェラが意外だという風に目を丸くした。わたしは頬を掻く。好奇心だけで動くにはちょっと重過ぎる内容っぽいもんね。

帰るか、というように顔を見合わせるわたし達にマスターは口を開く。

「じゃあ最後に一個だけ言っとくぜ」

振り向くとタバコを灰皿に押し付けながらもうもうと煙りを吐き出し、フロロの顔を見た。

「アサシン使う奴らなんて大体どういう人間分かるだろ？」

「……だーから深入りしないって言ってるのさ」

フロロはそう答えると部屋を出る。わたしとヴェラもそれに続いた。「どういう人間、ってどういう人間なんです？」

家の玄関扉を出るとヴェラがわたしの腕を突きながら聞いてくる。

「どう思うのだと思うの？」

「えーっと、『悪い人』です！」

大変ヴェラらしい答えだ。わたしは溜息つくと首を振る。

「……善良な一般市民じゃ、アサシンの雇い方なんて習わないでしようが」

「あ、学園でも習った覚えはないですね」

その受け答えにフロロの尻尾が不機嫌そうに揺れていた。

わたし達がカンカレの町を後にしたのは翌日の朝だった。夜中動き回るのはやっぱり冒険者として賢い選択じゃないというのと、ここで一気に生活のリズムを戻そうという狙いがあった。のだが、
「ちょっと……」

わたしは顔に掛かってきたセリスの足を払いのける。お行儀のなっていないお嬢さんだ。その動きの後もセリスは皆の衣料が入った鞆を積み上げた即席ベッドですやすやと寝息をかいている。昨日の晩も遅くまで騒いでたもんね。「だって眠くないし」とぬかして。

王城のあるセントサントリナに向けて移動中、フローラちゃんの中にいるのはまた「女の子メンバー」に戻っている。女の子ばかりになるとやっぱりほのかに良い香りが……ということはなく、イルヴァが食べるお菓子の匂いでいっぱいだ。わたしが見ていることに気がついたのか、

「食べます？」

と板チョコを突き出してくるが首を振って突っ返す。そのやり取りを見守った後、ローザがわざとらしいまでに大きくため息をついた。「まったく……、昨日みたいなことはこれっきりにしてよね!？」わたしはきよとした後、手を叩く。

「夜更かしの事？わたしは帰ってから結構早く寝たよ。出歩いて疲れもあったし」

「そうじゃないわよ、変な異種族追いかけてたら危ないことになった、って言ってたじゃないのっ」

変な異種族って……、第三者に聞かれたらややこしいことになりそうな台詞に眉寄せつつも素直に謝っておくことにする。

「ごめんごめん、まさか暗殺者集団に追いかけてるような奴だったなんて、怖いよねー。あ、盗賊ギルドでも噂になってる奴らしくて、そんなのに関わったと思うと滅多に出来ない経験かなー、とも思っけど」

「軽い！ノリが軽すぎるわよおお！あんた本当に分かってる！？危ないところだったって！」

喋っているうちに昨日、話した際の興奮が蘇えってきたのかローザが顔を覆って嘆きだす。そう言われてもどう弁解していいものか途方に暮れてしまうじゃないか。一緒に泣けばいいのだろうか。

「だってあんた達四人がその場でもしやられちゃってたとすれば、あたしとイルヴァ二人になってたのよ！？どうすりゃいいのよ、こんな娘とおお！」

『こんな』と言われた当のイルヴァはいつもの無表情のまま、ドーナツを口に運んでいる。この二人の旅もなかなか面白そうではある。

いや、二人にする気はないけど、勿論。

「ごめんって。これからはわたしも変に首突っ込まないようにするからさ。フロロとも『もうあいつ見かけても放っておく』って約束したし」

あのクーウェ二族の男の背景や持ってた荷物なんかが気になってるのは確かだが、もうあんなやばい連中と手合わせする気は起きない。そう伝えるとローザはようやく顔を上げた。

「約束よ？」

ぐずりと鼻をすすりながら小指を出す彼女に若干呆れるが、わたしは小指を絡ませる。するとイルヴァが小指を割り込ませてきた。

「ずるいですよー」

ずるいつてなんだ、と言おうとすると後ろでむくりと起き上がる気配がある。

「仲良いわねー」

荷物の上でうつ伏せになったセリスがにこにここちらを見ている。その言われように急に恥ずかしくなったわたしは頬を膨らませた。

「馬鹿にしてるんでしょ」

「うつん、妬けちゃうなあって」

そう言いながらもセリスはにこにことした笑顔を向けたまま、頬杖をついていた。後ろで振っている長い足が美しい。

「セリスさんも一緒にしましょう」

イルヴァがセリスに小指を突き出す。何だかよく分からないことになってきた。

セリスは一度苦笑すると「遠慮しとくー」と言っ、再びごろりと横になる。そんな彼女の行動に何となく目を奪われていると、

「早く指きりしましょうよー、リジア」

イルヴァの声にはっと我に返る。

「馬鹿みたい」

そうばやきつつも相手をしているローザも、全く気にせず腕を振るイルヴァもやっぱりわたしは好きなのだと思う。

前方からサラの声が聞こえてきた。

「デイベスが『ご飯』だって」

そう言っ指差す先、フローラちゃんビジョンから見える馬車の中で、デイベスがお腹を擦りつつ『馬車から出よう』というジェスチャーをしている。わたし達は相手には聞こえないと分かりつつも「はい」と揃って返事した。

「ちょっと、ちゃんと真っ直ぐ歩いてよ」

わたしはふらふらと頼りない歩きのセリスに口を尖らせる。わたしの肩によつ掛かりながら歩くセリスは「だって……」と言いながら大欠伸した。寝起きで足下が定まらないらしい。この調子だと今晚も遅くまで起きてるんじゃないだろうか。

皆すでに到着した町の通りを大分先に行っている。見通しのいい大きな通りだからはぐれることはなさそうだが、なんでヴェラといいわたしが面倒見なきやいけないのだろう。

ようやく着いた町の入り口に立つ看板を見て、セリスと顔を見合わせる。

「『縦に長い町、ドノン』だって」

「もつと他に売りは無かったのかしらね？長いから何なのよ」

セリスは「へっ」と鼻を鳴らした。確かに、だからなんだ、というキャッチコピーではある。

「あ、でも確かに縦長！随分きれいに整備したのね」

わたしは看板の横にある町の地図を指差す。縦横の比率が随分と違う不思議な作りの町だ。今、目の前に広がる大きな通りを挟んで左右に建物が散らばっているらしい。

「へえ」

と二人で町の地図看板を眺めていると後ろから声を掛けられた。

「きれいに整備したのとはちょっと違うな。実際はその逆なんだよ」振り向くと町の人なのか煙管をくわえたおじさんが立っている。

「セントサントリナ？首都から歩いて一日掛かるこの町は宿場町として栄えたんだよ。だけど最近はカンカレの方が賑やかだろう？あれよあれよという間に下に伸びて行って、こんな形になったわけだ」

「ふうん、ちょっとでも賑やかな町に近付きたいものなのかしら。」

だったらカンカレに引つ越せばいいのに」

セリスが身も蓋も無い話しをするとおじさんは「はは」と笑った。

「この町の人間が、っていうより旅人が近付けたんだ。内陸の町が発展する理由は旅人の利用だよ。町から歩いて来て、丁度夜が更ける時刻にある土地に町が出来る。そういう風になっているんだなあ」
「なるほどね、今は乗り物があるからもつと短時間で行き来出来るし、わたし達も丁度お昼の時間にお邪魔出来たわけだしね」

わたしが言うとおじさんは「そういうこと」とにこにこしている。
面白い話だな、と思っていると他のメンバーが遙か先に行ってしまったのに気が付いた。

「あ、ちよつとセリス！」

わたし達は慌てておじさんに礼を言い、通りを早足で進んで行く。

「もー、ちよつと待っててくれても良くない？」

「遅れた方が文句言うんじゃない、って怒られるわよ。人数多い分、あんまり気にしてないのかも」

文句垂れるセリスを宥めながら先に進む。ヘクター達の目立つ風貌の集団が昼食を取る店を迷っているのか、立ち止まっているのを確認出来た時だった。

「あああああ！！」

わたしは視界の隅に発見した影に思わず大声を上げて歩みを止める。

「ちよつとお、何よ……」

セリスの文句も聞かず、わたしは問題の人物？？屋台の饅頭を頼張っている丸いおっさんを指差し叫んだ。

「ぼ、ボンさん！」

その声にこの暑い中、黒いハットに黒いコートの人物は「ふごお！」というぐもった声を上げてむせ込む。でっかいたすき掛け鞆と球体のような体、伸びきった髭と髪はまさしくあの不思議な生物学者ボン氏！

ボン氏は涙目になりながら胸を叩き、熱々の肉饅頭を流し込んでいくようだ。

「し、知り合い？」

セリスの小声にわたしは頷く。ボン氏もわたしに気が付くと小さな目をくりくりと丸くした。

「おお、また会いましたな、お嬢さん」

「は、はい。奇遇ですね……」

なぜこのおっさんとも遭遇するのか謎でしようがないが、妙に気にかかるこの人物と知り合いになれたのは少し嬉しかった。

「ボンさんはこの町で何してるんです？」

わたしが尋ねるとボン氏は東の方向を指差す。

「トットムール平原の調査ですよ。あそこはまだ研究段階の小動物が沢山いるからね」

そこまで言ってからボン氏はもう一度目を丸くし、わたしのポーチをびしりと指す。

「おお！ちゃんと飾ってくれてるのだね」

ボン氏が言うのはポーチに付けてある小さなバッジの事だ。彼がわたしと会った時にくれたコボルトとオーガーの可愛くないバッジである。はつきり言っていないのだけど、もしかしたらまたこの気になる人物に遭遇することもあるかも、と付けておいたのだ。

「あー、その趣味悪いやつ、なんで付けてんだろと思ってただけど、このおっさんに貰ったんだ？」

セリスの『人に好印象を与える』という事を一切考えていない台詞を聞いても、ボン氏はにこにことしている。そして「では今回は……」と言いながら自分の鞆をこそごとと探り始めた。三回目ともなるとわたしも「今回は何かな」と少しわくわくしてきてしまった。

「今回はなんとドラゴンのバッジだよ！」

「おお！」

感嘆の声を上げるわたしの手にバッジが渡される。が、手渡された物を見てわたしは無言になった。

「……これがドラゴン？」

セリスがわたしの手元を見て眉を寄せる。無理も無い。手渡された

バッジはどうみてもグロテスクなミミズに豚っ鼻と、牙のついた口元と凶悪な目を付け足したようにしか見えないのだから。

「ハインカン地域に住む地竜の一種だよ。モグラのように地面を掘りながら暮らしているんだ」

にこやかに語るボン氏にわたしは「そうですか……」というしかなかった。ドラゴンだからか、他のバッジよりもでかくて更に存在感あるし……。

引き攣るわたしを隣りでにやにやと見ていたセリスだったが、ボン氏がじいつと彼女の方を見ているのに気が付くと、

「何よ」

と胸を張る。ボン氏はそれには答えず、再び鞆を漁りだした。

「はい、お嬢ちゃんにはこれ」

「え、いらないわよ……」

そう言いかけたセリスの手が止まる。渡されたバッジをまじまじと見た。

「精霊ドライアドのバッジだよ。木の精霊として知られている彼女は大変繊細で、扱いが難しい精霊でもあるんだ」

「え、ちよつと、いいなあ！」

わたしはセリスの手にあるバッジを見て頬を膨らませる。綺麗で女性的な容姿の精霊が横向きになったデザインだ。な、何、この差は文句を言おうと口を開きかけたところで止まる。セリスが真剣な顔でバッジを眺めているのに気が付いたからだ。

「じゃあ、がんばってね」

そう軽い挨拶を済ませるとボン氏はわたし達が来た方の町の入り口へ消えていく。ふわりと風に消えて行くような去り方をするボン氏を眺めているとセリスが口を開いた。

「私の方が文句多そうだから良いやつくれたのかもねー。得しちゃった」

そう言う様子は普段の彼女に戻っている。皆が消えていったと思われる店の方向へ歩きながら、わたしは前回ボン氏に会った時のこと

を思い出す。

そういえば、あの時は泣いてるミーナを慰める為にバッジをくれたんだっけ。

「今日の夜にはセントサントリナに着くのか」

デビスが鳥のドラムにかぶりつきながら呟いた。若い人の多い店内はお昼時だから騒がしい。テーブルが二つに分かれることになったわたし達の隣りでは、アントンとイリヤが半分ケンカのように騒いでいる。一緒にテーブルにされたローザが金切り声を上げて注意しているのが、端から見ると面白い。

「着いたら城に行けばいいのかな。その……」

ヘクターが言い淀むとフロロが頷く。

「泊まらせてもらえるのか、ってことっしょ？まあ普通に考えて招待されてるんだから、って思うけど、そんな長い期間居座っても平気なのかね」

「長い期間……って、王妃様の誕生日分かったの？」

サラが目をぱちくりさせて、野菜を退ける作業を進めるフロロに尋ねる。

「さつき通りにいた町の奴に聞いた。なんと十日も先だよ」

「と、十日！？じゃあそれまでずっといるわけ！？」

フロロの答えにわたしは慌てる。いや、別に特別用事があるとかでは無いんだけど、それにしても十日も先だったとは……。

「確かにそんだけ長いと、いくらあのエミール王子が『いいよー！』なんて言っても気まずいわね。私達、ただでさえ向こうじゃ浮いてるだろうし」

セリスが言ったことが皆の心配な点であるに違いない。予想でしかないけど、そもそもわたし達が王妃様の誕生日パーティーなんてものに招待されたのは、エミール王子の言い出したものなのだ。だって王妃様自体は全然知り合いじゃないもの。王妃の誕生日会の席に

息子の関係者枠がこんなに大人数でいいのかしら。それと「レオンを連れて来て欲しい」というのもエミール王子から母親へのサプライズだったのでは？というのがデビスの意見だった。冒険者、しかもわたし達みたいな名が売れてるわけでもない単なる学生をお城の人間はどう見るのか……。今から不安でいっぱいだ。あのブルーノだってラグデイスの事件を解決する前は相当上から目線だったもの。

「ヘクター、お前知り合いいるだろ？住んでた町なんだから。万が一の時は泊まる場所、都合つかねえかな。女共だけでもさ」

デビスの言葉使いは何だが優しい提案にヘクターは困ったような顔になった。

「知ってると思うけど、俺本来なら六期生なんだよ。同期は皆、町にいないんじゃないかな」

「あ、そっか……」

わたしは思わず呟く。ヘクターは学園を移る関係でわたし達と同じ学年になったんだ。サントリナの学園がうちの学園と同じような仕組みなら、六期生はもう一般の冒険者と同じ、色々な町を渡り歩いて旅の生活をしているはずだ。魔術師クラスなら学園に留まってるタイプもいそうだけど、ファイタークラスはそういう人もいそう。「やーい、ダブリダブリっ」

囃し立てるフロロにわたしは慌てて、

「あ、あんななんてほんと良いおっさんじゃないのよ！」

そういつて黙らせる。それにしても今の話で、ヘクターがサントリナ行きに楽しみな様子を見せない理由が、ほんの少しだけ分かった気がした。

「ローラスとサントリナの関係が良好なのは近年に限った話じゃない。何処も領土争いで国境がしょっちゅう変わるような時代から、この二つの国は仲が良いんだな」

揺れる馬車内、窓からの風を受けながらアルフレートの授業は続く。
「ほー」

「国土、人口、経済を比べても差は歴然だ。時代時代の指導者によつてはローラスの属国になつていてもおかしくはないサントリナが、何故こんなにも長い間対等な関係でいられたのか。その理由を示すエピソードは多いが、一番最近のだとローラスの革命後の混乱期の話しだな」

「ふむう……」

わたしは重たくなつてきた臉をこじ開けながら話を聞く。

「無法地帯と化した都市は確かに多かったが、それでも世界的に見ればローラスは大国のままだった。周辺国はてぐすね引いたまま見ていた状況だ。ローラス側から見ればもし、周辺国が攻めてくるようなことがあれば、やられることは無くともただでは済まない。そんな時にサントリナがやったのはローラスに大量の食糧を流すことだった」

「ふい……」

「『食糧』、それがあの混乱期に一番不足していたことをサントリナ側は分かつていたんだ。そして食糧こそがローラスとサントリナを比べて後者が圧倒的に優っている点だ。土地が肥沃なのは両国共に恵まれた点だが、広大な海域に発展した港、古来から続く畜産の知識がサントリナにはある。ローラスの人間は感謝と共にそれを再確認させられたわけだな。それにローラスが共和制に移つて一番『明日は我が身』と思つていたのはサントリナのはずなんだ。何処の国も共和制への波が広がるのを恐れていたのは間違いないがね。じ

やあなぜサントリナが……………」

アルフレートの言葉が止まったのには気が付いたが、わたしは抑えられない眠気に負けて夢の中へと落ちていくところだった。のだが、額に突然の強い衝撃を受けて一気に覚醒する。

「……………いたいわね！何すんのよ！」

前を見ると手をチョップの形にしたアルフレートがわたしを睨んでいた。隣りではヘクターがぎょつとした顔で固まっている。

「何すんのよ、だと？貴様が『退屈だから何か話して』っていうから話してやったのに」

アルフレートのわたしを睨む顔がどんどん険しくなる。でも殴ることないと思うんだけど。寝たら寝たで優しく毛布掛けるくらい心の広さが無いとね。

「だって授業でも無いのに堅苦しい話しばっかりなんだもん」

「なんだ？じゃあ私に好きなファクションやら恋の話しでもしろ、ってか？」

アルフレートは「けっ」と吐き捨てた後、ふと隣りに座るヘクターを見てにやりと笑う。嫌な予感にわたしが引いていると、

「恋、それは素晴らしい響き。さあ、このメンバーで『恋バナ』とやらでもしてみようか。我々の年代らしい青春の話題だ」

アルフレートは芝居かった大袈裟な身振りを入れて話すと、うつとりとした顔を作る。

「ききき気持ち悪いこと言わないでよ！」

わたしが一際大きな声を上げると、横で寝息をかいていたはずのアントンがむくりと起き上がった。

「うるせーなあ。二人とも血圧高すぎじゃねえの？」

『お前に言われたくない』とわたしとアルフレートが言い放った時だった。

馬車前方の小窓からこんこん、と音がしてフロロが顔を出す。

「見えてきたぜー、セントサントリナ。意外と早かったな」

それを聞いてわたしは窓から顔を出す。馬の走る先に光の粒が幾つ

も浮かんでいた。紫色の空の下、一際大きな建物のシルエットが見える。あれが王城なのだろうか。

「着いたわねー」

ローザが腰を伸ばす仕種を見せる。他の皆も肩を回したりして思い思いのほっとする行動を取っている。わたしは町を囲む外壁へと目を向けた。

長い年月を感じさせるような灰色の曇った色に見えるが、心なしか青みを帯びているように見える。紋章といいサントリナの王室の色は青系なのかもしれない。開きっぱなしになっている町の門は古い時代の凱旋門なのか、植物を象った装飾が綺麗だ。色をつければ花のアーチにも見えるかもしれない。ここを歴代の將軍達が歓声を浴びながら通つたりしたのかもしれない。

奥に待っている町の風景を見ても、古い建物がそのまま残っているところが多いのが分かる。初めての来訪が暗い時間になってしまつて残念だと思つていたが、ぽんぽんと浮かぶ明かりに照らされる幻想的な光景を見るとかえつてこの時間で良かったかもしれない。

夜といつてもまだ早い時間だから喧騒は多いが、わたしのこの町の印象は『静か』だった。

「本当にカンカレの町とは全然違うんだねー」

わたしのぼろりと出た呟きに、

「でしょう？」

とヘクターは笑って答えた。故郷を前に少し誇らしげな彼に、早く町を案内して欲しいな、と思つた。

「で、どうするの？」

セリスが何故か胸を張りながら問いかけると、皆固まる。

町に到着したんで何となく全員が馬車から降りて伸びなんてしてるけど、これからどうするんだろ。お城に行つてみるのかどうするのかは結局決めてないし。

デイビスが腕組み「うーん」と唸る。そして、

「とりあえず中入ろうぜ」

「要するに決まらなかったってことだな」

ヘクターに肩車されたフロロが突っ込むとデイビスは頭をかいだ。

確かにここで唸っていてもしょうがない。さて行きますか、という
雰囲気の中、わたしの背中になにかが当たる。

「リジア・ファウラーだな？」

耳元に聞こえる低音に体温が一気に下がった気分になった。頷くべきか、そのままにいるべきか、頷いたら背中に当たる刃物らしきものでぶつすりやられちゃうのか。じゃあ黙っているべきか……。というか相手は何処の誰なのか。脂汗を背中に滲ませつつ頭の中で考えていると、

「うおお！」

後ろから汚い悲鳴が上がる。急いで振り向くとヘクターがずんぐりとした小男を組み伏せている。首にロングソードを当てられた男は目をひん剥いて動きを止めていた。

「何者だ」

静かに尋ねるヘクターは頭にフロロが乗っていなかったら、とてつもなく格好良かったに違いない。騒ぎに気が付いた他のメンバーも集まってくる。

「お、落ち着いてくれよ、旦那」

「ナイフを捨てろ」

焦ったように引き攣った笑顔を浮かべる男を睨みつけ、ヘクターは静かに言い捨てる。顔をよく見るが全く知らない相手だ。何故この中でわたしを狙ったのか、何故名前を知っているのか、そんな疑問を男に尋ねようとするが、

「な、ナイフじゃないんだ」

そう言つて男が放り投げた物が地面に転がる。

「ペンかよ」

フロロが言う通り、道に転がったのは綺麗な青い万年筆だった。呆

氣に取られる三人。

「ちょ、ちよつと紛らわしいことしないでよ！というか何者！？」

わたしが怒鳴るとセリスが顔を出す。

「何？尋問だったら手伝おうか？」

ヘクターは首を振ると男を立ち上がらせる。思ったよりもキチンとした身なりだ。顔は夜盗でもやってそうな目付きの悪いカエル顔だが、真つ白なローブに白いベレー帽を着こなす姿は何とも似合っていない。男は額に汗を浮かべたままヘクターのロングソードを横目で見るが、わたしに口を開く。

「リジア・ファウラーだな？」

「……あんたは何者？」

問いかけに答えずにわたしが返すと男はにやりと笑う。

「サントリナ王室からの使いだ。あんた達を迎えにきた」

男が舐めるような上目遣いで言い終わると、長い沈黙が辺りを覆う。

『はあ？』

全員が息を合わせたように言うも、男は満足そうに手を擦り合わせるだけだ。

王室からの使いつて、こんな見るからに怪しい小男が？しかもあんな接近の仕方してきて、信用するとも思っているんだろうか。

「……紋章は本物だな」

男の帽子に付いた刺繍を見てアルフレートが呟く。ソードに絡み付く竜、確かにサントリナ王室の紋章だ。こんな城の目と鼻の先で身分詐称とは思えない。でもこいつを信用することはダッカー海峡を泳いで渡るより難しい。眉間の皺が深くなりすぎて固まってきた時、

「ホールドウィップ！」

セリスの呪文によって彼女の手から伸びた魔法のローブが、男の体をぐるりと巻いた。

「……とりあえずこれで案内して貰いましょう。変な動きしたら、分かってるわね」

彼女の蛇のような笑みを見ると男は、

「へへ、わかってまさあ、姐さん」

どう聞いても悪党としか思えない返事を返したのだった。

「確かに王城に向かつてるな」

男——ヴォイチエフと名乗った自称王室の者の後ろにぴったり付きながら歩くヘクターが呟いた。ということは本物の案内という可能性が高まってきたわけだ。

「……なんであんな怪しいことしたのよ」

わたしが聞くと男は「へっへ」と悪そうな笑みを浮かべる。

「自分の趣味でさあね」

それを聞き、自らの術で男を拘束しているため隣を歩くセリスが薄気味悪いものを見るかのように男に目をやった後、露骨に身を引いていた。

「でも何でわたしだったのよ」

ぶーたれながら腕を組むわたし。その疑問に答えたのはアントンだった。

「ぼーっとしてるからだろ」

「して……るかしら」

むっとするものの否定は出来ない。確かにあの時、早くも意識が街中に飛んでいた気がしないでもない。

「お得意の妄想の世界に入ってたんだろ」

アントンはそう言うのと馬鹿笑いを響かせた。全くアルフレートも余計なこと言ってくれたものだ。

ちよん、と肩を突かれる。ヘクターが前を指差している。

「見えてきたよ」

そう言われた通り、目の前に空色の城が見えてきた。形がどこことなくラグデイスのフロー神殿に似ている。エミール王子やサントリナ王室の者が住むセントサントリナ城だ。

大通りのアーケードを歩いていくと、また大きな通りにぶつかる。セントサントリナの大きな血管と言えそうな大通りがぶつかり合う箇所は流石に賑やかだ。馬車、人共に多い。

ぶつかった通りの向こうに見えるのがサントリナ城。手前に見える池はお堀ってやつだろうか。

お城の堀に掛かるアーチ状の橋の前に絢爛豪華な装いの集団が見える。その中心にいる人物にわたしははっとした。

「ブルーノだわ」

大きな耳がふわふわと揺れている。その可愛らしい様子とは対照的に持ち主の顔は険しい。相変わらず刺々しい雰囲気のようなのだ。

「これで疑いは晴れたんじゃないやあ？へっへ……」

ヴォイチェフが再び舐めるように顔で見てくる。確かに本物の案内さんだったらしいけど、どういう経緯でこんな奴がお城勤めになれたわけ？

セリスが一度眉を上げた後、術を解いてやる。ヴォイチェフは自由になった体の感触を確かめるように腕を振った。そしてブルーノの方へ軽く手を上げる。

「さ、参るとしましょうや。エミールの王子さんもお待ちですぜ」

「王子をさん付けってどうよ？」

フロロの言葉にも「へっへ」といやらしい笑みで返すだけのヴォイチェフは、そのままブルーノ達の集団の方へ歩いていく。わたし達もそれに続くことにした。

サントリナ王室の紋章が彫りこまれたラージシールドを携えた騎士の集団は見とれる程に美しい。ローラスじゃ見られない光景に圧倒される。全員がわたし達のお出迎えじゃないんだろうけど、なんか萎縮しちゃうな。

「よく来てくれた」

笑顔は見られないものの、ブルーノは近づくとわたし達にそう声を掛けて前に出てきた。そのままヘクターと握手する。

「急な申し出を快く受けてくれたこと、感謝する。エミール様は中でお待ちだ」

「いえ、こちらこそ招待ありがとうございます」

ヘクターの丁寧な返しにセリスが眉間にしわ寄せて間に割って入った。

「それより何なの、あの案内は！」

びしり、と指す先を見てセリス、そしてわたしもびっくりして固まってしまった。今の今までいたヴォイチエフがいない。

「あ、あれ？」

「案内……ヴォイチエフか。彼は部署が変わったばかりで不慣れな案内だったかもしれない。元から少し陰気な男なんだ。失礼をしたなら詫びよう」

ブルーノの淡々とした口調に「そういうレベルじゃないんだけど」とわたしは口籠った。しかし本人がいないとなると文句も続けにくい。

「元隠密部隊、とかかね……？」

門へと歩いていくブルーノを眺めながらフロロが呟いた。お客様の多い時期だからわたし達の係りになったのはあんなのだったのかしらね？

堀の上を横断するアーチ型の橋を歩きながらローザが弾んだ声を上げる。

「昔はやっぱり跳ね上げ橋だったりしたのかしらね」

「百年ぐらい昔になるんじゃないかな」

ヘクターが笑いながら答えた。

門を抜けた先にある光景は、予想はしていたとはいえやっぱり息を飲む。真っ青な芝生、咲き乱れる花と噴水、少しの乱れも許さないような刈り込みの植え込み。とにかく広い。夜ということもあって大昔に舞い戻ってしまった気分になる。

「はあ、お城、だわ」

当たり前の感想が口から漏れた。

「ラグデイスの神殿に似てるわね。同じ建築様式なのかしら」

サラがわたしと同じような感想を口にした。代々フロー神の神官でもある王家だから、あえて同じような建物にしてるのかな、と本殿を見ながら考えた。

前に行くブルーノにそのままついて行くと遠くの方から見覚えのある姿が駆けてくるのに気がつく。ぶんぶんと手を振りながら近づいてくる少年のふわふわとした金髪が、沈む寸前の日の光を反射している。

「王子！」

わたしが声を掛けるとにこにこの笑顔が返ってくる。司祭になった彼は纏うローブが少し豪華になっていた。

「お待ちしました！」

わたしの手を取り固い握手をした後、丁寧に全員と握手して回る。ヘクターの頭に乗ったフロロにもがんばって手を伸ばす姿は何だか可愛い。

「お招きありがとう、王子」

わたしが言うとエミール王子は小さく首を振った。

「こちらこそ皆さんに来てもらえて嬉しいです！異国の友達がこんなにたくさん出来たのだと、母に自慢出来ますね！」

「あの……その王妃様の誕生日だけど、あと十日も先なんでしょう？それまでどうしようか」

一番の気がかりは手っ取り早く聞いとくに限る。王子は笑顔のままわたしに答える。

「もちろんそれまで十分な御もてなしをしますよ！初めからそのつもりの日程です。遠いところを訪ねてきてくださった『お友達』を充分に楽しませたいですから！」

「そ、そう」

わたしはちらりとブルーノを見る。案の定、異種族のお付き人は冷

ややかな視線をわたし達に浴びせていた。

お城の中をエミール王子（＋ブルーノ）に案内されながらついて行く。

「プラティニ学園はもうすぐ夏休みに入ると聞いたんです。だからちょうど良いと思って！」

王子の言葉に「そこまで調べ済みなんだ」とちよつと驚く。そう、今週末から少しばかり学園も休みに入る。講義などは全て休みになるし購買や食堂もお休み。図書室等の施設は使えるけど教官達も少ない。でもわたし達のような五期生以降にはあまり関係ない話なんだけどね。皆、わたし達と同じように旅に出てるもの。ゆつくり、というかじろじろとお城の中を見回したいところだけど、興奮している王子の質問は終わることは無いようだ。

「皆さんあれからまた冒険してたんですか？あ、すぐにバレット氏のところに向かったんですか。彼はどんな人なんです？発明家なんでしょう？発明家なんてかつこいいですよ！ちよつと変わっている人みたいで」

「エミール様」

ブルーノが静かに嗜めると王子はきょとした顔の後、少し顔を赤らめた。

「ごめんなさい、皆さんお疲れですよ。すぐに部屋を案内させます。食事の準備もしますから、話はその時にしましょう」

王子が言い終わるとブルーノの手が動く。すると何処にいたのか廊下の隅から侍女と思われる人影がわらわらと現れた。思わず身構える。わたし達の全員に一人ずつ寄っていく動きは練習したんじゃないかと思う程素早い。

「ご案内いたします、リジア・ファウラー様」

わたしの横にぴったり付いた女性に言われ、わたしは顔を歪めた。「様って、やめてくださいよ」

「そういうわけにも参りません。さ、お部屋に。貴方様のお部屋は三階の南側に用意させていただきました」

「……一人一部屋なの!？」

「もちろんでございます」

え、え、え！なんか普段は「大部屋で全員寝泊りイヤだなー」とか言ってるけど、一人つてなると寂しいんですけど。せめて二人部屋とかが良いよ！

わたわたとするも涼しい顔で侍女はわたしの腕を引っ張って行く。
エミールが手を振っているのが見えた。

「おお……」

案内された部屋に感嘆の声を漏らす。侍女の女性はてきばきと明かりを灯していく。そこまで広い、というわけではないが、それでも軽くわたしの部屋の二倍はあるに違いない。調度品も細かい装飾がお高そう、なんて貧乏人丸出しの感想を持ってしまう。

「御用がある時はいつでもベルを鳴らしてください。私、ファムと申します」

「はあ」

本当に呼んだら夜中でもやってきそうで怖い。

「バルコニーがあるんですね」

部屋の奥、中央にあるガラス扉を指差しわたしは尋ねる。ファムさんはにっこり微笑んだ。

「狭いですが夜涼みくらいは出来ます。……夕食はもうすぐですので、用意が整いましたら一階に下りてきてください」

「ありがとうございます」

ぺこり、とお辞儀されて思わずお辞儀し返す。端から見れば変な光景だったに違いない。こういう扱いには慣れていないもんだから肩凝るなあ。

ファムさんの出て行った扉を肩を回しながら見ていると、ノックの

音が響く。

「どうぞ」

声掛けに開いた隙間から顔を覗かせたのはローザだった。

「これ、リジアの荷物よ」

わたしの鞆をフローラちゃんの中から持ってきてくれたようだ。わたしは慌てて受け取るとお礼を言う。

「ありがと、そっちの部屋もこんな感じ？」

「そうよー、ほぼ変わらないわね。なんで？」

わたしと違ってお金持ちのご子息、いやお嬢様であるローザには違和感は無いらしい。不思議そうに目を瞬かせる。

「なんか不安なのよね……、広くて。夜そっち行くかも」

「え？まあ、別にいいけど」

ローザはそう答えながらも「変な子」と呟いた。

「そんな事より、これ、王子様から頼まれたバレットさんの」

ローザが後ろから出したのは青い紙に包まれたバレットさんからの荷物。フローラちゃんに仕舞っておいた王妃様へのプレゼントだ。

「あたし達からのカップはお誕生日会で渡すとして、これは王子に渡しておいた方がいいでしょう？」

「え、でも夕食の席とかに王妃様っていないの？」

わたしは自分の家での夕飯の席を思い出し、自然に尋ねていた。ローザはゆっくり首を振る。

「さつき侍女の方に聞いたらご一緒しないそうよ。ま、一般家庭とは違うわけだから、そういうものなのかしらね」

へえ……でもお母さんなのに息子と一緒にご飯も食べないんだ。王室の暮らしなんて全然分らないけど、寂しいものなんだな。でも普段は一緒に食べてるけど、今回はわたし達がいるから別、って可能性もあるか。なんていつてもブルーノから冷たい目で見られるような客人なわけだし。

「じゃあ下に行きましょうか」

廊下を指差すローザにわたしは頷いた。

サマーバケーション

「みなさん遠慮せずにどうぞ。今日はサントリナの名物料理です。私の友人が来ると言ったら料理長が張り切ってくれたそうです」

笑顔で語るエミール王子。わたしは長いテーブルを前にやや無理やりに笑顔を返す。ホールのような広い広間で取る食事は味を感じるか不安だ。声が反響しそうな高い天井、巨木程ある柱が左右対称に並んでいる。なぜ食事の部屋に舞台があるんだろう？なんて庶民は思ってしまうわけで。

「ワインをくれ」

アルフレートが物怖じしないどころか図々しい注文をし、

「ビールくれ」

デビスが続く。わたしが「はあ？」という顔を見るとデビスは頬をかく。

「だって俺は成人済みだもんよ」

あ、そうだったか、と納得しかけたところでセリスがデビスの肩をばすん、と叩いた。

「そういう問題じゃなくてこういう場でビールってどうなのよ！」

「暑かったからさあ」

デビスはしらっと答える。

「おっさんみたいだな」

早速野菜を仕分けするフロロが呟いた。まったく、こんな美味しく調理された物も食べないなんて。わたしはフロロが寄せた冷製テリーヌと夏野菜の盛り合わせを横から頂いていく。こういうのもマナー違反なんだっけ。まあいいや。

速攻で騒がしくなったわたし達をエミール王子は嬉しそうに見ている。その王子の傍ら、やや下がった位置にブルーノ。今は無表情を貫いていて感情が読めない。これから暫く滞在する間、彼の嫌な顔を何度も拝見することになりそうだ。

「確かに少し蒸し暑いな」

手際よく運ばれてきたワインに口をつけながらアルフレートがぼやいた。ヘクターが頷いている。

「海からの風があつたかいんだよ。山も少ないし。俺も久々に戻ってきたから暑いんで驚いた」

隣国なのに気候を始め随分と違うものだな、とは思ふ。でもあまり不快感は無い。ローラスよりも空が明るくて高い気がするのだ。それが爽快感に繋がっているのかもしれない。

そんな事を考えているとエミール王子がわたし達を見回し、口を開く。

「皆さん泳ぎは大丈夫ですか？」

少し呆気にとられるわたし達に王子はくすくすと笑う。

「水泳大会があるわけではありませんよ？湖畔の別荘に皆さんを招待しようと思ひまして。城にずっといても退屈でしょうから」

「湖？別荘！？素敵ねー！」

ローザが手を叩く。確かに湖畔の別荘なんていかにも貴族っぽい。

「さほど広くはありませんが、その分家庭的で過ごしやすいですよ。もちろん管理は常に行っていますから綺麗です」

王子はそう言うがわたし達全員が泊まれるっていうことは、それに広いんだろうな。少なくともうちよりは。しかし王子が話し出すとやっぱり皆、聞く姿勢になるのが面白い。こういうのが王族のオーラなのかもしれない。

「私は母の誕生会の準備もあつて、ずっととは一緒にできないですけど城の者を何人が帯同させますから、不自由は無いと思います」

王子の台詞にはっとする。ローザも一緒だったようでおもむろに手荷物を取り出した。

「エミール王子、これ、頼まれていた物よ」

ローザがバレットさんからの荷物を手渡すと王子はぱっと目を見開く。

「エミールでいいですよ、……どうもありがとうございます」

そう言つて大事そうに箱の蓋をなでた。王子のその仕草に、中身は何なのかすごく気になります。が、それを見破ったかのように、「パーティー当日まで内緒です」

と言われてしまった。うーむ、残念。

「王子、俺達が頼まれたレオンは、その……」

デビスが言いにくそうに言葉を濁すと、エミール王子は深く頷いた。

「わかっています。彼の姿が見えないと気づいた時から、わかっていました。大丈夫、貴方が気にすることじゃありません。父には私から伝えておきます」

「お父さん……国王が頼んだの？」

わたしが聞き返すとエミール王子は少し間を空けた後、口を開く。

「父というよりその周り、ですね。禍根を残さない為にも一度、じっくり話し合いの場を設けるべきだと。父上があつさりとそれを認めたのも、こうなるとわかつていたのかもしれない。僕は……私は彼とゆっくり話してみたかったけれど」

禍根、か。余計な芽は早々に摘んでいく気満々だなと思うのはうがつた見方しすぎだろうか。

隣りからつんつんと脇腹を突かれる。セリスだ。

「……ねえ、水着とか持ってきた？」

「水着？持ってきてるわけじゃないじゃん、そんなの」

この会話に反応したのはアントンだった。

「持ってねーのかよ。つまんねえ奴らだな」

舌打ちにむっとするが、水着見たいよーの意味に受け取っていいのだろうか……。女子メンバーの目がやや冷めたものになる。

「ねえ王子、明日一日は準備に当てていい？町に出たいんだけど」

セリスが尋ねるとエミール王子はにこにこ頷く。

「もちろん！セントサントリナの町を皆さんに堪能して欲しいです」

王子のこの言葉で、とりあえずの予定は立ったようだ。

「なんだよ、早く避暑に行きたいと思ったのに。こういう堅苦しい場所は苦手だぜ、俺。準備にそんなに掛かるのか？」

ホールを出るなりデビスがぼやく。明日一日待機となったのが不満なようだ。

「女の子は色々時間が掛かるものなのよ」

セリスがつん、とそつぽを向いた。わたしも頷く。

「急だとちよつとねえ。楽しみではあるけど」

「別に一日じゃ腹はへこまないぞ」

その言葉にわたしは無神経男アルフレートを睨みつけた。そういう意味でも時間は欲しいところではあるけど、今は違うつていうのに「でも色々準備する時間も楽しいですよ〜」

前を歩くイルヴァが言うが返答に困る。イルヴァは一年中、心は海水浴場にいるようなのに。悪魔のコスプレだというハイレグカットの水着に矢印形の尻尾が揺れるイルヴァを見て思ってしまう。

「北の方にあるんだってね、湖は」

隣りを歩くヘクターに尋ねると頷かれる。

「子供の頃、何回か行ったことあるよ。確かに大きな別荘がいくつが見えたな」

「へえ、別荘地なんだ」

「うん、三日月みたいな形の湖でそのくぼみに。そっちの方には常に衛兵なんかが立ってて、普通の人間は入れないようになってたけど。子供は皆、反対側の岸边で遊んでたよ」

その光景を想像し、わたしが柱の隙間から見える表の空を何となく眺めていると、後ろからイリヤとヴェラの会話が聞こえてくる。

「淡水で泳ぐなんて怖いな……、海水より浮かないし。足がつつたりしないだろうか……」

「大丈夫ですよ、イリヤさん！私が泳ぎ教えますよ。私、泳ぎだけは得意なんです！」

「『だけ』ね、うん、『だけ』……」

その時、前を歩く侍女の足が止まった。釣られて全員の足が止まる。
「あら賑やかだこと」

曲がり角から現れた集団、その中心にいるのは家の母くらいの年代に見える女性。なんと豪華なドレスに見えるが色は真っ黒だ。その異様さに目を奪われる。周りにいるのは全て彼女の従者というところか。

「エミール殿下のご友人でございます、イザベラ様」

深く頭を下げていた侍女の女性が軽く首を戻して伝える。イザベラと呼ばれた女性は笑顔でわたし達を見回した。

「聞いていますよ、ラグデイスでのあなたたちの活躍もね。どうぞサントリナを楽しんでいらして」

ほほほ、と笑う女性に思わず頭を下げる。威圧感とも違うねっとりとしたオーラを持つ人だ。

女性——イザベラは満足そうに頷くとお供を引きつれ去っていく。しかし誰なのだろう。まさか王妃様じゃないわよね、と侍女の女性に尋ねようか迷う。ほんの少しエミール王子に似ている気もしたし、さまよった視線の先にどきりとする。広い廊下の後ろ、イザベラが振り向いてこちらを見ていたからだ。表情は凍ったように乱れが無いが、瞳の奥にあるものは冷ややかに違いない。わたしと視線が合った後も躊躇無く観察の目を向けて、満足したのか再び去っていった。

「別荘行きは『隔離』の意味が強そうだな」

アルフレートの言葉にわたしは頷く。何か問題がある、というよりも王室って常にこんな感じなのかもしれない。イリヤが大きく息を吐いた。

「ブルーノもさ、この前会った時に比べて感情が全く読めないんだよね」

「抵抗されちゃってるってこと？心に蓋するみたいに」

わたしは戸惑いつつ聞いてみる。イリヤが普段どの程度、感情を読み取っているのか知らないからだ。

「うーん……簡単に言つとそうなるかな。まあ、ああいう人間より長寿の上位種は精神のコントロールも上手いから、俺の力じゃ限界つてことかもね。俺だって常にアンテナ張ってるわけじゃないし。……ただブルーノは前回とあんまりに違うんでびっくりしたんだ」へえ、アルフレートが精霊を可視するように、常に読んでるわけじゃないんだ。探りたい時にスイッチを入れる感じなのかしら。そういえばラグデイスでの王子とレオンの対談の時、終わった後に疲れたように肩を回していたっけ。

「アルフレートも読みにくかったりする？そういうコントロールつて可能なの？精神統一！みたいに」

続けてしたわたしの質問にはイリヤは首を傾げる。

「いや、アルフレートは逆に情報量が多すぎて読めないな。常に二、三冊の辞典でも朗読されてる気分になる」

……ものすごく『らしい』かも。わたしは額に手を当て唸った。

「常に私の崇高な考えを皆に触れて欲しいものでね。隠すだなんてもつたいない」

澄ましたエルフの声に、

「ほんと突っ込みを強要する人だね、あんた」

フロロの深い溜息が続いた。

「いや、俺の能力を知っても警戒されないだけありがたいよ」

苦笑するイリヤに思う。きっと今までそういう経験が多かったのだろつ。わたし達全員が特に気にする様子を見せないのは、イリヤの人柄もあるけど『言いたいことは全く躊躇せず言う』という性格が集まっているからに違いない。

「イザベラ様は国王のお姉様です。つまりエミール殿下の伯母にあたるわけですね」

ファムさんはわたしに紅茶を手渡しながら淡々と語った。

「ありがとう、お酒入ってる？」

「数滴だけ。寝る前にはちょうど良いですよ。サントリナでは子供もよく飲みます」

それを聞いてわたしはファムさんに頷くと、少し甘めの紅茶を味わう。牛乳で淹れた濃厚な味は体の中からほっとする。

「国王の姉だとしても、ずっとこの城に住むものなの？」

普通は別に住居を構えて、なんて感じじゃなかるうか？とファムさんに尋ねる。ファムさんは箆笥からタオルを出す手を止めてこちらを向いた。

「イザベラ様は旦那様とご子を事故で亡くしておられます。それから王城に戻られたんです。馬の事故で……お可哀想に一人になってしまわれて」

「あー……」

わたしは彼女の黒いドレスを思い出し、呻く。あれは『喪』ということか。わたしの様子を見てファムさんは「まあ十年近く前のことです」と苦笑した。

本人にとつてはまだ終わっていない出来事なのだな、とあのわたし達を警戒する視線に思う。

「……じゃあ国王は三兄弟ってこと？ 弟さんもいたんだよね？ ごたごたがあったとかいう……」

そこまで言っただけでわたしは慌てて口を紡ぐ。確か暗殺未遂なんて穏やかじゃない話だったんだった。

ファムさんは驚いたように目を見開いた後、素早い動きで廊下への扉を開けて辺りを見回す。そして後ろ手に扉を閉めるとわたしの前

に戻ってきた。

「そのお話、どちらで？」

「えっと、ラグデイスでの例の会談の際に、レオンが」

ファムさんは表情が少ないので怒られるのかと思い、わたしはごによごによと答える。しかしファムさんは一人納得したように何度か頷いた。

「なるほど、ご帰還の際にブルーノ様の機嫌が悪かったわけが分かりました」

「……機嫌の良し悪しが分かるの？彼、常に機嫌悪そうだけど」

「そりゃあもう。私共の仕事はお世話もそうですけど、あの方達の観察が一番ですから」

肩を竦めるファムさんに面白い人だな、と思う。

「その様子ですと王弟が何をしたかもご存知のようですね？」

「レオンは『自らも弟に命を狙われた国王が私を捨てたんだ』って言うってたわよ。勿論、それは真実とは違ったわけだけど」

「レオン様はそんな事を言っておられたんですか。悲劇ですねえ」

ファムさんは再びうんうん、と頷いている。それを見てわたしは質問を続けた。

「さっきの言葉からすると王弟の事件の方がよっぽどタブーなのね。その、レオンの事よりも」

「そりゃあそうですよ。レオン様の事件はいわば王室は被害者なわけです。そりゃあ首謀者がいたんじゃないか、なんて黒い噂もありましたけど」

淡々と話すファムさんに「そんな話しして大丈夫か？」と思うが、興味から身を乗り出してしまう。

「王弟は王室の、しかも元は第二後継者でもある方です。その方が起こした事件といえばタブー中のタブーになって当然ですよ。……それに国王の『全てを話せ』という慈悲に対する回答が非常にマズイものだったので」

「何、何？」

「『神の啓示を頂いた結果なのだ』そう叫んだんです。ブルーノ様が表に出したくない話しはこれでしょうね」

わたしはきょとん、とした後、眉を寄せた。この国の王室とフロー神の関係がとても大切なものなのは、ラグデイスの事件で分かっていたけど、フローからの啓示がそんな不屈き者にもたらされるものだろうか。

わたしの表情を読んだのかファムさんは話しを続ける。

「……事件終結後、発表されたのは『王弟はサイヴァの悪魔に取入れ、狂死した』というものです。前半は真実だと思いますよ。私だって毎朝、毎晩とフロー神にお祈りする人間です。王弟にフローからの啓示など無かったことくらい分かります」

その言葉を頭の中で噛み砕いた後、わたしは喉を鳴らす。

「後半、……王弟は生きてるのね？」

少し間を置いてからファムさんは答える。

「生存、と同義語で語って良いものか……。王弟の身柄は今、サントリナより遥か東の孤島です」

「デープシー……！エメラルダ島ね！」

オカルティックな話しの展開に思わず声が大きくなったわたしを、ファムさん「しー！」と窘めた。

サントリナの遥か東にある孤島の存在はこの大陸に住む者なら誰でも知っている。

『言うこと聞かないとエメラルダ島に連れて行くぞ』『早く寝ないとデープシーから悪魔が来るぞ』なんて文句は誰でも言われたことがあるに違いない。

わたしの知識だけで語るなら、あそこは深海よりも過酷な環境であり、行き来する人間はいない、ということだ。人を幽閉するような施設があること自体、今初めて知った。

「……もちろんこれは正式な発表など無かったことですよ？でもこの使用人なら誰でも知ってることです」

ファムさんはそう言って肩を竦めた。

「酷い混乱だったんじゃない？ 当時は」

わたしの問いにファムさんは深い溜息と共に頷いた。 当時を思い出したのだろう。

「国王は無事でしたから、国民に混乱が伝染するまでにはなりませんでしたけどね。 大きな騒ぎにはなりましたが、よくある王室のゴシップの一つくらいな扱いだったんじゃないかと。 元々王弟は国王に比べて人気はあまり…… な方でしたし。 ただ問題は貴族達への説明と、あとはイザベラ様の混乱ですかね」

「イザベラが？」

わたしは紅茶を飲み干すと問い返す。

「ええ、先ほどの話しの事故の直後だったもので、関連性を疑ってしまつて、酷い取り乱しようでしたよ。 私がお城勤めに入つたばかりのことですから、よく覚えてます」

ふうん……、自分の夫と子供を殺したのも王弟の仕業と思つたつてところかしら。 本当のところはもう調べようがないけど、普通に考えたら関係なさそうだけどな。 だって王位を狙うなら姉自身を狙うならまだしも、姉の夫と子供なんて関係ないもの。

そこまで考えて何か引つかかったが、それを上手く掬い上げることが出来なかった。 なんだろう？

「サントリナの王位は長兄から優先なのね？」

「そうです。 現王室のストレリオス〓サントリナ家になってからは不思議と男児が途切れていないんです。 そこも威厳を高めてる要因ですね」

答えを聞きつつ『こんなことじゃないな』と思う。

「んー」

唸っているとドアがノックされる音が響く。 今の今までしていた会話の内容から二人ともびくりと肩が震えた。

ファムさんが固まっていたのは一瞬のことで、すぐにきびきびとした動作で扉に向かい、小さく開ける。 そしてわたしに訪問者を見せるように開け放った。

「セリス、どうしたの？」

わたしが立ち上がると綺麗な赤い髪を揺らしながらセリスが入ってきた。

「良かった、まだ寝てなかった。ちょっと頼みがあるんだけど」

「……変なことじゃなかったら」

「何よ、その警戒のしようは。……これなんだけど」

そう言っただけでセリスは腕に着けていた銀のバングルを外す。

「これ、発動体に出来ないかな？」

発動体とは魔法の使用の際に集中力の手助けをしたりする媒体のことだ。わたしの持っている短剣もそうで、マナの暴走をセーブする役目もある。だがセリスがわたしに頼むということは、今回は魔力の蓄えを求めているのではないだろうか。魔晶石程の効果は期待出来ないが、疲労時の飴玉くらいのものは出来るはずだ。

「いいけど、どうしたの？」

「うーん、なんかちよつと疲労が溜まってるのか、ね。集中力切らしてるみたいで」

肩を揉む仕草を見せる彼女に少し心配になる。弱ったところを見せるなんてらしくないかも。魔法はその性質故に精神状態がかなり重要になるが、それにしても気になるな。

「お茶お出ししましょうか？」

ファムさんが言うがセリスは首を振る。

「いえいえ、お気遣いありがとう。早めに寝るからいいわ」

そっぴい終わると部屋を出て行く。が、扉が閉まる直前に何かを思い出したようでもう一度顔を覗かせた。

「……明日、水着買いに行くの楽しみね。男を落とすデザインを教えてあげるわ」

「別にいいわよ！」

ニタニタと笑うセリスにクッションを投げつけるが、それは閉められた扉にボスン、と当たるだけだった。

「魔法ってそんなに集中しなくてはいけないんですか。大変なんで

すねえ」

興味深げなファムさんにわたしは頷いてみせる。

「まあデリケートなものには違いがないわね」

わたしは鞆を漁ると中から丸まった紙を引っ張り出した。

「よつと」

床に広げるとお手製の魔方陣がお披露目される。ファムさんが目を大きくした。

「これで発動体とやらが作れるんですか。へええ」

わたしは「そういうこと」と答えつつセリスのバングルを魔方陣の中央に置く。それを横目にファムさんが空になった紅茶のカップを手に扉に向かって行った。

「あ、ごめんね、追い出すみたいたいになっちゃった」

わたしが言うつとファムさんはくすくす笑う。

「私はお友達では無いですよ？」

そうだったのか、とわたしは頬をかいいた。やっぱりどう接していいのかわからないな。

扉を閉めながらファムさんが振り返る。

「そうそう、殿下の別荘にですが私が帯同することになりました。どうぞよろしく願います」

「ファムさんが？ やった！」

手を合わせるわたしに再び微笑みながら彼女の顔が消え、扉が閉まる。

気使うからお城の人が来るのはちよつと面倒だったけど、ファムさんなら仲良くなれそうじゃない、とわたしは鼻歌交じりに床に座り込んだ。

意識を集中させながら思う。個人的にもとっても気になる王室の話しだけど、今回は遊びに來ただけなんだから、あれこれ首突っ込むようなことは無いようにしなきゃ。

城を出れば日の光強いサントリナの町。カンカレと雰囲気こそ違うが、セントサントリナも夏らしい夏が訪れる町なのだ。水色や薄い青といった色の建物が多いのは王室カラーになぞっているのか、はたまた見た目に涼しいからなのか。

「あれ？人数これだけ？」

セリスが城の裏口前に集まったメンバーを見回し言った。集まったのはわたしとセリス、イルヴァ、ヴェラそしてフロロの五人。

「男連中は水着、適当に借りるからいいんだってさ。俺はサイズの無いからな」

フロロはそう言いつつも肩車に適した相手を探しているように目が泳いでいる。そして諦めたのか通りを歩きだした。

「何よ、それ。楽しみにしてるのこっただけみたいじゃない。気に食わないわね」

セリスは不満げに鼻を鳴らすとフロロに続き歩き出す。

ちなみにローザとサラも『水着になりたくないから』という正直な理由で城に残っている。

「際どいビキニパンツでも買って行って押し付けてやろうかしら」というセリスの言葉にわたしは首を振った。

「やめてよ……わたしが見たくないわよ」

「そう？」

アホな会話をしつつも町を見渡す。軒先、建物の間や道の隅など空いた場所があれば植木が置いてある。良い習慣だな、と思う。

「あ、その角を左のはずよ。商店が並んでる通りに出るそうだから。さつき来る前にヘクターが教えてくれたの」

わたしが指差すとセリスが振り返る。

「ヘクターってこの町出身なんでしょう？ついて来てくれれば良かったのに」

「み、水着選ぶのに男性は来づらいですよ。来られても困るし」
ヴェラの意見にわたしはしつこく頷く。誘っても絶対に断る人だけ
ど。

なんとなくそれらしい通りに着いたものの、入るべき店が分からない。
皆と顔を見合わせた後、わたしはイルヴァに尋ねる。

「また嗅覚でよさ気な店探せない？」

キョトン、とした顔の後イルヴァがくすくす笑いだした。

「水着は匂わないじゃないですか、リジア」

う……、まさかイルヴァに突っ込まれるとは。

仕方ないので町行く人に聞いてみることにする。ちょうどパン屋の
中から出てきた、ゆったりした歩みで話し掛けやすそうな老夫婦に
声を掛ける。

「水着を買えるようなお店？」

お上品そうな老婦人はわたしの質問を反復する。隣りにいる旦那さ
んらしき男性が頷きながら通りの向こうを指差した。

「ライアンの店はどうだろう？あそこは広いし、水遊びの道具から
キャンプ用品まで全部揃つとるよ」

「あらあなた、若いお嬢さん方だもの、レミーのお店の方が良いわ
よ」

それを聞き、とりあえず二つの店の場所を確認すると二人にお礼を
伝える。

「どういたしまして、イニエル湖に行くなら蜂に気をつけてね」

反射的に頷いてしまったが、老夫婦が去ってから思う。

「蜂が出るの？」

わたしの呟きにフロロが答える。

「蜂くらい出るだろ、水辺なんだし」

そうだけど……、わざわざ忠告するくらいだから気になってしまっ
のはわたしだけだろうか。

「早く行きましょう、リジア」

イルヴァの声に我に返り、既に歩き出している皆の元に急ぐ。教え

てもらった方向へと歩く間、何度かクーウェ二族の姿を見掛けてしまい、その度にどぎまぎしてしまった。のんきな顔で日に当たる彼らはあのクーウェ二族とは無関係そうだったけれど。

「ここじゃない？」

セリスが一軒の看板を指差す。確かに教えられた『精霊の庭』の文字。レミーのお店とやらだ。

「あら、あんたも来るの？」

当然のように店に入ろうとするフロロに尋ねると、

「一人で待ってる、っていうのかよ」

とふて腐れる。それもそうか、と思っていると余計な一言が続く。

「兄ちゃんが好きそうなやつ選んでやるよ、リジア」

「結構よ！」

「……誰とは言っていないのに」

わたしに叩かれた頭を擦りながらフロロは恨めしげにわたしを見上げた。

「あ、いっぱいあるじゃない」

店の奥をセリスが指差した時、右手にあるカウンターの奥から店員らしき人影が出てきた。

「いらつしやい」

そう言つてにつこり笑うのは随分背の高い女性。大きく胸元の開いたシャツに太ももが露になったジーンズという出で立ちだが、日に焼けた肌と引き締まった体がいやらしさを感じさせない人だ。

「水着買いに来たの？」

早速、ハンガーに吊るされた水着を漁るイルヴァを見て女性が尋ねてくる。

「今いる全員分、揃えなきゃいけないくて。明日から北の湖に行くんです」

わたしが答えると「あら、いいわね」と目を大きくした。

「じゃあ五人分ってことね？そんなに買ってくれるなら半額にしちやう」

「ほんと！？いいの？」

水着数枚を握り締めたセリスが振り返る。女性、レミーはにこりと微笑んだ。

「実は水着を買うにはシーズン少し過ぎちゃってるから。皆、暑くなる前に揃えちゃう人が多いからね」

この一言で全員の目が一層に輝く。現金な奴らで申し訳ない。

「ヴェラはこれにすれば？」

セリスが掲げるのは紺色に蛍光色のストライプが一本入ったワンピース型の水着。その、すごく早く泳げそうなデザインですね、と言いたくなる。多分、本格的なスポーツ用なんじゃないだろうか。

「わ、私にだって可愛い的選擇ばせてくださいよ、こういう時ぐらい「あらー意外、そういう意識あつたんだ？誰狙ってるのよ」

にやにやと笑うセリスの顔は本当に楽しそうだ。こういう時が一番輝く人なのだな、と改めて思う。怒り出すかと思いきや、ヴェラはふっと苦笑する。

「別に特定の人に見せたいなんて願望は無いですけど、私にだって青春を満喫したいという気持ちぐらいあるんですよ……」

……何となく言いたいことは分かる。

「リジアはこれにしろよ」

フロロが引つ張り出してきた水着を見て、わたしは一瞬にして頭が噴火する。

「な、なによそれ！？ほとんど紐じゃない！」

隠すべきところに当たる部分の布地が極端に小さい。しかも光沢のあるゴールドってどうなのよ。

「冗談に決まってるんだろ、リジアの幼児体型が目立っただけだもんないけけ、と笑うフロロにかっかしつつも、目に付いた水着をハンガーごと出してみる。

「これどうかなー？可愛くない？」

赤いギンガムチェックに要所要所に大きなリボンが付いたデザイン。わたしが持つそれを見て、皆微妙な顔になる。あ、あれ？かわいく

ない？

「水着自体は可愛いと思うけど……それ、リジアが着たら本当に子供みたいになるわよ？」

セリスの言葉にわたしは撃沈する。イルヴァみたいな豊満ボディは持っていないから、端から水着姿で悩殺！なんて考えてないけど、子供に見える、は避けなければ。

「なんでフロロが二枚も買うのよ」

店を出たわたしはフロロの持つ手提げ袋を指して聞いてみる。

「安かったし。俺、おしゃれさんだから」

なんかイラっとする答えだなあ。でも確かにフロロの選んだ水着、子供用だから可愛いんだよね。両方トランクスタイルの青地に蟹さん柄と、緑にてんとう虫柄。

イルヴァが大量に買ったし、結局六割引で買えることになったのだ。予定外の出費だったけど安く済んで良かった。

用も済んだし帰ろうか、という雰囲気になってすぐ、前にある店から見知った顔がぞろぞろと出てくる。両手に荷物、という姿のデИБスとヘクター、イリヤにアントンだ。

「あれー、何やってんの？」

わたしは声を掛けた。四人がこちらに振り返る。

「虫除けのお香とか浮き輪とか買いに来たんだ。大抵の物は向こうにあるって言われたんだけど」

そう言いながら抱えていた荷物の中身を見せてくれるヘクターに、早速フロロがよじ登る。

四人が出てきた店を覗くと看板に『ライアンズ バー』の文字。老夫婦が言っていたもう一つの店だったらしい。バー？と不思議に思うが、中では左右にピンと跳ねた髭の立派なおっさんがカウンターでグラスを磨いている。しかし並ぶ商品を見るにキャンプ用品の店で間違いないようだ。……なかなか個性的な雰囲気ではあ

る。

「セリスは黒、ヴェラは青、イルヴァはよくわかんないの、リジアはピンクの水着だよ」

余計なことを発信するフロロにわたしは慌てた。イリヤがぶほとむせる。

「うひょー、楽しみだな」

デビスのわざとらしい茶化しの声にセリスが彼の背中を叩いた。

「思ってたさそう！」

そう言い合いながら歩き出す二人はお似合い……を通り越して熟年夫婦みたいだな、と失礼なことを考えてしまった。

「リジアはピンクの水着だよ」

「う、うん、二回言わなくていいよ」

小声で答えるヘクターの頭の上で、フロロは満足そうに頷いている。何がしたいんだ、全く。

「あ、そうだ、その虫除けて蜂用なの？」

わたしが聞くとヘクターは少し不思議そうに答える。

「蜂にも効くって言われたよ。でも巣が側に無い限り、気になるのは蚊とかの方かな。なんで？」

あれ、ヘクターでも知らないのかな。わたしが老夫婦に言われた忠告だという説明をすると、

「へえ、なんか蜂に襲われるような事故でも湖の方であつたのかもね」

と首を傾げた。なんだ、てっきり蜂の多い所なのかと思っていたのに。

「イリヤはイルヴァの水着、楽しみですか？」

後ろでイルヴァが可愛い声で尋ねているが、

「うーん、まあ、でもイルヴァの水着は……その、想像はつくよね。というか今も水着みたいなもんだよね」

イリヤの大変困惑した声が続いた。

「っーかサラは？」

アントンがわたし達を見回す。わたしとセリスは思わず顔を見合わせた。アントンの隣りを歩くヴェラがおずおずと答える。

「サラさんは、その『泳げないからいい』って言ってました」

彼女にしてはとても氣遣いを見せた答えに、

「なんだよ、あいつ本当に付き合い悪りい奴だよな」

とアントンは舌打ちした。

城に戻ったわたし達を出迎えたのはブルーノだった。裏口からの通路の先、芝生の上に立つ姿はその威圧感とは対照的になぜか儚げに見えた。

「国王がお会いするそうだ」

「え」

思わず戸惑いの声が出る。会ってこれからだろうか。

「今すぐ？」

セリスが尋ねるとブルーノは深く頷く。

「短い空き時間があるそうだ。他の仲間は謁見の間の前にいる」
そう言ってさっさと歩き始めるブルーノにわたし達は顔を見合わせ
た後、ついて行く。王様ってそんなに忙しいのかな。分刻みの生活
なんだろうか。

「よく考えてみりゃラグデイスの一件なんて、王様自ら褒めてくれ
てもいい話だよな」

デビスの軽い口調に焦るが、ブルーノが咎めてくることはなかつ
た。わたし達に慣れた、ということかもしれない。

城の中に入り、前に行くブルーノにそのままついて行くこと暫し、
二階建ての建物程ありそうな高さの扉が見えてきた。その光景に圧
倒される暇もなく見知った仲間が駆けてくる。

「おかえりー！ちよつと聞いた？」

興奮気味のローザに落ち着くよう手で示すと頷く。

「今聞いてきた。いきなりだから焦ったわよ」

「そうよねえ、あたし達もさっき急に言われたのよお。誕生日会ま
で会うことないと思ってたから慌てちゃったわあ」

オカマ全開の口調に脇にいる兵士の目が泳ぐ。王子の友達って聞い
てたのに、というところかも。

城に残っていた他のメンバー、サラとアルフレートは普段の様子と

変わらない。アルフレートに至っては黒いオーラを撒き散らす不機嫌顔だ。昼寝の最中を起こされたのかもしれない。

どこからやって来たのか、すうっと現れた侍女がブルーノに小声で何か伝える。

「開ける」

短い命令に兵士二人が両開きの扉を開けていく。大掛かりな様子に緊張してきてしまった。

「はあ……」

中の光景にローザが感嘆の声を漏らす。広い広い謁見の間は明かりが届ききらないのか薄暗い。でもそれが重厚な装いをも少し出しているようにも感じられた。奥の階段の上に王座が並んでいる。右が国王で左が王妃に違いない。国王の横に立つエミール王子がこちらを見てにこにここと微笑んでいる。

「王冠かぶってねーじゃん」

アントンのお馬鹿な感想にセリスが彼の足を踏みつけた。

ブルーノに手で促されるままに前に進んでいくと国王夫妻の様子がよく見えてくる。二人とも見事な金髪だ。エミール王子もレオンも王妃似なのかもしれない。国王は意思の強いそうな目元に太い顎、とても男性的な人だ。

自然と観察するように目が動き、王妃を見た瞬間、息を飲む。美しい、というものがあるが若い。陳腐な言葉で申し訳ないがとてもエミール王子程の子供がいるようには見えないのだ。微笑む顔は王子によく似ている。座る体勢でも窺えるすらりとした全身に「王子って大人になったらかっこいいだろうな」なんて考えてしまった。

王達がいる場の下、段の前でわたし達が横並びになるとブルーノは国王に向かって頭を下げる。

「ラグデイスで大変な働きを見せた冒険者達です」

ブルーノがそう伝えると国王は軽く頷き、立ち上がった。そのままゆっくりと降りてくる姿に心臓がばくばくと音を立てる。予想していた展開としてはこのまま座る王様に一言一言貰うだけだと思って

いたからだ。

一番端にいるデイスから順に握手し、何か短く話している。国王が終わると王妃と挨拶する。段々と近づく自分の番に緊張で汗に汗を掻くのと同時に「イルヴァが変なこと言いませんように」と祈っていた。

「リジア・ファウラー様です」

国王の横にいる男性がわたしを手で示しながら国王に伝える。差し出された手を握ると温かった。

「ラグデイスでの騒乱、それを鎮めた働きは聞いている。……感謝している」

「もったいないお言葉です」

そう答えながら、わたしは王のまっすぐな目を見据えてしまった。感謝とは王子のことなのか、レオンのことなのか、瞳を見る限り後者の色合いが濃いように感じてしまった。

「ソーサラーだとお聞きした」

「まだ見習いですが……」

「厳しい学問の道だね。頑張りなさい」

わたしは深く頭を下げる。これで「よっしゃがんばるぜ！」なんてやる気がモリモリ、とはいかないが重い言葉を受け取れた気分だ。溜息をつく間も無いまま、王妃が目の前に現れる。やっぱり近くで見ても綺麗な人だ。少し赤く染まった頬が少女のようだ。

「魔法使いさんなのね」

出てきた台詞も少女そのもののものに少し面食らったが、国王に返した言葉をそのまま口にする。

「羨ましいわ！私も魔法使いになりたいかったのよ。空を飛んだり、良いわね」

「簡単な魔法でしたらお教え出来ます」

わたしが言うと王妃は嬉しそうに笑った。とても貴族様には見えないう無邪気さだ。

「ウェリスペルトからいらしたのよね？」

「そうです」

「ローラスは良いところだと聞くわ。私も一度行ってみたいの」
行ったことないのか、と驚くと共に「ウェリスペルトの名産品持つて来ました」なんて言いそうになる。これはお誕生日会まで出さない方がいいよね。

謁見の間を出ると誰ともなく大きな溜息が重なる。

「肩凝るな、こういうのは」

デビスがやれやれ、といったように首を回す。その様子を見ながらヴェラが低い声でばやし始める。

「でも皆さん、なんだかんだできちんと応対してましたよね……。
私緊張で全然駄目でした……」

失神寸前の顔で「はいー」しか返してなかったもんな。でも普段からそれに近いような、というのは黙っていよう。

周りの侍女に促されることで歩き出した時だった。

「どうしたのよ！」

サラの声に振り返るとイリヤが膝をついている。顔色も悪いし何かを振り払うように頭を振る姿に背中がひやりと冷えた。

「ちよつと……、ごめん何でもない」

「何でも無いってなんだよ。貧血か？」

イリヤの返答にアントンが舌打ちする。そのやり取りの横でアルフレートがすました顔のまま言い放つ。

「部屋に戻るぞ」

ここでは言いにくい『何か』があると踏んだのだろう。アルフレートはイリヤを起こしながら声を掛ける。

「お兄さん、あんたここじゃ力使わん方がいい。あんた純情過ぎるんだよ、その力持つ割には」

呟きに近い声だったが、イリヤはそれに何度も頷いてみせた。

「で、何があつたの？」

セリスが腕を突くとイリヤはぼーとした顔のまま口を開く。

「真っ黒い、何かが急に襲いかかってきて……食われるかと思ったんだ」

イリヤの部屋に集まつた全員が床に円を作つて座り込み、彼の話を聞いている。なぜ床に座り込んでいるのかと言われれば、落ち着くから、というのと何となく隠すべき話だと感じているからだろう。

「黒い何かって……やっぱり精神の話しよね？」

わたしが聞くとイリヤは一瞬の間の後、頷く。

「国王と握手した時に『あれ？』って思つたんだ。彼は俺らの事、あんまり来て欲しくなかつたと思つてる」

「……そんな気配、微塵も出してなかつたな」

ヘクターの呟きはイリヤを信用していない、というより国王の態度に感嘆したようだった。

「余計な動きするなよ、つてところか」

アルフレートは急に生き生きとしたようだ。ブルーノの事といい、知恵比べの気配にやる気が出てきたのだろうか。

「そんな感じかもな。……まあとにかくそういう雰囲気があつたんで、広間を出る瞬間に探つてみたんだ」

イリヤは「そしたら」と暗い顔で続ける。

「感じたことのない真っ黒い何かに、頭から丸呑みされるような感覚がして意識が遠くなつたんだ。多分ショックからだと思うけど」話を聞いて皆、何ともいえない顔で固まる。わたし自身、少しでも動けばイリヤの言う黒いものに飲み込まれそうな気がしてしまつて動けなくなつていた。

「で、その危ない思考してんのは誰なんだ？ やっぱり国王なのか？ デイビスが眉を寄せながら尋ねると、イリヤは首を振る。

「分からない。あの場にいた……国王かもしれないしそうじゃないかもしれない。王妃かもしれないしブルーノかもしれない。エミー

ル王子かもしれないし」

「それはちよつと……無いんじゃない？」

わたしは少し声が大きくなつてしまつた自分に恥ずかしさは感じつつ、イリヤの目を見る。

「うん、無いと思うよ。でもそれくらい誰だか分からなかつたつてこと。それ以外の大臣とか、そういう人もあの場にはいっぱいいたし」

なるほど……。エミール王子とはラグデイスから何度も顔を合わせてるから、イリヤが王子の内面を判断出来ていなかったつて線は低そうだけど、ブルーノなら分らないかも。こつちに来て丸つきり雰囲気が変わつてたとも言つていたし、何より彼はわたし達に負い目がある。それに『真つ黒な何か』つて物を精神的な攻撃と見るなら、そういうものに長けていそうなのが彼になるわけだ。

夕飯の後、わたしはベッドに横になりながらファムさんに尋ねる。

「どう思う？」

「今の話を纏めると、要するにあなた方を『何故か敵対視』している人物は誰か、つてことですよね？」

予想通り頭の回転の速い彼女に嬉しくなりつつわたしは頷く。ファムさんは暫く眉を寄せていたが、口を開く。

「私もエミール殿下はありえないと思います。嘘をつくのさえ、下手な方ですもの」

「他はあり得る、つてこと？」

起き上がるわたしに紅茶を手渡しながらファムさんは首を傾げる。

「王妃もない、と言いたいですけどね。でもイリヤさんとは初対面なわけですから、彼のように内面を覗ける力が無い私達は『表の顔』しか見てないのかもしれないですし。まあ、エミール殿下と王妃様は似ていらっやいますよ」

わたしの受けた印象と同じということか。となると残りは……

・ブルーノが国王ということか。もちろん第三者もあり得るのは忘れてないけども。

わたしの表情を見たのかファムさんは深く息を吐く。

「もし国王が、という事態なら私もあまり深追いはお勧め出来ませんね」

「どういうこと?」

侍女としては当然の台詞だが、何とも彼女らしくない言葉にわたしは少し驚いていた。

「この国全体が大きく揺れ動く事態に成りかねない、と思うからですよ」

「えっと、それどういふ……」

いきなり規模のでかい話しになり、わたしは戸惑ってしまふ。ファムさんは昨日と同じように廊下の様子を確かめに行き、扉をしつかりと閉めて戻ってきた。

「考えてもみて下さい。もし国王だった場合、何故リジア様達を敵対視するのでしょうか？」

「……明らかにラグデイスでの件が関わってくるわね」

とは言っても「感謝する」と言った国王の瞳は本心だったと思う。レオンの事は感謝してるけど、これ以上は何もするなって言いたいのかしら。でもそれでイリヤがショックで倒れるような感情をぶつけてくるのは納得いかないけど。そういう感情って何だろう。憎悪？わたしの顔をじっと見るファムさんに、ふと思いついた事があった。「そういえばレオンが城から消えた事件は『黒幕がいたんじゃないか』って噂があるって言うてたわよね」

「とりあえず根も葉もない噂、と言っておきます」

「根拠は無いってことね」

わたしは指で頬を叩きながら唸る。

もしその『黒幕』とやらが国王だとしたら。これはラグデイスでの会談の時にブルーノに全否定されたけど。もし、そうだと仮定するならば、理由は一先ず置いておくとしてもレオンを故意に連れ去られるよう手を回したのが王ということだ。その事実を突き止められては困るのでわたし達を敬遠したい、ってところかな。

「確かに黒幕が王自身、っていうのは洒落にならない事態かもねー。だってレオンを連れ去ったのはサイヴァ教団だったんだし……」

わたしはそこまで言うてからファムさんの言いたい事が漸く飲み込める。

「さ、サイヴァ、邪神！……王弟！こ、国王！」

あわわ、とするわたしの口をファムさんは「しー！」と押さえつけた。彼女の白い手の隙間からわたしの「ふがあ」という間抜けな声が漏れる。

「今言った話しの起点がそもそも仮定であることをお忘れなく」

「そ、そうだったわね」

わたしは落ち着くように紅茶をがぶ飲みする。いつの間にか温くなっていたそれは乾いた喉を潤すには調度いい。

これは仮定、仮定の話しよ。と自分で納得させる。王弟の事件を聞いた時、真っ先に思ったのが『神託とはフローからではなく、混沌を推奨するサイヴァからだっただけでは？』というものだ。これはわたしだけの感想ではなく、事件の概要を知った——国民もそういう思いを持った人が多かったんじゃないだろうか。

これはローザちゃんから前に聞いた話したが、特定の神を信仰する人間は邪神信仰者に対して嫌悪はもちろんだが『悪魔に魅入られた哀れな者』という見方が多いのだという。言ってみれば被害者、という意味合いが強いのだ。こういう雰囲気は土台にあるからこそ、王弟の事件は国民に知れ渡った後、そのまま風化していったんじゃないだろうか。

「でも現国王までサイヴァ教団と関わりを持ってた、なんてことがもしあったら……」

思わず口に出していた疑問にファムさんはゆっくり頷く。そして今までよりも更に小声になって話し出す。

「混乱、どこかの騒ぎでは済まないでしょうね。それに今の気風では現王室を引きずり降ろすだけで終わらずに王制自体の瓦解じゃないでしょうか」

暫し言葉を失うと同時に、眠気眼で聞いていたアルフレートの話しを思い出していた。

「その……ファムさんはどう思うの？サントリナの間人として」

「私ですか？私は困りますよ、もちろん。職場を失うわけですし」
そっちかよ、と思いきや彼女は言葉を続ける。

「サントリナの一国民としても困りますね。私は生まれもサントリナです。歴史ある王家がいなくなる事への疑問、罪悪感、虚無感、なんてものも当然ありますし。……でもね、歴史を作るのはやっぱり人間なんです。国民が選ぶ道ならそれもまた歴史のページなんじゃないでしょうか」

無表情にも見える顔で淡々と語る彼女はやっぱりわたしの好きなタイプの人間だな、と思う。

「……と語ってしまいましたが、あくまでも例え話ですから」

「そ、そうよね！例え話だし、王様のことだって本当には疑ってもないしー！」

おほほー！と乾いた笑いで暗い雰囲気吹き飛ばしてみたものの、今までにない奇妙なプレッシャーで胸が苦しくなってきた。沈黙が続いたからか、

「お休みになりますか？」

ファムさんがトレーに茶器を片付け始める。

「あ、ちよつとセリスに頼まれてたやつ渡してからにするわ。ファムさんはもう休んでいいよ」

「私はまだまだ仕事が残っていますから」

そうか、彼女の仕事はわたしの身の回りのお世話だけじゃないものね。見当違いな気遣いばかりしちゃうな、と思ったのだがテーブルを片付けるファムさんは少し嬉しそうに見えた。

セリスの部屋に向かうことにしたわたしはファムさんと一緒に部屋を出る。

「セリスの部屋ってこっちでいいんだよね？」

ばんばん、と等間隔に明かりの灯る廊下をわたしは指差す。

「セリス・ミユラー様ですよ？その曲がり角の一個目の部屋です」

お礼を言って歩き出そうとした時だった。ローラスよりも大きめの窓に目移ってしまう。表の景色は真つ暗な中に隣りの建物の窓からの明かりが浮き上がっていて、その一つ一つが絵画の額縁のように見えた。

その中の一つ、同じ階だと思われる高さにいる人物に目が留まる。

王妃だ。お腹を抱えて笑う姿は本当に気取りが無い。談笑の相手は影になって見えないけど、侍女相手でもあの王妃様なら屈託なく笑いそうだな、と思う。

「本当、王妃様って普通の人みたいだね」

ちよつと失礼な言い方かな？ と思いながら聞くがファムさんは頷いた。

「誰に対しても飾らない方ですよ」

そう答えながら立ち去ろうとするファムさんに「おやすみ」と声を掛け、わたしはセリスの部屋の扉をノックした。

少しの間を置いてから扉が開き、ぱつと顔を出したのはセリス本人だ。わたしは預かっていた銀のバングルを顔の前に出した。

「はい、これ。出来たよー」

「ありがとー！入って」

促されるまま部屋に入ったわたしはセリスの姿を見て目が丸くなる。

「すごい格好ね」

「だって暑いんだもん」

太ももが丸見えの短パンに今日買ってきた水着のビキニ、という格好でセリスは手で顔を扇いだ。女同士でも長い足に見とれてしまういや、自分が短いからとかじゃないからね。

ベッドに座るセリスに釣られて中に入ると、テーブルに乗った小瓶が目に入った。

「これ何？」

「サラが作ったポーションだって。滋養強壮とか言ってたけど、怖いから飲んでない」

自分の不調を心配してくれてるんだから飲みなさいよ、と思う。

「サラ、どうするんだろうね」

自然と口にしていたわたしの言葉に、セリスはバングルを腕に通しながら眉間に皺を寄せる。

「なるようになるしかないんじゃない？人を変えることなんて出来ないもん。嫌だと思うなら自分が変わるしかないでしょ」

「……その『変わる』はサラがアントンを好きになるって意味？それともサラがパーティーを抜けるって意味？」

わたしが言つとセリスの手が止まる。そしてわたしの顔を見てにやつと笑った。

「どっちが良いと思う？」

「そんなのセリス達が判断しなさいよ。外野が言う方が無粋じゃない」

わたしはそう答えながらテーブルから椅子を引き出し、座り込む。

セリスは仰向けに寝転がってしばらく「むー」などと唸っていたが、

「私達さあ」

と話し出した。

「こんな時期に揉めてる時点で分かるだろうけど、続かないだろうね」

『私達』とはデビス達パーティーの事か。セリスのあくまでほんやりとした口調にわたしは「そんなことないよ」と口籠る。

「正直、ちよつと期待してたのよ、今回の旅。あんた達見てたら参考になったりするのかなって」

「参考にはならないでしょうねえ」

「そうね」

セリスの即答にも怒る気にはなれない。だって人間じゃないの二人にオカマにイルヴァだもん。参考にする要素ないじゃない。

セリスはむくりと起き上がった。

「実は今回が初めてじゃないんだ。前からアントンがサラに切れたり、イリヤがアントンに切れたり、アントンがヴェラに切れたり、つてアントン切れてばっかね」

セリスは自分で「あはは！」と笑う。そしてふう、と息をついた。
「私さあ、結構我関せずを貫ける方だし、人見でてイライラすることあんまり無いんだけど、やっぱり仲間が揉めてるのを見ると嫌な気分になるじゃない」

その言葉にいつも天真爛漫なセリスが浮かぶ。人をからかうのが好きでムカつくことも多いけど、確かにセリス自身が怒ってるのってあんまり見ないな。でも今の彼女の言葉で気がついたことがある。きつと、ちっちゃい傷がいつぱいある状態なんだ。不調もそこからきてるんじゃないだろうか。

廊下を城の働き手らしき人の足音と声が通り過ぎていく。自然と二人ともそちらに注目し、少しの間無言になった。

「……ねえ、今日この部屋で寝ていい？」

わたしが尋ねるとセリスが目を大きく見開いた。

「いいけど、何、もしかして怖いのか？」

「うん、部屋が広すぎるんだもの」

わたしがそう答えると「しょうがないわねー」と言いながらセリスはけたけたと笑った。

「デビスってき、見てるようで見てないのよね」

広いベッドの上でごろごろとしながらセリスは言った。わたしは枕を整えながら頷く。

「何か分かるわね、それ。でも普段は頼りになるんだから良いじゃない。うちのイルヴァなんてメンバーの事、何も見てないんじゃないかな」

イルヴァと比べるのもどうかと思うが、セリスはとりあえず、といった様子で「そうねえ」と答える。

「でもサラの事だって全然気づいてないと思うわよ、デビス。サラはサラで頭固いつていうか……、メンバーの事『分かり合えない』って思い込んでると思う」

「セリスとは仲良さそうだけど」

わたしは寝る体勢が整うとセリスの横にごろりと転がった。

「私とは魔術師クラスで一緒だったから『同士』って意識が強いみたい。他は駄目ね。ほら、リジアにだってローザちゃんにだって懐いてるのに、他は駄目っぽいじゃない」

確かに言われてみたら、他のメンバーとは話してるの見てないなあ。人見知りとはちょっと違うから気づかなかった。

「アントンはデビスの真逆ね。あいつ、あんなので以外と繊細だから、サラのそういう所も気づいてるのよ。それで余計にイライラするんだと思う」

「あー、なるほど……」

わたしはそこでアルフレートが言っていたサラとアントンの『同属嫌悪』という話を思い出す。それをセリスに言うとお腹を抱えて笑い出した。

「分かる！ すごい分かるわ、それ！ さすがアルフレートね。エルフさんはやっぱり鋭いわ」

セリスはひとしきり笑い終わると涙を拭いながら寝返りを打つ。セリスの赤い髪がわたしの金髪に絡んでくる様子が綺麗だな、と思っ
てしまった。

「他はねえ、イリヤはイリヤで心が読めるくせに鈍感じゃない？ ヴェラは、まあ、ヴェラだし」

セリスのこの二人の評価は否定出来ない。末っ子二人、という雰囲気
気が濃いのがこの二人だ。

木々のざわつく音に顔を上げた。窓から見える月が流れる雲を映し
出している。風でカーテンが揺れている。この涼しい風のお陰で何
とか眠れそうだ。

「こつちの話しばつかりじゃない。リジア達はどんなの？」

セリスが顔を覗き込んできた。どう、って言われても答えにくいな。
仲が良いのか悪いのか、言い争いは多いけど深刻な喧嘩は無いし……

……。パーティーへの依存度が低い『自由人』が多いのか？

わたしは自分の仲間の顔を思い出しながら考える。

「ローザちゃん程みんなに献身的な人もいないから、ローザちゃんをうざいなんて思おうもんならバチ当たりそうだし……。イルヴアは『こういう子だから』で怒る気になれないんだよねー」

「その二人、何気に仲良いわよね」

そうなのだ。人のお世話に生きがいを感じるローザと人にお世話になること前提で生きてるイルヴア。気が合うかどうかは別として、ぴったりくる組み合わせではある。

「あと……、アルフレートとフロロは何だかんだ言って、こっちがお世話になってる感が強いからねえ……。べつたりもしてないけど最後まで一緒にいてくれそうな感じがするのもこの二人かな」

わたしが答え終わるとセリスの「ふうん」という声を最後に部屋が無言に包まれる。暫く自分の爪を見ていたセリスが、がばっと上半身を起こした。

「終わり？ 肝心な人の話し出てないじゃない。あんたもしつこく逃げ回るわね」

「に、逃げ……？ ヘクターの事だったら、ふ、不満なんてあるわけないじゃない。あんなにいい人なのに」

わたしはそう返しながら身を引く。そこへセリスが手揉みしながら寄って来た。

「『仲間』としては、ね。うん、それはもう分かったから、次のステップの話しましょうか」

にこにこ顔を寄せてくるセリスにうるたえるわたし。端から見るとどう見えるんだらうか。黙るわたしに痺れを切らしたのかセリスは口を尖らせる。

「もう！ 言いたくないなら私が思ったこと言うわ。私の予想だとヘクターはね、気付いてるわよ」

「気、付いてる、って何に？」

思わず食いつくわたしにセリスはにやりっと笑った。

「……内緒、教えてあげない」

いきなり発動するセリスのサディスティックさにぐっと詰まる。ムカムカとしつつも気になってしょうがない。セリスが笑う振動でベッドが揺れる。それが収まるとぽつりと呟きが漏れた。

「……アントンの事が関係してるのかしらね」

「え？」

わたしは聞き返すがセリスは答えない。カーテンを大きく揺らす風が首筋を冷やす。

「寝よつか」

セリスはそう言ってタオルケットに包まる。正直、もう一度問い返したいが、こっちもあまり突っ込まれたくない。わたしは頷いてから枕にぼすん、と顔を押し付けた。

水面に揺れる

揺れる馬車の中、ローザの小言が始まった。

「いくら暑くても、準備運動無しに水に入らないでね？ああそう、遊んだ後にもマッサージした方が良いわよ。得に足、ふくらはぎなんかね。あと気付かない内に意外と水分失ってるからマメに飲み物とってね」

微妙に言い返したい気分になるが、とりあえず神妙な顔で頷いておく。

「あ、もう着くみたいですよー。湖が見えてきました」

「暴れるな、イルヴァ」

子供のように窓から身を乗り出し、外を指差しながら足をばたつかせるイルヴァを、アルフレートが足首を掴んで止める。久々に六人揃うとやっぱりうるさい。御者席にいるのはイリヤと案内役のファムさん。デビス達はエミール王子が乗る馬車に同乗させて貰い、後ろから来ている。

「……やっぱり怖いな」

ヘクターが馬車の後方を見て呟いた。後ろから来る王子の乗る馬車なのだが、御者役にいるのは何故かカエル顔の男、ヴォイチェフだった。彼が今回のお付き役ということらしいが、今も不敵な笑みを浮かべてこちらを見ている。怖い。これから数日、彼と共にしなきゃいけないのか。

「絶対、元暗殺部隊とかだよなあ」

フロロも窓に張り付きぼやいている。

馬車がゆるゆると止まり、表から話し声が聞こえ始めた。見ると背の高いフェンスの前にサントリナの兵士がいる。ファムさんとのやり取りの後、兵士は木の門を開け放った。どうやら別荘地の入口だったようだ。

右手に光る湖、左手に林という景色を進んでいく。

「綺麗！思ったより大きな湖なんだね」

わたしはイルヴァの隣りから窓の外へ身を乗り出す。空の色を映す水面は美しい青色。湖は三日月型ということだったが、その全貌は見えない。少し波のような動きが見えるということは、それだけ大きな湖なんだろう。

暫く行くとボード乗り場らしき桟橋も見えてくる。林の中、大きな家は何軒か建っている。全部、貴族とかそれなりの人の持ち物なんだろうな。だってこんな大自然の中に見えて道はきっちり舗装されていたりして、この敷地内を利用する人間の特別さを感じるもの。

一台の馬車がすれ違った。中々豪華な車体だったのだが、

「すごいスピードだったわね」

ローザの驚きの通り、車体がバラバラになるんじゃないかと心配してしまような揺れを見せながら、あっという間に消えて行ってしまった。休暇中、急に仕事に呼び戻された、とかかしら。

馬車が林の中へ軌道を変える。目的の建物が何となく伺えてきた。真っ白な外壁に茶色の屋根というシンプルな装い、高さは二階建て程なのだが、でかい。はつきり言って別宅なのに我が家より数倍立派……という感想が出てきてしまうのが悲しい。

馬車が止まり、ファムさんが扉を開けてくれる。勢いよく六人が飛び出すと王子達の馬車も隣りに停車するところだった。

いつの間にか現れていた白髪の男性が王子の乗る馬車の扉を開け、深々とお辞儀する。隣りにいる女性共に黒い服に身を固めていて、姿勢はまっすぐ綺麗だ。ファムさんもそうだけど、王家に仕える人ってだらけてる所が想像出来ないくらいぴしっとしてるなあ。例外は彼くらいだわ、と御者席から飛び降りるヴォイチェフを見て思う。

猫背気味に歩く男からお辞儀中の執事服とメイド服に身を固める二人に目を移していくと、後ろからファムさんが耳打ちしてきた。

「彼らはここの管理を行っている夫婦です。彼らとヴォイチェフ、私の四人で皆さんのお世話に当たります」

その時、夫婦が顔を上げる。二人の顔を見てわたしは「あれ？」と声を漏らした。ファムさんの方に振り返ると、

「私の両親です」

思った通りの答えが返ってくる。だってよく似てるもの。管理人がファムさんの両親だから彼女が同行することになったのだろう。だとするとますますヴォイチエフって浮いてる気がするんだけど……。ちらりと見るとヴォイチエフはこちらの考えを見透かしたようににやり、と笑った。その上目遣いだけでも何とかならないのかしら。

「着きましたね。割と近かったでしょう？」

馬車から降りてきたエミール王子がわたし達の顔を見回す。その後ろにはしっかりブルーノの姿。王子は今日一日、一緒に遊んだら城に帰るそうだ。寂しいな、とも思うがブルーノの監視の目が無くなると思うと少しほっとする。

荷物を運ぶファムさんに小走りで追いつき、わたしは小声で話しかける。

「ねえ、ファムさんのご両親だなんてちょうどいいからさ、お願いしといてくれない？『あんまり堅苦しい扱いはやめてね』って」

「わかってます、わかってます。充分に、わかってますよ」

そう言ってファムさんはしつこいぐらいに頷いた。

強い日差しに暖かい風、光る水辺という景色の中、アントンの奇妙な叫びが響き渡る。

「ほおおおお！全部！俺のもんだあああ！」

そのままザバザバともの凄い勢いで湖に入っていく、泳いでいく。彼の「うおおおお」という声が遠ざかっていった。

と思いきや、ウターンして戻ってくる。のっそりのっそりと先ほどとは別人のようにテンション低く上がってくると、

「さむい」

そう一言言い放つ。

「当たり前だろ？半分以上湧き水って話なのに、ここ」

ヘクターが呆れたように言う。アントンは、

「きき聞いてないぞ！そんな話し！俺は！！」

と唾飛ばす。二人の横にいるヴォイチェフが「へっへ」と笑った。

「旦那、準備運動無しに飛び込んだら、運悪きや心臓止まっておいですぜ？きゅつとね、一瞬でさあ」

そう言うヴォイチェフの海パン姿はスタイルが良いとは言えないが、見事に引き締まっていて無数の傷痕がある。その異様さにヘクターとアントンの様子は明らかに引いていた。

「なんでこっち見ないのよ」

不服そうな声を上げたのはセリス。黒いビキニをかつこよく着こなす彼女はわたしと違って上着を羽織るなんて邪道なことはずいぶん王立ちになっている。視線の先にいるデビスとイリヤは忙しそうに椅子やらバーベキューセットやらを組み立てていた。

「見たくて堪らないが」がつついてる」って思われるのもこわい、っていう可愛い年頃なんだろ？理解してやれ」

そうせせら笑いながら言うアルフレートは、死ぬほど似合わない短パン・シャツ姿でウツドチェアーに横になっている。とことん夏の気候の似合わない人だ。

しかしセリスの文句もよく分かる。水着に着替えて早速出発！となつてから、ここに来る間に男連中と一度も目が合っていない。赤面して『か、可愛いじゃん』とか口籠ってくれ。

妙にそわそわする男連中と、仲良く並んで準備運動するフロロとイルヴァを見ているとエミール王子がやって来た。

「良い天気でよかったですね！」

にこにこする王子の水着姿が可愛い。対極にブルーノはいつもの黒い服をがっちり着込んだままだ。暑そうだな、と思うが本人は普段と変わらない無表情。汗一つ掻いていない。

「リジアの水着、とっても素敵ですよ」

「そ、そう、ありがとう」

さらりと言つ王子に少し焦る。フロロとイルヴァが勢いよく駆け出し、水に飛び込んでいった。

「僕らも行きましょう。リジアは水、大丈夫？泳げます？」

そう言いながら上着を脱いだ王子の体はまだ子供特有の細さだ。色も白くて女の子みたい…… っていうのはきつと失礼だな。言わないでおこう。

「少しだけね。でもあんまり深いところまでは行けないと思うな」
こちらにも上着を脱いで岩場に引つ掛けつつ答える。

「じゃあ後でボートに乗りましょう！」

やけに張り切っている王子に腕を引つ張られる。海とは違うので岸边も岩場と砂利、かと思えば柔らかい土が抜き出しになっているので、走ると少し怖い。

「うわあ、本当、冷たい」

足首まで水に浸かったわたしは目を見開いて水面を見つめた。そこへばさ！つと頭から水を掛けられる。

「けけけ」

「うふふ」

フロロとイルヴァの笑い声が聞こえる。わたしは顔の水を乱暴に拭くと二人を睨みつけた。そのままなし崩しにわたしとエミール王子対フロロ、イルヴァの水掛合戦が始まった。四人ともずぶ濡れ、誰に水を掛けてるのかもはや曖昧、という状況になってきた時、ピリリリリリ！と笛の音がする。

驚いて顔を上げると「なぜ持っている？」と聞きなくなるホイッスルを片手にセリスが脇に立っていた。

「目標が間違ってるわよ」

そう言つてセリスがびしりと指す先にいるのは、暢気な顔で佇むアントン。

「目標、再確認」

フロロがそろそろと動くのに合わせて四人が移動する。

「発射！」

セリスの掛け声にわたし達は一斉にアントンへ水攻撃を開始した。初めは「ひえ！」などと情けない声を上げていたアントンだったが、その内「ふざけんな！」「おい！」「いい加減にしろ！」などの罵声が続切れに聞こえだす。

「うふふふふふふふ」

テンション上がりきったからなのか、イルヴァが不気味な笑い声を響かせつつ、アントンを頭上に持ち上げた。全員呆気に取られてそれを見上げる。

「はあ！？おい！やめ……」

アントンの悲鳴もむなく、イルヴァの怪力によって彼の体が飛んでいく。どぼーん、と痛そうな音を立ててアントンが水へ沈んでいた。ヘクター達を含めたメンバー全員が呆気に取られる中、エミール王子が楽しそうに笑い声を上げたのが幸いだった。

ジウジウと肉の焼ける匂い、音、そして煙り。赤い炎がちかちかする炭の上に網が固定されたバーベキュースタイルの食卓。暑いけどこういうのは何故か気にならないものだよね。

ファムさんが肉と野菜を丁寧に切り分けて、皆に配る。残念ながら彼女は水着ではなく白いシャツにラフなズボンというスタイル。

アルフレートは何故かアイスクリームのカップにはお擦りしている。顔が焼けたらしい。

「昼からバーベキューにビールか！最高だな、今回」

デビスが口に白いヒゲを作り、空を仰いだ。

「まあ本来なら夏休みってことで、いいんじゃない？前回頑張り過ぎたし」

わたしはラグデイスでの騒動を思い出しながら答える。帰ってからも一週間くらい怠かった。教官達に聞かれたら……どうなんだ？という今回の旅だけど、正直いい骨休みになったな、と思う。

「レオンも来ればよかったのにな、こんな良いところ」

イリヤがぼやんとした声を響かせる。皆の空気が凍りついたのに気がついたのか、イリヤは目にも止まらぬ素早さでしゅぱん！と土下座した。

「まだ何も言っていないわよ。……言う気満々だけど」

セリスが冷たい目で見下ろしていた。

わたしはちらりと王子の様子を見る。レオンと違って感情を隠す術が無いように思われる彼は、案の定眉を下げてしょんぼりとしていた。レオンに会えなかった寂しさもあるだろうけど、エミール王子もレオンを招待したことで広がる波紋に気づき始めたのかもしれない。

「……ねえ、アレ何？」

空気を変える為か、フロロが王子に質問する。指差すのは湖畔のす

ぐに建つように見える建物。ここからだとな貌は見えないが、結構大きい屋敷なんじゃないだろうか。かろうじてテラスのようなものが湖に掛かるように飛び出しているのが確認出来る。あの家から見える景色は夕焼けなんて素敵だろうな。

「ああ、あれはレイモンの別荘ですね。正確にはユベールのですが、ええっと、ユベールは僕の祖父の妹の子供で……」

「国王のいとこってことか。レイモンは君のはとこだな」

アルフレートが淡々と言うとエミール王子は顔を明るくした。こくこくと大きく頷く。

「そうですね！アルフレートは頭が良いんですね。大叔父は体が弱ってしまっただけでレイモンがよく利用しているらしいです。レイモンは母のパーティーにも来ますから、会えますよ」

えーと、王室ってどこらへんの人までが含まれるんだろう。自分が家系図なんかには疎いから、こういうの混乱しちゃうな。誕生日パーティー当日も色々説明されても理解出来るかどうか心配になってきた。

心地よい浮遊感に酔いながら空に流れる雲をひたすら見つめる。浮き輪に寝そべり湖に浮かんだわたしは、一人ぼんやりとしていた。時々聞こえる水の音と小さな波で揺れる体。こういうのって胎内回帰みたいな間隔なのかなあ。

岸辺の方から誰かの笑い声がする。でもそれに振り向かない程ぼーっとして気持ち良い。

ふと頬が熱い感覚に気づく。やばい、日焼けするかもなあ。……というか眠いなあ。でも寝たら流石にやばいよね……。

上を向いてさえいなければ涎でも垂らしてそうなひどい力の抜け具合に、頭のどこかで警告音が鳴ってる気がした。

その時、いきなり左側の水面からふわ！と何かが飛び出してくる。

「んがあ！」

全身が泡立つほど驚いたわたしは悲鳴を上げて浮き輪からひっくり返りそうになった。飛び出てきた人物が慌てて浮輪を固定する。

「ごめん、ごめん、そんなに驚くとは思わなかった」

銀髪が濡れて普段とは違う人に見えるヘクターは困ったように眉を下げている。

うん、許そう。

「いやあ、ばーつとしてたからさあ」

わたしは照れ臭いのをごまかすように笑った。

「考え事してた？」

ヘクターが浮輪に掴まりながら聞いてくる。

「ううん、何にも考えないでいるのが気持ち良くて」

そう答えると「はは」と笑われる。そして岸边の方向を指差した。

「結構流されてたって気付いてた？」

言われてみて初めて岸がかなり遠くになっていたことに気が付いたわたしは目を見開く。うわ、全然気付かなかった。どれだけぼんやりしていたんだろう。

「岸まで運ぼうか？」

ヘクターがそう言って浮輪に付いたロープを引っ張った。わたしは思わず体を起こす。

「えええ！勿体ない！」

わたしの叫びが意味不明だったのかヘクターは目をぱくりさせた。「い、いや流されて来たのが良かったとかじゃなくて！えーとその、もうちょっと……お話ししない？」

わたしのつつかえながらの言葉を最後まで聞くと、ヘクターはにこりと笑って浮輪に腕を乗せた。

「いいよ」

が、頑張ってみるものだ。しみじみとそう思う。しかし、わたしの頭上より奥に視線が動いたヘクターが眉を寄せる。

「……残念、急いだ方が良さそう」

わたしは彼の視線の先に目を移す。

東の空から信じられないほど真っ黒な厚い雲が、じわじわと近付いてくる光景がそこにはあった。

「王子、大丈夫かしらね？」

応接室の窓を叩きつける雨水が、滝のように流れるのを見ながら口――ザが呟いた。

雨雲から逃れられなかったわたし達は、全員走りながら屋敷に帰ってきた。着替えが終わった途端、王子は「そろそろ城に戻らなければいけないんです」としょんぼりしながら馬車に乗り、大雨の中を去っていつてしまったのだ。

「この時期は毎日のようにこの規模の夕立がくるんでさあ。慣れるもんだ。大丈夫でしょう」

いつの間にか傍らにいたヴォイチェフがそう言つてにやりと笑う。

「殺人事件でも起きそうなシチュエーションねえ……」

わたしがそう漏らすとローザがぷりぷり怒りだした。

「もう！止めてよ、そういうの！ただでさえあんたといると何かしら起きそうで嫌なんだから」

どういう意味だ。目を薄めるわたしの横でヴォイチェフが「へへ」と笑う。

「そうなたらあつしは『一番怪しいから犯人じゃない役』でしような」

「……『その裏かいてやつぱり犯人役』なんじゃないの？」

わたしがそう返すと彼の顔が一層不気味にニタニタとしたものになった。嬉しいらしい。何なんだ、こいつは。

「殺されるのは誰なんだろうな」

アルフレートが面白そうに話を拾う。冗談だとはわかっているが、この場にいるのがわたし達だけで良かった、と思ってしまう。

「物語の最後まで犯人がわからないようにするなら『誰とも親しくない人間』じゃないの？この雨の中、急にやってきた見知らぬ旅人、

とかね」

わたしが話しに合わせるように発言するとローザも食いついてきた。「けど少しずつ登場人物全員と何かしら繋がりがあることが分かってくるのよね。で、結局『じゃあ犯人は誰なんだ！？』で第二の殺人が起きるのよ」

楽しそうに語った後、ローザは「悪乗りし過ぎたかしら」と口元を押さえる。アルフレートが足を組み替えてわたし達の顔を見比べた。「誰も怪しくない、から誰もが怪しい、に変わるだけで一気に舞台が狭くなり、登場人物以外に犯人はいない、と上手く誘導するんだな。……殺人が起こる前に被害者と誰かが派手な喧嘩をする、なんていうのもあるな」

「あ、わかる！『Aが犯人よ！だって被害者と揉めてるところ見たもの！殺してやる、とか言ってたわ！』なんて騒ぐのがいるのよね」わたしが身を乗り出すと、アルフレートは大袈裟な身振りをつけながら芝居掛かった声を出す。

「『冗談じゃない、ミートパイを食べられた恨みで喧嘩しただけで殺人犯にされるのか！？』」

わたしとローザが耐え切れずに笑い転げていると、ドアがノックされた。

「……晩飯だよ」

ドアから覗いた不機嫌そうな顔のアントンに部屋が静まり返る。何となく気まずいのは、頭に浮かべていた『架空被害者の像』が彼に近かったからか。

ファムさんとファムさんのお母さん、クララさんの作ったご飯を頂いてから、全員で応接室に戻る。ベッドの用意がまだ完全に終わってないらしい。そのくらい自分達でやりますよ、と言ったが「リネンの場所だとか説明するより、自分達でやった方が早いもの」と返されてしまった。多分気を使ってくれてるのだと思う。

「雨上がったな」

フロロが窓の外を覗き込んでから少し開ける。昼間には考えられなかったような涼しい、いや冷たいとも言える外気が入り込んできた。フロロは慌てて窓を閉める。

「夕立のお陰で夜は快適になる、これがこの辺りのサイクルでさあね」

当たり前のようにわたし達の輪に入り込むヴォイチエフをローザが睨んだ。

「あんたは手伝わないの？あんたのベッドも用意してもらってるんでしょ？」

「あつしはベッドシートの場所なんて頭に入っていないもんでね」

そりゃそうかもしれないが、これじゃあ見張りがいるみたいで窮屈だなあ。

「雨降ってないなら肝試しでもやる？表涼しいみたいだし」

セリスが欠伸しながら提案するものの、いまいち皆乗ってこない。更にヴォイチエフに「屋敷の裏は崖に近い急勾配でっせ」と言われてしまった。

「なんつーか、暇だよな」

デビビスが皆の本心を代弁したような形になる。贅沢なことだけど、全部「どうぞ」と用意されていて、話し合うような事件も無いし暇なんだよね。皆どこかだらつとした様子で顔の締りも無いような。

「明日も湖に行つてぼーつとして……そんな感じ？」

とイリヤ。既に顔がぼーつとしている。

「ボートに乗ろう、とか言ってたよ。今日、夕立で乗れなかったし、わたしが言うものの、「あー」という緩んだ返事が聞こえるだけだった。デビビスがわたしを見る。」

「で、ボートって面白いかな？アレ」

……そう言われると答えづらいけど、『ボートに乗るとココが面白い！』つてもものも出てこなかったりする。

「所詮、我々に金持ちの余暇の過ごし方なんてものが理解出来るは

ずが無かったってことだ」

アルフレートの言葉には誰も反論出来ない。更には「あと一週間もこれが続くのか」という重い気分に沈んでいくのが分かってしまった。

寢室の用意が出来た、とファムさんのお父さん、オグリさんに言われて皆して応接室のソファから立つ。「まだ眠くない」「もう眠いわよ」など口々に話す中、

「レオンの事、悪かったな。エミール王子の落ち込みよう見ると、もうちょい粘ってみりゃ良かった」

デビスが空いたグラスを持ちながらヘクターに声を掛けていた。何となく、程度に意識を傾ける。

「別にデビス達のせいじゃないから、あんまり気にするなよ」

ヘクターらしいな、と思う返答を聞きながら部屋を出ようとした時だった。

がつ！という鈍い音、続く悲鳴に体が固まる。何かが床板に打ち付ける大きな衝撃音とガラスの割れる音に振り返ると、仲間の揉み合う姿があった。

「おいやめろ！」

デビスの聞いた事のないような怒声、その彼が羽交い締めにするのは興奮で顔を真っ赤にするアントンだ。アントンが殴りかかろうとする相手、ヘクターの口元から血が流れているのを見て、すつと血の気が引いていく。

「お前が悪い！」

アントンの刺すような台詞は意味が全く分からなかったが、隣りにいるヴェラがびくんとする程、有無を言わせないような冷たさがあった。

「いい加減にしろ！」

猛獣を取り押さえるようなデビスも、それを払うように暴れてヘクターに掴みかかるアントンも、対峙するヘクターも異世界の人のように見えてとても怖い。突然始まった乱闘に他のメンバーは動けなくなっている。

「お前のそういう余裕ぶってるのがムカつくんだよ！いつだって見下しやがって！」

アントンの獣の咆哮のような叫びに耳が熱を持つ。続いて響いたのは信じられない声だった。

「じゃあ俺も、『お前が悪い』って言えば良かったのか!？」

初めて聞くヘクターの怒声。部屋の中が凍りついたのがわかった。

「……殺す！」

アントンが再び拳を振り上げる。次の瞬間、ばちーん！と皮膚を叩く音が響いてきた。一瞬、何が起きたのか分からなくなる。

不意打ちを喰らったからか、床に倒れるアントン。頬を押さえる彼の前にいるのは振り切った手の平をそのままにして立つサラだった。

「あんたなんて大嫌いよ」

冷め切った視線を向けてアントンを見下ろすサラは、凍てつくような言葉を吐き捨てると部屋を出ていく。その迫力に姿を目で追うことも出来なかった。

「もう泣かないでよ」

わたしは皆、バラバラに出て行ってしまった応接室に自分ともう一人残った相手、イリヤに向かって声を掛ける。

「だって、怖くて怖くて、ほんとに……」

イリヤはうつうつと泣きながら割れたガラスの破片を拾う。二人掛かりで片付けているのにイリヤがこの調子なので終わりやしない。

「もうダメだ、俺達……。サラは、サラは言っちゃいけなかったんだよ……。そりゃあ彼女ばかり我慢するべきじゃないのは分かってたけど……」

そう言って涙を拭うイリヤ。この言葉からしてイリヤは知っていたって事か。……。そりゃああそうか。

「借りてきたわよー」

ローザがバケツを持って入ってくる。置かれたそれにガラスの破片

を入れていると、ローザがわたしの肩を叩いた。

「ここはあたしがやっておくから、リーダーさんに揉めた原因をきつちり聞いてきてくれない？」

動きを止めて戸惑うわたしにローザは真顔で首を振る。

「……そろそろ『個人的な事』じゃ収まらなくなってるわ。もうパーティーの問題だと思う。説明してもらわなきゃいけないのよ」

ローザの言葉はわたしが「聞きにくい」と思っていること自体を否定した。それでもやっぱり、ヘクター本人が言わない事を聞いて良いものか、躊躇はある。でもそれは聞いて自分が嫌われるのが怖いからなのかもしれない。

無言のままだったからか、ローザが再び口を開く。

「集団で行動する以上は、揉め事を作らないようにするのも大事なことでしょう？……アントンが殴った時から、イルヴァはウォーハンマー構えてたわよ。あたしが腕持って押さえてたけど」

それを聞いたわたしとイリヤの顔が、同時にざあつと青ざめたのは言うまでもない。

屋敷の裏手、広いテラスの奥の方の暗がりに見間違う事は無い後ろ姿がある。屋敷からの光も届かない所だけど、ずっと見てきた人だもの。

ベンチに座るヘクターに近付いて行くものの、何て声を掛けるかが決まらない。何言ってもわざとらしくなりそうだ。

どうしよう、なんて考えながら背中を見ていると、

「隣りに誰か座っていて欲しい気分だなー」

という声。一度も振り返ってないけど、誰だか分かってるのかな。

少し勇気がいったが、ヘクターの隣りに座り込む。深い青色の目と目が合った。

「……痛そう」

わたしは治癒術を唱えると彼の頬に手を伸ばす。腫れ始めていた殴

打の跡が少しずつ綺麗になつていった。

「ありがとう」

そう言つて手を取られる。わたしの手を握つたまま、じつと目を見るヘクターにときどきするが、

「俺の両親と、アントンの親父さんは傭兵仲間だった」

意外な内容で始まつた話しに、わたしは口元を引き締めた。

「タウノ、っていう人で俺も何度か会つたことはあつたんだ」

ヘクターの声の出し方で、久しぶりにその名前を口にしたのでらうと分かる。

「普段は三人とも傭兵業で稼いでいて、何か惹かれる話が舞い込んだ時は三人で乗り込む、なんてやり方だったらしい。その時も三人揃つて目的の遺跡に入り込んで」

一瞬、話が止まる。記憶にある光景を追っている様子が伝わってきた。

「両親の最後を伝えに来た、と俺に言つたタウノは片腕が無かつた。入り込んだ遺跡は三人にとってはそんな苦勞するものじゃなかつた、つて言つてたな。ただ一瞬の気の緩みで……。タウノは何度も『俺が悪い。俺のせいだったんだ。俺が二人を殺して、一人で逃げてきた』つて俺に頭を下げていた」

わたしは少し混乱してくる。話が逆じゃないのか、と思つていたからだ。ヘクターの声のトーンがまた低くなる。

「本当のことなんて分からない。その場で何が起きたのか、誰が足を引つ張つたのか、危険に飛び込んだのは誰なのか、話を持つてきたのは誰なのか、本当にタウノが悪かつたのかかもしれない。そうじや無いかもしれない。ただ、正直俺はそんなことどうでも良かった。だから、『自分達のことは気にしないでくれ』そう伝えた」

本心だつたんだろう、とヘクターの横顔を見て思う。少し前に聞いた話しだと、その頃にはヘクターもお祖父さんもお祖母さんも覚悟をしていたような言い方だったのだから。

「アントンの家族がウェリスペルトに越してきたのは、俺の家が越

してきたのと同時期だったらしい。本当に偶然だったみたいだな。
……アントンのお母さんが俺を見つけた時、ぶっ倒れるんじゃない
かってぐらい酷く青ざめてた。その時、タウノが死んだ事なんかを
聞いたんだ」

「何て、言われたの？」

わたしはぼんやりと浮かぶ予想された台詞に背中が冷えるのを感じ
ていた。

「タウノは生きるのを止めてしまった、って」

わたしはぎゅっと閉じた自分の唇がひどく乾いているのに気がつく。
「ぼろぼろの状態になっても帰ってこれたのは、俺に謝罪する使命
が残っていたからなんだ。でも俺はそれを潰してしまった。両親の
最後がこういうものだったのかは分からない。でもタウノの最後を
壊したのは俺なんだ。それは事実だ」

過酷な旅の過程で隻腕になった男の姿がわたしの脳裏に浮かぶ。彼
は罵倒されたかったのだろうか。残りの人生を償いに賭けた男は、
自分の居場所を無くしてしまったのだろうか。

「アントンに言われたことがある。『お前が世界中の人間に好かれ
るような奴でも、俺はお前を許さない』って。……俺もそう思う。
世界中の人から『お前は悪くない』って言われても、俺は自分を許
さない」

その言葉を聞いた瞬間、涙が溢れてくる。でもそれに気づかれたら
ヘクターはわたしの事を心配するんだろう。そういう人だもの。せ
めて嗚咽が漏れないように、とわたしは必死に唇を噛んでいた。

風が吹いて木が一斉に騒がしくなる。葉に溜まった雨水が地面を打
ち付ける音が響く。わたしは深呼吸すると口を開いた。

「……じゃあわたしは世界中の人が『許さない』って言っても、許
す人になるよ。世界中の人が『嫌い』って言っても、好きでいる」
繋がれたヘクターの手に力が入るのが分かる。少し間を置いてから
わたしは付け加える。

「イルヴァもね」

「イルヴァ？」

ヘクターの不思議そうな声にわたしは「アントンに殴られた瞬間から、イルヴァはハンマー構えてたらしい」という話をする。月明かりで照らされた彼の顔が、びっくりしたように目を見開く。思ったらヘクターは大きな声で笑い出した。

「そっか、イルヴァが……そっかあ」

笑いが収まったのか、ふう、と息つくと、

「そのままイルヴァが暴れだしてたら、どうなってたかなあ」

と呟いた。きつとうちのメンバーはヘクターの味方するにきまつてるさ、と思う。それがたとえ正義じゃなかったとしてもね。

テラスから中に入るとヘクターがわたしの顔を見た。

「冷えたからあったかい飲み物でも貰いに行かない？」

そう言つて厨房の方向を指差す彼にわたしは頷いた。

「長々とごめんね」

という謝罪の言葉には首を振る。

「やだなあ、もっと長い話でも良いのに……」

などと言い掛けた時、廊下の先にいる二人組みが目に入る。窓にへばりついて表を覗き見ているのはローザとフロロだった。

「何やってんの？」

わたしが後ろから声を掛けると、二人揃つて「しー！！」と立てた人差し指を口にはつ付ける。何だよ、と思い二人の後ろから窓の外に目を移すと、わたし達が話していたテラスとは違う位置の少し小さなテラスに、アントンとセリスがいるではないか。

セリスの頭が時々動く。アントンの言葉に頷いているようだった。珍しく落ち着いた様子で話すアントンと、それを聞いてあげているといった様子のセリスは確かに良い雰囲気、と言えなくもない。

暫くするとアントンの手がセリスの肩に伸び、顔を近づけていくのがわかった。

「わ、わお」

フロロが身を乗り出した瞬間、ばちん！！と豪快な音がここまで聞こえてくる。ずるりとベンチから落ちるアントンに、それを足蹴にするセリス。

「調子に乗るな！」

赤毛の魔女の怒声に、ヘクターがびくつとなっていた。

「イケると思つたんだよ」

応接室のソファに座り、ふてくされた顔でコーヒーを飲むアントンの頬を、渋々といった様子で治療してやっているのはローザ。

「馬鹿につける薬にする為にも、治さないでいた方が良くないんじゃないの？」

ぶつくさ言うローザにアントンは、

「お、俺だってオカマに頬に手当てられたりしたくねえよ！」

と言い返す。ある意味何も様子の変わらないアントンに微妙な安心感を覚える。そんなアントンの頬にもう一度セリスの鉄拳が入り、倒れたところを足で押さえつけられていた。

「馬鹿につける薬は無い、って上手いこと言うわよねえええ！あんた見てるとホントそう思うわ！」

ぐりぐりとアントンの頬を踏みつけるセリスの目は完全に据わっている。思わず身を縮めるわたし、ヘクター、フロロ。

サラもこのくらい感情を表に出すことが出来れば、きっと拗れなかったに違いない。

「他の皆は？」

わたしが小声で尋ねるとフロロは上を指差した。

「もう部屋戻った。イリヤは『サラの様子見てくる』って言ってたけど」

アントンの肩がぴくりと動く。その様子に気付いたのかいないのか、ローザがばんぱんと手を叩いた。

「さ！あたし達も休むわよ。その前に、仲直りして」

そう言うアントンの背中を押す。

「『殴ったこと』を謝りなさい」

ローザの上手い言い方に感心する。アントンはふて腐れた顔のままだったものの、

「『殴って』悪かったな」

と胸を張る。絶対思っていないだろ、という突っ込みは今は不粋に違いない。

ヘクターも「いや」と言って苦笑する。悪い空気はとりあえず断た

れた、と言っていていいようだった。

「なある程ねえ……、親に関する因縁だったって事か。そうなることやっぱり、アントンの事は責めにくいわね」

化粧水をパタパタと顔に付けながらローザが感想を漏らす。

ローザに割り当てられた部屋は机にレースが乗っていたりと既に『ローザ仕様』になっていた。わたしはベッドに仰向けになりながら、枕元にあつたポプリを手取る。

「やっぱりそう思う？わたしもさ、百パーセントヘクターは悪くないって言えるけど、アントンも可哀相だな、って初めて思ったんだよね……」

わたしの言葉にうんうん、と頷いていたローザが振り返る。

「……親に関することだとさ、冷静に成り切れなかったり、考える前に体が動いちゃったりするものよね」

そして「動けなくなる、って場合もあるわね」と付け加えた。アントンに『呪縛』という言葉が浮かんだのはわたしもだ。

「話し聞いた様子だと、アントンのお母さんから相当言われたっばいわよね、ヘクター」

ローザは乳液を染み込ませるように顔を手の平で覆いながら、眉間に皺を作る。

「ヘクターは『話を聞いた』しか言わなかったけどね。まあ、ああいう人だから」

わたしはゆっくり答えると、枕に顔を埋める。ローザが毛布を掛けてくる。自分も毛布に入り込みながら笑顔を向けてきた。

「ま、サラの事はあたしに任せてよ。明日、皆が湖に行ってる間に話しするから」

「……今日は何してたの？」

「そ、それは言いつこ無しよ」

ほほほ、と笑うとランプを消す。真っ暗になると急に眠気が襲って

きた。明日、皆笑って過ごせるかな、なんて考えながら眠りのまどろみに落ちていった。

「ふうん……」

ローザの寝言が耳元でした。わたしは少し夢から引き戻される。が、直ぐに眠りに落ちていく。しかしばたと騒がしい音が聞こえた気がして、また目が覚めていった。

薄目から見る静かな様子の室内に、気のせいか、と眠る体勢に戻った時だった。ガラスの割れるけたたましい音に跳ね起きる。

「な、何!？」

ローザが悲鳴のような声を上げた。他の部屋のドアが次々に開く音仲間と思しき話し声もし始める。わたしとローザは顔を見合わせる。廊下へ飛び出した。

寝る前の出来事のせいか、また喧嘩?なんて事を考えてしまう。でもさっきのガラスの割れる音はそんな生易しいものじゃなかった。廊下に出るとすぐ、騒ぎの方向が分かる。皆集まり出していたからだ。

廊下の突き当たりにある窓が派手に割れている。その前に膝をついているアントンの様子を息を飲んでしまった。肩から酷く血が流れている。ばたと音を立て、赤い染みが広がる早さに傷の深さが現れていた。

「ち、ちよつと……」

駆け寄ろうとしたローザに後ろから止めが入る。

「私がやるわ」

淡々と言ったのはサラだった。素早い詠唱と複雑な印を組み合わせると、サラは血まみれのアントンの肩に躊躇なく手を当てる。アントンは一瞬呻くが、直ぐに安堵の表情に変わっていった。

「何があつた?」

廊下を見渡し言ったのはアルフレート。彼が見るのはアントン、ヴ

オイチェフ、フロロの三人。アルフレートより先に廊下にいたのがこの三人って事か。フロロが手を挙げる。

「俺は廊下が騒がしくなったんで飛び出してきたんだよ。黒ずくめの何かが二人いて、俺がきた時はそいつらが窓から逃げるところだった。アントンは既にこんな状態だったな。正直、俺より二人も早く出て来てるなんて驚いたね」

フロロが言うのは自分の察知能力には絶対的な自信がある、ということだろう。事実、いつも危険にいち早く気付くのは彼だった。今も侵入者が逃げる前に廊下に来ていたということは、あのガラスの割れる音の前に気付いていたということだ。

じゃあアントン達は？という皆の視線に気が付いたのか、彼は不愉快そうに舌打ちした。

「俺は便所に行こうとしただけだ」

アントンがそう吐き捨てる。顔色も大分良くなっていた。

「あつしも騒がしくなったんで出て来たんでさ。あつしの部屋の目の前なもんで、早かったんでしょ」

にやりとヴォイチェフが笑う。アントンがその彼を指差した。

「このオッサンが追い払ったんだよ。あいつら暗がりいきなり切り付けてきやがった」

ヴォイチェフが？と驚くが、あの肉体を見るにやり手だったのかもしれない。

「全員いるよな？」

デヴィスが一人一人を指差していく。

「ファムさん達は……？」

わたしが一階に寝ているはずの三人を口にすると、階段からばたばたと三人がやって来た。クララさんが廊下の惨状を見て悲鳴を上げる。

「あ、大丈夫です。怪我人の治療もしてます」

とわたしが言うのと三人共、大きく息を吐いた。

アルフレートが割れたガラス窓を確認する。

「侵入もここからだつたみたいだな」

アルフレートは暫く目を色々な場所に動かしたりしていたが、

「一晩に二度も襲ってきたりはしないさ。今は寝ておくんだな」

そう言つて部屋へ戻ろうとする。

「おい、そんなんでいいのかよ!? 何が目的の奴らだつたんだよ」

アントンが塞がった傷を撫でながら反論すると、アルフレートは鼻で笑う。

「お前が目的だつたんじゃないか? 襲われたのはお前だ」

「な、何でだよ!」

顔を赤くするアントンに同情してしまう。アルフレートの煽りは性質が悪い。もしアントンだけに個人的な何かがあつたとしても、こんな所で襲われるのも変な話だ。

「見回りにでも行くか?」

デヴィスが困惑顔で提案するがヴォイチェフが首を振る。

「暗がりの馴れない場所ですろついても、相手に良い襲撃のチャンスが増えるだけでしょうな」

「私が明日、朝一で城に報告に参ります」

オグリさんも動揺いっぱい顔だが、そう言つて手を挙げた。そうなると他にどうすれば、というのも浮かばない。他の皆も納得いかない顔だったが、何か出来る訳でもない、という様子で押し黙る。

「まとまつて休まないか?」

ヘクターが男女別に二部屋にまとまるよう言つとヴェラが安堵の息を吐いた。不安だつたのだろう。

ばらばらに動き出す中、

「イルヴァ」

ヘクターがイルヴァに鞘に入つたロングソードを投げる。

「俺のサブだけど、ハンマーよりは振り回しやすいだろ」

「ありがとうございます。イルヴァ、ソード下手クソですけどね

」

半分寝ているような顔でイルヴァは受け取ったソードを振り回す。
花瓶ががしゃんと割れた。……不安だ。

アルフレートがわたしの前を通り過ぎる瞬間、素早くフロロに耳打ちしていく声が聞こえる。

「ヴォイチェフを見張れ」

フロロは露骨に顔を歪めた。

昨日のような快晴とはいかなかったが、暑さは充分な翌朝、

「あつしは残ります。お嬢さん方だけじゃ不安でしょう」

屋敷の前に集まったわたし達を見回し、そう言ったのは怪しい男ヴオイチエフ。

昨晚の事態があったものの、エミール王子との約束があるのでとりあえず湖まで行ってみようか、となったのだ。しかしアルフレートの言葉を聞いていたわたしは彼に訝しげな視線を送ってしまう。

「メイド達の心配もあるからな。それで良いんじゃないか？」

当のアルフレートはそう言うことさっさと歩き出す。林の中の道を行く彼の後ろ姿を見ながらわたしは軽く頷いた。

「じゃあ、お願いします」

「承知」

ヴオイチエフの返事を聞くと全員歩き始める。屋敷に入っていく謎の男を見ていたヴェラがわたしの方へ駆け寄ってきた。

「昨日のは何だったんですかね……？」

「さあ、普通に考えたら物取りでしょうね。お金持ちの別荘に入ってきた泥棒っていうのが自然かしら」

わたしはヴェラを納得させるよう答える。それは成功したようで隣を歩く彼女はしきりに頷いていた。

物取りだとすると、偶然鉢合わせたアントンにいきなり切りかかりたり、寝ぼけていたとしても剣士であるアントンを打ち倒すような相手だったというのが引っかかるんだけど。だってアントンの傷は右肩だったんだもの。ヴオイチエフが彼の言葉通り、騒ぎにいち早く気がついて出てきていなかったら、と考えると少し怖いものがある。別荘地に現れる泥棒にしては随分と武闘派じゃないか。

皆のサンダルの音を聞いているとイルヴァがきよとした声を出した。

「フロロがいませんね〜？」

言われてわたしはメンバーを見回す。集まった時には昨日と同じメンバーがいたはずで、フロロも水着姿で参加してたはずだけど。わたしはアルフレートに追いつくと小声で話しかける。

「見張りつてこと？」

「うちのシーフは優秀だねえ」

茶化す言い方のアルフレートにわたしは眉を寄せた。

「何なの？ヴォイチエフって……、ローザちゃん達だけで大丈夫なの？」

「……私は奴が『敵』だとは一言も言っていないがね」

その呟きに思わず足が止まる。後ろを来ていたイリヤが「おうつと！」と大きな声で驚いた。わたしは目を丸くしているイリヤに謝ると、またアルフレートに追いつく。

「味方つてこと？というか、昨日のはわたし達の敵？」

「敵なんかいないさ。ただ、既に色々動き出しているんだろ？」「遠くを見るようなアルフレートにわたしは溜息をついた。全然分かん。

林を抜け、視界が明るくなると同時に目の前に湖が広がる。まだ早いからエミール王子は来てないかな、と見回していると右手からオグリさんの乗った馬が駆けてくる。早朝から出ていたオグリさんは少々お疲れに見えた。

「一応、城には報告して参りました。物取りかもしれないので敷地内外の見張りを増やすそうです」

馬を降りてオグリさんはそう語った。そして「ですが」と付け加えた。

「揉める雰囲気になってしまったので、さっさと帰ってきてしまいました」

肩をすくめるオグリさんはファムさんにやっぱり似ている。

「揉める？誰と誰が、何で？」

セリスが聞くとオグリさんは少し間を置いてから話し出す。

「皆さんを城に戻すべきか、このままにするべきかを」

「危ないからってこと？まあそうは言ってもわたし達は冒険者だしね」

わたしはそう言っただけをかく。普通のお客様なら物取りが出た別荘なんぞ、早々に引き上げるんだろうけど、傭兵身分のわたし達には物取りを引つ捕らえるなんて役目もあるわけで。

「物取りでは無かった場合、王子を狙う暴漢だったなんて事も考えられます。その場合は皆さんは巻き込まれたことになります。王子を始めとした何人かが『城へ戻ってもらわなければならない』と」

オグリさんはそこで話を止めた。アルフレートが「他には？」と続きを促す。

「『このまま様子を見るべき』という意見があります。暴漢が皆さんに対しての恨みなどでやって来た者だった場合、城に戻す訳にはいきませんから」

「は、はつきり言うなあ」

イリヤが脱力したように肩を下げた。確かにわたし達狙いの奴らだったら、そんなのに追われてる冒険者を城に匿うわけにいかないだろうな。

「で、オグリさんは何て？」

デビスは少し面白そうだ。オグリさんもとやうと笑う。

「『ラグデイスでの英雄ですが、彼等は子供です。冒険者の卵にそういった事情があるとは思えません』と正直に申し上げさせていたきました」

「つまりはラグデイスの件の恩を念押しして、我々の潔白さを証言してくれたわけだ。おい、この切れ者に皆感謝するんだな」

アルフレートが笑うとオグリさんは軽く頭を下げる。でも城での騒ぎになってしまったということは、今日は王子は来れないだろうな、なんてことをわたしは考えていた。

「今日は昼には切り上げるか」

デビスがそう言いながら膨らました浮き輪をわたしの首に掛ける。自分は泳ぐつもりは無いようで、岩場にどっかりと座り込んだ。ヘクターもアントンも今日は遊ぶつもりが無い様子だ。何でもないような顔をしてるけど、ソードを傍らに置いて周りの音を拾うように神経を払っているのが雰囲気に分かる。

「護衛って感じ？良いけどこっちはしゃぎ辛いわね」

セリスがつまらなそうに呟いた。うむむ、普段のエミール王子の気持ちがちよっと分かるかも。

どうしようかな、と浮き輪を腰の辺りでぐるぐると回していると、アルフレートがちらりと見て言い放つ。

「お前、馬鹿みたいだぞ」

「う、うるさいなあ」

わたしは口を尖らす。ふと何かをじっと見る様子のヴェラが目に入った。

「どうしたの？」

尋ねるとヴェラはこちらに振り返る。

「あれ何かなーって思ったんですよ」

彼女の指差す先にあるのは、昨日エミール王子が話していた親戚の別荘だ。湖畔のすぐにある薄黄色の建物は、ここからだ住民がいるかどうかはよく分からない。

「レイモンって人の別荘でしょ？王子のはとこだっけ。そのお父さんが国王のいところになる人で今は体壊してるとかいう……何だっけ？」

「ユベール」

「そうそう、ユベールさん」

アルフレートの即答にわたしは頷きながらヴェラを見る。しかしヴェラは首を振った。

「いや、その奥ですよ。別荘の奥です」

言われてみて初めて気付く。奥の方に湖から直接繋がるような形で

洞窟のようなものがあつた。

「あ、本当。何だろう、あれ。よく気がついたね」

「いやあ、私、目だけは良いんですよ！」

そう言つて照れたように笑うヴェラ。究極のドジっこ属性が無ければ、ヴェラつて結構優秀なんじゃないの？

「じゃあ、あの馬車に乗つてるのはどんな人物だ？」

アルフレートが湖の横を通る道を顎で指した。わたしとヴェラは振り返る。先ほどオグリさんが帰つてきたのと同じ方向からやってくるのはどこか見覚えのある馬車だつた。

「あれつて……ここに來た日にすれ違つた馬車じゃないの？」

わたしは言いながら横目で馬車を見送る。王子達とこの別荘地にやつて來た時、猛スピードを出して去つていった馬車だ。車体の形が洒落ていて、何となく覚えていたんだよね。

今回は急ぎの用は無いのかゆつたりとした速さだが、止まることなくそのまま通り過ぎていく。

「……すごい美男美女が乗ってました！キラキラしてましたよー！二人とも金髪でした。服装も派手でしたね」

馬車が去つていつてからヴェラが答えると、アルフレートは「ご名答」と頷く。ヴェラは手を叩いて喜んでいる。アルフレートの人を使う能力も毎度感心するけど、ヴェラつて本当に目がいいな。わたしには二人組みの男女が乗っている、くらいしか分からなかった。

馬車の去つて行つた方角を見て思う。今の二人の男性の方がレイモンだったんじゃないかな。馬車の雰囲気といいヴェラの話しといい、王子の親戚にしては派手な様子が意外だけど。

「あの洞窟に行つてみませんか？」

ヴェラに言われて我に返る。楽しそうだな、と思うがどうやってあそこまで行くか首を捻る。

「あんまり広いようだ途中で帰ることになると思ふけど、楽しそうだね。皆に聞いてみようか」

わたしはそう答えるとヘクター達の方へ戻る。

「ヴェラが面白そうな所見付けたんだけど」

と前置きしてから説明すると、デビスがわたしの後ろ方向を指差した。

「ボートで行ってみるか？確かあつちに何隻も停まってただろ」

「借りていいの？」

セリスが聞くとデビスは肩をすくめる。

「別にいいんじゃないの？名前書いてあったりしたら諦めればいいし」

じゃあ行ってみるか、となったところでウッドチェアに横になつて本を読むアルフレートに話しをすると、

「私は待つてる。皆で行ってこい」

と手をヒラヒラされた。予想通りの答えだ。

「じゃあ荷物見てて。ちよつと見てくるだけになると思うけど」

「胸躍るダンジョンだといいねえ」

目線は本に向いたままからかうアルフレートの膝を叩くと、わたしは残りのメンバーと一緒にボート乗り場に向かうことにした。

波止場に着くとお互いの顔を見る。

「四隻あるわね」

セリスの言う通り小型の手漕ぎボートが四隻、湖に浮いている。軽くロープで固定してあるだけだったり、色違いなだけで同じ型なのを見るに、やっぱり誰でも使えるものなのだと思う。普通に考えれば二人ずつ乗り込めばいい。

「一つは残しておいた方が良いんじゃない？」

ヘクターが言った言葉にわたしも頷く。他に遊びに来てる人を見てないけど、占領するのも悪いものね。

「じゃあ三組に分かれようぜ」

デビスがグーにした手を振ってみせた。皆それに応えるように輪を作り始めた。

訪問者

「ちょっとイリヤ！暴れないでよ」

わたしはボートの真ん中でしきりに体を動かすイリヤに文句をぶつける。

「だってこれどう考えても二人乗りじゃない！？沈み具合おかしくない！？」

イリヤが涙目で指差すボートに乗るのはわたし、ヘクター、イリヤの三人。

「大丈夫だよ、二、三人用って表記があつたから」

ヘクターが笑顔を向けるものの、イリヤはずっと水面とボートの側面を凝視している。

「デビス達のボートだつて普通に進んでるじゃない。総重量は向こうの方があると思うわよ？」

わたしが指し示すボートにはデビス、アントン、セリスが乗っている。ジャンケンで決めたらこんな偏ったメンバーになったのだ。

イリヤがちらりとこちらを見てくる。

「リジア、君意外と体重あつたりしないよね？」

「失礼ね！」

わたしの手の平がイリヤの額にすばーん！と綺麗に入った。うずくまるイリヤの後ろでヘクターは黙々とオールを漕いでいる。ちよつとは見習つて欲しい。

「大体イリヤ、あなた泳げるでしょ？昨日泳いでたじゃん」

「転覆、って事態そのものが怖いじゃないか！しかも俺の乗ったボートだけ転覆する、なんていかにもありそうで！」

自分の不幸体質をよく分かつてる発言だな、と思う。

そんな風に騒いでいる間にもイルヴァとヴェラの乗った一番身軽なボートは件の洞窟まで到着しており、二人がこちらに向かって手を振っている。

「真っ暗ですよー」

イルヴァの声にわたしはライトの呪文を用意し始めた。

洞窟前に着くと唱えていた光球をゆっくり投げ、中を覗き見る。割と苦勞せずに歩けそうな岩場に挟まれるように水面が続いているのを見て、わたしはヘクターに尋ねる。

「ボートに乗ったまま行けそうだけど、このまま行ってみる？」

「いや、岩にぶつかったりして危ないかもしれないから歩こう」

そう言うヘクターはボートに繋がるロープを適当な岩にくくり付けた。

全員が上陸すると奥に広がる闇に目を向ける。わたしとセリスが用意した『ライト』の呪文で光量は充分だが、洞窟がカーブしているので中の様子が窺えない。

「うわー、ドキドキしない？海の中の洞窟とかさ、懂れてたんだよね」

そう言うてはしゃいだ様子を見せていたセリスだったが、数歩ほど歩いたところで、

「何か寒くない？」

両腕を抱えるようにして肌を擦っている。わたしは上着を羽織っていたので寒いまでは感じないが、素足を撫でる空気がひんやりとしている、と思った。

「日が当たらないから、かな？」

イリヤが首を傾げる。

「理由なんてどうでもいいだろ」

アントンは面倒くさそうに言うときさささと歩き出す。それもそうか、という様に皆も続きだした。

しかし直ぐに足を止めることになる。川のように浸入していた水面も途切れ、足元が砂利の混じる土になった時、洞窟の幅びつたりに構える灰色の扉が現れたのだ。

「何これ？」

誰も答えられるはずは無いのだが、自然とわたしは口になっていた。

材質は普通の石なのだろうか。洞窟の岩に同化するような飾りのない色合い。中央に一筋の割れ目が入る以外は何も目につくものは無い。

「開きそうにないな」

デイベスが扉の表面を手で撫でた。彼もイルヴァもボートに乗るということで、普段の武器は置いて今はロングソードを持っている。扉に向かっていつもの重量級の武器を振り上げてみる、なんてことも今は出来ない。

「鍵穴も無けりや取っ手も無いしなあ。なんだ、これ？」

イリヤが頭をかく横から、

「もう引き返さないか？」

ヘクターが静かな声を響かせる。確かに他に見るものも無いけど、何だか真剣な顔に戸惑う。すると同調するようにデイベスとアントンも頷いているじゃないか。

「何か変な感じがするんだよなあ。さっさと帰ろう」

デイベスの言葉にヴェラが「や、やめてくださいよ」と飛び上がる。嫌な空気を感じる、って事だろうか。わたしも不安になってくる。その時、ざざざ、という水の流れるような音にはっとして振り返った。

「お、おい何だよ!？」

アントンがカタナを抜きながら吼える。先ほどまで横目にしてきた水辺からいくつもの塊が出現してきているのだ。人のような形に見えたそれが全身を現していくにつれて、向こうの景色を透過させていることに気がついたわたしは大きな声で叫ぶ。

「アクアサーバントよ!」

全身が水で出来た魔法の兵士達が、ざあざあと音を立てながらわたし達に近づいてこようとしていた。

「何だよ、それは!？」

デイベスの問いに答えようとしたわたしは、アクアサーバントの一人が腕を振る様子にはっとする。

「ストーンサーバント！」

セリスの呪文に応えるように地面が震えた。地中からずんぐりとした土の兵士が現れる。

腕を広げるそれに先程のアクアサーバントが放出してきた水の塊が次々に突き刺さった。ストーンサーバントはどろりと溶けて、すぐに地面に還っていく。

「こういう奴らよ」

セリスが真っ直ぐ前を見据え言った。

「魔法生物ってことか！じゃあ術者は！？」

デビスが大声を上げるが、わたし達以外の影は無い。何処かに隠れて、と思いイリヤの顔を見るが彼は無言で首を振った。

「切れねえよ！」

アントンが叫ぶ。彼が切り付けた水の兵士は少し水飛沫を飛ばしただけで平然としている。棒きれで水面を割っているのと同じで、直ぐに元の形に戻っていくのだ。更に動きを止めるそぶりが一切無い。『何も受けていない』のと同じなのだ。

「ファイアウエポン！」

わたしはとりあえず唱えておいた呪文でヘクターのロングソードに炎を纏わせる。

アクアサーバントにヘクターの剣が走る。水の体からもうもうと水蒸気が立ち昇った。

「効いてない！？」

「……いや」

わたしの問いにヘクターは首を振る。

「動きが止まる。効いてないことは無いと思う」

じゃあわたしとセリスで全員の武器に、なんて考えていると、

「ライトニングボルト！」

セリスの指先から強い光を帯びながら電流が流れる。アクアサーバントの一体に絡むと、びくと体が跳ねてその一体は水中へ戻っていった。が、

「ぎゃああああ！」

悲鳴と共にアントンが倒れた。水中に足をつっ込んでいたので……感電だろう。

「ふ、ふ、ふ、ふざけんな！」

唾を飛ばしながら詰め寄るアントンに当のセリスはぶふー！と噴出す。

「やだアントン、唇が痙攣してる！」

「怒りからだ馬鹿野郎！」

けらけら笑うセリスと感電でかくかくした動きになっているアントンは放っておくことにする。

しかし今の一手で他のアクアサーバントも少し動きが鈍くなった。

「ファイアウエポン！」

イルヴァのソードにも炎を纏わせ、これで全員の剣に魔法を掛けたわたしは一つ息をつく。

「小さくなってきたるな！」

デビスの言葉通り、炎の剣で切りつけられるたびに水蒸気が上がっているアクアサーバント達は、少しずつだが小さくなってきたる。

「でも効率悪すぎじゃない？」

アントンのカタナに魔法を掛けながらセリスがぼやいた。

確かにそうなんだけど、他に良い手が思いつかない。もっと強力な呪文をこの空間で使う勇氣はちよつと持てない。

「いやー！助けてください！」

ヴェラの悲鳴が響き渡った。アクアサーバントの数体がヴェラを担ぎ込んで湖の方向へ運ぼうとしている。

「ヴェラ！飛び込め！泳いで陸に上がれ！」

デビスがヴェラを担ぐアクアサーバントを切り付けながら叫ぶ。

「ったく、本当に役に立たねえな……」

アントンが舌打ちと共に吐き捨てた。

「だあああ！死ねい！」

アントンが小さな塊になったアクアサーバントを勢いよく切り付ける。じゅう！と最後の一体が水蒸気となって消えていく。

「お、終わった……」

イリヤががっくりと膝をついた。その彼も、他の皆もわたしも汗びっしょりで水から上がった後のようになっている。舞い上がった水蒸気で一帯はまるでサウナのようなようだ。

「最悪な気分だわ」

真つ赤な顔をしたセリスが口を歪める。わたしも同感だ。死ぬ程喉が渴いているが、ここの水は飲む気にはなれないし、と水面を見ていると、

「終わりました？」

ぶはー！という呼吸と共にヴェラがひょっこりと顔を出す。今の今まで泳いでいたらしい。全員が脱力したように肩を落とすのが分かった。

「……俺も泳いで帰る」

怒る気力も無い様子でアントンはカタナをセリスに渡す。直ぐに水に飛び込むとカエル泳ぎで出口方向へ行ってしまう。

「イルヴァもそうしまーす！」

全身真つ赤になっているイルヴァが水に飛び込む。デイスが頭をかいた。

「しょうがねえなあ。ボートどうすんだよ……」

「出遅れた……」

イリヤがぼそつと呟く。帰りは彼にもボートを漕いでもらうしかない。

残ったメンバーでサウナと化した洞窟を後にする。ボートが三隻浮かぶ前に来て外気温の心地好さに深呼吸していると、いきなりヘクターに抱き抱えられた。

「ひえ！？」

「急げ！」

そう叫ぶとヘクターはそのままボートに飛び移る。素早くロープを外し岩を蹴り飛ばした。他の皆もそれに続く。

「やだ！」

セリスが洞窟内を指差す。振り返ってみると奥の方、ゆらゆらと形の不安定な生物がいくつもこちらに向かって来ているのが分かった。先程のアクアサーバントだと思って間違いないだろう。

「な、何なの、ここ？」

「……来たらまずい所だったんだろうね」

ヘクターがわたしの疑問に苦笑した。

侵入者がいる限り無限に兵士が現れる、なんて仕組みだったとも考えられる。だとしたら、あそこには何が隠されているんだろう。

ボートを止め、アルフレートの元に戻ると仁王立ちした彼が待っていた。

「遅かったな」

「ごめん、実は予想外の展開だった」

洞窟の話しようとしたわたしをアルフレートは手で制してくる。

「……雨が来る。早く引き上げるぞ」

もうそんな時間？と空を見上げるが、青い空が広がっているだけだった。雨の匂いでもするのだろうか。すうっと息を吸い込むと夏の緑濃い匂いを感じる。

すたすたと行ってしまうアルフレートに「放っておかれて拗ねてるんだろつか？」とも考えるが、そんな訳は無い。お腹空いたのかもな、と思いながら荷物を持ち追いかける。

「腹減ったな」

「口開けばそれね」

デビスとセリスの会話と皆の持つ荷物のがちゃがちゃいう音を後ろに歩いていると、アルフレートが「しっ」と静止を求めてくる。

林の中、虫の羽音と葉の揺れる風の音だけがする。

数秒だったはずだが長く感じた静寂に口を開きかけた時だった。アントンの唸るような声が聞こえる。林の木の影から物音一つ立てずに現れた黒い人影にわたしも息を飲んだ。

真っ黒な装束に身を包んだ男が三人、道を塞ぐように立ちはだかる。ヴェラの小さな悲鳴に後ろを見るとそちらにも三人、目元だけ覗かせた黒い姿がある。囲まれたってことだ。

「トマリを渡せ」

男の一人が言った言葉でようやくカンカレの町での出来事を思い出す。あのクーウェ二族を追っていた集団だったのか。彼らの恐ろしさを垣間見ているわたしはどっと汗が出る。

「は？誰だよ」

アントンの即答に男達は目を合わせる。嘘の無い様子に何かを確認し合ったのかもしれない。

「クーウェ二族の男だ。その女は知っているはずだ」

わたしは指差されたことで動揺するが、なるべく冷静に答える。

「あいつが何処にいるかなんて知らないわよ。大体こっちもトマリって男には迷惑掛けられたから、それであの時は追いかけてたんだから」

再び沈黙が続く。得体の知れないプレッシャー。言葉の選びに間違いは無かったか、ぐるぐる考えてしまう。

「……嘘は無いようだな。もしこの先、トマリを引っ掛けることがあれば我々に引き渡してもらいたい」

とりあえず戦闘の意思は無いらしい。一先ず息つくが、こんなのと関わりあうのはごめんでもある。

「あんた達が何者なのかわかんなかったら渡しようが無いわよ」

身元を聞く為の引っ掛けではない。単純にそう思っただけ言葉だ。トマリとも勿論、二度と会いたくも無いし。

「なに、その辺に転がしておいてもらえれば拾いにくるさ」

そう軽口を叩くように言った男の顔は笑みが浮かんでいない。目元しか見えないのもあるが、瞳孔一つ動かない様子に寒気がする。早く、早くこの話し合いを終わらせたい。

「おい、まさかそんな事の為に大事な肩切られたんじゃないよな？」

アントンの野犬の唸りのような声に冷や冷やする。男はほんの一瞬目を細めるだけだ。

「腕の良い護衛がいたことを幸運に思った方がいい」

動かないわたし達に話を続けていた男が軽く手を上げる。木の葉や枝が散らばる林の中だというのに足音一つ立てない不思議な動きで、全員がその男の元に集まった。

「失礼した。楽しい夏を」

短い挨拶の後、一斉に男達は駆け出す。それをただ見送っていた、

つもりだった。

頬を風が撫でたことにはつとずる。

「よせ！」

ヘクターの叫び声が耳に響いた。男達の方へ駆けるアントンの背中に気付き、息を飲む。ダメ、行つてはいけない。

最後尾にいた男が振り返ったところまでしか、わたしの目では追えなかった。アントンがカタナを落として倒れ込む。

「ヴァイスダート」

アルフレートの放つ光の矢を避けるように、再び男は走り出し、消えていった。矢は木の幹に当たり、四散する。

全てがスローにも感じ、断片的に見えた気もする。はつと気がつく
と「この馬鹿が！」というデイビスの怒鳴り声と、彼がアントンを抱えている姿があった。

「一先ず横にしろ」

珍しく焦ったようにアルフレートが言い放つ。見る見るうちに地面に広がる血を見てセリスが小さな悲鳴を漏らした。

「あ、アントン、大丈夫なの？」

腹部が真っ赤に染まり、ぴくりとも動かないアントンを見ても現実感が湧かない。でもわたしの声は震えていた。

「ヒーリング」

答える代わりにアルフレートは呪文を唱える。淡い光が集まり、アントンの腹部を照らすと出血は止まったように見えた。だが、

「……これで死ぬことはないだろう。さつさと運ぶぞ」

立ち上がり言つた彼の言葉は安心感など与えてくれず、アントンの怪我の酷さを教えてくれただけだった。

昨日より早く降り出した大雨に舌打ちする。もう屋敷は見えてきているというのに。

「もう着くぜ。耐えろよ」

アントンを背負いながら走るデイビスの声。ヴェラが堪え切れなかったように泣き出す。

一足先に戻っていたアルフレートから話が行ったのか、屋敷の扉からローザとサラが飛び出してきた。意識の無い様子のアントンを見て、二人とも青い顔で立ちすくむ。

先に動いたのはローザだった。

「レザレクシヨン！」

背負われた状態のままのアントンの背中に手を着いて呪文を唱える。かなり高位の治癒魔法が状況を物語っていた。そしてローザは「中へ！」と先導する。

屋敷の中に入るとファミさんが駆けて来る。

「直ぐその部屋のベッドへ」

そう言つて玄関ホール右手の部屋を指差す。デイビスが言われた部屋に駆け込んでいく。それに続こうとしたローザが振り返り、よろよろと近づくサラの顔を見た。ここからは後ろ姿だったが、どんな顔をしているのか想像がついてしまった。ローザが手を振り上げる。ぱちん！と平手打ちする音がホールに響く。

「何も出来ないならこないで頂戴！……やる気があるなら入ってきて」

そう言い残し部屋に入っていくローザ。叩かれたサラは一瞬、体を硬直させていたが頭を振り、直ぐに部屋に入っていく。その光景に少し安堵の息が漏れる。

「アントンさん大丈夫ですよ。ローザさんがいますもんね」

イルヴァの声に何故か無性に泣きたくなった。

どのくらい立ち尽くしていたのだろう。頭にタオルが降ってきた。投げられた方向を見るとアルフレートが立っている。

「拭け。そんな顔してても、どうせこっちは何も出来ないんだ」

わたしは黙って頷く。サンダル足の泥だらけな事と足首が痛む事に、今ようやく気がついた。

「もう安心していいってよ」

食堂の椅子に腰掛けながらデИБスが深い深い息をついた。お昼を食べ損ねたわたし達の夕飯の献立にはスープだとか体の温まるものが多い。ファムさん達が気を使ってくれたのだと思う。

「アルフレートの呪文がなかったらやばかった、ってさ。ローザにも……。あの馬鹿の為に世話になりっ放しだな」

そう苦笑するデИБスの言葉は乱暴だが、顔は疲労いっぱいという感じだ。他の皆も当たり前だが元気が無い。先ほど屋敷の中からふらりと現れたフロロが口を開く。

「一回心臓止まってたっばいってよ。あと神経性の毒がどーたらで、今晩はローザとサラで寝ずに様子診るってさ」

ヴェエラがぶっ！とスープを吹いた。確かに軽い口調で話す内容とは思えない。

「あの世から舞い戻った男、って呼んであげたら喜ぶんじゃない？ かつこいいじゃん」

セリスのからかう調子の声も普段より覇気がない。イリヤが「はは……」と乾いた笑いを響かせた。

そこからは皆、無言で食事を取る。でも、考えていることは一緒なのだと思う。

『これからどうするの？』

そんな思いを感じた。でも誰も何も言わない。フロロにヴォイチエフの話しを聞こうと思ったが、それも躊躇してしまう。聞いて意味があるのだろうか、そんな風に考えてしまうのだ。

そもそもあの男達がトマリの事を尋ねてきたのは、カンカレの町でわたしが余計な行動を取ったからじゃないのか。

デИБス達だって気になっっているはず。でも彼らは質問してこなかった。『あいつらは何者？』なんて聞かれても答えられないのだけだ。

『どうにかする為に行動を起こす』には力が足りない。初めて味わ

う苦い思いだった。

ふと玄関ホールの方が騒がしくなっているのに気がつく。スープ皿から顔を上げるとヘクターと目が合う。気のせいじゃないようだ。

「またあいつらじゃないよな」

デイビスの言葉に緊張が走る。顔を見合わせた後、食堂の扉を開け、皆して廊下をそろそろと歩く。角から玄関ホールを覗き見るとオグリさんが玄関口に立つ何者かと話しをしている。腰が大きく曲がり、フードを深く被る男はジプシーのように見えた。

「哀れな旅の者に慈悲の手を……」

「そう言われても部屋が無いんだ。それにさっきも言ったように怪我人がいて……」

そんな会話が聞こえてくる。

「トマリじゃんよ」

フロアの呟きに全員が固まる。

「え……あれが？」

弱弱い声を絞り出す男は体も小さく見えて、思わず疑問を口にするが一瞬だけフードからちらりと見えた肌の色に硬直する。

「お前かあああ！」

デイビスの怒声に身を竦める。走る勢いそのままにトマリに飛び蹴りを食らわすデイビス。

「ぬえ!？」

奇妙な叫び声を上げながらクーウェニ族の男の体は面白いように表へ飛んでいった。

「かつ！」

水溜りに体を打ちつけ、ばしゃりと音を立てるトマリ。衝撃でフードがはだけて見覚えのある爬虫類顔が覗く。そこへデイビスが馬乗りになった。未だ降り続く雨が二人を容赦なく濡らしていく。

「俺らに迷惑掛けたあげくに物乞いかあ！？いい度胸してんな、オラ」

怒りで半分くらい聞き取れないデイビスの声にトマリの動揺しきった声が続く。

「な、何だよアンタ……アンタなんか知らないってえの！」

デイビスが拳を振り上げた。息を飲むわたしの後ろから声が張り上げられる。

「デイビス！」

厳しい声はセリスのものだ。デイビスの体がびくりと動き、拳が止まる。そこへ、

「パラライズ・ヴァイン」

アルフレートの冷静な呪文の声が響き渡った。地面からぎゅるぎゅると気味の悪い音を立てて植物の蔦のようなものが伸びる。トマリの体に伸びたそれはあつという間にクーウェ二族の男を拘束していく。巨大植物によってぶらりと持ち上げられた様は処刑人のようだ。

「げえ！エルフ野郎！？」

吊るされた体をじたばたさせながらトマリはアルフレートを見て顔を歪める。デイビスが二人を交互に見た。

「どうすんだよ？」

「……あのアサシンどもがやって来た場合の上納品、ってところかな。この状態を見れば我々の関係性も理解して貰えるだろう？」

そう答えるアルフレートはとても楽しそうだ。続けて短く精霊語を唱えると、トマリの体がぶつり、と果実を落とすかのように地面へ

落下した。拘束はそのままなのかしばらくじたばたとしていたが、
疲れたらしきトマリは次第に静かになる。

小雨になってきた。雨音が小さくなっている。静かになってきた林
の中から今にもあの黒い男達の影が飛び出してきそう、不気味に
感じてしまった。

応接室に重たい空気が続く。デイビスのイライラが彼の組まれた足
が揺れる様子で分かる。ローザ、サラ共にこちらには戻ってきてい
ない。未だに緊張が続く状態なんだろうか。

「で、どうすんの？これ」

セリスが面倒くさそうに足で部屋の隅を指す。そこに転がっている
のはトマリ。濡れた衣服のままで寒いのか「くしょん！」とくしゃ
みをしている。

「……なんで中にいれたんだ？」

デイビスが非難めいた視線を送るが、アルフレートは澄まして答え
る。

「流石に屋敷の前で野垂れ死にされたら気分悪いだろう？」

それに対してセリスとデイビスは大きく溜息をつき、イリヤとヴェ
ラは気まずそうにソファで体を揺らした。そんな対比が面白いの
かフロロがにやにやと笑っている。彼とイルヴァがクッキーを食べ
るぽりぽりという音だけが響いた。

再び部屋を覆った沈黙をデイビスが破った。

「おい、お前はなんで追われてるんだ？」

ああ、聞いちゃったよ、とわたしは心の中で舌打ちする。珍しく消
極的になっていた自分の心境とは裏腹に、どんどん触手を伸ばして
くる周りの動きを恨めしく思う。

でもこの流れを作るためにアルフレートはこの男を室内に入れたの
だ。優雅にコーヒーを啜るエルフをわたしは横目で見た。

トマリの方もアルフレートをちらりと見て、諦めたように息をつく。

「……別に名乗ってもらったわけじゃねえから確証があるわけじゃねえけど、あいつらサントリナ王室からの追っ手だよ」

部屋の中の空気がぴん、と張り詰める。わたし達の反応が予想以上のだったのか、トマリは目を丸くした後、体を萎縮させる。

「……どういうことだ？」

デビスが身を乗り出した。一瞬、器用に足だけで後ずさりを見せたトマリだったが、拘束する薦を見せ付けるように胸を張った。

「答えるからこれ、解いてくれよ。じゃなきゃ説明も出来ねえや。

……おっと、逃げる気なんて初めから無えから心配すんなよ。そこ
のエルフがいるんじゃないやこつちもお手上げだ」

前回のアルフレートからの脅し文句が相当堪えたようだ。

「アルフレートだけじゃない。変な動き見せたら容赦ないってことは肝に銘じてろよ」

デビスが小型ナイフを取り出しながらトマリを睨む。部屋の皆を見回しながらトマリは、

「ガキのくせに恐ろしいやつちゃ……」

とごによごによ口を動かした。ブツリと薦を切る音の後、トマリは開放された体を確かめるように関節を回す。皆の視線を浴びながら示された椅子に座ると上目遣いでわたし達を見て、ぱちぱちと目を瞬かせた。そして腰の後ろ辺りをこそこそとすると見覚えのある皮袋を出してくる。

「これが追われてる原因だ」

そう宣言するトマリはなぜか誇らしげに胸を張るのだった。

「勿体振らなくていいよ。中身何だよ、コレ？」

フロロが遠慮無い態度で袋に手を伸ばす。トマリの「あっちゃっ！」という慌てる声と共に、革袋からゴロリと出てきた物体に皆の視線が集まった。

テーブルに転がったのは丸い、握りこぶし大の石ころ。白味かった灰色のどこにでもありそうな石。強いていえば綺麗な丸のフォルムが目を惹く、かな。

一瞬の間の後、セリスの肩が小刻みに揺れ始める。何かが決壊したようだ。笑いに歪んだ顔を見せないように伏せている。

「何だよ、これ」

そう呟くデビスの口が怒りの為か震えている。一同に緊張が走った。そんな空気を必死に取り繕うようにトマリが手を振り、話を始める。

「ちょ、ちょっと待って！本当にお宝なんだよ、これは！これを手に入れてから俺が追われるはめになったんだから！大体なあ、これは俺の人生の中で一番の大仕事をやって手に入れたものなんだぜ！」

「へええええ、何やったのか興味あるな。で、何やって手に入れたお宝なんだ？」

フロロが棘をたつぷり含んだ声を投げかける。身を乗り出しているが尻尾は不機嫌そうに揺れていた。彼の場合はギルドの事情も含まれていそうだ。それを知ってか知らずかトマリはもう一度胸を張ると、鼻から息を勢いよく吹き出す。

「もう十年以上前になるか。これはな、俺がサントリナの王城に忍び込んだ時に手に入れたんだよ」

「お、王城で？」

わたしは思わず聞き返していた。こいつが王城に忍び込めたのか、とか、忍び込んで盗んだのが何でこれなんだ？とか気になることは多いが、再び口を開いたトマリに続きを聞くことにする。

「そう！その晩は色んな偶然が重なって、通常じゃあ考えられないくらい警備が薄くなることになってたんだな。その情報を『とある筋』から手に入れた俺は、人生最大の冒険に出たわけだ！なんせ俺みたいな奴が王城に忍び込んでとっ捕まったら、よくて国外追放、普通に考えりゃ死罪だしよ」

「とある筋？」

フロロは眉間の皺をさらに濃くする。それでも機嫌が良くなってきた様子のトマリの演説は終わらない。

「そそ、まあ深くは聞くなよ。で、同時期にサントリナに流れていた噂で『アンリ幽王の隠し財産』ってやつがある」

「ストレリオス」サントリナ家に王朝が移る前の王か。また随分古臭い話を」

アルフレートが苦笑する。しかし顔は楽しそうなままだ。アンリ幽王っていうとまだ飢饉が起きたり文献も少ないような時代。ざっと五百年は遡るわけか。そりゃ古い話だ。ヘクターがため息をつく。

「聞いたことないけどな」

そう言つて首を振るヘクターにトマリが指を突きつけた。

「そりゃそうよ！財宝云々は盗賊ギルドだつて嗅ぎ付ける前の話だつたんだぜ！その情報と財宝にまつわる手がかりを手に入れた俺は颯爽とこれを盗み出したつてわけだ」

そう締めくくるとトマリは石ころを手に取り、うつとりしたようにそれを眺めた。暫くそれを見守つてからわたしは目の前の男に質問を開始する。

「それがその『アンリ幽王の隠し財産』とやらに関わりがあるの？」

一瞬、トマリの顔が真顔に戻る。首をぼりぼりとかくと口を開いた。

「これはよう、鍵なんだよ、財宝の。これで財宝への道が開かれる仕組みなんだ」

そこで話が終わると沈黙が広がる。その静けさに表にいる虫の「リーリー」という音が聞こえだす。

「……もしかしてお前も知らないんだろ、その財宝の在り処とやらを」

フロロに睨まれたトマリは「いやあ」と頭をかいた。が、すぐに胸を張りなおす。

「当たり前だろ。知つてたらとくに手に入れて、こんなところにいるわけねえ。南の方で悠々自適に暮らしてるっつーの。サントリナにあることは確実なんだよなあ。で、まだ手付かずだったこの金持ち共の別荘地に潜り込んだはいいいけどよ、いきなり警備が厳しくなりやがって逆に表に出れなくなっちゃった」

「威張らなくていいわよ。……まあそれであんたが王室からの追っ手に追われてるのに、こっちに帰ってきた理由は分かったかな」
わたしはトマリの手の中にある灰色の石を眺めながら呟いた。そしてふと思う。

「ねえ、ファムさん達にも聞いてみない？その財宝の話だとか、噂くらいなら聞いたことあったりするかも」

そう提案したところで応接室の扉がノックされた。皆当然のようにそちらを見る。

「お茶です。……どうされました？」

お盆の上にあるポットから立ち上る湯気の向こうから、予想外の視線を浴びたからためか驚いた顔のファムさんがわたし達を見回した。

「さあ……ちょっと聞いたことは無いですね」

ファムさんは少しだけ眉を寄せて答える。一緒に入ってきたクララさんもお茶を配りながら首を振った。皆の視線が一斉にトマリへ戻る。

「なななんだよ、人が嘘ついてるような顔しやがって！大体こいつら単なる女中だろう！？王家の財宝なんて知るわけねえや」

喚き始めたトマリにフロロがクツキーのかけらを弾き飛ばし「あち！」という悲鳴が上がった。セリスがうんざりといったように息をつく。

「じゃあ単なるゴロツキのあんたが知ったのはどうしてなのよ。結局そこに話しが戻るじゃない」

「それは……」と口ごもるトマリを、後ろから見下ろすアルフレートが口を開いた。

「部族内の伝承、ってやつじゃないか？」

皆が一斉にアルフレートを見る中、わたしはトマリの顔が一気にどす黒く変色するのを見た。間違いない。これが彼の一番知られなくなかった部分だ。

「どうということだ？」

尋ねるヘクターにアルフレートは前に座る男を指差す。

「クーウェニ族は同族間の繋がりが異常なまでに強い。盗賊ギルドも掴んでないような情報をこの男が独自に手に入れるなんて芸当、考えつかないだろう？どうせ先祖の一人にアンリ王に仕えた者でもいたんじゃないか？」

何度目かの沈黙が部屋を覆う。しばらくアルフレートを睨んでいたトマリだったが、諦めたように溜息をつく。がっくりと力の抜けた様子が今度こそ本当に逃げ場を失ったように見えた。

「正しくは俺の兄弟……幼なじみってやつか、の御先祖だな。その

兄弟ももう死んじまったけどよ」

トマリはそこで一度息つくと、再び大きなだみ声を響かせる。

「俺は救世主になる！……予定だった。クーウェ二族の、な。途方もない量だって話しのお宝を手に入れて、クーウェ二族の町を作る予定だったんだ」

「そういうのはみみっちい野望っつーんだよ。大体やるなら他種族の金、充てにすんなよ」

フロロの突っ込みにトマリはむにやむにやとバツが悪そうに口を動かした。一度目を伏せた後、ぱっと顔を上げる。

「アンリ幽王は知ってるか？」

その質問にはわたしが答える。

「あんまり評価は高くない王様よね」

「ふうん、それでそいつのせいでエミールの御先祖に王朝が移ったってのか？」

デビスの問いにわたしは少し考えた後、頷いた。

「正確にはその息子の代までは王位に就いてるけどね。一番大きなきっかけを作ったのがアンリ幽王だったわけ。確か教会の排除をしたのよ。フロー、ラシヤなんかに限らずサイヴァだとか密教も徹底的に」

「そ、そんな事出来るんですか？」

ヴェラの驚きの声。わたしは首を振る。

「まあ、だから駄目だったんだろうね」

駄目だった、とは彼の一族がその後、歴史の表舞台から消え去った数百年後の現在、彼の評価はすこぶる悪いままという意味だ。

「そう！そういう王様だ」

トマリが膝を叩く。

「しかもその息子も資金さえありや親父の尻拭いだとかその他もろもろ、何とかなったらしいんだな。それをこっそり隠しちゃって、自分は流行り病でばつくり逝っちまったのがアンリ幽王ってわけだ」
「ふうん……、で、その資金隠しの現場にクーウェ二族の男がいた

ってことか」

フロロも興味が湧いてきたのか尻尾が伸びている。トマリの方も機嫌が元に戻って「そういうこと！」などと言って指を弾く仕草を見せた。

それまで黙って会話を聞いていたファムさんが口を開く。

「あなたがその『鍵』を持ち出した結果、王室の使いに追われている、ということでしょうか？でもそれだと国王とその周辺はアンリ幽王の財宝を知っているということですよ。なぜ手をつけないでいるんでしょう」

淡々とした問いにトマリは少し勢いを削がれたようだ。もともと口を動かす。

「さあねえ、別に必要無いんじゃない？王様なんだし、金持ちなんだろう？」

「財政問題の無い国なんて存在しない。サントリナは豊かな国だが、それはまた別問題だな」

アルフレートがゆっくりと口を挟む。イリヤが首を傾げる。

「もう使っちゃったとか」

その発言にファムさんは首を振った。

「じゃあ『鍵』も必要ないですね」

確かにそういうことになるな、という空気で全員が息を吐く。

トマリの話を鵜呑みにするなら王室は財宝の存在を知っていて、且つ手を着ける前ということだ。何とも不思議な話し。トマリを追いかけるくらいだから興味が無いわけでもないのだし。

「……ここまでお喋りしたんだ。もうちょっと披露してもらいたいね。そうだな、城に入り込んだ日の話しなんかどうかね」
アルフレートが目を細めるとトマリは下顎をかいだ。

「別にいいけど、財宝に関わりそうな話しは本当に無いぜ？」

過去の回想に入ったことで目がぼんやりする男の前で、わたしはクッションをお腹に抱え込んだ。

「こんな風に雨が上がった後の夜中だったな」

トマリは窓の方へ目をやった。意味は無いかもしれないが警戒の為にカーテンをぴっちり閉めてある。が、わたしにも雨上がりの肌に密着するような冷気を感じられた。

「その日は前々から被害出してた山賊共がサントリナ周辺へ来襲するって垂れ込みがあったんだ。それで警備兵の手がいくらあっても足りねえ、って混乱してる空気だった。加えて前日になってサイヴァ教の起こした騒ぎがカンカレであった。兵の手は更に分散だ。城の警備は半分になってた。……これは俺の兄弟が持って来た情報。あいつは城の厨房に酒運ぶ仕事してたからな。『明日しか無い』そう言ってたよ」

「……警備兵が半分って言ってもよく宝物庫なんて入り込めたな？」フロロが尋ねる。トマリはにやつと笑った。

「そう思うだろ？宝物庫にあるって。これはな、宝物庫じゃなく礼拝堂にずっと安置されていたんだ」

それを聞いてクララさんがはつと顔を上げる。

「そうです、そうです、城には立派な礼拝堂があるんですが、フロー神の像が昔は丸い玉を持っていたんですよ。それがある時から無くなって……。でも私共には何の説明もありませんでしたわ」

デビスが口笛を吹いた。何の変哲も無い石ころに見せかけたように裏をかいたつもりが、結局盗まれちゃったってオチか。それだけ情報を握ってる人物が少なかったのだろう。クララさんも言われて初めて思い出した風であったし。

ファムさんは働く前の話だったらしく「へえ……」と呟いている。

「でもさ、城内で働いてるクララさん達が知らなくても、国王に近い人達とかが慌しくなったりって雰囲気は無かったの？」

セリスが尋ねるとクララさんは一度口を開いたが、そのまま頭を振ると呻く。

「……あの時はそれどころじゃありませんでしたから。レオン様が殺害された頃のことですもの。生きていらしたそうで、本当によかった」

クララさんはそう言って少し涙ぐむ。その様子を前にわたしは色々な事が合わさっていく感覚に頭が興奮してきていた。トマリが手を叩く。

「そうそ、俺への追っ手がしつこいのも、それ関係してると思うんだよなー。俺さ、見ちゃったのよ、レオンって王子が殺されるところ」

部屋の中が凍りつく。誰もが動きを止める中、トマリは暢気な声を響かせ続ける。

「鍵も手に入れてさっさと逃げるか、ってところでさ、興奮してたし慌ててたんで場所なんか覚えちゃいねえが城内から抜け出して敷地内を走ってる時に、建物の中から真っ白な手が伸びてきて布に包まれた赤ん坊を表に出すんだよ。それ受け取った奴は真っ黒なローブで顔なんか見えねえし、気味悪くて覚えてんだ」

「……どう考えてもそっちだろう、お前が追われてる理由さあ」

フロロが彼にしては珍しく目をくりくりとさせて呆気に取られている。彼だけじゃない。部屋にいる全員が目を大きくしてお互いを見ている。何か言いたいが無も出てこない、といった様子で口だけが動く。

「意外なところからパズルのピースが降ってきたもんだ」

アルフレートが顎を撫でつつ呟いた。

「その『真っ白な手』って男？女？受け取った方って黒いローブじゃなくて藍色のローブじゃなかった？」

矢継ぎ早にするわたしの質問にはトマリの半分唸った声しか返ってこない。

「そ、そう言われても、こっちも慌ててたしよ。細っこい腕だったから女だと思ってたな。ローブは……暗がりだったし、言われてみれば青っぽい気もするけど……」

もう、使えないな。わたしは思いつき大きく嘆息してしまった。

廊下を歩く音がする。続けて開かれる扉から疲れきった顔が覗いた。
「お疲れ」

わたしは応接室に入ってきたローザを労う。肩を揉む仕草を見せながらソファーに座ると、ローザはきょとした顔で皆を見回した。
「何かあったの？」

「今説明する。……アントンの様子は？」

デヴィスが言うところローザは深い頷きを何度かしてみせる。

「もう大丈夫でしょ。まあ正直に言うところ焦ったことは確かだけどねー。今サラが様子見てるから、あたしは一休みするわ」

「……ヴォイチエフは？」

わたしが声を低くしたことに驚いたのか、ローザは丸くした目でこちらを見た。

「今もアントンのいる部屋の前で警護してくれてるけど」

そういえば先程、そんなことを頼んだっけな、と思いながらわたしはゆっくり立ち上がった。

「ちよつとサラの様子見てくる」

そう言い残すとわたしは廊下に出る。右を向けばすぐにホールとアントン達のいる部屋の扉、そしてその前で腕を組む男の姿が見える。
「今晚、またあの男達は来ると思う？」

下から舐めるような視線を送る男にわたしは尋ねた。ヴォイチエフは小さく首を振る。

「今日はもう来ないでしょうなあ。なんせ手出した男は今頃、こつてり絞られてるはずでさあね」

「……そう」

言葉の意味を深く聞きたいが、この男がすんなりと説明するとは思えない。『今日は大丈夫』これが聞ければ満足だ。わたしは扉に手をかけると薄暗い室内に入ることにした。

ランプが一つの明かりを灯す以外は暗い部屋の中、微かな寝息が聞こえる。何かの薬品の匂い、床に描かれた魔法陣の跡、普段より小さく見えるサラの背中。

「どう？」

わたしはサラの隣に腰掛けながらアントンの顔を見た。暗がりの中だけど普段と変わらない顔色に見える。今にも起き出して不服を喚きそうな眉間の皺に、思わず小さく笑う。

「……私、何も出来なくて……」

サラが小さく呟いた。真っ直ぐアントンを見る顔は表情が無いのが逆に痛々しい。

「そんな、しょうがないよ。わたし達もアルフレート以外はパニックだったもん。それにサラは昨日の晩にはちゃきちゃき動いてアントンの怪我治してたじゃん」

わたしの言葉にサラはふるふると首を振る。

「ローザちゃんが先に動いたでしょう。それを見て『あ、私がやらなきゃ』って思ったの。きつと、あの行動で『私はアントンの事、許してあげるのよ』ってアピールしてた。自分でも生意気で横柄で、最低だったと思う」

わたしは言葉に詰まってしまった。確かにあの時あの行動を見て、サラがアントンに対して本当に嫌悪感を持っているわけではないのだな、という印象を持ったからだ。サラがふ、と笑う。

「そんなズルイ考え持って行動することは出来るのに、いざ本当に瀕死の仲間がいたら何も出来ないんだもん。私、今まで何やってきたんだろ。学園でも、旅の間も」

少し自分とかぶる思いに胸が苦しくなる。わたしもいつも思うことだから。あんなに勉強して、何度も寝不足になって学園に行って、旅に出てからは何も出来ない自分に気づかされてばかりだ。

「でもね、サラ、ローザちゃんは随分前から学園長のお手伝いなんかしてるから慣れてるんだよ。場数が違うもん。サラもきつとこれからだよ。サラは頭良いし、真面目だし、普段は冷静だもん。すごいヒーラーになるんだろ？うな。あ、だって同じクラスの時はすごい成績も良かったじゃん。羨ましかったもん」

わたしの「口説き文句かよ」という押しの言葉に、サラは漸く笑顔になる。少しぎこちない物だったけれど。わたしがほっとした時だった。サラの大きな目からぶわっと涙が溢れる。あまりにも一瞬の出来事に仰天した後、ふと思う。

そういえばわたし、サラが泣いてるの初めて見たんだ……。一期生の時の懇談合宿で怖い話をした時も、三期生の終わりの時、進級試験に受かった皆で泣いた時も、サラって皆を慰める役だった気がする。

ぼたぼたと涙が膝に落ちる音を聞いて我に返ったわたしは慌ててサラにハンカチを差し出した。無言で泣き続けるサラを見て「優等生が失敗に弱い、って本当だったんだな」などと考えてしまった。

暫く鼻をすする音の中、サラの落ち着きを待っていると「私ね」とサラは話を始めた。

「すごく、怖かった。怖かったの。アントンが肩を怪我した時も、雨の中デイベイスに背負われて帰ってきた時も。怖くて動けなかった」「うん、わかるよ」

わたしも怖かったもの、と同調しようとすると思わず意外な言葉が返ってくる。

「なんでアントンばかり、って思った。あんな、私と喧嘩した後でアントンばかり……。私、心のどこかでアントンの不幸を願ってたのかもしれない、って。そんなわけないって分かってるけど、もし私がそう思っていたからアントンばかり怪我したのだとしたら、って思ったらすごく怖くて」

ぐしぐしと泣き続けるサラを見ながら、わたしはぼんやりとしてしまった。

なんだ、そんな事考えてたのか……。やっぱりサラは「良い子ちゃん」じゃないか、と思う。そんな脱力感に襲われていると、

「お前にはそんな力があんのかよ」

急にした低い声にびっくりとする。のっそりと不機嫌全開の顔で起き上がったアントンは、変な感覚でもするのか腹部を撫でる。そしてわたしとサラの方を向いた。

「すげえ力だな。神様にお祈りすれば思い通りに相手を不幸に出来るのか？あ？最強じゃん、もう何でも出来るじゃん」

そこで床に足を下ろすとサラの顔を覗き込む。

「んなわけねえだろ」

アントンのサラを睨みつける顔にわたしは思わず立ち上がった。

「あ、あ、あんたねえ！」

「お前は黙ってろ、チビ」

復活するなり絶好調の男に「不幸になれ！」と言いたくなる。が、この分だと呪いも跳ね返されそうじゃないか。

「わけ分からなねえ事言つてぐずぐず泣きやがって。嫌いな相手が不幸になったら高笑いするぐらいになればいいじゃねえか……。いか、お前にそんな力は無え！」

びしりと指を突き出すアントンにサラは立ち上がり、

「わ、分かってるもん！！」

顔を真っ赤にして叫び返した。

再びぎすぎすする二人の空気を前にしながら、わたしは目をぎよろつかせる。

どうしよう、気まずい。よく考えてみれば今、この場でわたしが二人に投げ掛ける言葉が彼らにとって重要な意味を持つてくるかもしれないのだ。

わたしはのしかかるプレッシャーに喉を鳴らす。

「と、とりあえずさあ、お互いに言いたい事を言ってみるっていうのはどうだろう？」

言ってみてからしまった、と思う。これって二人の関係が修復不能

なところまで行く可能性秘めた爆弾じゃないか？しかし今更「やっぱ止めよう」というのもおかしいかな、と迷っていると二人は鼻息荒く座りなおした。

アントンが腕を組み、ふーっと息を吐くと口を開く。

「俺が言いたいのはいきなり怒りだしてぶん殴ってくるより、その場その場で不満を言っただけいいことだ」

「あら、まともな意見じゃない。サラは？」

わたしの司会進行が不満なのか「てめー！このチビ！」などと騒ぐ男は無視する。

「私がアントンに言いたいのは」

そう言っただけはアントンを睨んだ。

「そういう意見交換も大事だけど、そうとは言えない不満をすぐ言うのを止めて欲しい。もっと皆の輪を考えて、穏やかに行動して欲しいの。喧嘩なんて以ての外よ」

暴力を嫌うプリーストらしい意見だ。わたしも殴り合いの喧嘩なんて二度として欲しくないけど。

アントンの舌打ちに「そういうのも」と厳しいサラ。こりゃあ長引きそう。

お茶でも持って来ようか、と言い掛けた時だった。

「お前さあ、あいつの事好きなんだろ」

アントンの言葉に立ち上がりかけた足が止まる。あいつ、って誰だ？デビース？イリヤ？いや、話の流れからして……つまり、

「ヘクター？」

わたしがぼろつとこぼす名前にアントンは嫌そうに頷いた。サラが勢いよく立ち上がる。

「な、何言ってくれるのよー！リジアもいるっていうのにー！」

噴火する火山の如く、なサラにわたしは椅子から転げ落ちる。う、嘘でしょ？

「お前が殴ってきたのだってあいつと喧嘩した時じゃねえか。それにお前の言う穏やかで、輪を乱さず、ってあいつのことじゃねえの

？」

「そ、そうよ！？彼は優しいし紳士的で、穏やかで静かで素晴らしいじゃない！でもアントンの言う『好き』とは違うわよ！大して話したことも無いのに……」

「何で話さない？」

すうつとアントンの目が細められる。一気に変わった彼の雰囲気わたし、そしてサラの動きも止まる。静まり返る室内は空気までも硬くなったように感じた。

アントンが面倒くさそうに頭をかく。顔を伏せると息を吐き出した。

「……俺に遠慮してんだろぅが」

サラは答えない。否定しないってことは、そういうことだ。

下を向く二人を呆然と眺めてしまったが、わたしは床から漸く起き上がる。

「えつと、要するにサラはアントンが嫌がるからヘクターとかうちのメンバーとあんまり話さないの？」

「……だって怒るじゃない」

そつぶつきらぼうに答えるサラの顔は真っ赤だ。

暫くの間呆気に取られていたわたしは、思い切りの声で扉に向かって叫ぶ。

「バカだー！とてつもないバカがここにいるぞー！！」

「ちよつとりジア！ひどい！」

覆いかぶさってくるサラを椅子に座らせ、わたしは胸を張ると二人を交互に見た。

「あのねえ、わたしが丁寧にも纏めてあげるから、よく耳かっばじってお聞きなさい！サラはアントンの事が大事なのよ。大事な仲間なの！だからかもしれないけど、勝手にそれを足枷にして、自分で自由を無くして勝手に息苦しくなってるだけ！それとアンタ！」
わたしに指差されたアントンはびくりとして身を引く。

「気づいてたのに言わないってことは、あんたもそれに胡坐掻いてたんじゃない！……まあ言いたいことをその場その場で言う、って

いうのにはわたしも同意だわ。あと、サラの言ってたあんたが『横柄で粗暴で馬鹿』っていうのも同意よ」

「そ、そこまで言われてねえ！」

わたしに突っかかってきたアントンはサラに袖を引かれて、気まずそうに振り返る。眉間に皺を作った彼女が首を振ると、つまらなそうにベッドに倒れこんだ。と思っただけに起き上がり、わたしを見る。

「なあ、勝負しようぜ」

「な、何をよ？」

嫌な予感に反り返っていた胸が勢いを無くしてくる。アントンはやつと笑った。

「俺がサラを落とすのと、お前が『あいつ』を落とすの、どっちが早いか勝負しようぜ」

「な、何、何を……」

ふがふがとしつつサラを見るが、

「……それで、アントンが優しくなるなら良いよ」

渋々、といったように答えるサラに「よくねえ！」と言いたくなる。問題を鮮やかに解決した恩人に何を考えてるんだろ。揃ってこちらを見る顔にそう思っただけで睨みつけてしまった。

卵はかき回すのが好き

わたしが応接室に戻るとトマリのしゃがれ声と食器の音が聞こえた。
「へー、あの王子生きてたの、あそう。そんな話し全然聞かないけど……え？城に戻りたくないんだ？へー、俺ならすぐさま戻っちゃうね」

簡単な夜食を出して貰ったらしく、大きな口をいっぱいにしてがついているトマリ。

「俺、金属苦手なんだよなー。キーンってするじゃん？木のフォーク無い？そう、無いよな、普通」

ファムさんに睨まれて大人しく引き下がる。わたしはお茶を飲む口――ザの肩を叩いた。

「アントン、起きたわよ」

「騒ぎ声が聞こえたわよ……。で、どうしてる？」

「まだ今晩は嫌でも寝かしつけとくって、サラが」

本人はこちらに来たがったがサラの言うことには大人しく従っていた。何しろ今日から彼は『紳士』にならなくてはいけないのだ。

ヴェラが殆ど寝ているような状態で船を漕いでいる。デイビスはまだイライラするように足が揺れていた。トマリの食事も終わったので部屋は静かになる。

すつとアルフレートが立ち上がると自然に皆の視線が彼に動く。それを充分知っている様子で「さて」とアルフレートは胸を張った。

「どうしたいんだ？」

試すような視線がわたしに向いている。言いたいことは分かっている。でも、どう答えるべきかが自分の中でも出ていない。答えたのはデイビスだった。

「すつきりしない状態はどうも駄目だな。こっちは仲間が死に掛けたんだ。あの黒ずくめの集団の目的と、影にいる奴を暴いてやりてえ」

「レオンのこともそれで分かつちやったりするかもな」

フロロが同調する。アルフレートは目を細めて彼を真っ直ぐ見るデ
イビスと視線を合わせる。

「で、どうして貰いたいんだ？」

「力を貸して欲しい、アルフレート」

皆が押し黙る。空気を読めないのか敢えて読まないのか、トマリが
ずるずるとお茶を啜る音が響いた。

「……協力を要請された訳だが、どうするかね？」

アルフレートが今度はヘクターを見る。迷うように組んだ手の指を
動かすヘクターを見てわたしは立ち上がった。

「だ、駄目よ、リスクが高すぎる。意味分かつてる？この国の王室
相手にするってことよ？あの男達相手にすることだって……」

そこまで口にしてわたしは先ほどのヴォイチェフの言葉の意味が分
かってしまった。

今の状況でわたし達に何かがあった場合、呼び戻されるのは王城な
のだ。表ならまだしも、正式な招待状を受けて城にいるわたし達に
何かあったら不味いに違いない。王子からの依頼でこの地にいるこ
とを学園も知っている。学園に所属する意味を少し実感出来た気が
した。

「珍しく消極的だな」

アルフレートの台詞と皆からの視線に顔を上げた。わたしは低い呟
きで返す。

「……城に戻る流れになるなら」

「今、父が今日の事を城に報告に行っています」

わたしはファムさんに頷いてからアルフレートを見る。

「オグリさんが帰ってきたら、城に戻るのに誰が『反対派』にいる
のか聞いておきたいわね」

「なんだ、もう首突っ込む気満々じゃないか」

「しょーがないですねー」

アルフレートとイルヴァにわたしは「うるさいな」と返した。気難

しい顔のローザに苦笑するヘクター。

「俺の意見も聞いて欲しいなあ」

とぶつくさ言うイリヤを見てアルフレートがびしっと彼の顔を指差す。

「そつだ、そつだよ」

「え、何？……ごめんなさい！別に反対して空気悪くしたりしないよ！？」

「うるさい、黙れ。今回、一番守るべきはお前だ」

慌てるイリヤにアルフレートはよく分らないことを口にした。イリヤは目をしばしばとさせていたが、真顔に戻り口を開く。

「俺が心を読めると思ってるから？」

「違うの？」

聞き返すローザにイリヤは大きく首を振った。

「『誰が十二年前にレオンをサイヴァ教団に渡して、今現在アサシン雇って後始末させようとしてるか』って？そんな事まで分かんないよ！一人一人に『貴方がやりましたね』って聞いて回るなら可能かも、だけどね。大体、あの城にいる人達、皆が腹黒い物もってるっていうのに」

「全員腹黒いか、面白いな。だがな、ラグデイスの件……双子の王子の話はお前が紐解いたんだ。少なくとも連中はそう思ってる」

アルフレートが淡々と言うとイリヤは後ずさり、フロロは、

「何それ、つまんないの」

と口を尖らせた。

確かに表向きは全員のお陰、ってなってるけど、実際には『たまたまビーストマスターを含んでいたヒヨッコパーティー』って扱いかな。わたしは「別にいいけど」と呟いた。

アルフレートがもう一度椅子に座り込む。

「ま、今ので要点は絞られたな。……『レオンをサイヴァ教団に渡した者』『目撃者であるクーウェ二族の男を始末したい者』『ラグデイスの件を片付けた面倒な冒険者達を遠ざけたい者』がいる、と。

こんな感じか？」

彼のテーブルに並べた三つのコップを全員が見つめていた。

「え、全部同じ人がやってる事なんじゃないの？」

ローザが困惑の声を出す。

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれないってところか」

アルフレートの言葉に首を傾げるローザへわたしは質問してみる。

「ローザちゃんはわたしがもし、余所様の財布を拝借してるところ見ちゃったら、どうする？」

少しびつくりしたような顔をしたが、ローザは「うーん」と唸ると、
「然るべきところに通報させてもらうわあ」

と答えた。思った答えが引き出せずにイライラするが、そんな事するわけない、と信用されているのだと良い方に解釈することにする。

「あ、庇ってる人間がいるかもしれない、ってことか」

「そういうこと」

腕組みを解いたヘクターにわたしは頷いた。ローザも「ああ、そういうこと」と納得している。

「王妃がやったことを国王が庇う、とか国王がやったことをブルーノが庇う、とかね。……あ、今はあくまでも例だけど」

わたしはびつくりした顔でこちらを見るクララさんに聞かせるよう、付け足した。ファムさんとクララさんが顔を見合わせる。ファムさんは母親に「心配するな」というように頷いていた。

「では『舞台上上がってきそうな人物』を挙げていくことにするか」
アルフレートがテーブルの方へ身を乗り出してから、言葉を続ける。

「まず国王夫妻、異論は無いな？……よし、そして国王の兄弟達、姉と弟の二人で間違いないか？」

ファムさんとクララさんが頷く。アルフレートはそれを見ると指折数を数え始める。

「他の……まずは王室関係者から挙げていってもらおう。『レオン連れ去り事件』の日に、城にいた可能性があった者だ」

考え込む素振りを見せたクララさんにアルフレートは手を振った。

「ああ、事件の日を思い出そうとしなくていい。その当時、城にいても不自然じゃない者を言ってもらえると助かるね」

言われたクララさんは「それなら」と彼女も指を折っていく。

「当時、ご存命だった王室の方、と解釈して答えさせていただきます。まず王太后であられるグレース様」

「まだご存命？」

ローザの問いをファムさんが肯定する。

「元々先王に比べて若い方ですので、今も元気ですよ。王宮の離れにいらっしますが、エミール王子の事も大変可愛がっております」

アルフレートをはじめわたし達の頷きを見ると、クララさんが話を続ける。

「あとは……先王の妹君でいらっしゃるルーズ様、そのご子息のユベール様、その長男レイモン様は……当時まだ十六ですね」

数に入れるか？というニュアンスを含んだ言葉にアルフレートが首を振る。

「例外を入れ出すとキリがない。一応含ませておくか」

「ではレイモン様。ユベール様の奥方は当時既に亡くなっております。後はイザベラ様の旦那様とご子息アシル様は、ずっと年に一度の聖誕祭シーズンしか城には参りませんでしたので、この二方ばかりは除外出来るかと」

わたしは火を噴きそうな頭をどうにか冷静に保ちつつ折った指を上げる。

「全部で八人ね。後はブルーノに……大臣とかその辺かしら」

「じゃあ次は王族以外の王城常駐者を、片っ端から説明してもらう」
アルフレートがクララさんとファムさんに視線を送る後ろで、デイビスが手で顔を覆いながら呻く。

「……任せる、つつつたら怒る？」

「怒らない、端から期待してない」

ぴしゃりと言い放つアルフレートは目が爛々としていて、全部を吸

収してやろうと言わんばかりの体勢に見える。彼ほど優秀な脳みそを持ち合わせていないわたしは嫌気が差しながらも、ファムさん達の話を感じ取り聞いていった。

ファムさんの「先々王の時代から腰巾着な態度を崩さない大臣一族」の話に眉間に皺寄せていると、アルフレートがトマリを見る。こつくりこつくり首を揺らす大男に呆れているのかと思いきや、そうではないらしい。

「こいつも片付けておかないとな」

恐ろしい台詞にトマリが飛び起き、ソファアの背もたれによじ登る。「ちょ、ちょ、ちょっと待ってくれ！大丈夫！あの夜のこと今からはつちり思い出すから！」

「無理に思い出されても意味無いよ。記憶なんていい加減なもんだ」フロアの吐き捨てる台詞にクーウェニ族の男の顔は可哀想な程、綺麗な紫色になっていた。いった。

「大丈夫、悪いようにはしないさ」

悪い顔で言うアルフレートに引いていると、彼は窓の方を見る。すっかり雨の上がった暗がりがかーテンの間からちらりと見えた。

「やるなら暗い内だな。……おい、ヴェエラを起こせ」

「ヴェエラを？」

セリスが驚きを露にして聞き返すが、アルフレートは頷いてみせる。また先程のようにトマリを魔法で縛り上げるとデイベスに視線を送る。

「ブン殴れ」

アルフレートに言われたデイベスは少し前の勢いは何所へやら、「冗談だろ」と口ごもりながら頬をひく付かせた。

切り立つ崖の上から眼下に広がる夜の湖の景色を見て、わたしはささやく。

「本当にうまくいくのかな？」

「さあね」

心算らない声で隣りに立つアルフレートは答えた。

昼間遊んでいた湖岸よりも東に来たここは、水面から陸地まで随分な高さがある。夜中のこの時間に水面に目を凝らしても真っ暗な闇が微かに蠢いているようにしか見えない。アルフレートと二人だけのこの状況は彼の指示によるものだ。

『中途半端に揃ってると、他のメンバーは何をしてるのか、なんて考えさせるだろ』

とのことだが、なんでわたしなんだ、と思ったりする。確かに黒ずくめの男に『その女』呼ばわりされたのはわたしなだけど。

緊張からわたしはもう一度アルフレートに話し掛ける。

「この湖も大昔は川の一部だったんだって。不思議だよ。今はそんな面影無いし」

が、アルフレートに手で遮られる。闇の中から物音一つさせずにゆらりと影が現れた。

「この早さで来てもらえるとは、仕事の出来る人間は違うね」

アルフレートが現れた影二つに語りかける。相変わらず目元だけ覗いた黒装束の男が二人、黙ってこちらを見ている。アルフレートが足元に転がる物体を軽く蹴り上げた。

「……ふぐう」

トマリの苦痛の音が響く。それでも男達の顔は少しも乱れなかった。「いきなり巻き込まれたもんでかえって好奇心が湧いた。この男は何をしたんだ？」

アルフレートの問いに男達は答えない。それも予想済み、というよ

うにアルフレートは話しを続ける。

「こいつが最後まで手放そうとしなかった、これは何だ？」

そう言っただけで掲げるのは丸い石。白みがかった灰色の綺麗な球体。それを見て二人の男の内、後ろに立つやや小柄な男の肩がほんの少しだけ動いたのを見たのはわたしだけではいいはず。

「答える理由も、義務も無い」

前に立つ男は声からして昼間も会ったリーダー格の男のようだ。

「そうか」

アルフレートが答えるや否や、彼の手の中であつた石がぱん！とゴムボールが破裂するかのようにはじける。風に破片がキラキラと飛ばされていく様は綺麗だった。

「貴様！」

後ろの男が身を乗り出す。前の男がそれを黙って止めた。トマリも拘束された体をばたばたさせつつ激しい唸り声を出す。

「争いの種など潰すに限ると思わないか？」

「それには深く同意しよう」

意外にもリーダー格の男はアルフレートの問いに頷いて見せた。それを受けてアルフレートは淡々と話し続ける。

「我々としてはこの男の仲間だと思われるのも避けたいところだが、君らのような人種に協力するのも不本意なものでね」

アルフレートはそこまで言うと言つと転がるトマリの頭を持ち上げた。デイスに殴られたせいで腫れ上がった顔がある。

「協力は出来ない、と。ではどうするかね？」

腫れ上がった顔をちらりと見た男の問いにアルフレートは黙ってトマリを転がす。

「こうするのさ」

最後の一押しによってトマリは崖の下へと落ちていく。

「ふーごおおお……」

ご丁寧にも口輪までされた哀れなクーウェニ族は断末魔の悲鳴まで情けないものだった。どぼん、という水中に落ちた音の後、暫く水の

跳ねる音が続いてたがそれも止んでしまう。小柄な男の方が後を追う体勢になるがリーダー格の男はそれも止めに入る。意外な判断だな、とわたしは思った。

「さてどうする？やり合うか？」

アルフレートが腕を組んだまま楽しそうに問いかける言葉に内心わたしは焦る。が、目の前の男は抑揚を感じない動きで首を振った。そして一歩足を後退させる。

「好奇心だけで動くのはここまでにした方がいい」

そう言い残しじわじわと闇と同化していく男に問い詰めなくなる。ざあ、という音は男達の立ち去った足音だったのか、風の音だったのか。

少し間を置いてからわたしはアルフレートに尋ねる。

「うまくいったのかしらね？」

「さあね、こつちも始めからちよつとした時間稼ぎのつもりだ。後は『下の連中』がどうしたか、だな」

「……お宝ってやっぱり嘘だったのかなあ」

『鍵』であるはずの石の玉を破壊された時取った男の反応を思い出してわたしは呟く。アルフレートが首を振った。

「『鍵』が嘘なのかもしれない。『お宝』が嘘なのかもしれない。

……こつちの猿芝居に付き合う気がないのかもしれない」

そう言っただけで肩をすくめた後、歩き出すアルフレートについて行きながら考える。

偽物だつてばれちゃったのかな？それとも向こうはお宝とやらに、手をつけるつもりが端からない？

わたしの頭の中に解くことは無い封印の扉が想像されていた。

「イテーよお、イテーよお」

硝子玉のような目からぼろぼろと涙を流すクーウェ二族の男を見て、流石に同情してしまう。

「二、三発殴られた後に落ちた衝撃で肩が外れたくらいでビービー泣きなさんな」

アルフレートがローザの治療を受けるトマリに言い放つ。相変わらず冷酷な奴だ。

ここはフローラちゃんの中。狭い空間にわたし達、操縦席には役目を終えたヴェラがぐーすか寝ている。

「おらヴェラ、ベッド行つて寝ろよ……」

デビスがヴェラを持ち上げるとフローラの中から出て行つた。トマリと顔を合わせ続けるのも気まずいように見えてしまった。

「にしても乱暴過ぎるぜ、旦那……。それにあの程度で騙せたんかな？ 奴ら日が昇れば湖を徹底的に探すぜ？」

治療された肩を回しながらトマリがアルフレートを見る。視線を送られたアルフレートはふん、と鼻を鳴らした。

「時間稼ぎに成れば十分だ。その間に城へ戻ればいい。お前もある程度経つまではここにいてもらうからな」

トマリは初めこそ『ラッキー』というような顔をしていたが、徐々に不安げな顔になっていく。

「トイレとか……風呂とか」

むにやむにや口を動かしていたが、アルフレートに睨まれてそれも止まる。

『とにかく時間を稼ぐ』というアルフレートの主張により起こった先程的一幕。

まず黒装束の男達に向けてトマリとの関係をはっきり否定する。そのためにデビスが「悪く思ふなよ」などという悪役っぽい台詞を吐きつつ、トマリの顔を変形させた。

ボロボロのトマリを男達の前に出し、暗い湖に沈める。上からは死角になる位置にヴェラを乗せたフローラちゃんに待機してもらい、トマリが落ちた所を救出してフローラの中に戻ってもらう。……というわけだ。

最低限の明かりはローザに用意してもらったとはいえ、ヴェラも暗

闇の水中で大男を救助するなんて良くやってくれたと思う。
治療を終えたローザが目を細め、アルフレートに向き直る。

「で、そこまでしてこの人を匿うのは何で？まさかアンタが『見殺しにしたいから』なんて言わないわよね？」

ローザの何かを匂わせる質問にアルフレートは中々答えない。わたしが代わりに答える。

「アルフレートは『お宝』があると思ってるんでしょう？」

肩を竦めるアルフレートの後ろ、トマリが弾かれたように立ち上がる。

「そ、そうだよ！鍵！石の玉！何てことしてくれたんだよお！」

喚くトマリの鼻先にアルフレートの手が突き付けられた。その手に持つのは灰色の石の玉。トマリは目を白黒させていたが石に震える手を伸ばし、ほお擦りする。

「偽物を用意すると言っただろうが」

「殴られた後は気絶して覚えてねえよ！」

アルフレートとトマリの言い合いの脇からわたしは口を挟む。

「壊れなかったんだって、こっちは」

「試したのかよ！？」

またしても顔色が紫色に変わるトマリにわたしは指を突き付けると彼の目を真っ直ぐ見据える。

「……反応するところはそこ？『壊れなかった』のよ。普通の石ころならどうなったか、あんたも見ただしょ？」

トマリはぼかん、としていたがしげしげと手の中にある物を見直す。

「やっぱ、力を持つてるってことか！」

「そういうこと。本当に宝の鍵かは知らないけど」

わたしはそう言いながら石の玉を見る。魔力の類いは見て取れない。魔法とは違う何かの力が働いているのか、掛かっている魔法が高度過ぎてわたしには感知出来ないのか、それは分からない。

「とりあえず表出ない？いい加減、休まなきゃ」

ローザに言われ、表へのスイッチへ足を向ける。

「あんたはここ！」

当然のように着いてこようとするトマリを手で制すると、フローラの中を後にした。

室内の明るさに目を細める。先程まで話し合いをしていた応接室のテーブルの上にフローラがいる。ソファーに座るヘクターの横、こちらを見るのはオグリさん。

「あ、帰ってたんですね！」

わたしの掛けた声にオグリさんはゆっくり頷いた。

「城へ戻る許可が出ました。明日の朝からでも大丈夫です」

思わずわたしは皆の顔を見回す。

「順調に行き過ぎて怖いね。まああの王子が頑張ったんだろうが」

アルフレートはそう言うのと、わたしの頭をぼんと叩き扉へ向かう。

「寝ておけ。あと何時間かは寝られる。城に戻ってから昼夜逆転なんて生活出来ないぞ」

アルフレートの言葉にローザも深く頷いた。

「そうそう、こういうのは早めにきっちり直しておかないとね」

そう言われて大欠伸を見せたのはわたし達ではなく、大分お疲れ顔になっているオグリさんだった。

相変わらず日の出る時間は快晴だ。朝日の眩しさが寝不足の目には痛い。フローラちゃんがいるのだから馬車は一台で充分なのだけど、わざわざ向かえの馬車が追加されていた。

「どうか無理なさらぬよう」

オグリさんの言葉に頷く。

「大丈夫、ファムさんもいるし。あ、ファムさんを巻き込まないようには十分注意するから」

わたしの言葉にオグリさんは苦笑する。生意気だと思われたかな。

「娘は要領だけは良いですから大丈夫です」

そう言いながら心配なんじゃないかな、とオグリさんの目線を見て思う。ファムさんはいつも通りのきびきびした動きで荷物を運んでいた。

「皆さんにフローのご加護がありますように」

クララさんがそう言うてくれたことにお礼を返す。皆フローを信仰してる信心深い国、というより神様を身近に感じている空気がある。どうかそれを壊す結果にはなりませんように、と考えながら馬車に乗り込んだ。

揺れる馬車の中、空腹に胃の辺りを摩りながら思う。よく考えてみればわたし達って疎まれるようなこと、何一つしてないのよね。レオンの件なんて感謝されて当然だし。でもそもそもそれが余計だった？

その旨をローザにこぼすと、少し考えるような顔を見せる。

「……何か受けたのかもねえ」

「受けた？」

「言葉よ、『言葉』」

ローザの繰り返しに「ああ、インスピレーションの話しか」と思うが首をひねる。

「それって王室の中にフロアから『冒険者達に注意すること』って言葉を貰った人がいるかも、ってこと？フロア神から見てわたし達が悪い奴になってるみたいじゃない」

信者以外は排除、なんて神様でもないし、それにこっちはローザもいるのだ。なんだかしっくりこないな、と思っているとアルフレートが口を開く。

「『西から来る者が汝の身を滅ぼす』とかならどうだ？」

「それならあり得るわね」

ローザも頷く。なるほど、受けられるのは助言の類とは限らないってことか。神様も意地が悪い。

爆睡中のイルヴァの横でヘクターが珍しくうつらうつらとしている。「皆、寝不足よねー。あたしも眠いわ」

ローザがそう言って大あくびを見せる。寝る時間が不規則なのもあるだろうが、どうもこっちに来てから現実感が無い。セントサントリナの町を回る時も城にいる時も、ふわふわとして頭が回らないのだ。ここから頑張らないといけないというのに。

それにしても十年以上も前の話を解決なんて出来るんだろうか。『誰が』よりも『何故』の方が重要な気がするし、難しい気がする。

ラグデイスの事件は「これから起こること」を考えなきゃいけないかったけど、今回は昔に舞い戻らなきゃいけない。逆になるのだ。でもタイムリミットがあるのは同じだ。誕生日会までに終わらなければ終了。滞在を延長は出来ない。

「着いたら誰の部屋で相談するか決めない？ラグデイスの時みたいに『赤鬼亭』みたいな所があるわけでもないし」

少し大きめの声になったのかヘクターがはっと目を開ける。悪いこととしてしまった。

「集まるなら魔術師の部屋がいい。私かお前、ローザの部屋どれか……向ここの魔術師でもいいが」

アルフレートがそう言つて後ろのデイビス達が乗る馬車を指差す。
今回も恐ろしい顔で御者席に座るヴォイチェフが見えた。

「なんで？」

わたしが聞くとアルフレートは淡々と答えだす。

「何か仕掛けてないとも限らない。魔術師ならそれを見破られる可能性がある。私なら魔術師の部屋は選ばない。なに、盗聴の類は情報戦に翻弄する貴族様には得意なことだろう？」

それを聞いてわたしとローザの顔は同時に大きく歪んでしまった。そ、そうか「何か引つ掻き回すのが好きな連中が来る」っていうならそうなるよな。ってことはこの前、城に泊まった日も何か仕掛けられていたりするんだろうか。わたしとセリスの愚痴話しが駄々漏れ……とかは無いわよね？

そんな事を考え眉間に皺寄せていると、窓の外に広がる湖に目が行った。岸辺に朝っぱらから遊びに来ている姿が見える。着いてすぐらしくウッドチェアやらを用意している男性と、それを見ているだけの女性。二人とも見事な金髪……ってことは昨日見た馬車の二人だ。

男性の方をエミール王子のはとこだというレイモンだとばかり思っていたわたしは、二人の行動が少し不自然に感じて注目してしまっていた。

男性は体つきも良くここから見ても美男子と分かるが、甲斐甲斐しく動き回る姿が逆に滑稽に見えた。相手の女性も羨ましいプロポーションだ。大きな胸に長い足が作り出すシルエツトはとても妖艶に見える。にしてもちよつとは手伝ったりしないものだろうか。

二人の姿が見えなくなつてからアルフレートが小さく笑う。

「王子のはとこは美女に首つたけか。とんでもない悪女じゃないといいねえ」

「やっぱりあれがレイモンよね」

「しか考えられないだろうな」

アルフレートはわたしの問いに頷く。

やっぱりそうか。ってことは一緒にいる女性は恋人か何かだろうか。王族の若い貴族に近寄る悪女……なんて考え、ぞくぞくしてしまっただ。

馬車の外が賑やかになってきたことに気がつく。セントサントリナの町に入ったのだ。朝だからか何処かに向かう人や、道に水を撒く老女の姿など沢山の人影がある。

「露骨に嫌そうな顔してる人を疑っていけばいいんじゃないの？」
見えてきた城を眺めながらローザが暢気な声を出す。

「全員そうだったらどうするのよ」

わたしが言っているとローザはうつと声を詰まらせた。

「でもこつちも情報が欲しいのは確かね。盗聴器なんて物は用意出来そうに無いけど」

わたしは腕を組み考える。魔術具でそんなような物があるのは知っていたが、作るのも使うのも犯罪だ。

アルフレートが黙って前を顎で指す。御者席にファムさんと一緒に座るフロロが小窓から見えた。

「盗賊さんは忙しいわね」

わたしの言葉にローザがため息をつく。

「フロロは今回散々ねえ……」

なにやら罪悪感が蘇ってくる台詞に、わたしは黙っていることに決めた。

王宮の前庭で馬車を降りると妖精のような姿が駆けってくる。ふわふわとした金髪が揺れる下にあるのはエミールの泣きそうな顔だった。

「リジア！大丈夫でしたか？心配しました」

わたしの手を取る彼にわたしは問い返す。

「王子こそ何も無かった？」

エミールは怪訝な顔をしていたが、はつとしたように首を振る。

「城は常駐の兵でいっぱいです。私の心配は何もありません。それより貴方達の方が心配でした」

「怪我人は出たけど大丈夫」

心配してくれているエミールには悪いけど、『王子を狙う暴漢が間違えて別荘に現れたのではないか』ということを匂わせておきたい。エミールは馬車から出てきたアントンに近寄ると、

「ご無事でしたか？」

と調子を尋ねた。アントンが怪訝さを露にして「ああ？」と答えるのに冷や冷やする。なんでここまで馬鹿になれるのか。

ちらりと後ろにいるブルーノを見る。普通の顔なんだろうが睨まれたような気がして、慌てて目を逸らしてしまった。

ふん、オグリさんから聞いてブルーノが一番わたし達を城へ戻すことに反対してたのは知ってるのよ。

エミールと一緒に城内へと足を進めながらそう思ってしまう。

ラグデイスの時から思ってたけど、ブルーノってものすごい忠誠心だ。でも何処かエミールに対してよりも、もっと大きな……王室全体に対してのものに見える。国王に対してなのだろうか。エミールに対しては忠誠心とはちよつと違う気もするし。

彼もエルフと同じように長生きな種族なのよね。ってことはもう何代も前から王室に仕えてるんだろうか。その辺りの話しも他の王室の方の話しも探っていこうか。そう考えて隣りを歩くエミールに声を掛ける。

「エミール王子」

「エミールで結構ですよ」

にこやかに即答するエミールに「負けた」と思いつつ頷く。

「じゃあエミール、後で少しお話ししない？こっちに來てからゆつくり話してないし」

「もちろんです！」

思った以上に飛びついてくるエミールに少し驚く。「じゃあ……」

と言い掛けてどうしようか迷ってしまった。するとエミールの方から提案される。

「私の部屋に來ますか？」

「え、いいの？」

王子様の部屋ってどんなものだろう？と単純な興味が湧く。何しろこの先、王室と知り合いになって、さらに城に招かれるなんて経験訪れそうにない。

「持ってやるよ」

不機嫌そうな声に後ろを見るとアントンがサラのかばんを引つ手繰って（としか見えない）いた。

「あら、ありがとう」

につこりと笑うサラを見るに、ぎこちないことこの上ないアントンより彼女の方が上手という感じた。セリスがアントンの肩に腕を回す。

「持って『やるよ』？そこは『持つよ』か、さりげなく手を出すんで良いのよ。使えないわね」

辛辣な言葉にアントンの顔が一気に『止めようかな』という冷めたものになる。が、わたしの顔を見て激しく首を振っていた。

……なんか目的が『わたしとの勝負』に成り代わってる気がするんだけど。

「朝食は取りました？」

エミールの声に視線を前に戻す。

「ああ、それが起きるのがぎりぎりになっちゃって、まだ」

「そうでしたか、じゃあ準備させましょう。……リジアは何が好きですか？」

にこにことしたエミールの質問に少々戸惑いつつ答える。

「え？いや別に何でも大丈夫だよ。用意してもらったもの食べるから、気にしないで」

「そうですか？飲み物は？卵料理は何が好きですか？」

矢継ぎ早の質問に戸惑いが加速する。質問自体が面倒なのではない。

彼のきらきらとした笑顔がわたしを動揺させるのだ。その間にも「果物は何が好きですか？」やら「音楽は好きですか？」など飛躍した質問まで出てくる。何だか感じたことのある雰囲気じわりと湧く思いがあった。

もしかして、エミールってわたしの事、気に入ってない？

わたしだってそう鈍感な方ではない。だって何でさっきからわたしに対しての質問ばかりなのよ。今までは自分に一番懐いてくれるのだな、と思う範囲だったのだけど。何より雰囲気、『わたしに似てる』。一気に背中から汗が吹き出る。ヘクターの前でわたしってこんな……なのかなあ。

連日の流れを思いだしてはとする。そして思わずアルフレートの方へ振り返った。

気付いてたのね！？

そう目線で訴えるが、のんびり口笛を吹く彼に明後日の方向へ目を逸らされてしまった。

「というわけでついて来てください」

ベッドの上、わたしはローザに土下座する。荷物を整理する手を止めてローザはこちらを向いた。

「それなら尚更一人で行った方がいいと思うけど」

困ったような顔をするローザにわたしは激しく首を振る。

「無理よ！そういう空気に耐えられそうに無いもん！」

そういう空気とはどんな空気か、と問われるとわたしにも上手く説明出来ないのだが。気付いたが最後、まともにエミールの顔を見て話せそうにない。たとえ『ちよつと仲良くなりたいな』程度だとしても、苦手なものは苦手なのだ。

必死で頼み込むわたしにローザは「王子かわいそう」と呟いた。

「じゃあヘクターに頼んでみれば？」

ローザからの提案にわたしは飛び上がりそうになる。

「ダメ！無理無理むり！」

「なんで？いいじゃない、案外良い方に働くかも！王子が必死にご機嫌取る横でヘクターも嫉妬の炎が燃え出したりするのよ。『あれ、この気持ち……』なんて、やだあ！少女向け小説みたいだわあ！」

一人で勝手に盛り上がるローザを睨むが、そんな事はお構いなしにはしやぎ続ける。

「あたしそういう展開大好きなのよねえ。あんたもね、この機会に『男を手のひらで転がす』態度つてものを身につけるべきだと思うのよ」

何言っただコイツ、と思いつつローザに尋ねる。

「わたしがそんな器用な人間に見える？」

「見えない」

「じゃあ駄目じゃない！とにかく、ヘクターは連れて行かない！説

明するのが恥ずかしい！」

声を張り上げるわたしの横でローザは不服そうな顔をしていた。尚も何か言われそうな空気になってきたところでわたしは先手を打つ。「ヘクターを連れて行くぐらいなら一人で行くわよ！」

「じゃあ行つてらっしゃいな」

手をひらひらとされ、わたしはぐつと詰まる。その間にローザは畳み掛けてくる。

「実はね、あたしもこれから訪ねたい人がいるのよ」

「え、それってこのお城に？」

「そうそう」

初耳な情報に面食らっているとローザは説明を始めた。

「うちのコックの知り合いがこの厨房で働いてるらしいの。その人からも何か聞けるかもしれないでしょう？知り合い相手なら口も多少軽くなるもんだし」

うちのコック……。金持ち感全開の言葉にくらりとする。そんな風に戸惑っている間に、

「じゃあ、頑張ってきてね」

と言いながら背中を押され、部屋から追い出されてしまった。ばたんと閉められた扉から目を外すと、廊下で待っていたファムさんと目が合う。

「……行きます？」

「はあ……しょうがない、行こうか」

王子の部屋へ歩き出したところでファムさんがにつこり笑った。

「大丈夫、エミール殿下は紳士的な方です。いきなり獲って食われるようなことはありませんよ」

「……さすがにその心配はしてないわ」

まだあどけなさいっぱいの少年の顔を思い出してため息をつく。疑問があるとすれば気に入られた理由だ。代々『金髪に弱い』とかあるんだろっか。

建物を出て中庭に出ると「盗み聞きしたようで申し訳ないのですが」

と前置きして、ファムさんが話し出す。

「確かに殿下の気持ちを利用するのは有りかと思えますよ。色々な話も聞けるでしょうし、頼み事もし易いじゃないですか」

その言葉にわたしは「うーん」と唸ると、ファムさんを見る。

「良い子ぶりたくないけどさ、そういうの出来るような人間に見える？」

「見えません」

ファムさんの即答に悲しくなる。別にいいんだけどさあ……。

夏の色鮮やかな花が咲き乱れる花壇の脇に、赤い髪が揺れているのが見えた。

「セリス、イリヤ」

名前を呼ぶと何か話し合っていた二人が振り返る。どうしたのか尋ねようとしたところで先に答えを言われた。

「怒られない範囲で色々見て回ろうと思って。今、注意事項を確認してたってわけ」

彼らも情報収集に回るということだ。セリスに「そう」と返してからイリヤを見る。

「気をつけてね」

何しろアルフレートから『一番の要注意人物』だと指摘された彼だ。気をつけて欲しい反面、やっぱりイリヤの力は頼りにしたいところでもある。

「修行だと思って頑張ってみるよ」

苦笑しながらの答えが返ってきた。

「デイベスとヘクターも兵舎みたいところ回ってみるって。あんまり期待しないでくれ、とは言ってたけど」

セリスが髪をいじりながら建物を指差す。細長い塔の頭が見えた。兵士達の詰め所らしい。

「じゃあ後で報告会になるわね」

わたしが言つとセリスは肩を竦めた。

「報告するような事を掴めたらいいけどね」

「リジアは何処行くの？」

イリヤからの質問にわたしはなるべく平静に答える。

「エミール王子の所。部屋でお話ししよう、って」

「へえ、なんでまたリジアだけなんだろうね」

首を傾げるイリヤの頭にセリスが拳を入れる。さつさと歩き出すセリスに頭を撫でながら追いかけるイリヤを見送った後、ファムさんと顔を合わせてわたしもエミールの部屋へ歩きだした。

「どうぞ、入ってください！」

溢れんばかりの笑顔に迎えられてエミール王子の部屋に入る。ブルーのストライプに合わせた家具に銀の調度品が素敵だ。入る直前にファムさんは音も立てずに消えていた。寂しいけど仕方が無い。ずっとついてる方がおかしいもんね。

「わー、やつばすごいわ……」

部屋を見回し正直な感想を漏らす。部屋の奥、テーブルの前にいたブルーノが一礼すると扉に向かっていった。彼も出て行ってしまうのか。でもまあ、いられても突っ込んだ話を色々聞きたいわたしには都合が悪い。

さてどうしようか、と思っているとエミールが棚をこそごとし、何かを運んでくる。

「これ、やりませんか？ルール分かります？」

エミールが持つ升目が描かれたボードと小箱に入った駒を見て理解する。領土取りを簡素化したようなルールのボードゲームだ。辛うじて知っているが、あまりやったことはない。

「あんまり詳しくはないけど、一応出来る、くらいね」

「じゃあ良い勝負かもしれません。僕……私も弱いんです、これ」
つかえるエミールにわたしは、

「『僕』でいいよ、わたしじゃないんだし」

と伝える。照れくさそうだが何とも嬉しそうな顔が返ってきた。来

るなりゲームをやりたいという要望にも、この表情にも改めて彼を「可愛い人だな」と思う。と同時に罪悪感も湧いてきた。この王子を『利用する』なんて芸当はちよつと無理かもしれない。

「並べ方これでいいんだっけ」

自軍になる駒を列に並べながら尋ねる。エミールは指を動かしながら確認していった。

「ええとキングが右で……はい、合ってますよ」

「これ黒から始めるんだっけ？白からだっけ？」

「えつと……リジアからでもいいですよ」

意外と大らかな性格のようだ。少し笑ってしまった。

「じゃあお言葉に甘えて。……こういうゲームとかお父さんお母さんとやったりしないの？」

わたしは白い駒を動かしながらエミールに聞いてみる。あえて国王王妃、ではなくこんな聞き方をさせてもらった。エミールも駒を眺めながら答える。

「父とはたまに。母とはそういえばやったことないですね。たぶんルール知らないと思います」

ふうん、確かにこの手のゲームって男の人の方が好きだな。うちのお父さんも好きだし。

「お母さんとは何したりするの？意外と普通の家と変わんないのかな」

「母とは……本を読んでもらったり、馬に乗ったりでしょうか」

「馬？」

思わず聞き返す。あの王妃さまが馬を乗り回すとは。

「ああ見えて母はじつとしていられない人なんです。馬の扱いも父より上手ですよ」

早速意外な面を聞いた。……あんまり『実』はないけど。

馬の形をした駒を動かしながら、またエミールに質問する。

「これ、こつやつて動かせるんだっけ？」

「はい、大丈夫ですよ」

「ありがとう。……ああ、そういえばレイモンを見かけたわ。エミールのはとこっていう。金髪で体の大きな人よね？こんな髪型の」両手でウェーブした髪を作るとエミールは頷いた。

「そうですね、別荘地で見たんですか。レイモンは歳が離れてますから、あまり一緒に話すことはないですがよく気にかけてくれる良い人です」

「ふうん……、女の人と一緒にだったわ。すごい美女！って感じの」わたしが言つとエミールは「レイモンはモテるんです」とにっこりと笑う。

あんまり『モテる』って人の態度じゃなかったかな……？まあ、あんまり言つと悪口になってしまいそうなので止めておこう。

「前に言つたように大叔父は体を悪くしてから籠りがちで、それでこちらにはあまり来られないんです。それでレイモンが代わりに訪ねてくることが多いんですよ。式典参加も大叔父の代わりに欠かさず来てますね」

「式典か。王族の方は忙しそうね」

わたしの呟きにエミールはまた笑顔でこちらを見る。

「父は分刻みのような生活を送っていますが、僕はこうやってリジアとゲームをする時間もあります」

エミールの言葉に急に恥ずかしくなってくる。わたしは「ああ、うん、そうだね」と口をにごによこによさせた。不自然でない程度に話を戻すことにする。

「でもその大叔父のユベールさんだつて、そんな歳じゃないでしょう？レイモンのお父さん、っていうくらいだし」

「ええと、六十超えたくらいなはずです、たしか。大病を患ってから、精神的にも弱ってしまったようだ。特に人前に出ると疲れが出てしまうようなので」

エミールの言葉を反復させながら考える。ってことはユベールにはあんまり顕示欲みたいなものは感じないわね。代わりにレイモンには逆の傾向があるように見える。ふむ、面白いな。

「リジアの家族はどんな方です？」
急に振られた話題に「そんなどうでもいいことを」と思うが、こちらばかり根掘り葉掘り聞くのも不自然だろう。わたしは迷いながら話し始めた。

「こんな話し面白くないでしょ」

家のお父さんの職業から始まり、最近犬が脱走して大変だった話しまでを終えてからわたしは我に返る。が、エミールはにこにこしながら、

「いえ、とっても面白かったです」

と答えた。王子にとっては別世界の話しで逆に新鮮だったのかもしれない。面と向かってつまらない、と言う人ではないけど。

「次は学園の話しも聞かせてください」

そうエミールが言った時だった。ぱたん、と静かな音を立ててブルーノが部屋に入ってくる。

「エミール様」

「あ、もうそんな時間なんですか？」

眉を下げるエミールにわたしは目の前の白い駒を振って見せてから、かつんと音を立ててボードに置いた。

「チェックメイト。……楽しかったよ、エミール」

一瞬、呆気に取りられた顔をしていたが、エミールは笑い出す。

「あんなに話し込んでいたのにすっかり進めていたんですね。やっぱり僕とは頭の回転が違うみたいだ」

わたしが立ち上がり、扉に向かったところでエミールがブルーノに声を掛ける。

「リジアを部屋まで送ってください」

「かしこまりました」

そのやり取りにわたしは慌てて手を振った。

「い、いいよ、そんなの」

「いえ、まだ城内も不慣れでしょうから」

そう言っつてブルーノに頭を下げられる。むっ、余計な行動取らないように見張りに付かれるんだろうか。と、素直に好意を受け取らない

いのはわたしの悪い癖だな。

「じゃあまた、夕食の席で」

エミールが扉の前まで来て挨拶してくれる。わたしより少し小さい背の彼が真っ直ぐわたしの目を覗き込んだ。レオンと似てるけどやつぱり雰囲気はまるで違うから、今両方並んでも見間違えることはないだろうな、と思う。神殿で会った時はあんなにそっくりに見えたのに。

初めてブルーノと二人きりというのはエミール以上に緊張する。ちらりとブルーノを見るがラベンダー色の髪の下にある顔は何も読めない。

部屋を出て廊下を歩き、下に降りる階段に足を踏み出した時だった。隣りを歩くブルーノが口を開く。

「エミール様は君の身を案じている。何せ初めて家族以外で『執着』を見せた女性だ」

何を言われるかと身構えていた体が恥ずかしさで熱くなってくる。

「そ、そうなんだ。でもわたし達はアサシンに狙われるような生活送ってないもの。王子の方にこそ気を配った方がいいと思うけど」別荘での出来事を誤魔化すようにわたしは答える。ここまでくると押し付けがましいか。上手くいったとは思えないが、ブルーノは頷いていた。

中庭に出ると再びブルーノから声が掛けられる。

「王室の話は面白いかな？」

今度はしっかりと嫌味と警告の色を感じる。わたしは笑顔で答えた。

「まあね。異世界の話しみたいで面白いわ。現実感が湧かない分、今なら何でも出来る気分よ」

「勇ましいことだな」

ふつと苦笑するブルーノを見て思う。また雰囲気が変わっている。戻ったというべきか。あ、分かった。イリヤがいないからだ。そう考えるとわたしのような小娘の方が相手の油断を誘うには向いていたりして。

そんなことを考えていると、中庭を向こうから歩いてくる集団に気がついた。今度はセリスとイリヤではない。そしてイザベラと取り巻きの集団でもない。

「王妃さまだ」

わたしはそう零す。向こうからやって来たのは王妃と数人の侍女。楽しそうに談笑しながらやって来る姿にこちらから声を掛けていいものか迷う。やっぱり王子以上に纏うオーラが独特だからだ。花のように美しく朗らかな雰囲気だが、その辺を歩く人間とはどこか違うのだ。

笑顔を振り撒いていたはずが、こちらに気がついた王妃の顔から笑みが消える。わたしは一気に鼓動が早くなり、ひやりとする。まるでこちらをいないものと扱うように通りすぎていく彼女達にシヨックを受けてしまった。

少女のよう、と感じていた彼女に初めて見たキツイ部分に落ち込んでしまったのもある。

ばくばくという胸に手を置いているとブルーノがこちらを見る。

「気にしなくていい」

そう言う彼の顔をわたしは無言で眺めてしまった。動くことは無い表情で声が続く。

「嫌悪されているのは君ではない。私だ」

それを聞いてぎよつとする。なぜ？という顔でブルーノを見るものの、彼は既に前を見て歩き出していた。その後姿を見て「なぜ嫌われるの？」という質問は無意味だと分かる。イリヤではなくてもそのくらいは読めてしまった。

「リジア」

入りかけた建物の廊下を歩いてくる二人のうちの一人、ヘクターがわたしの名前を呼ぶ。なぜだがひどくほっとしてしまう。

ブルーノに目をやると「どうぞ」という風に手で促された。

「では、私はこれで」

そう言っ去ろうとするブルーノに「ありがとう」と返すが、彼が

振り返ることはなかった。

昼食の用意された部屋は良い意味で質素な部屋だった。窓が少なく昼間でもランプをつけているが、それがまたいい雰囲気。また高い天井と響く声の元で食事することになるのかと思っていたわたしはほっとする。

「なあ、俺もそろそろ動き回りたいんだけど。もう何所もおかしくねえよ」

座るなりアントンがサラに詰め寄る。一人、部屋に待機させられていたので元気が有り余ってる感じだ。

「おかしい所、あるじゃない」

セリスがアントンを指差し笑う。その視線を辿り、自分の頭を触ってアントンは赤くなった。

「お前なあ！」

「セリス、アントン」

サラが静かに二人を睨む。肩を竦めるセリスの横でアントンが身を乗り出した。

「俺も！？今の俺も悪いのかよ！」

「……どうしてそう、唾飛ばしながら喚かなきゃいられないの？」

サラの厳しい顔の前にアントンは「むきよー！」と叫びながら頭を抱えていた。傍から見てるだけだと面白いものだ。

「やいやい、うるせえぞ」

不機嫌さをいっぱいに表した顔で入ってきたのはフロロだ。珍しく攻撃的なオーラにみんな彼に注目する。背を丸めて歩く姿はまるでチンピラじゃないか。

「どうしたのよ」

わたしが聞くとフロロは頭をかきながら椅子に飛び乗った。

「どうもこうもないぜ！あの野郎、一向に尻尾出しやしねえ」

「ヴォイチェフね？」

ローザの問いにフロロは何度か頷きを見せる。わたしは慌てて「ちよつと……」と部屋を見回す。こちらが何を言いたいのか分かったようだ、フロロはふんと鼻を鳴らした。

「別にこれくらい聞かれてたとしても構わないだろ。……こっち着てからもずつと張り付いてたけど、何度もまかれた。いくら地の利は向こうにあるっていつても、こんなの初めてだぜ」

そう言い終えるとフロロはファムさんが運んできた飲み物を一気に飲み干す。

「まく、ってことは何かあるんじゃない？ 隠す事があるってことで……見失ってる間、何かしてるんだろっね」

わたしが聞くとフロロは「だろっね」と答える。なら引き続き頑張ってもらうしかない。

「聞かれても構わん、っていうなら私の話もそうだな」

アルフレートが覇気の無い顔でグラスを傾けながら呟いた。わたしは彼の方へ向き直る。

「何？ そういえばアルフレート何してたの？」

「先王の妻、王太后に会って来た」

「よ、よく会えたわね」

ローザが感心半分、呆れ半分というように声を漏らした。アルフレートはつまらなそうな顔のまま続ける。

「離れにいる、って聞いてたからな。どうせうるさい警備は少ないだろうと行ってみたら、案の定だった。ちよつと顔出してみたらあつさり部屋に入れてくれたよ。エルフは物珍しいんだろ。暇でしよっかない身分だろうし」

「へえ……で、どうだった？」

ヘクターの質問にアルフレートは即答する。

「嫌なババアだった」

ぶつ、と何人かが噴出するが当人は軽く肩を竦めるだけだった。

「口が悪いエルフねえ……。太后には失礼な態度取ってないでしよっねえ？」

ローザがそう窘めるがアルフレートに限ってそれは無いな、と思う。
「典型的な嫌な歳の取り方した人間、って感じだったな。延々、いかに先王が素晴らしくて今の王室が墮落してるか、って話をされた」

アルフレートの話で彼のこの態度の理由が分かる。とことん『好きじゃないタイプ』にはつまらなそうな顔をする奴なのだ。思ったら何かを思い出したように、少し笑う。

「唯一面白いと思ったのは自身の子供への評価かな。太后のお気に入りは長男である現王じゃなく、次男だったらいい。気が触れる前は切れ者だったそう。この辺の愚痴も多かったが、どうも『かわいそうな王弟と愛の無い兄』って雰囲気丸出しで……。話だけのイメージだと国王がエミールのようなタイプで王弟がレオン、って感じが」

国王がエミール……。ねえ。レオンが切れ物タイプっていうのは分かるけど、あの親子は雰囲気からして結びつかないな。今は中性的な顔立ちの王子だけど、大きくなったら国王のような男らしい顔つきになるんだろうか。

食事を進めているとアルフレートに肩を突かれる。

「ちよつと頼まれてくれないか」

本当に色々な人間を使う奴だな、と思いつつ「わたし？」と聞き返す。

「規模の大きい図書館に行って調べものしてきてくれ」

そう言つて二つ折りの紙を渡される。わたしは口を尖らせた。

「そう言われても図書館ってどこよ？」

「城から近いよ。俺が連れていく」

ヘクターからその言葉が出てくると途端に顔がにやける。が、渡された用紙の中を見てぎくりとしてしまった。アルフレートの達筆な字で、

『エメラルダ島』

の文字が書かれていたからだ。

思わずアルフレートを見返すが、黙って食事を取る彼の顔には「何も言っな」と書いてあった。

エメラルダ島

ファムさんに出かけることを伝え、ヘクターと王宮を出ることにする。その途中、中庭に面した廊下を歩いている時だった。

「また……来たの？」

「その……ですね……」

ひそひそとした話し声に思わず足が止まる。聞き覚えのある声だったからだ。柱の影からそつと様子を伺うと中庭の噴水の脇、相変わらず黒いドレスに身を包んだイザベラと付き添いの侍女らしき二人が話しているのが見えた。ここの廊下は窓が無いので彼女達の会話は筒抜けだった。

「エミールのお気に入りだか何だか知らないけど、ずうずうしいこと。傭兵風情がこんな長い間滞在するなんて」

「殿下の希望もありますが、ラグデイスの件もありますし」

「それが不気味なのよ。ビーストマスター？人の心を見透かすなんていやらしいわ」

「ですが……、プラティニ学園の使いというと無下にもしずらいよ。うで。あそこはローラス最大の学園ですから」

「学園ねえ……。要するに傭兵育成所でしょう？前々から思っていたけどなぜ兵力扱いにしないのかしら。同じじゃない。他国の兵士が城をうるついているようなものよ」

会話の内容にわたしとヘクターは顔を見合わせる。驚いたようなヘクターの顔。きっとわたしも同じような顔をしているだろう。

何となく気まずいので頭を引っ込めながら歩き、逃げるようにその場を後にした。

「……驚いたね」

王宮を出るとヘクターが後ろを見ながら呟く。わたしも大きく頷いた。

「イザベラがいい気分してないのは予想してたけどね。それよりも

わたし達がここにいるっていうのは、思ってた以上に大きい意味があるみたいで」

現在のローラスで自国育ちの冒険者が大きな役割を持つことは知っていた。共和制に移った際に国王の持つ軍がいなくなり、代わりに外部からの侵略を防いだのが傭兵、冒険者上がりの市民軍だったからだ。ローラスが学園経営に力を入れる理由も教官から何となく程度には聞いていた。

ふう、と息つくわたしの頭にヘクターが手を乗せてくる。

「エミールの友達だから招待された、って胸張ってればいいよ。実際そうなんだし」

「そ、そっか、そうだね」

後頭部に当たる彼の手にし少し安心する。さっきブルーノに「何でも出来そう」なんて大見得切ったばかりだというのに、もうイザベラ達の氣に当てられていたようだ。

裏門から城を出て、思わず伸びをする。番の兵士をちらりと見ると横目に睨み返されてしまった。

ヘクターに図書館までの道を案内されながら町を見ていくことにする。オープンテラスの店で午後のお茶を楽しむおじさんを見て、羨ましいと思う反面、アルフレートからの頼み事を「あと数時間で調べられる事なんだろうか」と少し焦る。

「で、何頼まれたの？」

ヘクターがこちらを見た。わたしは町の喧騒を前に少し声のトーンを落として答える。

「エメラルダ島、知ってるでしょう？」

「ああ、何かと問題になるね」

ヘクターの反応にわたしは「そうなの？」と逆に質問してしまった。「場所が場所だからね。領有権は手放せないけど、利用できないよな島だから」

「なるほど」

わたしは納得に頷いた。

エメラルダ島は島を取り巻く特色だけでなく、存在する位置の関係から何かと話題になることが多い。これはわたし達の住む隣国ローラスも無関係ではない話だ。

島の場所はローラス、サントリナのある大陸と外洋を隔ててある隣りの大陸との間にあり、距離的にはサントリナの方が『やや近い』という微妙な位置なのだ。その為に度々領有権争いの話題に上がるものの、エメラルダ島そのものといえば大戦を起こしてまで欲しいと思える島でもない。

ただ外洋を隔てた向こうの国、というのが強国アルケイディア帝国だったりするのでお偉いさん方はこの島の話題になるとぴりぴりする、といった感じた。ローラスでも聞く話だもの。サントリナでは大きな問題の一つに違いない。

「そのエメラルダ島の歴史が知りたいんだって、アルフレートは」わたしはそう言いながら左手に見えてきた建物を見上げる。装飾の少ない神殿、といった印象の灰色の建物。柱が幾つも並ぶ外観は楽器のハープの弦を連想させた。

「一応サントリナで一番大きい、ってことになってるよ。俺は利用したことないんだけどね」

ヘクターが図書館を指差し微笑んだ。

受付で地理や歴史関係の蔵書の位置を聞き、内部に入る。

「うはあ」

思わず感嘆の声が漏れる。地上三階、地下二階の本の山。中心に向かう壁を全て取っ払った造りは、階全部を見張らせるここから見るとドールハウスを思い起こさせた。中央部分が最下層から天井まで吹き抜けになり、階段と本棚を乗せた床がぐるりと囲む。かなり広いのだろう。対角線上のフロアで動く人間の大きさが不自然に小さい気がしてしまって、騙し絵を見た時のように頭がくらくらする。当然といえば当然だが知識人が多いようだ。ローブ姿が大半だった。

「地下一階って言われたよね？」

ヘクターがそう言って右手にある階段を指差した。わたしが頷くと二人揃って吹き抜け部分に面した階段を下っていく。途中、横をふわふわと光源が漂っていった。

「魔晶石じゃない『ライト』の呪文を浮かせてるんだね」

わたしは呟く。魔晶石の方が長持ちするだろうが雰囲気作りにはこっちの方がいい。意たる所で漂う光に「管理者は大変だな」と思ってしまうのは、きつとわたしが魔術師だから。

「えっと、Dの3、4番だから……あっちだ」

柱に貼られた地図のプレートを眺めて位置を確認する。目当ての本棚の並びにくるとわたしは腰に手を当て、息を吐く。ここからはわたしが中心になって働かなくては。

とりあえずタイトルに『エメラルダ島』が付くものを探し出す。ぱつと目に入った二冊の本のタイトルを交互に見た。

『エメラルダ島』まんまのタイトルと『エメラルダ島、その神秘』というもの。中を比べ見ると後者は宗教色が強い。前者のタイトルの本を腕に残してもう一冊は棚に戻した。

「じゃあ他に関連ありそうなものを見つけたら持って来てくれる？」ヘクターに頼むと少々自信なさ気に頷いた。専門外の仕事を頼むのは申し訳ないが、じつとしているのも退屈だろうしな。

フロアの中央にあるテーブルに着き、本をばらばらと眺め見る。じっくり読む時間は無かった。

「前の方は海神シユメルの話ばかりね……」

海神シユメルはフロー、ラシャなどと同じ六大神に括られる神だ。海の神でありシンボルには「勇氣、探求、吹き荒れる風」などが上がるので当然ながら船乗りに信仰者が多い。

この本によるとエメラルダ島は「古代文明時代、シユメル信仰の一派がシユメルの怒りを買う、その神殿は海中深くに沈められた。その冒読者達の怨念がエメラルダ島一帯の吹き狂う風に繋がっている」となっている。

わたしの好きな展開ではあるけど、正直胡散臭い。根拠の元も「サントリナ東部にある集落の船乗りに聞いた言い伝え」だそうだ。本の続きを見ても『著者が見たわけでもないエメラルダ島内部』の話ばかりだ。曰く「島の東西南北を四匹の海竜が守護している」など、ちよつと首を捻るものが頭良さに書いてある。

これは『ない』な、とわたしは本を閉じる。すると見計らったようなタイミングでテーブルに本が置かれた。

「的外れも多いだろうけど、とりあえず持ってきた」

ヘクターが重なる数冊の本をぽん、と叩く。その中の一冊、背表紙に書かれたタイトルが妙にわたしを惹き付けた。

『アヴァロン・エメラルダ島　～民俗伝承と文化～』、装飾の少ない革張りの本は普段ならスルーしてしまうようなお堅い雰囲気だが、何故か気になる。わたしの頼りない勘センサーが今はフル稼働で頑張っているのかもしれない。

どれ読んでやるか、と本に触れた瞬間、ぎくりとする。

「いやだ、蜂よ!」

女性の悲鳴が響き渡った。フロア一帯が恐怖の雰囲気包まれる。たかが蜂、されど蜂。授業中に教室に舞い込んだ蜂といい、人は皆あの小さな虫に恐怖する。わたしも身を硬くして周りをきよきよと見回した。同じテーブルに着いていたおっさんも顔を強張らせて頭を振っている。

「……いないみたいだけど」

しばらくした後、ヘクターが呟いた台詞にすつと血の気が引いてしまった。

「あ……、誰?どの人だったか分かる!？」

急に慌てだしたわたしにヘクターは目を見開いていたが、厳しい顔で辺りを見回す。やがて一つの方向を集中して眺めると指を差した。

「あの人だ」

弾かれたように走り出すわたしの後ろをヘクターが続く。本棚と本棚の間をゆつくりと歩く女。暗がりではよく分からないが長い髪

が揺れている。女が歩く同じ本棚の区画に入ろうとすると急に脇から現れた大量の本を抱えたおじさんとぶつかってしまった。

「おおおう！」

「ごめんなさい！」

散らばる本に意識が移った後、すぐに顔を前に戻す。無人の通路に顔が強張るが、ヘクターの「あっちだ！」という声にすぐに我に返る。

後で手伝うからごめんね！と心の中で謝罪し、散らばる本を後にする。女がフロアを出て外周部分の廊下と思われる方へ曲がっていくのを見た。一瞬の遅れの後、わたし達も廊下へ飛び出す。

誰もいない。誰の影も見当たらないがらんとした廊下が伸びていた。地下なのだから当然窓は無い。突き当たりまで別の入り口も無い。今のタイミングで来て見失うとは思えない距離の廊下を前に、わたしは力なく呟いていた。

「『蜂に気をつけてね』」

今更になって思い出す。イニエル湖には、蜂なんていなかった。

城に戻った後、夕食の時間まで少しあったのでわたしはセリスの部屋を訪ねることにする。

廊下の突き当たりにある扉をノックすると直ぐに赤い髪を揺らした彼女が現れた。

「おう、お帰り。どうだった？」

そう聞いてくるセリスの肩を掴むと部屋に押し込む。「なによ……」と不満げな声を上げる顔を見ながら、後ろ手にしっかりと扉を閉めた。

「……水着買いに行った時のこと覚えてる？」

わたしの質問にセリスは眉を寄せる。

「はあ？二、三日前の話を忘れるわけじゃないじゃない。何？店の名前か何か？」

「そう！それよ！」

わたしは勢いよくセリスの顔を指差す。が、答えようとする彼女を手で制した。

「……あの時、通りがかりの老夫婦にお店の場所聞いたでしょう？それで別れ際にあのおばあさん、何て言った？」

「あー、虫さされに気をつけてとか言ってたわよね」

そののんびりとした答えにわたしは今度は激しく首を振る。

「違うわよ！『イニエル湖には蜂が出るから気をつけて』って言うてたじゃない。でも、蜂なんていなかった」

顔を合わせるセリスの眉間の皺がどんどん深くなっていった。

「分かんないじゃない。たまたま出てこなかっただけかもしれないし。季節としては出てきてもおかしくないんだから」

厳しい顔の彼女にこのままだと自分がただのいちゃもん付けになるな、と思い直す。一つ息を吐くと図書館での出来事を話し始めた。蜂が出たという叫び声とそんな事実は無かったこと、瞬間移動して

しまったかのように消えた女のことを言うと、セリスはぶるりと震えて二の腕を摩った。

「やだ、怖い話してみたーい」

望んでいた反応とはずれた感想にわたしは脱力する。

「それで、その図書館の女は道聞いたおばあさんだったの？」

「それが……」

わたしは言いよどむ。あの老婦人は白髪に大きなカールのミディアムヘアだったけど、図書館で見た女は長いストレートのロングヘアだった。色も暗がりでよく見えなかったが金や銀といった薄い色素というよりは茶や赤といった色だったような。セリスの髪を見ながらそう思う。第一、歩き方が少し背を丸めてゆっくりの老婦人は全く違う。すっと伸びた背筋で、早歩きではないものの流れるように足を進めていた。

「じゃあただの偶然じゃない？」

セリスはそう言ってわたしの肩を叩く。その時だった。

「怖い話しの展開だと、三回目に蜂の忠告を聞いたお前は巨大蜂に食われてバッドエンドだな」

「……なんでよ」

後ろからするエルフの声にわたしは睨んで返す。セリスが「うわ、勝手に入ってくるって信じらんない」と扉の前に立つアルフレートにぼやいた。

「で？ちゃんと『お使い』は出来たのか？」

アルフレートは勝手にずかずか入ってくると、勝手にテーブルの上にあったナッツを口に放り込む。そして勝手にコップの水を飲み干した。

「お使いって何よ！ちゃんと調べてきたわよ」

わたしはそう答えるとテーブルにある椅子を引き、座る。アルフレートとセリスも席に着き、こちらに身を乗り出した。二人が並ぶと目つきの悪いコンビに睨まれているようで笑いそうになるが、咳をして誤魔化す。

「……エメラルダ島の歴史だとかどんな内部なのか、とかそういう話になるとやっぱり確証がない『想像』ばかりになっちゃうのよ。だからあの島が『どうして恐れられているか』とか『畏怖の対象になったきっかけの事件』とかそういうのを中心に研究してる学者の本があったから、そっちを読んできた」

「あー、エメラルダ島って嵐が侵入を妨げる、とかいう島だっけ」セリスが腕を組み天井を見上げた。アルフレートは満足げに頷く。

「実際のエメラルダ島ではなく、本土でのエメラルダ島ってわけか。

……それで？」

「エメラルダ島の存在が一気に知れ渡ったのは、千年くらい前のサントリナの王様が隣りの大陸に使いを出そうとして、その使いが東の地の船乗りにごとごとく船を出すのを断られたからなのよ」

「船乗りにはもう有名な島だったわけね」

セリスの問いにわたしは「そういうこと」と頷く。

「噂が広まれば『実際に行ってみる』人間もいっぱい出てくるわけでしょ？そんで帰ってこない航海士が沢山出て、帰ってきてても嵐からぎりぎりまで逃げ帰ってくるような惨状で『あそこはやばい』なんて言われれば、すぐに畏怖の対象になるよね」

「へー」と呟くセリスに比べて、アルフレートは「続きを早く話せ」といった様子だ。わたしは彼の為に早くも『とっておき』を出すことにする。

「まあそんな感じで古くから近づいちゃいけない場所、って扱いだったんだけど、サントリナの歴史の中にまたこの島が登場する機会が出てくるのよ」

ぐっと身を乗り出す二人にわたしは嬉しくなりながら言葉を続けた。「アンリ幽王の時代よ。彼が財産かき集めて、エメラルダ島に隠れ住んだって話があったんだって」

部屋の中の空気が明らかに変わる。目の前に座る二人の厳しい顔にちょっとだけ動揺しつつもわたしは話しを続けた。

「……前にも話題にしたけど、アンリ幽王っていうのは宗教をとこ

とん弾圧したのよ。で、その理由っていうのは彼がエメラルダ島になぜだかたならぬ執着を見せていたから、っていう説があるのね。土着信仰っていうのかな。神を排除して島に祈るの。そんなの上手くいくわけないから、反感買って失脚して、島に逃げた……って話し」

「島を信仰するの？なんでそんなに好きだったの？」

セリスの質問は尤もなのだが、そんなこと聞かれてもわたしも知るもんか。てつきり「すごい！」等の興奮の言葉を貰うかと思っただけわたしは不満に口を曲げる。

「変なのー。嘘くさーい」

尚も言うセリスにわたしは反論する。

「なら、これでどうよ。その本に書いてあったこの説の根拠がね、セントサントリナ近郊の小さな町に『一人のクーウェ二族が王はエメラルダ島に渡った、という話しを広めた』って文献があったんだって」

「トマリの先祖、いや……違うか。トマリの幼馴染の先祖とかいう奴だな？」

アルフレートの感嘆の声。わたしは頷きつつも考える。問題はその昔のクーウェ二族が語ったのは、文献だと『アンリ王の居場所』なのだ。トマリの言う財宝の鍵なんて話ではない。

しばらくテーブルを指で弾いていたアルフレートが顔を上げる。

「アンリ幽王は財宝を持って島に渡った、って説があるんだっただけじゃあ、あの玉はエメラルダ島への鍵なんじゃないか？」

「そっか！そうなるね」

わたしは手を叩く。きつとクーウェ二族の先祖の男は『財宝』と『鍵』の話は自分の身内にしか話さなかったんだ。盛り上がってきた空気にまたしてもセリスの質問がかぶさる。

「玉の力で島に渡れるの？海に投げ入れたら嵐が止むとか？」

「そ、そんなの知らないわよ。……あ、でも王弟もエメラルダ島にいる、なんて噂もあるんだっけ。じゃあ王族には伝わってる島への

渡り方なんていうのもあるのかな？」

わたしの言葉にアルフレートの顔が何故か大きく歪む。

「王弟がエメラルダ島にいる？そんな話は聞いてないぞ？」

あれ？言ってなかったつけ。わたしは頬をかく。アルフレートがど
んどん顔を近づけてくるので、わたしは身を引いた。

「誰に聞いたんだ」

「ファムさん」

「呼べ」

ふんぞり返り指を振るアルフレートを見て思う。アルフレートって
国王より偉そうだよな。

わたしが立ち上がり扉に向かおうとした時、ちょうどノックの音が
する。しかし顔を出したのはファムさんではなく別の侍女の女性だ
った。黒髪をみつあみにした女性は扉の前にいたわたしに目を大き
くしていたが「そろそろお食事ですけど」と口籠る。

「そいつでいい。こっちに來てくれ」

アルフレートのとんでもない横柄な言い様にこっちが気まずくなる。
案の定、女性は困った顔でもじもじし出した。

「質問に簡単に答えるだけでいい」

「は、はあ」

アルフレートの顔を見ながら女性はおずおずと近づく。

「なんだ、まだ若いな。まあいい、国王の弟は知っているな？」

それを聞いた女性は「え」と声を漏らした後、わたし達の顔を見回
す。その顔には「何なんだ、この人達」と書いてあった。

「王弟が国王暗殺未遂の事件を起こした後、エメラルダ島に行った
話があるらしいな。知っているか？」

真顔で見つめるアルフレートに女性は部屋をきよきよと窺った
後、口を開く。

「あの、私が話したとは言わないで欲しいのですが」

「もちろん、約束しよう」

「ありがとうございます。……えーと、誰が言い出した話なのか

は分かりません。きっと城で働く者、誰に聞いても同じだと思えます。噂が開始めたのは王弟が何所に幽閉されたか、なんて話しが全く出ないのが原因だと思うのです」

この話しにアルフレートは満足そうに笑った。

「なるほど、何所にいるか分からないからエメラルダ島、ね」

「はい。それに……この国の何所かにいるなら王太后様が放っておきそうにないですし」

これにはアルフレートも「確かにあのばあさんなら通い詰めそうだな」と呟く。侍女の女性も頷いた。

「あとは……昔の王様でいたらしいじゃないですか。エメラルダ島に渡ったって人が。それからっていうものこの国では、王室から出た重罪人っていうとあの島のイメージが付きまとうんです」

「アンリ幽王？」

わたしが聞き返すと侍女は頷く。わたしはなるほどね、と息を吐いた。

アルフレートがわたしに視線を送ってくる。わたしが食事に向かうことを告げると、侍女は頭を深く下げて部屋を出て行った。アルフレートが小さく笑い出す。

「自分が話したとは言わないで欲しい、ねえ。あの女、きっと仲間の元に行ったら自分からぺらぺら喋りだすぞ」

その言葉にわたしにも彼女がお茶うけにでも、とこの面白い話を嬉々として仲間に話す様子が想像出来てしまった。

城に来た一日目と同じ、広いホールのような食堂に通される。奥の席にエミールが座り、護衛のように一步引き、柱の傍にるのがブルーノ、ヴォイチェフ。昼間と違って機嫌の良いフロロが椅子に飛び乗った。

家庭で作る料理とこういったプロの職人が作る料理で、決定的に違うのは見た目だな、と目の前の色鮮やかな料理に思う。

「母の誕生日まであと六日です。会の準備も整いつつありますから、是非楽しみにしててください」

グラスを傾けながらエミールが微笑む。

「皆さん、退屈してないといいですが。湖もこんなに早く引き上げる事になってしまつて」

「あ、大丈夫、全然退屈じゃないよ」

わたしが返すとエミールは「そうですか」と安心したように笑った。そしてブルーノの方へ視線を動かす。無表情の仮面を被った男が前に一步踏み出した。

「別荘を襲った集団を城の兵士が追っている。情報が入り次第、君達にも伝える」

「あ、どうも」

デビスが呆けたような顔で返す。こっちも独自に追ってます、とも言えない。何だか妙な空気になってしまった。それを破るようにセリスが口を開く。

「王妃様も国王もいつご飯食べてるの？」

テーブルを示しながら尋ねる。暗にこの場にいないことを指してるのだろう。

「来賓がいない時は自室で取ります。定期的に一族で食事を取ることも、父から誘いがあれば一緒に取る日もありますけど」

エミールの言葉に皆の顔がお互いの方へ動く。なるほど、根本的な

考えが違っただ。両親と食事取らないなんて、王子可哀想……というのがそもそも庶民の感覚なのか。

その後は他愛ない会話をするのみで食事が終わり、名残惜しそうなエミールに就寝の挨拶を貰って部屋を出る。廊下と階段が交わるころまで出ると、デイビスが振り返り全員に告げた。

「飲んでくる」

はあ？という声上がる中、デイビスは廊下の先を指差す。

「昼間、兵士の奴に誘われたんだよ。何か面白い話も聞けるかもしれないし。お前らも来る？……って飲めないか」

「私は飲める」

「俺も飲める」

アルフレートとフロロが手を上げる。

「じゃあ来いよ。お酌してくれるような女の子連れてきてくれよ、って言われたんだ。誰か来ないか？」

「いやよ、そんなの」

セリスが顔を歪めて即答した。サラも嫌そうな様子だ。じゃあわたしが行こうかな、と自分の顔を指差す。

「……うん、まあいいか」

気になる沈黙の後に曖昧な返事をするデイビス。何それ、むかつくわね。

結局、兵士の詰め所とやらにお邪魔させてもらうメンバーはデイビス、ヘクター、アルフレートとフロロ、そしてわたしとなった。

「お酒の席に行くなんて心配だわあ。飲ませないでよ？」
ローザはわたしの顔を見ながら渋い顔だ。

「大丈夫だよ、俺もいるから」

そう答えるヘクターに更に顔をしかめる。

「アンタも飲まないでよ？酒の勢いにまかせて変なことしようとか
そっいう……」

「そ、そういう目で見てたんだ……」

ヘクターががっくりと肩を落とす様を、妖精二人がにやにやと見ていた。

何か文句のありそうなアントンが部屋に戻る組に引つ張られて階段を上がっていくのを見送った後、わたしはフロロの肩を突く。

「何か機嫌いいわね。うまくやったってことね？」

その質問にフロロはにやっと笑う。そして「早く出ようぜ」と先を指差した。それを受けて全員が早歩きになる。死角が無いように配備された兵がちらちらとこちらを見ていた。

本殿を出て夜空の下に出る。兵士の影は途切れないが、屋内と違って声は届かないだろう。

「で？ヴォイチエフの事だろう？」

アルフレートがヘクターに肩車させたフロロを横目に見る。フロロは何かおかしいのか鼻で笑うと声を潜め、話し始めた。

「あの野郎が変な動きするパターンが読めてきたんで、それが見えてきたらあえて撒かれた振りしたんだ。そっから……まあ言いにくい場所使って探っていったら、あいつが妙な場所に滑り込むのを見たんだな」

「何所に？」

聞き返すわたしにフロロは更に声を小さくする。

「ブルーノの部屋だ。……バカ！声出すなよ」

わたしとデイビスの息を吸い込む音に、フロロは素早く反応して釘を刺す。

「ふうん、じゃああの神経質そうなウサギは除外か」

アルフレートが面白そうに呟き、雲の流れの速い空を見上げた。「なんでだ？」と聞くデイビスにまた視線を戻す。

「あの胡散臭いカエル男はどう見ても身の回りの世話任せるような従者じゃないだろう？普段は……まあ隠密部隊が何かにいるんだろうが、そんな奴をわざわざこっちに引つ張ってきたのはなぜだ？」

「……護衛だ」

ヘクターが呟く。

「そう、アントンは馬鹿だが腕は有る。それを軽くあしらう奴から我々を守る使命があるんだよ。それを命じたのがウサギってことだ」

「で、でも……」

わたしは反論しようとした口を閉ざす。そうか、城に滞在することをおく思わないのは犯人だけじゃない、って分かったはずなのにな。わたしの脳裏にブルーノの歩く後姿が浮かんでいた。

城の正門、西側にある細長い塔を見上げる。昔からの城塞と同じく見張り台を兼ねているらしい。デイビスが強いノックをした後、遠慮無く木の扉を開いた。

中の明るさに一瞬目を細める。扉付近にいた甲冑姿の兵士が手を上げた。

「おう、お前らか。上行けよ。もう始まってるぜ」

その口調にデイビスとヘクターが既に随分と打ち解けているのかが分かる。

「俺も早いとこ参加したいぜ。二日連続の夜勤だなんてついてねえ」兵士は欠伸びながら外へ出て行ってしまう。他にも休憩中らしい兵が兜だけを脱いだ状態で、タバコの煙をくゆらせているその後ろを通る。言われた通り上へと向かう階段を上がる中、フロロが小声でデイビスに話し掛けた。

「もうこんなに馴染みになってるなんて、やるじゃんよ」

それに答えるデイビスも声を潜めている。

「……傭兵や城勤めになるにはどうするか、っていうような『相談』を持ちかけたんだ」

「なるほどね、筋肉ダルマには先輩面させるのが一番良い手だ」偉そうなシーフの声にデイビスとヘクターは苦笑した。

階段を上りきるとすぐに扉がある。狭い空間にあれこれ詰め込んで

いる造りなのだ、と思う。扉を開けるとむわつとした熱気が肌を襲った。お酒などの匂いもあるが、男達の集まりという異臭の方に身構えてしまう。

「おお！来たな」

「おー！待ってたぜ」

「エルフだ……」

という声が次々に沸いた。狭い円形の部屋に十人以上の兵士がいるように思われる。非番なのか鎧兜ではなく、ラフなシャツという姿だ。木のテーブルには既に空いた瓶がいくつも並んでいる。その割には赤い顔が少ない。全員見るからにお酒に強そうだもの。

アルフレートとフロロが気を配って……というわけでは無いのだろうが、ずかずかと奥へ行き、わたしはヘクターとデイベスに挟まれる形で手前の席につく。

「兵士になりたいなんて言ってたけどよ、お前ら冒険家目指してるんだろ？」

綺麗な角刈りをした兵士が座るなり尋ねてきた。

「いずれ、ですよ。そりゃあやるだけやってみるつもりだけど、そういう道も考えとかなきゃ」

答えるデイベスは兵士は笑う。

「まあな、冒険者っていうのはありゃ一握りの運が良い奴が続けられる職業だ。俺達の中にも冒険者学校出身の奴もいるぜ」

そう言つてグラスの中身を飲み干し、再びにかつと笑う。中々身に沁みる言葉だ。情報収集の目的でなくとも普通に楽しめそうな雰囲気、わたしは肩の力を抜いていった。

「あとは仲間とは綺麗に別れるべきだ。後々まで協力してもらえないように、な。外部にも仲間がいるっていうのは良いことだぜ」

そこまで言い終わるとちらりとわたしを見てくる。

「彼女は？」

「彼女も一緒に、です」

指差す兵士の男にヘクターが即答した。

「宮廷魔術師みたいなやつを考えてるのか？それだとこの城じゃあ
厳しいかもな」

男が意味ありげに笑うと、隣りに座る黒髪をきっちり撫で付けた男
が声を上げて笑った。

「うちは厳しいな！なんせヴェロニカがいる。この城の魔法部門の
お局様でよ、ヒステリーが酷いんだ！」

そ、それは嫌かも……。その前に冒険業を辞めるような事態が訪れ
て欲しくないけど。

そこから自然と城内に住む人間の話しになっていく。間に自己紹介
を挟みながら彼らの話を聞いていく。角刈り頭の一際大きな男がヤ
ニック、黒髪の二枚目な雰囲気の方がアルバン、彼等の向かいに座
る金髪のやや物静かな雰囲気の方がライアンというらしい。ここ
らの会話に参加しているのがこの三人。あとはアルフレートとフロ
口の珍しい異種族コンビに興味を持ったようで、二人に話し掛けて
いた。

暫くの間、ヤニックとアルバンの間で厄介な王室お抱え魔術師の話
が続く。つまみのナッツを頬張りながらヤニックがぼやいた。

「今言ったヴェロニカは王太后様のお気に入りなんだ。だからでか
い顔してるものの、現王にも取り入ろうと必死だな。なんせグレー
ス様がいなくなった時を考えると、後ろ盾が無くなっちゃう。まあ
王太后がすぐ亡くなるなんて事態もなさそうだが」

「先王の奥様は未だに元気みたいです」

わたしの質問に、

「元気も元気！ありやあエミール様の孫の代まで見るつもりだぜ！
風邪一つ引きやしねえ」

「先王も歳は歳だったが、崩御の際は皆言ったもんだよ。『グレー
ス様に吸い取られたな』ってな」

そう言っただけとヤニックとアルバンは大口を開けて笑う。ヘクターとデ
イビスが顔を合わせるのが分かった。

「そのヴェロニカって魔術師をお気に入りってことは、グレース様

は魔術に興味があるのかしら？」

急な話題の転換は不自然か、ともう少し引つ張ることにする。ソー
サラーらしい食いつきにブライアンが眉を上げ、肩をすくめた。

「嫁への対抗心、って感じたけどな、俺は」

「はあ？」

思いがけない答えにわたしは目を丸くして金髪の兵士の顔を眺めて
しまった。

「それって王妃様も魔術の類いに興味持ってる、ってこと？」

デビスの問いにヤニツクが苦笑しながら首を振る。

「違う違う、ブライアンが言うのはブルーノ様の事だろう？あの異種族の御付きと一緒に城に嫁いできた時は、結構な衝撃だったらしいからな」

「え！？」

かなりの大きさの声で驚いたからだろう。皆がわたしの顔を見る。

内心焦りながら、わたしは取り繕う言葉を並べる。

「いや、ブルーノってエミールの御付きだと思ってたから、まさか王妃様の嫁いできた時代からいるなんて思わなくて」

エミールの歳を考えればそう不自然なことではないので、少々苦しいか。しかしアルバンは不思議な色のお酒を自分の前にあるグラスへと注ぎながら大きく頷いた。度数の高いお酒なのか、指の関節で入れた量を測っている。

「ファルテ・ヘグナ……って種族だったかな？人間より長寿の種族だ。何でも王妃の子供の頃からいるんだってよ」

そういう流れがあったのか。でも、じゃあ今日の出来事は何だったの？ブルーノが言った『嫌悪されているのは私だ』というのは嘘だったんだろうか。わたしに気を使って？まさかそんなわけが無い。何かきつかけがあったはずなのだ。挨拶もしなくなるような出来事が。

話しの続きを促したくしょうがない衝動に駆られるが、なるべくがついている雰囲気が出ないよう、でも王妃の話からは逸れないよう言葉を選んでいく。

「王妃様は……どこのご出身なのかな？やっぱり王族同士の結婚なの？」

「いや……まあ王族みたいなもんか。騎士団領の総長様、ブリーゼ

マイスター候の一人娘だ」

ヤニツクの答えにわたしは興味深いよう何度が大きく頷いて見せる。騎士団領、とは東の大陸にあるサントリナのお向かいさんだ。すぐ下にアルケイディア帝国があり、帝国とローラス・サントリナの強国との戦争を防いできたのが、この中立国家『デッエン騎士団領』の存在だ。その総長の娘とサントリナの国王が結婚、ということかなり色々な意味があるのだろう。

わたしは手渡されたオレンジジュースを飲みながら、現代史には少々疎いということを反省した。

「ファルテ・ヘグナって種族は遙か東の地にいる種族なんだそう。騎士団領でも珍しいらしいが、東の大陸にはこっちに比べたらまあまあ、見掛けることもあるんだってよ」

ブライアンがそう言いながら少々赤くなってきた頬を撫でる。隣りにいるデビビスがさつきから馬鹿みたいにグラスを空けているのが心配になってきた。

「……で、さつきブライアンが言った『嫁への対抗心』っていうのはだ、ブルーノ様がサントリナに着た時に城にいる人間も国民も、あの異種族に惹き込まれたんだよ。あの見た目だもの、若いのからはあさんまでそりゃあ人気だったんだぜ？」

「『だった』？ そりゃ語弊があるだろ。ブルーノ様は今でもサントリナの女の子のアイドルだ」

ヤニツクの台詞をアルバンが笑いながら訂正した。

「それが気に食わなかった姑が、人間だが同じように見た目が良かった腕利きの魔術師を可愛がり始めたんだ。あ、こっちは過去形な『見た目が良かった』、今は性格がそのまま顔に出ちゃったオールドミスだ」

ヤニツクはそう言うとき大きな口を開けて笑った。辛うじて外の空気を流し込む役割の小さな窓からぬるい風が入ってくる。次の話題に流れてしまわないよう、わたしは何気ない振りで質問を続けた。

「嫁ぐお嬢様に御付きとしてついて来るぐらいだから、ブルーノは

騎士団領でもそれなりの地位だったのかしら」

これに答えたのは低い呟きのような話し方をするブライアンだった。「ブリーゼマイスター候の右腕だったらしいぜ。候が拾い上げたのか、それより前の時代から騎士団領にいたのかは知らないがね」

「……でも、ブルーノと王妃様ってあんまり仲良くないみたいだけど」

わたしの言葉に三人の兵士はこちらを見る。わたしは慎重になりながら今日の出来事を話すことにした。

「中庭で二人がすれ違ったところを見たんだけど、真横を通ったのに何も挨拶が無くて」

「ああ、やっぱりそう思う？」

ヤニックはそう言った後、いかにも『ここだけの話』というように不敵な笑みを浮かべながら小声になる。

「エミール様が生まれた時期にはもう冷え切ってたみたいだ。それで護衛する相手が息子に移ったってことだろうけどさ。……噂じゃあよ、ブルーノ様が王妃の懷妊中、国王に色目使ったとか、そんな話もあったんだぜ！」

「な、な、な……」

わたしは顔が赤くなつた後、絶句する。……男色つてこと！？

「あ、本気にすんなって！女の子はこういう話し好きなんじゃないの？」

的外れなヤニックに、仲間の二人も呆れ顔だ。アルバンが首を振る。「馬鹿だなあ、お前。メイドの遊びの話を混ぜるなよ。大体、男色家に息子預けるなんて危なくて出来るかつーの」

言われてみればもつともだ。この流れでからかわれたのだと気付いたが、何だか妙にほっとしてしまった。

「……まあ相手がブルーノ様なんていうのは冗談だとして、国王がフラフラお遊び、なんていうのはあり得ないと思うね、俺は」

「へえ……」

アルバンの台詞にわたしは失礼ながら「意外だ」と思っていた。王

室という側室をおいたり、貴族様といえば交友関係が派手、というイメージはどうしても持ってしまう。

「サントリナ王室は、特にストレリウスⅡサントリナ家は代々『お堅い』人が多いんだな。現国王のフェリクス様も例外じゃないよ。側室なんてもんが存在した時代もあったそうだが、確か二代くらいで無くなっちまったはずだ」

アルバンの説明にライアンが少々愚痴っぽく呟く。

「そうそう、直系じゃないにしてもレイモン様みたいのが特殊なことだよ」

その言い方からして彼ら兵士達からの人望は薄いようだ。微かに寄っているライアンの眉間の皺を見た。

「エミールのはとこなら湖の方で見たわ。確かに派手な雰囲気ね、色男で」

朝日を浴びる姿を思い出す。逞しい体躯に揺れる金髪は遠めから見ても美男子の雰囲気だった。アルバンがくつくと笑い出す。

「レイモン様ならサントリナ中の町、村に一人ずつ子供がいても驚かないね」

「ありゃあ、じい様に似たんだよ」

「じいさま？」

ヤニックの言葉にわたしは問い返す。彼は大きなグラスを空けてしまうと頷く。

「そう、先王の妹君であられるルーズ様の旦那。もう八十近いじいさんだけど、まだ生きてるぜ。城には来ないけどな。ルーズ様は若い頃、相当泣かされたらしいねえ。何でも太陽のような男だったんだと」

わたしとヘクターは顔を見合わせる。太陽のような、と。こっちの方が王様みたいなイメージだ。

「ルーズ様の方に似た息子のユベール様は、ある意味ここの王室の人間らしい人だよ。真面目なところかな。病気で更に枯れ枝みたいになっちまったけど」

ヤニツクはそう言つと演技掛かった仕草で首を振る。「ふー」という溜息で嘆いてみせる様が面白い。それに同調するようにアルバンもぼつり、ぼやく。

「ユベール様こそ、息子が父親そっくりな事をどう思ってるのかねえ……」

「中身だけじゃなくて見た目もそっくりなんだ？」

ヘクターはそう言つと「会つてみたいな」と呟いた。太陽のような男の人、なんて聞くとわたしも間近で会つてみたい。湖で見た姿はアレだったけど、近くで見ると印象も違ふのだろうか。にしても、その太陽のような男を顎で使う美女、というのもまた興味がある。ヤニツクが頷きながら答える。

「両方の若い時を知ってるじいさんばあさんに聞くと、そっくりらしいな。まあもうすぐ嫌でも会えるぜ。王妃の誕生会前に来るだろうから」

「前日から来るの？」

「賭けてもいい、もつと前から来るぜ」

わたしの問いに答えたアルバンは前に座るブライアンと目を合わせ、意味深な笑みを見せる。その様子を見たヤニツクは少し咎めるように、二人に向かって手を振った。そしてわたし達の方を見る。

「普段からそうなんだよ。何かって理由をつけちゃ城に入り浸ってる……これは本当に口外するなよ？」

後半を真顔で言うので、わたしもヘクターも大きく首を縦に振ってみせる。ヤニツクの声が低い呟きのようなものに変わった。

「よく考えてみな。エミール様が第一王位後継者であることには変わりないが、レイモン様は現段階じゃその次に王位に近い人間なんだ」

ぞくりとした。わたしは隣りにいるヘクターの顔を見るのを、なんとか堪える。

国王の兄弟達には子供がすでにいないのだから、若い王族というとエミールの他にはレイモンしかないのだ。だって王弟は既にいな

いのだし、イザベラの子供は夫と共に亡くなっている。

ファムさん達が語った王室関係者を頭の中でリスト化して考え直すが、他は国王より年上ばかりだ。どうして気付かなかったんだろう。ごん！という大きな音に飛び上がりそうになる。横を見ると赤い顔をしたデビスがテーブルに突っ伏し、がーがーと豪快な寝息を立てていた。

「大人しいと思ったら潰れやがったな」

ヤニックは舌打ちするが、その顔は笑っている。

「当たり前だよ、この短時間にこれだけ空けやがった。タダ酒だと思ってかつ込みやがったな」

アルバンが空の瓶を振って見せた。い、いやしい。お酒が入ってないのにこっちが赤くなってくる。

「……俺しか担いでいくやついないのに」

ヘクターが珍しく嫌な顔をして溜息をついた。

「戻るか」

アルフレートが立ち上がる。顔つきからして満足いく結果に終わっただけだった。

「なんだか関係ない話ばっかになっちゃまって悪かったなあ、また来いよ」

ヤニックの言葉に「十分聞けた」と答えそうになるが、そういえば表向きのお題は「城勤めになるには」だったな、と思い出す。

「うっん、楽しかった。皆はまだ飲むの？」

「当たり前よー！まだ日付も変わる前の時間じゃねえか」

元気の良い返事だが、全員顔が赤い。もう一度お礼を伝えると、陽気な兵士達の詰め所を後にした。

「この恥さらしが！」

ベッドの上でいびきをかくデイビスをセリスが足蹴にする。デイビスは嫌そうな顔で横を向くものの、起きる気配はない。

「まあまあ……お説教もお仕置きも明日でいいわよ」

わたしは鼻息荒い彼女をそうなだめる。セリスは髪をかき上げた。

「当たり前でしょ、意識無い相手にやっても面白くないわよ」

「……そう」

怒りの治まりを見ると二人でデイビスの部屋を出る。向かうのはサラの部屋。今日一日、ばらばらに行動していたのでその報告会だ。少々眠いが仕方が無い。

廊下の角を曲がるとちょうどサラの部屋の扉を開けるところのフロ口と目が合う。

「おす、もう皆揃ってるってよ」

そう言うフロ口と三人で部屋の中に顔を出すと、椅子に座り本を読む姿のサラがいた。傍らにあるテーブルの上にはフローラちゃん为首を傾げている。サラがにっこり微笑んでそのフローラちゃんを指差した。

フローラの中に入るとアルフレートを筆頭にメンバーの半分が揃っている。後の半分は各自の部屋で待機中だ。

床に円を作って座るメンバーの中、一番奥にいるトマリを見る。たった一日の軟禁でも大分憔悴しているようだ。

「風呂とトイレ、済ませといたよ」

イリヤのトマリを指差しながらの報告に「ペットかよ」とセリスが突っ込んだ。

「旦那ー、まだ出られないのかよお。俺もう限界」

顔を覆うトマリにアルフレートが舌打ちする。

「しょうがないだろう、まだ石の秘密が分からないんだ。大体出て困るのはお前なんだぞ」

「そっぴゃ、あの黒集団は出てこないんで？」

トマリがはつと顔を上げた。わたしは頷く。

「さすがに城の中じゃ暴れられないでしょ。今日、わたしが町に出た時も大丈夫だった」

それを聞いてトマリは「いいなあ」とぼやく。人間だったら無精髭とクマでも出来ていそうな顔に少し気の毒になる。

「で、誰からいく？」

わたしが輪の中に投げかけた言葉にセリスが手を挙げた。

「私とイリヤからで。……っついても大した報告無いんだけど。

イリヤがビビツちゃって『ただの人』になつてたから」

酷い言い様にイリヤが肩を落とす。それを横目に見ながらセリスは続けた。

「ぶらぶらとお城の中見て回るだけになっちゃったのよね。もちろん入れないところも多かったし。噂の礼拝室は見せてもらえたわ。

想像よりでかかった。ちよつとした教会つてかんじ。あと聞いてた通り、立派なフロア様の像と……手には何も無かった」

それにトマリが反応する。「ここにあるもんねー」と石の玉に頼ずりするのをセリスは冷めた目で見ていた。

「使い道が分かんなかったらただの石ころよ。あとは蔵書室があつたわよ。ここは明日サラと一緒に探ってみようと思つて」

セリスが「おしまい」と言うと、フロロがイリヤを突く。

「アンタ本当に何もしてないんだな」

「……俺も自分の身は可愛いんだ」

まあ、あまり責める気にはなれないな、と思う。皆が再び視線を合わせる中、ローザが手を挙げた。

「じゃあ次はあたし。リジアには言つたけど家のコックのお知り合いがここで働いてるっていうから、会いにいったのよ」

イリヤが「家のコック……」と案の定な反応を見せる。

「そ、でも会いに行つてびっくりよ。その人料理長だつて言うんだもの！だからあんまり時間取れなくて……。急に行つたのはこっちだし、無理も言えなくてねえ。個人的には面白かつたけど、大した話し出来なかつたわ」

「何を話したんだ」

アルフレートが舌打ちしてイライラしたように足を揺らす。オカマの話しが長いのは今に始まつたことではないというのに。

「んもう！気が短いわねえ。……王室の方の好き嫌いよ。もちろん食事のね」

全員が微妙な顔をする中、意外にもアルフレートは身を乗り出す。

「どんなだ？」

「えつとね……正直な感想としては『結構好き嫌い多いのねー』つて思つたわね。王子と国王様は好き嫌いまで似てるんですつて。二人とも野菜が苦手なもの多いらわよ。王妃様も日によつて変わるんで困るとか何とか。イザベラが細かい感じだつたわあ！見るからに神経質そうなものね！鳥が好きだけど皮が少しでも残つていたらもう食べないとか、トマトは火が少しでも入ると駄目！とか、珍しいわよね？あたしが一番嫌だなーつて思つたのは王太后のグレース様ね！とにかく味にうるさいのよー！昨日と同じ味付けなのに『辛い』つて手を付けなかつたりとか、サラダを所望したのに『冷えるから』つて不機嫌になるとか……王室の方相手つてやっぱり大変よお」

ぺらぺらとよく喋るなあ、と感心してしまった。そういえばレオンも初めて会つた時はレストランでケチつけまくつてたっけ。彼の場合は神経質になつてた時期なのもあるけども。

「レイモンもよくここで食事取るらしいけど、あれこれ注文するくせにおしゃべりに夢中で味わってるんだか、つてばやいてたわね。まあ彼の場合は全部食べるだけ良い、とも言つてたけど」

「レイモンが城によく来る、つて話しは今ちようど聞いてきたわ」

わたしの返事にローザは目をぱちぱちとさせる。

「じゃあ今度はリジア達の話しお願い。昼の後から全然聞いてないもの」

そつえばそうだった。わたしは頭をかく。アルフレートとフロロの顔を見ると、今日一日の長い話しを聞かせることにした。

翌朝の朝食の席、アントンが急に低い呟きを漏らす。

「ローラスに帰りたい」

呆気にとられると同時にわたし達だけの席で良かったと思う。

「……確かにそろそろお家が恋しいですねえ。まだ五日もあるなんて信じられない」

ヴェラがぼーとした顔で頷いた。ナイフにささった目玉焼きの黄身が皿に斑点を作っている。ぼたぼたという音で気がついたのか「おっと」と言つてすくい上げた。

「購買のミルクパンが食べたい」

アントンが再び真顔のまま呟く。

「学園の購買の？アレあんた『まずい』つて言つてたじゃない」

セリスの問い掛けにもアントンは「食べたい」と返すだけだ。これは重症だな。

「意気揚々と乗り込んできて『ミルクパン食べたいから帰ります』はねえだろ」

デビスが呆れたように言うのには同情の念を送ってしまう。彼が意気込んだ経緯にはアントンの怪我があつたというのに。

「それどころか失礼よ。元々は王妃様のお誕生日会に招かれたから来たのよ？」

サラがフォークを置いて身を乗り出すとイリヤが「ああ、そうだった」と呟く。何か駄目だな、この人達。

どこか抜けたデビスパーティの会話を聞きながらの食事も終わり、ばらばらに席を立つ。アルフレートがフロロを手招きし、それをフ

口口が嫌そうな顔で見る、なんていつもの光景を横目に部屋を出ようとすると後ろから声を掛けられた。

「リジア」

ヘクターの少し囁くような声にときどきとするが、壁際に寄ると彼の話を聞く。

「今日も町に出ないか？」

「いいけど、どうしたの？」

「……ちよつと付き合つて欲しいんだ」

にやにや顔のローザとセリスがヘクターの後ろを通っていく。恥ずかしいけどやばい、嬉しい。心臓が口から出そうで上手く発声出来ないわたしは、黙って頷いた。

「じゃあ後で」

そう言つて部屋の方向へ去つていくヘクターを暫し見届けると、わたしも自分の部屋へと走る。何度か躓きそうになりながらも部屋に着くと、ドアを開け放った。

中にいるのはベッドメイクを終わらせた直後らしきファムさんの姿。いつもの冷静な顔に怒涛の勢いで今しがたのことを説明していく。

「デートよ！」

「デートですね」

「デートだ！」

「素晴らしい」

叫ぶわたしと静かなファムさんの声が繰り返される。一度頷き合うと、わたしは衣服を詰めたカバンに飛びついた。

「ああ、そのカバンの中身はこちらに」

そう言つて立派な衣装棚を差される。ぼさつとしてる間にやってくれたらしい。本物のアンティークの衣装棚にわたしの衣類では釣り合わないが、今気にする問題ではない。

「ありがとう……着替えて行くのって気合入りすぎで引かれるかな！？ 良いよね、別に！」

上の段のハンガー掛けから衣服を引っ張り出すわたしの横から、フ

アムさんが黙って手を伸ばしてくる。下の段の引き出しになっている部分をがらつと開けると、わたしの持ってきた下着が並んでいた。「気合を入れるならこちらから、かと」

「……それはちよつと先走り過ぎじゃないかしら」
どうにか赤面を抑えながら言うが、ファムさんはびしりとわたしの顔を指差した。

「リジア様、こういうのは実際に『役立つか』どうかは別なのです。問題なのは『こんなところから気合を入れている！』という過程なのです」

「おお……何か説得力あるわね」

わたしは思わず唸る。少し考えると引き出しから自前の下着を取り出し、ベッドに並べていった。

「実はわたし『使い道』は無いけど下着は好きなのよ。上下揃いは基本よ！どう？かわいいでしょ」

わたしは胸を張りながら並べた下着類を指し示す。が、ファムさんは眉間にしわ寄せた。

「なんだかいかにも女の子は好きだけど男受けはいまいち、な下着ばかりですね」

ファムさんの言葉が胸にさくつと刺さる。そこを突かれると何も言い返せない。

「……まあ今回はしょうがないでしょう。せめて服のラインに響かないものにするべきだと思いますけど」

ファムさんはフリルの多い下着を持ち上げて首を振る。そして打って変わった素早い動きで振り向くと、再びびしりとわたしの顔を指さす。

「では最低限の工夫で男を虜にさせる魔法を教えて差し上げます。

……実はリジア様はそれをお持ちなのですよ？」

肩を掴み、耳元で囁く声にわたしは目を瞬かせた。

「……何だろう？わたしにも使えるお色気術ってことかしら」

チビで胸が無くてもしけますかね？と余計な事まで言いそうになる。

ファムさんはにっこりと微笑んだ。

「かなり強力かと。あなたは知らぬ間に仕込まれていたのですよ。それを今解放してやりましょう」

そう言って指の長い手がわたしの頭に伸びてくる。わたしは思わず目をつぶってしまった。

そんな人じゃないんです

待ち合わせ場所の一階階段下に来ると、ヘクターがわたしを見て目を丸くする。が、それも一瞬のことですぐに「行こうか」と足を進め始めた。

『第一段階』は合格、といったところだろうか。わたしは腕を組み、唸る。

ファムさんが言った魔法とは簡単な事で、単に『髪を下ろす』事だった。確かにわたしは普段から髪を結い上げていることが殆どだ。動き回るから、という理由と単にあれこれいじるのが好きだからなのだが、

『男性は単純に長い髪が流れる様がお好きですよ』
とファムさんは語った。加えて、

『顔を合わせた際にほんの少しでも反応があれば、それは魅了されたと思って大丈夫。褒める言葉が無くてもがっかりしないことです。逆に手放して褒めてくる男性には注意して欲しいですね。私はお勧め致しません』

とのことだ。しかしそれ程計算高くなれないわたしは手放して褒めて欲しかった。言って貰わないとどう思われてるか分からないじゃないか。

内心がっかりとしながらヘクターの後ろをついて行く。昨日と同じように城を出ようとすると、

「よう、お出かけかい？」

裏門の見張りをしていたのは眠そうな顔をしたヤニックだった。どうやらわたし達が帰った後も酒盛りは続いたようだ。

「若いのには城に籠りきりは退屈なんだろう？」

はは、と笑う門兵にヘクターは頭を振った。

「ちょっと用があるんだ。俺はこの町出身だから」

ヘクターの言葉にヤニックは目を見開くと、嬉しそうに笑う。

「なんだよ、そうだったのか。じゃあ同郷じゃないか」

まだ何か続けそうな様子だったが、後ろを気にするように伺うと「また飲もうぜ」と話しを終わらせた。

そのまま表に出ると、強い日差しに晒される。まだ乾いていない道を見るに、昨夜の雨は遅い時間だったようだ。

何も言葉が無いまま歩き出すヘクターに少し驚く。先程のヤニツクへの言葉といい、行き先は決まっているらしい。その展開にわたしは驚きと共に戸惑っていた。

歩く速度も少し速い。わたしは彼の背中を見ながらはや歩きになる。『一緒に歩いている時、何も苦勞が無ければそれは相手の優しさです。彼はあなたに合わせて歩いていきます。なぜなら身長差を考えても明らかに歩みの速度が違うからです』

ファムさんの話を思い出す。こちらは自信があっただけに、一気に浮かれた気持ちがいぼんできてしまった。いつもはそんな事ないんだよ、とファムさんに報告する時の言い訳を今から想像してしまう。綺麗な水の流れる水路にアーチ型の橋が掛かっている。そこまで来るとヘクターがこちらを向き、足を止めた。

「ごめん、一人でせかせかして。ちよつとぼーつとしてた」

苦笑する顔は少し緊張しているように見える。わたしに対して、というよりこれから先に待つものへ慎重になっっているように思える。今度はゆっくりと歩き出す。町の景観を眺めるわたしとは違って、ヘクターは真っ直ぐ前を見て歩き続けていた。知っている町だから、いや知っている町だからこそ懐かしい町並みを見たりするものじゃないのかな。

暫く道なりに歩いていくと明らかに住宅街へ入る。一般住宅も花を置く家庭が多いようだ。日差しが関係しているのだろうか。

ヘクターが一軒の家に寄って行くのに気がついた。クリーム色のペンキを塗った木の柵に囲まれた、一際植物の多い家。屋敷の大きさはそれ程でもないが、空色の建物と白の窓枠が可愛い。

「俺のおばさんの家なんだ」

背の低い門を開けながらヘクターがわたしを見た。「そうなんだ」と答えながらもドキドキとする。まさか親戚と会うことになるとはドアのノックを鳴らし、暫し待つ。すぐに一人の女性が顔を出してきた。四十代前半くらいだろうか。ショートにした金髪の美しい人だ。少しヘクターにも似ている。羨ましいことに美形一族なのだろう。

女性は目を見開いてヘクターを見る。

「まあまあヘクター！あなたいつも急に来るのね！」

「ごめん、忙しかった？」

「そんな事はどうでも良いわよ！それよりもっと頻繁に顔を見せて欲しいわ！」

そう言いながら中に入るよう扉を開け放つ。わたしの顔を見ると、

「こんにちは、可愛いお嬢さん！おばのコーリンよ」

と軽く抱き寄せられた。少し似ているだけにドキマギする。背もわたしより大分高い。

「部屋、見ていってもいい？」

上に乗る階段に足を掛けながらヘクターが尋ねると、コーリンは大きく頷いた。

「当たり前でしょう？あなたの部屋、そのままよ」

それを聞いてわたしは理解する。階段を上っていくヘクターの後ろ姿とコーリンの顔を見比べる。少し振り向きわたしを手招きする姿に階段を上り始めた。

きいきいと木の音が立つ。そう、ここは彼の生家だったのだ。

白い壁紙の部屋には少年らしさが詰まっていた。隅に転がるサッカーボール、棚に並ぶ切れ味は期待できそうにないナイフ数本、壁に掛かった大きな世界地図。

「可愛い」

チェストの上に飾られていた犬のぬいぐるみを手に取り、感想を漏

らす。かなり不恰好だが顔に愛嬌がある。手作りだろうか。

「……子供の頃、同じクラスの女の子に貰ったんだ」

ソードを腰から外し、ベッドに立て掛けながらヘクターが答える。

「あー……そうなんだ」

と答えるわたしの顔は無理に愛想笑いを浮かべようとして、自分でも歪んでいるのが分かった。ヘクターがふ、と笑う。

二人して少し小さいサイズのベッドをソファに代わりに座る。綺麗に洗濯されたカバーの匂い。そして部屋の中も埃の匂いが無い。「そのまま」とコリーンは言っていたが、彼女が整えていることは明白だった。

「コリーンがこの家を買取ったんだ。『生まれ育った家無くすには、あなたはまだ若すぎる』って」

そう語るヘクターの雰囲気は普段のものに戻っていた。

「コリーンはうちのじいちゃん姪っ子。じいちゃんの妹の子なんだけど、この家を随分前から気に入ってて、俺の面倒もよく見てくれたんだ」

「それじゃあ、『もっと顔を見せて』って言うのも分かるね」

実際『母です』と紹介されても違和感の無いコリーンは、ヘクターの事が可愛くて仕方ないといった空気だった。

わたしはベッドの脇にある出窓から表を見る。花壇と植木鉢が並ぶ庭の隅に大きな犬小屋があった。

空になって長い様子と家の中に犬の気配が無い事に、わたしは尋ねるのを躊躇う。その時、頭に違和感を感じた。

「犬がいたんだ」

ヘクターがわたしの髪をいじる。何度も指通りを確かめるように絡ませる。ヘクターの言葉に予感する。これは彼の『核』だ。今まで触れたことのない、一番の本質が漏れ出している。

「親父が拾ってきた大型犬で、ろくに家にいないのに一番懐いてた」
そこまで言うとお出窓に腕を乗せた。視線は庭を見ているが、犬小屋を見ているのかどうかは分からない。

「どんどん体が弱っていつて、いよいよ危ないなって話しになった晩にいらなくなっただ。……じいちゃんの話しだと親父の所に行こうとしたのかもしれない、って」

寂しげに語る顔は初めて歳より幼く見えた。

「……初めて憎たらしくなっただ。『なんでこんな時くらいないんだ』って、初めて親父の事を憎んだ」
青い瞳がわたしを見る。

「おかしいかな？この町にいたくなくなったのも、この家に帰りづらいのも、犬の事を思い出すからなんだよね」

わたしは黙って首を振った。「全然」と呟くだけになってしまったが、ヘクターは小さく頷く。手がもう一度わたしの髪に伸び、指が微かに首筋に当たった。

『二人ともご飯食べて行つてー！』

階下から聞こえたコリーンの声にヘクターがびくりとする。そういえばさつきからいい匂いがするな。

「……いい？」

ヘクターからの問い掛けに「もちろん」と返した。

「やだ、あなた今お城にいるの？」

サントリナ城に滞在している旨を話すとコリーナは目を丸くした。

テーブルに並ぶパンは裏にある窯で焼いたのだという。

「まあ、ちよつと色々あつて」

そう言葉を濁すヘクターに「すごいわねー！」とただ感心していた。

「国王様にも会えるの？王太后のグレース様は元気なのかしら？そうそう、イザベラ様も今はサントリナ城にいらんだっけ？あ、パン美味しい？」

興奮気味に話すコリーナの質問に一個一個頷いていく。ヘクターがテーブルの席から見える台所を指差した。

「懐かしいね、あれ」

それにコリーナは振り返ると、笑い出した。

「ああ、あれ？あの鍋ね！……あのお鍋ね、ラナさんが一度派手に焦がして使えなくなっただけで、見た目が可愛いから、って飾ってたのよ。私も何となくそのままにしているのよね」

コリーナは笑いながらわたしに説明する。ヘクターが「ラナは赤ちゃんの名前ね」と付け加えた。二人の指す先にはキッチンとこちらを隔てるカウンターに置かれたホーロー鍋がある。

「確かに捨てるのは勿体無いくらい可愛いですね」

赤い鍋を見てわたしが言くと、コリーナは嬉しそうに笑った。

「でしょう？やっぱり女の子は話しが分かるわね！」

そう言い終わると「お茶淹れよう！」と立ち上がる。忙しないのは嬉しいからだ、と甘えることにした。

キッチンから鍋を移動する音とコリーナの声が聞こえる。

「しかしお城ねー！びつくりな出世だわ！」

「そういうのじゃないよ」

苦笑するヘクターにコリーナは声を被せてくる。

「何言ってるの！……でも王室もいつまでも騒がしいわよね。お世継ぎには欠かないっていうのに、相変わらず何かしら騒ぎが起きているんだから」

腰に手を当て、お湯が沸くのを待つコリーナにわたしとヘクターは顔を見合わせた。

「……なんかそういう話しあるの？」

何気ない雰囲気ではクターが尋ねる。コリーナはカウンターに肘をつくと眉を寄せた。

「王室なんてものの自体がそういうものなんだろうけど、いつも事件起こしてるじゃない。大抵は根も葉もない噂なんだろうけど。エミール王子がラグデイスの認定式で騒ぎ起こした、って話しが今は話題になってるわよ」

わたし達の空気に感じるものがあつたのか、コリーナは初めて見せる真顔になる。

「……単なる噂話よ？ 私みたいに真剣に受け取らない人間の方が多いんだから、あんまり気にしないで欲しいけど『レオン様が生きてる』って噂があるの」

「あー……」

わたしは呻く。その後、言葉を続けようとしたが何を言うべきか迷ってしまった。

レオンの事って言わない方が良いんだっけ？ 特に口止めもされていないから言っても良いのだろうけど。レオン本人が帰る気がないのだから、言っても言わなくても同じだろうとは思ふ。だからこそブルーノから何も言われなかったのだろっし。

「そのレオン様がラグデイスに現れて、エミール王子に王位継承権を主張したんだけど、王子が追いやって。話を聞くまでもなく追いやってたけど、どうやら本物だったんじゃないかって話しよ。なんでも王室に代々伝わる指輪を持っていたとかで、指輪だけを奪い取って町から追い出したんですって。それを面白おかしく『随分としたたかに育って』なんて言う人がいるのよ」

「それってエミール王子の事ですよね？」

「うん、そうよ」

わたしの質問に少々バツが悪そうになるコリーナに、逆に申し訳ないな、と思う。

わたしもヘクターも黙ってしまった。指輪の話しまで漏れているのだ。それが何とも言えないショックになっていた。エミールの言われようは権威ある者に対する平民の噂、という事であまり気にはならない。よくあることだろうとは思ふ。が、

「……そんな人じゃないけどな」

そう返すのが精一杯だった。

重い空気にするのも嫌だな、とわたしは席に戻ってきたコリーナに窯の事を尋ねたりして話題を変える。コリーナもすつきりとはしていないはずだが、親切に火の熾し方などを話してくれた。

テーブルに用意されていた昼食とお茶を片付けると、ヘクターがゆつくりと口を開く。

「コリーナ、親父の剣を持って行こうと思う」

コリーナはたつぷりと間を取って、その間ヘクターの顔を眺めると「そう」と呟いた。椅子から立ち上がる彼女にわたし達も続く。

「タウノが持つて来てから、物置に仕舞ったままよ。だから状態は良くないと思うけど」

そう言いながら玄関へ向かっていった。彼女について行きながら、「別に特別な剣じゃないんだ。ちよつと良いもの、ぐらいのものだよ」

ヘクターはわたしに言いながら苦笑した。『タウノが持つてきた』という事は本当に最期まで持つていた形見になるのか。

手入れが行き届いた植木の多い庭につくと小さな物置がある。先に着いていたコリーナが中をこそごとしていた。すぐに一本の剣を持つてくるとヘクターに手渡す。今、彼が腰に携えているものよりも一回り大きい。もしかしたら今まで使っていなかったのには身長の問題もあったのだろうか。

コリーナから渡された剣を鞘から抜くと、ヘクターは柄を顔に持つてきてから日に当てるように水平に構える。じつと刀身を見る姿は勇ましくてかつこいい。でもなんだか近寄り難かった。

「……うん、大丈夫。手入れすれば良くなるよ」

そう言うのと鞘に素早く仕舞う。ヘクターの動作を見終えてからコリーナは彼に語りかける。

「本当はね、あなたが冒険者になるって聞いた時に止めたかったの。でも今みたいな姿見るとおじさん達が止めなかったのも分かるわね」
「じいちゃん達は止めても無駄だと思ってるからじゃない？」

ヘクターはそう言つて笑つた後、コリーナに「そろそろ行くよ」と伝えた。少し不満そうではあつたがコリーナは、

「そう、なんだかあなた達も忙しそうだね」

と言つて息を吐いた。

「是非また来てね」

わたしに笑顔を向けるコリーナと握手する。通りに出てからも手を振っているコリーナに何度か振り返りながら家を後にする。角を曲がり、姿が見えなくなった時、ヘクターが口を開いた。

「……自分の気持ちの区切りもあるだろうけど、あんまり俺や親父の荷物があの人に残るのもコリーナの為に良くないんだ。もうあそこはコリーナの家なんだから」

そう言つて前を見るヘクターの顔はまたひどく大人びたものに戻つていた。

城まであと少し、という通りまで来ると隣りを歩く影が立ち止まる。

「……やっぱりもう少し町を見ていこうか」

その提案にわたしは全力で頷いた。

「どうする？旧市街の方行くと学園とかあるけど、ちょっと遠いかな。こっちの方だと俺がよく行つてたのは……」

ヘクターの話しにうんうん、と相槌を打っていた時だった。

「失礼」

わたしは一人の少年と肩がぶつかる。颯爽と立ち去る少年は背丈はわたしぐらい。ということは年下だろう。黒髪に黒のマントが揺れていた。

少年が通りから消えてしまつてからはっとする。慌てて懷を確かめた。

「……あつた」

自分の財布を指で探り当て、ほっと息をつく。スリに合うの二回目なんて洒落にならん。しかし考えすぎで良かった。

あまり長居しても文句言われそうだ、と夕方には城に戻る。見張りの変わった裏門を通り宮殿に帰ると、フロロの部屋に向かう。わたしの部屋の一階下、階段からすぐの部屋をノックすると、

「……おう、お帰り」

にやついた顔がすぐに出てきた。

「兄ちゃんからデートのお誘いとは俺も予想外だったね。てつきり

……」

「そういう話をしに来たんじゃないんだ」

ぺらぺらと憎らしい口を利くフロロの話しをヘクターが遮る。「分かってるよ」と言つてフロロは肩をすくめてみせた。

「ちよつとぐらいからかってもいいだろ。……俺のところ来たって事は何か聞いてきたな？」

飲み込みの早いシーフにわたしとヘクターは頷く。部屋に入ると三人でテーブルを囲む。

ヘクターの生家、コリーナの家に行ってきたというのにやにやしていたフロロだが、話が町で流れる噂になると眉を寄せて厳しい顔になる。

「ちよつと待てよ。なんで『指輪の話』まで漏れてるんだ？アレ、俺らしかいない時だったよな？」

テーブルに肘つく彼の言う通り、ラグデイスでの会談でレオンが指輪を出したその場にいたのはわたし、ヘクター、アルフレートとフロロ、それにイリヤ。王室側の人間がエミールとレオン、ブルーノ。それに神殿にいたアルシオーネ大神官のみ。どう考えても噂を流す出所になりそうな人物がいない。

暫くの沈黙の後、わたしとフロロは同時に「お前だ！」と指を差し合う。

「……まあ冗談はこれくらいにして、フロロ、何とか探れない？」
わたしが尋ねると暫くの間、お行儀悪くテーブルに足を乗せて椅子を揺らしていたが、フロロはふつと姿勢を戻す。

「かなり難しいだろうけどな。ちよつと行ってくる。暫く町の方に

籠るから…… そうだな、明日の夜になっても戻らなかったら心配してくれ」

「そんなに？ 聞き込みにかこつけて町で遊んでくるんじゃないでしょうね」

わたしが言うつと真顔のまま尻尾だけを揺らしていたが、いきなりさつ！と窓から身を躍らせた。

「ちよつとお！」

わたしはフロロが消えた窓の外を見る。中庭に飛び降りた彼がさつさと逃げていく後姿があつた。

わたしとヘクターが顔を見合わせていると、部屋の扉が開く音がする。振り返ると「ん？」と首を傾げるアルフレートがいた。

「何だ、フロロは？」

その問いに今起きた事を答える。アルフレートは顎を撫でながら何か考えていたが、

「まあいい、お兄さん、アンタちよつと来てくれ」

アルフレートとフロロのヘクターを呼ぶ、この「お兄ちゃん」呼びって何なの？

ヘクターが自分の顔を指差しながら答える。

「俺？ どこ行くの？」

「王太后グレースの所だ。話し相手が欲しいんだと。何でも若い男大好きらしいからな。機嫌取るにはちよつと良い」

「な、なな、何よそれ」

わたしはむつとして立ち上がる。話しに割って入ると「わたしも行く」と言つて鼻を鳴らした。

「……機嫌損ねるマネはするなよ？」

アルフレートははあ、と息つくつとわたし達二人を手招きした。

王城敷地内、西側の離れに來たわたし達三人。わたしは本殿より質素な感のある建物を見て驚く。建物自体よりその入り口に、だ。

「見張りの兵がないのね」

そのせいか見た目以上にひっそりして見える。中に気難しい太后がいるかと思うと不気味にすら思えた。

「ばあさんが追い払ってるんだと。どうせ自分にはもう危険は無いだろうから、って嫌味っぽい口利いてたな」

そうばやきながらアルフレートがノックを鳴らすと直ぐに扉が開かれ、中にいた侍女が恭しく頭を下げる。あっさり中に入れてくれるところからも、警戒感が無い様子だった。

螺旋階段のある吹き抜けのホールに「おお」と声を漏らす。こっちはお城、っていうより豪華な邸宅という雰囲気なんだな。

その螺旋階段を上がり、廊下を歩いていると、

「誰か来たね！」

と勇ましい声が響いてきた。思わずびくりとする。声色からして王太后に間違いないはずだ。侍女の女性は馴れているのか「少々お待ちを」とにつこり笑い、早歩きで先にある扉の中に入っていた。一瞬置いて「お入り」と、また力強い声が掛けられる。顔を見合わせるわたしとヘクターを余所に、アルフレートはさっさと扉を開け放った。

中にいたのは威圧感たっぷりの老女だった。少々ふくよかだが太りすぎという程でもない。レースをふんだんに使ったドレスはイザベラに比べれば大分派手だ。まあ王族なのだからこちらが普通なのかもしれない。

「お前達かい？レオンに会ったっていうのは」

肘掛け椅子から響かせる声は現国王夫妻よりも偉そう……というのは失礼か。王太后グレースはとても「女帝」という言葉が似合う方だった。

王太后グレースは暫くの間、わたし達を眺めながら手に持った扇を優雅に振っていた。扇につけられているのであろう上品な香水の匂いが緩やかに漂ってくる。

「ここにお座り」

いきなりの台詞はとある一点を見つめながら発せられた。視線を辿ると予想通り、困惑顔のヘクターが自分の顔を指差している。

「そう、お前だよ。ここにお座り」

ぴつ、と扇が指すのはグレースの斜め前に配置された肘掛け椅子。ごくり、と喉を鳴らす音に気の毒になるが、ヘクターはゆつくりと椅子に近付く。

そのまま座り込んだ彼の顔から目を離さず、グレースは扇をびし！と閉じた。その先をヘクターの顎に近付け、顔を上げさせる。

「……良い顔だ。銀の髪を見るにスノーイムの方の出だね？」

「母が……そちらの方の出身です」

それを聞いてグレースは「やっぱりね」と笑う。スノーイムは口ーラス、サントリナの北に位置する小さな国だ。国、というより集落が点在する一帯、といった方がいいかもしれない。

「彼自身はここ、サントリナ出身だがね」

アルフレートの余計な一言に案の定、グレースは目を輝かせた。

「そう！確かにこんな上品な空気はスノーイム出身者には無いね。

お前、サントリナの人間なの」

ほほほ、と太后が笑うと彼女の胸元に張り付く豊かなものがゆさゆさと揺れる。色っぽいというより怖い。ひたすら怖い。

暫くゆつくりとヘクターを観察していたが、グレースの扇がわたしの顔を捉える。

「お前はここにお座り」

ヘクターの座る椅子とグレースを挟んだ反対側を指され、わたし

はびっくりとした。てつきり『女は立つたまま』なんて事を言われるかと思っていたので予想外だ。

恐る恐る椅子に腰掛けると、早速扇の先が襲い掛かる。顎を取られ、じつくりと顔を見られた。

「……金髪は好きだよ。王家の色だ。緑の目も良いね。裏が無い子が多い」

にっと笑う顔は本気なのかどうか分からない。遠まわしに『嘘はばれるよ』と言われている気がしてしまった。でも髪を下ろしていたのは偶然とはいえ、良かったのかもしれない。とりあえずの印象は良かったようだ。しかしアルフレートが『いやなババア』というのも分かるな、これは。

その間にアルフレートはさっさとヘクターの隣りに腰掛ける。それを見てからグレースは再び扇を開き、ゆったりと背もたれに寄りかかる。

「ブルーノを黙らせた、なんてどんな子達かと思ってたよ。……エルフまでいるとは予想外だったがね」

ラグデイスでの一件を言っているらしい。それに対してエルフは「私は何もしてない」と素っ気無い。こんな態度に怒り出しそうなものだが、グレースは「あ、そ」と目を細めただけだった。昨日だけで大分打ち解けているのか、もしくはこういう奴はしょうがないと思っっているのかもしれない。

侍女が紅茶を配り、頭を下げてから部屋を出て行く。ぱたん、という音が消えるとグレースは口を開いた。

「で、お前達はどう考えてるの？」

「……はい？」

ゆつくりとわたし達の顔を見回す視線に戸惑う。わたしの間拔けな声に女帝はほほ、と笑った。

「かわいそうなレオンを表に放ったのは誰だと思ってるのか、聞いているのよ」

わたしとヘクターがぎょつとして目を見開くのは対照的に涼し

い顔のアルフレートに思う。こういう話しになるなら始めに言っておいて欲しかった。

黙ったまま、正しくは何を言うか浮かばないだけなのだが、そんなわたしにアルフレートは大きく息を吐く。

「『誰が』を考えるからややこしくなる。『何故』を考えていけば良い」

そんな事は分かっているがその『何故』も分からないし、王太后の前で変な事を口走ってしまわないかが不安なのだ。しかしフオロもなくわたしの顔を見ているアルフレートに諦めの気持ちを抱きながら、わたしは現段階で考えていた事をゆつくりと話していく。

「……単純に考えれば王位、だと思います。現国王のお世継ぎが生まれて、その直ぐに連れ去られたんですから」

グレースはゆつくり、深く頷いた。

「でも、そうなると分からないのがレオンだけだった事です。王位を狙うなら二人同時に消さないと意味がありません。現状、エミールが第一王位継承者なんですし……レオンが消えて得をしたのは、この双子の片割れであるエミールだけです」

大分口が悪い事は分かっている。でも正直に話したつもりだ。勿論、赤ん坊だったエミールの仕業、というのは端から論外だ。グレースは嬉しそうに笑い出し、扇を揺らす。

「頭の良い子は好きだよ。どれ、もう少し聞かせて欲しいわね」

わたしは今度は安堵の息を吐く。機嫌を損ねたところで『首をお刎ね!』とはならないだろうが、この女帝には何ともいえないプレッシャーがある。わたしは続けた。

「レオンを連れ去ったのはサイヴァ教団の一味だったわけですけど、彼らの目的からすればレオンだけで十分だったんです。彼らは混沌を引き起こす事だけが目的ですから。でも『差し出した側』から考えると話は別です。先程言ったように王位が狙いだった場合、二人じゃないと意味が無いんです」

なるべく淡々と話したつもりだったが、最期にはつい力が入る。

グレースは暫くわたしの目をじつと見ていたがふ、と下を見た。

「シャルルの時の事を思い出すね。あの時も目的が分からずに皆、言いたい放題だった」

「王弟の事か。確かに世継ぎが生まれている段階で国王を暗殺しようとして、自分には王位は回ってこないもんな」

アルフレートの言葉にわたしは「え？」と返す。

「王弟の暗殺事件ってレオンの事件の後なの！？」

そう声を上げながらもファムさんの話を思い出す。そういえばレオンの事件の時はファムさんはお城に勤める前で、王弟の事件の時は勤め始めた後だったんだっけ。うわあ、見事に勘違いしてた。実は頭の中で王弟は除外していた為にわたしは唸る。

「って事は王弟がレオンの事件の犯人の可能性だってあるんじゃない。まあ目的が分かんないのには変わりないけど」

言ってしまったから「しまった」と思う。確か王弟って王太后のお気に入りだったんだっけ。案の定、グレースはむっとした顔になるが、それも一瞬の事だった。疲れたように背もたれに寄りかかる、と深い溜息をつく。

「頼みたい事があるのよ」

ちらりとこちらを見る顔には怒りは無かった。それだけでほっとする。「何でしょう？」と返すとグレースは黙って後ろを指差した。その方向に目をやる。細かい細工がふんだんに入ったチェストがあった。首を傾げるわたしにもう一度指を後ろに向ける。どうやらそちらに行け、ということらしい。

立ち上がりチェストに向かうわたしに、グレースは「一番上の左よ」と告げた。開ける、という事だろう。花を模したような華奢な作りの取っ手を掴むと引き出しを開ける。中身は一つだけだった。

「鍵？」

そう呟くと、

「持っておいで」

との声。次々に命令する人だ。一度もこちらを見る素振りも無いと

いうのに。アンティーク物のような金の鍵を肘掛椅子の元まで持ってくる、再び座るよう合図される。

「シャルルの部屋の鍵だよ。私の命令でそのままにさせてる」

それを聞いて固まっっているわたしに女帝はにやり、と笑った。

「訳が分からない、って顔だね？私はね、シャルルを信じたいのよ。あの子が家族をめちゃくちゃにしてやるう、なんて考えてたとはどうしても思えない。それを使って探ってきて頂戴」

わたしはごくりと喉を鳴らす。わくわく感なのか、プレッシャーなのか、自分の中で渦巻き始める感情がよく分からなかった。

「後悔する結果ならどうするんだ？」

アルフレートがにやつと笑うが、

「この歳になれば後悔なんて無いよ」

グレースはあっさりと言い放った。

その時になつて漸く、わたしはグレースがヘクターの左手を撫でているのに気がつく。

「ちよつとおおー！」

何してんだ糞ババア！という言葉は飲み込むが、非難を隠さない顔で指差すとグレースを睨む。

「鼻の穴大きくするんじゃないよ、はしたない。良いじゃないか。

男は触れた女の数だけ磨かれるんだよ」

「は、はしたないのはどつちよ！」

睨み合うわたしとグレースにアルフレートが割って入る。

「まあまあ、これなら良いだろう？」

そう言うヘクターの空いた左手を取り、ゆつたりと撫でる。ヘクターの顔に鳥肌が立つ様子がここからでもはっきり分かった。

「……冗談はこのくらいにして、あなたはどうか考えてるんです？」

ヘクターが二人の手を退かしながらグレースに問う。女帝は「冗談なんかじゃないよ」と流し目を送るが、直ぐに真顔に戻った。

「私はエリーザベトをどうも良く思えない。だから公平な目で見れないね」

エリーザベト……誰？という顔を見たのかアルフレートが「王妃の名前」と呟く。ああ、嫁姑問題ね。

「でもまさか王妃が自分の子供を、なんて考えてませんよね？」

わたしが身乗り出すとグレースは首を振り、ふんと鼻を鳴らす。「やりかねないよ。あの子はね、サントリナ王室を恨んでる。結婚に乗り気じゃなかったらしいから。……元々政略結婚なんてする玉じゃないのさ。馬に乗ってきつねを追いかけるほうが幸せな娘だ」

一般のお嬢さん、という意味だと解釈する。それにはわたしも同意だ。花のようなオーラはあるが王室のような身分の威厳、とはちよつと違う気がする。もつと天真爛漫なものだ。

「父親がそもそも『候』を名乗ってるがね、あれは成り上がり。本人の野心よりも有能が故に担ぎ上げられた、私から見れば被害者だね」

「……すごい暴言」

思わず漏れるわたしの一言にグレースは「その通りなんだからしようにないだろ」と涼しい顔だ。でもはつきりとした政略結婚なのね。そう聞くと王妃に同情してしまうのが乙女心。

「まあエリーザベトだとしても何で自分の子供片だけを不幸にしたかったのかは謎だけどね」

この発言には「レオンは不幸なんかじゃないわ」と言いたくなる。でも黙っていた。幸せの価値観の話しにまで及びたくない。

「他はどうだ？例えば……イザベラとか」

アルフレートが意味有り気にグレースを見るも、女帝は優雅な顔のままだった。娘の名前を出されようが微塵も動揺が無いのがこのバアさんらしいといえらしい。

「あの子が喪に服してから何年になるのかねえ……」
少し苦しげに息を吐くグレースは漸くイザベラに対して母の顔になる。

「レオンがいなくなって直ぐのように感じたけど、いつの間にか季節は一周してた。それで一年経ったのか、なんて気付く有様だったよ。昼は汗ばむ陽気で夜は雨で冷やされる。……今みたいな時期さ。当時は最悪の気分だった」

そりゃそうだろう。グレースからしてもレオンとイザベラの子供、と孫二人を一気に失ったわけだ。娘の不幸に心痛めてる気持ちは勿論あるのだろうし。

「イザベラはエリーザベトと真逆な子だよ。結婚してからは城に近付きたがらなかった。自分の夫と息子のアシル、それだけいれればいいって。……でもあの子は根っからのプリンセスなんだ。褒め言葉じゃないよ。貴族の名前を覚えるのも晩餐会での振舞い方も完璧だったけど、馬の乗り方一つ知らないお姫様だ」

グレースはそこで肩を一度竦める。

「私が禁止したわけじゃないよ。小さい頃からの、生まれ持った性格だね。だから結婚して子供が生まれて、あの子の求める環境が『家庭的なもの』に変わった時は私じゃなくても驚いたもんさ。多分夫であるモーリスが良い人だったんだろう」

それだけ自分の家族が大事だったんだ。その最愛の二人を亡くした、っていうのは惨い話だな。

「イザベラは……馬に乗れなかったのね」

わたしのこの一言でグレースは何が言いたいのかわかったようだ。深く頷く。

「そう、だからあの子は無事だった。家族を助けられなかった、とも言える」

かなり正直な言葉だが、グレースの瞳は微かに潤んでいた。

「乗馬での事故で亡くなったらいいな。どんな状況だった？」

アルフレートが間を置かず尋ねる。それをちらり、と見るとグレースは扇を振った。

「何が言いたいか分かってるよ。本当に事故だったのか、だろう？ 答えは『そうとしか言えない』だね。機嫌損ねた馬が暴れ出して、二人同時に投げ出されたらしい。夫のモーリスは打ち所が悪くて即死。相乗りしてたアシルは可哀想に馬の下敷きになったんじゃないかって。どれも現場に居合わせたわけじゃない警備兵の検証だけど、あまり信憑性は疑ってないよ」

アルフレートは軽く頷くと、もう一つ尋ねる。

「何所に出掛けたんだ？」

「トットムール平原さ。東にある、見晴らしの良い平原。めったに小動物以外が出ないような所だから油断もあつたんだろう」

なんか聞き覚えがあるな、と記憶を辿り浮かんだのはあの不思議生物学者ボン氏だった。あのおっさんが行き先に告げていた平原だ。でも今おっさんは関係ないな、と首を振る。

「今は城に戻ってあの子本来の姿に戻ったわけだ。皮肉なもんだね。とても幸せとはいえないだろうに。ま、母親である私がこんな事言うのもおかしい話だけど」

グレースは一度重そうなお尻を浮かせて座りなおす。それを見届けてからわたしは口を開いた。

「後は……まだ聞いてない人っていうと、先王の妹さんの方の一家ね」

「よく下調べしてあるねえ」

グレースは何故か嬉しそうにくつく、と笑う。

「ルイーズは事件に関係あるとは思えないけど、ついでに聞かせてやろうかね。私が嫁いで来た時にはもう結婚して子供、ユベールも生まれてたんだよ」

「ああ、病弱だって話しの……」

わたしはそう言いかけて止める。大病患ったってだけで、病弱とは言わないか。でもどうも覇気が無いイメージの話ばかり聞かされてきたので、枯れ枝みたいなおじいさんを想像してしまうのだ。ヘクターがぼん、と膝を叩いた。

「旦那さんがあの『太陽みたいな男』って人か」

「そう！世界中の女が自分を愛してると思ってるような男だよ。そのせいで嫁も息子も影になっただけだからね」

グレースはそう言うってから「私も嫁いで来た当時は口説かれた」と付け加える。うわあ……。

「なんて顔するんだい。私だってまだ十代の時だよ。そりゃあ花のある姿だったんだから」

わたしの嫌そうな顔にグレースは眉を上げる。

「いや、義理の兄の嫁を口説くのはおかしいでしょう」

「ああ、そっちかい。まあ私は王に惚れ込んでたからね。私の鼻にも掛けない態度にショック受けてたよ。あの時の奴の顔といったら

……」

「へえ、先王も素敵な方だったんだ」

わたしとグレースの話の盛り上がりでアルフレートが「んー！」と咳払いする。しまった、どうも人様の恋愛話しには弱い。

「こんな感じの一家でルイズもユベールも城に来るのはあまり好きそうじゃなかったね。ルイズは家に籠ってお茶飲んでる方がいい、ってばかり言ってた事もある。息子もそんな風な母親そっくりで、王室の権威より昆虫図鑑の方が好きなような子。病気の後は自宅からも出ないみたいだし」

「何の病気だったんだ？」

アルフレートが問うもグレースは首を傾げる。

「消化器官系、ってことしか。ヴェロニカが言うには心臓は丈夫だったんで助かった、って話だったね」

ヴェロニカ、ヴェロニカ……聞き覚えがあるな。

「あ、このお城にいる魔術師さんね」

わたしは兵士達の飲み会の席での話しを思い出した。『ブルーノ連れの嫁さんに対抗して』云々は言わないでおこう。

「少し捻くれてるけど良い子だよ」

というグレースのヴェロニカ評に、

「捻くれてる時点でダメだろ」

とアルフレートが返す。が、聞こえなかったかのように話を続ける。「専門は別らしいけど神官としての腕もこの城一番なのよ。ヴェロニカがいたからユベールは後遺症も無く回復出来たと思うんだけどね。歳取ってから一度気持ちが悪えちゃうとダメだわね。今じゃ私も会ったのが聖誕祭くらいだよ」

少し話しがズレてきた、と思ったのか「そうそう太陽の男だったね」ともう一度座りなおした。

「セルジュ・ジル・バルテルミー、サントリナの貴族家庭出身の男だよ。八十近い歳の今でも女の前じゃシャキシャキしてるらしいから、生き甲斐って大事ね。ルイズを初めて会ったパーティーで口説き落としたくらい、精力的な男だけど野心家とは違うわね。王室内での地位よりも自由になる時間が大事のようだった」

「まあある意味、魅力的な人ではあるわね」

わたしは唸る。結婚相手には御免だけど。

「そう、女好きなだけでなくポンと出す発想やアイデアも素晴らしかったから、先王も随分可愛がってたよ。でも重要ポストを与えるに逃げちゃうんだもの。でもいるだけで場が明るくなる人だった。」

……似たような孫にはお前達も会えるんじゃないの？」

グレースの意味深な視線にわたしは答える。

「レイモンね。誕生日会に来るっていうのは聞いてます」

にやっと笑うグレース。暫く優雅に扇を振っていたが、ゆつくりと口を開いた。

「誰にも人気者だったセルジュにそっくりな孫、を気取ってるけどね、あの子の本質はそんなものじゃないよ。人当たりが良いのも、有能な所も確かに引き継いでいるけど」

「……というと？」

アルフレートが低い呟きのような声で問い返した時、扉がノックされる。

「あの、もう少しで夕食の席になります」

ここまで案内してくれた侍女が顔を覗かせた。グレースは黙って頷きながら扇を振り、下がらせる。

「野心の塊なのよ、あの子は。でもかえってあんな子が一族に生まれて良かったと私は思ってる。庶民に生まれてたなら革命家にでもなつてたろうね。あの子の目は危険すぎて、ぞくぞくするの」

グレースの言葉を受けてしん、とする室内にアルフレートの含み笑いだけが響いた。

「なるほどね、やっぱり貴族様の話しは面白いもんだ」

半分嘲るようなアルフレートに女帝はにんまりと笑う。

「そうよ、ここでは誰もが本質を見せないように振舞ってる。唾吐き掛けたい相手にもにつこり笑ってハグするのが賢い生き方なの。」

……お前達が誰に注目したのかは知らないけど、それを覚えておくことね」

そして「そうそう」と付け加えた。

「この私も同じこと。今までの話が嘘だつてことも、私が全ての元凶だつて可能性もあるのよ」

立ち上がるわたし達を眺めながら面白そうに言うグレースに、わたしは首を振った。

「それは無いかと」

「……なぜだい？まさか今のお喋りで気を許したんじゃないだろうね？」

目を細めるグレースにわたしは答える。

「ここに一切、兵がないからです。あなたがもし今も表舞台を動かす気概があるなら、こんな大胆な事は出来ないですよ」

グレースは大きく目を見開くが、直ぐに体を揺らしながら笑い出した。

「ほほほ、面白い子なこと。いいわ、お前達からの報告を楽しみにしてるよ」

この言葉を貰い、わたし達は女帝の部屋を出る。誰もいない廊下に思わずふ、と溜息が出るが、あえて緊張を削ぐ素振りとしたりと面白い人だった。

侍女に頭を下げられながら見送られ、離れを出たところでヘクタ―が口を開く。

「でも何で、自分じゃ調べないんだろう」

その質問にわたしは自分のポケットに入った王弟の自室の鍵を握り締めた。アルフレートが答える。

「あのばあさんの現在の立ち位置じゃ動きにくい、っていうのもあるだろうが、一番の理由は『怖いから』だろ」

怖い、とな。首を傾げるわたし達にアルフレートは続けた。

「信じたい、けど王弟がやったのかもしれない。こっちの遊びに付き合うつもりで、背中押された感じじゃないか？」

はあ、なるほど、と思いつつ重要な事を思い出す。

「あ、でもこういう仕事におあつらえ向きなフロロがないんだよね。どうしよう」

わたしはアルフレートにフロロへ仕事を頼んだ事を説明した。彼の目が面白く無さそうに細まる。

「……まあしょうがない、このメンバーで行くしかないんじゃないか？」

わたしとヘクターは頷いた。残りのメンバーでいうとシーフが残っているものの、あのドジっ子だしね。

「とにかく今は腹ごしらえだ」

似合わない台詞を言うアルフレートにわたしは笑ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3465r/>

タダシイ冒険の仕方5

2011年12月28日01時47分発行